379-12
1200501453501
379
2

部

エ4G57

國譯禪宗叢書

第二輯
第六卷

虛堂和尚語錄

昭和三年

37912

國譯禪宗叢書第二輯第六卷凡例

一　本叢書第二輯第六卷に收載する所は、虛堂和尙語錄の十卷の內、一二三四の四卷を以てす、此の語錄は、古來より宗門七部の書の第四に入る「言句の麤細を知らしむるが爲なり」といふ、亦碧巖錄と併行して、禪門の間に於て、提唱擧揚せられ、參禪者の重視する所の書なり、虛堂和尙は、南宋の名知識なり、吾朝鎌倉時代の南浦紹明和尙の師にして、東山下一流の豪者なれば、現今吾邦に流布する、臨濟一派は、皆此の一流の傳統をのみ存す、所謂東海日多の懸記を與ふる名匠なり、苟も臨濟禪に參ずる者の、最も熟讀翫味すべき語錄中、唯一のものとす、客年六月末日に第二輯第五卷を發刊してより、已に一箇年餘にして、漸くこの第六卷を刊行することは、

讀者諸君子に對して、怠慢の甚だしき痛罵を被むるも、何等の遁辭を呈すること能はず、無責任無方針なりとの痛棒を賜ふことを覺悟せり、請ふ越格の大慈諒を垂れたまはんことを禱る、印刷工の都合、亦其他の事故に依り、刊行會主を督勵すること日々夜々にして、今漸く刊行成る、此の語錄の和刊本、正保四年板の七卷本、及び萬治元年版の十卷、又は或抄本二三を、彼此對照して、編者自ら關東大震災前に、約一箇年を費して、之が譯註を執筆し、十卷として卷尾に註したれば、請ふ參照せられんことを、實に本叢書中の一大名著なり、七卷の刊行と相俟つて完結するを、冀ふのみ

昭和三年九月

編者識す

國譯禪宗叢書　第二輯第六卷

目次

國譯虛堂和尙語錄解題……一―二
國譯虛堂和尙語錄卷之一……
興聖錄……一―一五
報恩錄……一―四三
顯孝錄……一―一
瑞巖錄……一―二四
延福錄……二五―四〇
同　上卷之二……

寶林錄……一―一三八
同　上卷之三……
育王錄……一―六六
栢巖錄……一―一三
淨慈錄……一―一八
徑山錄……一―三四
同　上卷之四……
法語……一―二七
序跋……四
眞讃……六
普說……一―二五

國譯虛堂和尙語錄

解題

虛堂和尙語錄の、吾邦に渡來せしことは、無着忠和尙「妙心龍華院」曰く、此の錄序なく、以て闕典と爲す、蓋し師は、蒙古亂の際、滅を唱ふ未だ幾くならずして趙宋亡ぶ、諸徒大手筆を請ふて、序を作つて編に蒙らしむる暇あらず、幸に此の錄日本に傳へて盛んに流行すのみ」と、又曰く、「師徽號なし、是れ天下屠屠に屬し、朝廷狼狽、度宗早く崩じ、元朝に至りては、前朝歸崇の僧の諡號を奏請することを得ず、故に此の項を闕くか」と、又云く、按ずるに此の錄は、南浦和尙携へ來る、後錄又南浦現存の來時る、何を以てか之を知る、錄尾の絕崖（名は宗卓南浦に嗣ぐ）、新添の跋に曰く、祖翁（虛堂）在世の語錄二帙、刊つて天下に流ふ、宋の咸淳五年「この年虛堂寂す」、晉之妙源、續いて後集を錄す、已に三卷を成す、本朝「日本」末だ之を刊行せず、先師「南浦」常に言を爲せども未だ成ることを果さず、」と、本錄は各卷、みな會裡の門人が編集すところにして、南宋の度宗、咸淳五年

の十二月、則ち虛堂和尙の遷寂の十月七日を過ぐること、僅に二ケ月にして、嗣法の弟子晉之妙源之を編集するところなり、その弟子焚萃淸塞が、衣資を抽んでて刊行す云云、吾邦にては、足利時代に刊本のありし事を古記に載せたりと、無着和尙はいへり、今現存するものは、正保四年版は七卷となし、萬治元年版はは十卷となし、龍溪性潛之が序を製し註を加へて、溪抄といふて流布せり、虛堂和尙の詳傳は、本錄の後に行狀を載せたれば、こゝに略するも、一端を述べんに、虛堂は南宋の第二主孝宗、淳熙十二年に生る、無準師範は同四年に生るを以て、その後るゝこと九年なり、日本の後鳥羽院天皇文治元年鎌倉に於て、源頼朝が、覇府を開き、安德天皇は、西海に崩じたまひ、又その明々年の文治十四年には、建仁の開山榮西は、再び入宋せり、南宋この時代は禪宗最盛の時にして、松源、運菴、無準、癡絕、等みな化を旺んにし、元無學、曇西磵も在宋の日師に參せり、儒家は、蘇軾、朱熹、呂祖謙、等みな盛んに門戶を張りし時なり、本邦に來朝せし高僧には、建長の蘭溪、兀菴大休、圓覺の無學、一山、等の如きあり、入宋せし高僧には、東福の聖一、永平の道元、興國の法燈建長の南浦、等あり、彼此往來し、鎌倉時代禪宗の最も旺盛を極めしことを、參照するの要ありと思ふ、この卷は、第一卷には、虛堂和尙が南宋の理宗紹定二年五月行年五十餘、勅を奉じて興聖禪寺に住する語錄に始まる、山門の請疏は揚璘の撰するところ、諸山の請疏は別浦法舟の撰するなり、後代の支那、日本の諸大本山住持の、請疏の大槩は、之を模範として製作せらるゝもの多かりしならんか、又報恩、顯孝、瑞巖、延福等に住する語錄を載す、凡そ上堂その他の禪門の規式、之を準據とするもの多きか、第二卷は寶林寺に住するの語錄を、第三卷は育王、栢嵩、淨慈、徑山等に住するの語錄を載す、この時、虛堂和尙、暮齡八十一にして徑山に住せり、度宗咸淳元年八月なり、それより同五年十月、八十有五に至るの語要は、後の七卷に徑山後錄として之を載することゝせり、第四卷は法語、序跋、眞讃、普說、等の禪餘の文辭類を載するなり、一々詳に之が解題を書せざるも、諸賢の熟讀に俟つのみ。

國譯虛堂和尚語錄 卷一

㋺參學㋩妙源㋥編

㋟嘉興府㋠興聖禪寺の㋡請疏

朝請郎知嘉興軍府主管學事兼管內勸農公事借紫楊璘㋣撰

㋤右伏して以れば、㋥者の寺は是れ尋常にあらず。㋦孝宗聖跡の㋧去處爲り、㋨諸山皆懽喜を生ず、㋩相公の㋪鈞旨を承つて請じ來らしむ。此の住院に當るの人は、㋫箇の作家の漢ならんことを要す。㋬伏して惟れば、㋭新命虛堂愚公㋮禪師は、㋯遁㋰讓の㋱聲價、㋲鴻仰の㋳工夫、

㋴虛堂。傳記は本語錄第十卷の末に見ゆ、日本の龜山天皇文永六年己巳、宋の度宗咸淳五年十月七日に示寂せらる、今を距ること（昭和三年）六百五十七年。

㋵和尙。梵語なり、羅什は翻して力生と云ふ。

㋶語錄。師一生受用の語言三昧なり、語は師、錄は門人。

㋷參學。其の師に參じて學道す蓋し學徒の自ら稱する所なり

㋸妙源。定水の寶榮源禪師、飾の法嗣、泉州承天に住す。

㋹編。簡を次づるなり。

㋺嘉興府。古の秀州なり、浙西に在り、宋の慶元中、嘉興府と改む。

㋻興聖。もと嘉興縣丞廳、日本

㋓法法無心、㋔鄞水一輪の月を湛ふ。㋕句句眼あり、㋖北山半嶺の雲よりも高し、㋗正に宜しく㋘戒香・定香・解脫香を㋙薰取して、便ち來つて㋚佛界・魔界・㋛衆生界を㋜坐斷すべし。㋝矧んや惟の㋞御殿、㋟肅悶たる㋠梵坊なるをや。㋡皇覺の莊嚴に㋢憑るに非ずんば、曷ぞ㋣清朝の崇奉に副はん。㋤臣子義重く、㋥菩薩願宏なり、請ふ師㋦九帶の禪を提起して、㋧我が爲に㋨兩宮の壽を祝延したまへ。㋩垂虹橋畔、㋪爭つて㋫動地放光を看ん、㋬冷泉亭邊、㋭切に車を停め歩を卻くること莫れ。㋮謹しんで疏す。

㋓法法無心。支道、字は道林、晉の高僧、或は龍牙遁か。

㋔鄞。支謙。字は恭明、晉の高僧、或は明招の謙か。

㋕句句眼。智德一切が稱揚すること、又名を謂ふ。

㋖北山半嶺。北山は仰山なり。五家七宗にても微細の宗旨は溈仰宗なり。

㋗正宜。今日その時節なればなり。

㋘戒香・定香。五分の香の中の三を揭げて餘を總ぶる。瓔珞經に云く、「五分法身は識性を以て別なり。戒香は身を攝し、定香は意を攝し、慧香は亂を攝す、解慧は倒見を攝し、度知は無名を攝す。」無著考に曰く、「香を薰ずるは虛堂自ら薰ずといふに非ず、孝宗の靈及び今上帝に祝薰し奉るなり。」

㋙薰取。薰はたくなり、取は語の助なり、薰取又は聞取の類なり。

㋚佛界は順境界。魔界は逆境界。

㋛衆生界。順逆境界、衆生は能修の人、佛は所修の法、所謂正知正見なり、魔は無修の方、所謂越格自在なり。

㋜坐斷。ひつしかれる、把住なり、坐定なり、教外別傳單傳心印の

㋝矧。況の事。

㋞御殿。宋の孝宗、此に誕育す、寧宗の嘉定年中、額を興聖院と賜ふ。

㋟肅悶。嘉興府の城主の疏なり疏は條陳なり、記なり、通なり、具に山門の盛事を陳べて兼ねて教請の旨趣を記して、新命の人の疑滯を疏通するなり、之は雲門偃禪師をして靈樹に住せしむるに、何希範等が請疏を製して請ぜしたるに始まる乎。

㋠梵坊。寺の事を管領す。

㋡皇覺。日本の朝散大夫從五位上に當る、朝會召請に奉する官。

㋢憑。遠なり、造なり。

㋣清朝。山門の疏等、みなこれを用ふ、疏語の前面の序言なり、日本にてはよみ上ぐるに「いうふういん」とか「右伏請」とか書讀にてよむの慣習。

㋤臣子義重。知嘉興軍府主　知行守護する太守知事なり。知はつかさどる。

㋥菩薩願宏。この寺はなみ〳〵の寺にあらず。

㋦師。孝宗聖跡。孝宗は南宋の二代なり、在位二十七年、壽六十八、孝宗の母張氏、秀州に生む、父は太祖六世の孫の秀王なり後に捨施して寺となし、興聖禪寺と稱す、勅願道場なり。

㋧九帶。法燈を建て、宗旨を立する底の一家を作すの人てなくてはならぬ。

㋨我が爲に。夫れに就いて、よく〳〵分別して見ればなり。これより以下衆生界に到るまで師の德を贊す。

㋩兩宮。新命。新に命を受けて進院するなり。

㋪垂虹橋畔。人天の凝滯を開發するを禪師と名づく。

㋫爭。

㋬冷泉亭邊。

㋭切に車を停め歩を卻くること莫れ。

㋮謹しんで疏す。

の政所なり、宋の孝宗、此に誕育す、寧宗の嘉定年中、額を興聖院と賜ふ。

㋫禪寺。律寺や教寺に簡別するなり、百丈のとき始めて坐禪を行ずるの場となし、この名稱始まる。

㋬疏。嘉興府の城主の疏なり疏は條陳なり、記なり、通なり、具に山門の盛事を陳べて兼ねて教請の旨趣を記して、新命の人の疑滯を疏通するなり、之は雲門偃禪師をして靈樹に住せしむるに、何希範等が請疏を製して請ぜしたるに始まる乎。

㋭朝請郎。日本の朝散大夫從五位上に當る、朝會召請に奉する官。

㋮知嘉興軍府主　知行守護する太守知事なり。知はつかさどる。

㋯管學事。學校の事を管領す。日本の外記と同じ。

㋰金內勸農。農桑力田を勸し兼ねるなり。

㋱借紫。紫彩金帶を借すとて、借は假なり、本紫に非ず、唐の則天の時より始まるといふ。

㋲揚璣。傳記は宋史になし、不明なり。

㋳撰。述なり、造なり。

㋴右伏以。この三字は發句、山門の疏等、みなこれを用ふ、疏語の前面の序言なり、日本にてはよみ上ぐるに「いうふういん」とか「右伏請」とか書讀にてよむの慣習。

㋵者の寺。この寺はなみ〳〵の寺にあらず。

㋶高峯は乃ち靈隱の最高峰なり、石磴百級、曲折三十六灣なり。師この時に北山の靈隱寺に在つて、請を受くるを云ふ。

㋷正宜。今日その時節なればなり。

㋸戒香・定香。五分の香の中の三を揭げて餘を總ぶる。瓔珞經に云く、「五分法身は識性を以て別なり。戒香は身を攝し、定香は意を攝し、慧香は亂を攝す、解慧は倒見を攝し、度知は無名を攝す。」無著考に曰く、「香を薰ずるは虛堂自ら薰ずといふに非ず、孝宗の靈及び今上帝に祝薰し奉るなり。」

㋹薰取。薰はたくなり、取は語の助なり、薰取又は聞取の類なり。

㋺佛界は順境界。魔界は逆境界。

㋻衆生界。順逆境界、衆生は能修の人、佛は所修の法、所謂正知正見なり、魔は無修の方、所謂越格自在なり。

㋼坐斷。ひつしかれる、把住なり、坐定なり、教外別傳單傳心印の

風か興起めされかしと。

㋒剏。上を受けて、虛堂か請すべき所以を說く。

㋓御殿。興聖寺は孝宗誕育の處なれば御殿といふ。

㋔諸閣。閣は閉なり、悉皆に閉閉して地下の常流の來往を許さず。

㋕梵坊。梵は淸淨の義、坊は區なり、淸淨の伽藍、天下傑出の道場なればなり。

㋖皇覺云々。皇覺は覺王と云ふが如し、佛か大覺王と稱す、故に莊嚴は莊飾端嚴編智の二莊嚴なり。

㋗非想。禪師のやうなる編智具足の人をたのみにするにあらずんばの意。

㋘淸朝云々。理宗帝の淸朝なる朝廷の尊崇來持なり。

㋙臣子義重。忠義重きが故に史彌遠や私ども楊璃が淸朝の鈞命を承つて國の爲に師を請ず。

㋚蒼陳顧安。蒼顧安き故に、化度の爲に命に應ず。

孝宗なあなたはと菩薩にたとへる誓願安度なりと。

㋛九帶禪。濟ドの宗匠なる故に之を用ふ、浮山の九帶として人天眼目に出づ。

楊璃は不案內ゆえ、いつかど向上宗乘のつもりで兩宮壽の對に書かれたるものなり。

㋜我。相公又は楊璃又廣くは天下國家のためにの意。

㋝兩宮壽。理宗皇帝と皇后との聖壽なり、親願延長の御新禱をなされしと。

㋞垂虹橋畔。興聖寺の傍にある橋なり。

㋟爭。不可思議の神變に出合つては如何なる惡業煩惱もなくなる。

㋠動地放光。一佛出世說法の故なり事は法華經の諸經に見ゆ、六種震動白毫相好、東方八千土を照すなり。

㋡冷泉亭。靈隱寺に在り、五亭の一なり。

㋢切に車を停め。冷泉亭のあたりに愚圖々々とせずに御越しを願ひたしと。

㋣謹疏。具に山門の盛事をのべて、敎請の趣旨を書す。

㋑諸山勸請の疏

㋒在城の住持㋓報恩光孝禪寺㋔嗣祖㋕比丘㋖別浦　法舟撰

㋗臨濟を祖とし、運菴を師とし、㋘聲名透徹す、㋙廣覺を辭し㋚興聖に住す、㋛去取分明なり。㋜吾が軍を張るに足れり、㋝祢子に愧づることなし。恭しく惟ればば、新命虛堂和尙は㋞貞實諦を得、㋟淸淨身を現ず。其の㋠南北の兩山に、㋡閑に霧隱を爲さんよりは、㋢東西の二浙に㋣高く雷鳴を作さんに孰若。況んや此の㋤龍宮、實に㋥虹渚に當るをや。㋦大亟相、親り曾て㋧我に問ふ、㋨賢邦君、㋩妄に人に予せず、㋪速かに來れ速かに來れ。㋫希有希有㋬閭丘㋭向前して作禮す、㋮豐干に在つて、豈に

㋑諸山勸請疏。諸山の疏は大槃慶頁の儀と隣交の好みとを疏す、此は別浦吹噓の故に、單に勸請の意を疏す。

㋒在城住持。嘉興府の城內にある寺に住せるなり。

㋓報恩光孝禪寺。天寧寺なり、國に一ヶ寺づゝあるなり、この府にあるは天寧報恩光孝禪寺なり、秀州嘉興府內にあり。

㋔嗣祖。祖師の命脈を嗣ぐ意。

㋕比丘。譯して乞士といふ、淸淨清命の故に、或は淨持戒、或は能怖魔との義を兼ぬるなり。

㋖別浦法舟。別浦は道號、法舟は諱なり、空叟印に嗣ぐ。

大惠宗果―佛照惠光―空叟印―別浦法舟

㋗祖臨濟、師運菴。祖師の承繼道德據ろあるが故に、運菴は臨濟の十七世の孫なり、祖は始めなり、本なり。

㋘聲名透徹。その名法界に透徹す、四百余州歸敬せざるものなし。

㋙辭廣覺。笑翁和尙が靈隱に住するとき、師に命じて藏事を尸らしむ、暴げて杭州の廣覺に住せしむ、力めて辭す。

㋚住興聖。この度興聖寺に住す

㋛去取分明。廣覺と興聖とは事がちがふ、內證ことではない、天子の命ある故に、進むも退

㋜饒舌の人ならんや。㋞黄梅勉めて爲に山を下つて、㋟馬祖に代つて㋠悲心の偈を說きたまへ。㋡師紹定二年五月一日、㋢靈隱に在つて請を受く、㋣入寺陞堂祝聖畢つて㋤座に就く。㋥僧問ふ、㋦呼猿洞口、㋧無心にして月に臥し雲に眠る、㋨長水江頭正に好し綸を拋ち釣を擲つに㋩只だ㋪靈山の密付の如きんば、還つて學人が㋫吝參を許さんや也た無や。」師云く、「㋬崑崙生鐵を嚼む。」僧云く、「㋭與麼ならば則ち㋮要津を把斷し去れり。」師云く、「㋯將に謂へり、儞是れ箇の㋰屐を出づる良駒と。」僧㋱噓一聲して、便ち禮拜す。師云く、「㋲果然。」㋳乃ち云く、㋴「大機圓應、㋵大道無方、㋶去來象を以てせず、㋷虛空を撥轉す、㋸動靜心を以てせず、㋹當軒大坐。㋺兵は印に隨つて轉じ、㋻將は符を逐ふて行く。㋼物に遇ふて緣に應じ、處に隨つて主と作る、㋽直に得たり、㋾嘉禾穗を合し、㋿秀水朝宗し、(1)鳳凰來儀し、(2)麒麟瑞を現じて、(3)西來の祖意を發揮し、興聖が門庭を成就することを、(4)然も是の如くなりと雖も、畢竟何を以て(5)驗と爲ん。」(6)良久して、「(7)一氣言はず有象を含む、萬靈何れの處にか無私を謝せん。」(8)復た擧す、(9)三聖道く、「(10)我れ人に逢ふときは則ち出づ、出づるときは則ち(11)人の爲めにせず。」興化道く、「我れ人に逢ふときは則ち(12)出でず、出づるときは便ち人の爲にす」と。師云く、「二大老、一人は(13)占波國裏に向つて鼓を打ち一人は(14)大食國裏に向つて舞を作す。若し臨濟の正宗を(15)扶樹せんと要せば、大いに(16)竹を接いで月を點ずるに似たり。山僧今日出世、(17)

くも智識が明かなり。

(ノ)足張吾軍。此の師を得て吾が宗を恢弘するに足れりと。作家の戰將の大軍を法戰法軍として、宗門の關羽や張飛の百萬軍兵も事ともせぬ意。

(オ)無愧衲子。英靈の衲子坊樣なりと。

(ク)得眞實諦。これは八字稱と云ふ句のならべかたなり、諦は眞實不虛の義、眞諦俗諦などと云ふに「淸淨妄を絕するを眞實と名づく」と大乘義章に出づ、得は自利利他、解行相應を云ふ。

(ヤ)現淸淨身。見聞利益を得ることとにて、現は利他なり。

(マ)南北兩山。南山は淨慈、北山は靈隱、師は之の時靈隱に在り、淨慈には南屏山、靈隱には北山と云ふあり。

(ケ)閑爲霧隱。靖退長養の意、靜にしやがんでござらうより、まう時緣熟してあればと、理を推して之を責むるなり。霧雨七日にして下り、食ますなどより出づる語なり。

(フ)東西二浙。浙東、浙西なり。

(ヨ)嘉興府は浙西に屬す。

(コ)高作雷鳴。說法の雄音普く諸方に達するに譬ふ。十法界に入り涉つて、隨類他利を得ることにて、爲人說法で、大菩薩心の說法をなさらんにはと。

(エ)龍宮。興聖はもと孝宗の御據ゆゑに龍宮と稱す。

唐詩の駱賓王の句にも「龍宮鎖して」とあり。

(テ)虹渚。喬くも孝宗皇常の誕生の靈地なりと。史記に「火星虹の如く華渚に下り蟠む、母即ち感じて少昊を生む、黃帝の子なり、」これより出づる語なり。

(ア)大丞相。史術王なり。

(サ)問我。この別浦に住院に當人を問はせらる。正に其の人は虛堂和尚なりと。

(キ)賢邦君。邦君は諸侯、則ち日本の大名なり、府主楊璘のこと。

(ユ)不妄予人。予は賜なり、通じて與に作る。

巨細に吟味を遂げて請待せらるるなり、人とは凡庸のものにはなり。

(ム)速に來れ。時緣熟する故に、擬議なせずに來れと。

(ム)希有。名藝といひ、丞相や府主の請待といひ、諸一統が盡く勸請といひ、珍しき極みなりと。

(シ)閭丘。丞相や邦君に比す、これは閭丘、唐の貞元の末に豐干を敬したる因緣あり、今は略す。

(エ)向前作禮。進んで禮義を盡して尊重す。

(ヒ)在豐干。別浦が自ら比するなり。

(モ)饒舌人。此方が口やかましくてのことではない、申しぞこなひではないと。

(セ)黃梅。これは大梅の誤りなり

虛堂に比す、大梅は明州なれば師の生緣ゆえ、之を用ふ、燕處せずして勉めて山を下りしなり、山は武林の靈隱なり。

(ス)代馬祖。渥菴に比す、先師の法懷を主張するは師にあらずして誰ぞやと。

(イ)說非心偈。即心即佛、又潰ふ、非心非佛と、祖師門下の鳶の種艸を接得めされよ。

(ロ)師紹定二年。師は此の時四十歲なり。南宋の理宗（五代）日本では八十五代後堀河天皇寬喜元年己丑に當る。

(ハ)在靈隱。笑翁和上の會下に在りしなり。

(ニ)入寺陞堂。次第に嗣香等まで

で開堂の式擧る。

㋕就座。橋上にすわつてこゝには案話を擧ぐ。

㋖僧問。出たは出たが陸地じや四六文章文字のはしくれ位は少し覺えて、智解分別を悟りと思つて居る。

㋗呼猿洞口。靈隱の境地なり、武林山にあり。

㋘無心臥月。此れは師の眷前の靈隱に在つて、跡を晦し德を靈ふことを序するなり。

あなたは打成一片、聖胎長養なりと。

㋙長水江頭。嘉興府の城南六里にあり、長さ五十余里。

㋚正好拋倫。此れは師の即今興聖に住して、接物利生するを云ふ。行鳥蝦蟹鬼龍、向ふまゝに釣り得られる丁度の時節なりと。

㋛只だ。今が目出度き時なり。

㋜靈山密付。世尊不說の說、迦葉不聞の聞にて、世尊拈花、迦葉微笑す、世尊の玉はく「我に正法眼藏あり、摩訶迦葉に付屬す」と。以心傳心も未だ密付と稱するに足らず

㋝香參。俺とちつと御相談はあるまいかなり。

㋞崑崙磨生鐵。沒滋味のことなり。

㋟興盛問。さうならばとの意。

㋠把斷要津。海泊し難しとの故に、それでは寄り附かれぬ何卒二義門に下りくだされと。

㋡將計、始めの言ひ出しは子細らしいがと、抑下の意なり。

㋢川賊長髯。俊逸にして繁いで置けぬ天晴れのものと思ひたり、生嗟（いけづき）磨蠟（するすみ）と思ひたり。

㋣嘘一歷。方語に不背の義、からうそ吹くなり、偖り手合の遊ぶ故、まあ引取りますで御座ろうと體拜したり。これが全機作用のところなり。

㋤果然。それ見たか、再び完全を得るものは能く幾箇ぞとなり。

㋥乃云。提綱の語なり。

㋦大機圓應。應ぜざる所なしである大機大用、地獄は地獄、餓鬼は餓鬼、畜生は畜生。

㋧大道無方。方所のることなしとなり、西でも御座らぬ、こざらぬ所は御座らぬと。

㋨去來云々。これは涅槃無名論の意に出づる語、佛に佛の相なく、女に女の相なし、往くの還るのと云ふ沙汝はなし、器として形とらずと云ふことなし。

㋩撲叫虛空。上句の著語なり、何にせよと、自由自在、去彼來此なり。

㋪動靜不二心。これも上と同じ、無名論より出づる語、少しも心を用ひず、感じて應ぜずと云ふことなし。

㋫玄軒大垂。上の句の著語、立つてゐてもとなり、山を見川を見て居る。

㋬長隨印轉。將軍の印なり。

㋭將逐符行。天子の符なり、この二句は上の大機圓應以下の文を承けて、響み引きて下の二句を說く。

㋮遇物應緣。有情非情の物や、順緣逆緣のものにてもとなり。

㋯直得。直様目出度い揃ひなりと、已下開堂祝賛の語。

㋰嘉禾合穗。嘉興府に嘉禾郡、嘉禾墩あり、一莖九穗あるの瑞ありしこと、光武の生れたる時、これは天下和同の象なり、これによりて秀と名づく

㋱秀水朝宗。秀水縣なり、嘉興府にあり。朝宗は海に朝するが如く、天下王化に服せずと云ふことなく、我れ後れじと走り付くこと。

㋲鳳凰來儀。仁德の香に依つて來り舞ふて天下太平なり。

㋳麒麟現瑞。麟も仁獸なり、吉瑞なり。

㋴發揮西來。達磨大師が十萬里の波濤を歷て、釋迦の大法を傳へんが爲に來り、今日又盡堂が興聖の門庭を成就したのもそれじやと。

㋵巍然。それはさうなれども、畢竟どんつまりはなんぞ、證據がなくては請け取られまいと。

㋶論。證なり。

㋷良久。何食はぬ顏で、やゝ久しくしてなり。

㋸一氣不言。何程の天文家でも役には立たぬ、先づ話頭に參ぜよと、萬有の物象はみな萬靈なり、百姓でも町人でも天鑑の天理に私はなし、佛法と王法と一般なりと。

㋹復舉。拈提なり、後は皆其の通りなり、拈弄舉揚することなり。

㋺三聖興化。二人共に臨濟の法嗣、臨濟下の二郎、三郎なり。

㋻我逢人則出。一機一境の上なり、この拈語は前の一氣不言の講釋なり。

亦禪道佛法の人の爲にするなし。只だ㋑一味に口あれば飯を喫す、忽ち㋒箇の漢あり、出で來つて和尚の指示を謝すと道はゞ、拄杖を拈じて便ち打たん。何が故ぞ、㋓一做さざれば㋔二休せず、㋕風流ならざる處也た風流。」

㋖上堂、擧す、㋗龍濟、衆に示して道く、「㋘是柱、柱を見ず、非柱、柱を見ず、㋙是非已に去ぞけ了りて、㋚是非の裏に薦取せよ。」㋛柱杖を卓して、「向に道ふ、㋜山下の路に行くこと莫れと、㋝果然として㋞猿叫ぶ斷腸の聲。」

㋟解夏㋠小參、「㋡靈山に結夏す、結本會て結せず、㋢興聖に解夏す、解も亦會て解せず。解結既に拘りなく、㋣去來作相なし。㋤所以に道ふ、㋥大圓覺を以て我が伽藍と爲して、㋦身心安居すれば、㋧平等性智なりと。」㋨喝一喝して、「者

の㋐草索子は㋑諸方共に用ふる底なり、㋒只だ花街に入り柳巷を穿つて、㋓波波㋔挈挈として、九旬を過了するが如きんば、㋕尅期取證又作麽生。」喝一喝して、「㋖國に憲章あり、三千條の罪」㋗復た㋘文殊三處に夏を度るの公案を舉して、師云く、「㋙迦葉㋚當時性燥に㋛一椎を下し得ば道ふことなけん文殊㋜三處に夏を度ると、直饒ひ㋝黄面老子、㋞別に神通ありとも也た須らく㋟腦門著地すべし。

㋠次の日上堂、㋡秋風淅淅、㋢秋水冷冷、㋣千辛萬苦、㋤笈を負ひ簦を擔ふ。㋥張公が㋦埃了つて李家が店、㋧草舍茅庵知に程を作す。㋨知府㋩吳狀元㋪齎租を竊いて㋫公據より石を立つる上堂、㋬拄杖を拈じて云く、「黄面老漢㋭末上に㋮他に遭ふて、㋯雪山深き處に向つて、

㋰不爲人。點滴も施さぬと。不乘手なり。

㋱不出。胡來り漢來るも、寄せ附けぬと。

㋲古波國。安南地方の或國、現今は何に當るか不明なれども我國でならば蝦夷、松前などに當る。

㋳大食國。西域の波斯國、西都婆羅門にありと、我國でならば琉球、朝鮮などに當る。

㋴是の二ヶ國は一味知音底なり。

㋵扶樹。取り立てんと思はゞなり。

㋶接竹點月。竹を接いで接いでも、それは月に屆かぬ、勿交涉の義なり。

㋷無禪道云々。二老を點ず、三聖や興化等が云ふたやうな六ずかしいことは云はぬ。

㋸一味有口。一向に口を以て居ればなり。

㋹鎮溪。胡人は中原を漢と云ひ中原は胡人を虜と云ふ。

㋺一不做。この語が云ひたいばかりに不成就、元來は無一なるに、はや二となり。

㋻二不休。不做處は風流でなし。

㋼不風流處。流はおち〳〵清潔の風、各條流あるを言ふ。是非の沙汰に及ばぬこと。

㋽上堂。凡そ宗乘向上の大事を舉揚するを上堂と云ふ、拈古なり。

㋾龍濟。撫州の龍濟、紹修山主地藏琛に嗣ぐ、雪峯の法孫、法眼の同行なり。

㋿是柱不見柱。止觀の語、柱は助語なり、是非と云はんなり、有句無句の如し、衲僧は是非の中で是非さつぱりなし。

(ア)是非已去了。異體なきが故に無是無非の處、舊に依つて是は自ら是、非は自ら非なり。行脚遍歷も、參禪辯道も、看經看教も、今體不是なり。

(イ)是非裏處取。鷄取は會得せよとなり、たとひ彌勒が下生しても埒あかぬとなり。

(ウ)卓拄杖。それ見たかと、氣を付けて云はるゝなり。

(エ)山下路。寒山子の語なり、向上の一路なり、是非の窟なり。

(オ)果然。案の如くさうなり、それ見よ。

(カ)猿叫。餘り痛ましいので、心混亂して、心肺の府もきれ〳〵すたずたになると、是等の妙唱は我が虛堂も感發するとなり。

(キ)解夏。五月一日に入寺、今七月十五日なり、その解制なり。

(ク)小參。百丈清規には、晚參の章あり、凡そ衆を集めて開示する、昔之を參と謂ふ云云、昏鐘鳴に移すを而して之を小參と謂ふ、住持登座提綱、叙詣、舉古、結座等あり、此れは提綱、次の文殊の條は即ち舉古なり。

(ケ)靈山結夏。靈山は靈鷲なり、夏中に五月一日に請を受けたる故に結夏す。

(コ)興聖解夏、今日こゝで解夏せり。

(サ)去來無作相。靈山か去り、興聖に來り、走作の相なし。

(シ)所以道。言ひ譯に古語を引ていふ。

(ス)以大圓覺。圓覺經の圓覺菩薩章に出づ、伽藍は此に衆園と譯す、人本具足の圓覺は萬德の所依なり。

(セ)身心安居。須彌山の如く安住不動なれば「形心靜かなるは安要期、此に住するは居なり」と南山はいへり。

(ソ)平等性智。南方の位にて、七識を轉じて云ふ、性緣の性寂なれば能緣の七識自如なり、如の性皆同じ故に平等なりにて、波瀾を動ぜず如來の大寂滅海に遊ぶ、所謂靈動含靈、一一放光明の境界なり。

(タ)喝一喝。やい大衆たち、見たか、聞いたか、どうじやとなり。

(チ)神柒子。此の格索と云ふが如し、靈龜さつとしたもの、上の解結安居を指す。

(ツ)諸方共用底。順境界の故に分外とせず、後面に逆境界を說かんと要す、それ相應に用ひ所があるとなり。

(テ)只如入花街。嬉坊酒肆、無礙自在の無功用道なり。

(ト)波波。波は當に跛に作るべし、行いて正しからずとなり「ちんば」なり。

(ナ)挈挈。ちく、不具足の辭、百醜千拙、一夏を了りたり。

(ニ)尅期取證。是れは緣起を記するのみ。尅期は定るを約するなり、長期百二十日、中期百日、下期八十日と圓覺經にはあれども、今は九十日、龍溪抄に「取と證とを二事となすは非なり」とあり、無用の說なり。

(ヌ)國有憲章。國家に憲法條章あり、罪品三千を分つ、如レ此規矩嚴令なるが故に、逆境界に打入することを許さず、今解夏、隨往無礙の佛

痛く正命を行ずとなり。

㋐復擧。上の拈語を受けて擧ぐ。

花街柳巷を承けてなり。

㋑文殊云々。文殊は此に妙德と譯す。禪林類聚の解結門に、「世尊因に自恣の日、文殊三處に夏を過し來つて靈山に至る、迦葉問うて云く、仁者今夏何れの處に安居す。文殊云く、一月は童子學堂に在り、一月は婬坊酒肆に在り云云」の故事あり。

㋒迦葉。摩訶迦葉、此に大龜氏、又は飲光と譯す。

㋓當時性燥。燥は當に躁に作るべし伶利のことにて、はしやぐなり。

手ばしかくなり。

㋔一椎。迦葉が白椎の例なり、文殊の未だ日を開かぬ已前にやれればとなり。

㋕三處度レ夏。不如法にして、三處に度夏するばかりではあるまい。

㋖黃面老子。佛の面貌は黃金色なるが故にいふ。

㋗別有神通。佛は六通を具し玉ふの故諸天神仙も及ばぬ。

㋘關門著地。是れ頂禮歸降の義、あゝ御免なされといふ。

㋙次日上堂。日本でいへば十六日の精靈棚を流してなり。

㋚秋風淅淅。秋の風の聲、風のなる聲で、送行の景容なり。

㋛秋水冷冷。清冷なること、身にしみてひや〳〵すること。

㋜千辛萬苦。行路難を述ぶ、身にしみて冷かなればなり。

㋝笊擔笠。笊は「本箱」笠は「笠」「蓋」なり、「からかさ」なり、いかなる貧僧でもこれは離されぬ。

㋞張公李家。七兵衛の尉も、六兵衛の介もなり、支那では氏のだれかれと云ふことに用ふ、これは諸方の杜撰師家に比するなり。

㋟琉店。裝は一里塚、堡（ドテ）に記しあるもの、槐の木などを植ゑてある所もありと云ふ、つまりいへば八兵衛が所で茶なのみ、五兵衛が所で餅や菓子をくふとの意。

㋠神舍茅庵。短に程をなすことで、學者の小知見に比す、狹量なる器であるとなり。

㋡知府。楊璘に代りし知事なり。

㋢吳狀元。狀元は及第の首魁をいふ。吳潛、履齋と號す、理宗の末、入つて相たり、金湯篇にあり、此の人乎。

㋣鋼蘆租。嘉興府は澤の多き國ゆゑ蘆を產す、興聖の境內も古來蘆の稅を官府に貢す、吳氏は之を免ぜしなり。

㋤公據立石。公は府、據は依にて、公府は即ち衆人のよりよる所、立石は免許の碑を刻んで、永代の知府の者に示すとなり。

㋥拈拄杖。先づ宗乘の向上底を示す。

㋦末上。先づ最初の義なり。

㋧遣他。他に出會はしてなり、他は蘆をさしていふ。

六年㋨脚を擡げ起さず。自後㋩三百六十餘會、㋪葛藤を說き盡せども、終に是れ㋫解洗し出さず、達磨大師、西天より㋬十萬里の水雲を歷て此の土に至れども、㋭故に是れ便を著ず。㋮端なく脚に信せて蹈著して、㋯枝葉轉生ず。誰か知らん㋰二千年の後、累興聖寺裏に及んで、㋱籬坍れ壁倒れ、㋲道絕え人荒るゝことを。㋳幸にして風雲、際會す、㋴有力量の人、㋵寸伊を施さずして、㋶艸を削り根を除く、㋷便ち見る、坐ながら太平を致し、㋸高く舜日を歌ふことを。然れども是の如くなりと雖も、且く道へ㋹何の憑據かある。」拄杖を卓して、「㋺公驗分明。」

㋻除夜小參、㋼灰寒く火冷じ、家家竹を㋽爆いて窮を送る。臘盡き春回る、處處㋾錢を燒いて

㋨脚。「檀特山に六年端座六年、蘆芽が膝を穿つ」と普曜經にあり。

㋩擡脚不起。黑嵓窟裏じや程にとなり。

㋪三百六十。釋迦老子四十九年住世三百六十會、頓漸權實を問談す、之を一代時教と云ふ。

㋫說盡葛藤。橫說竪說しても、終には一字不說と說き、止止不須說と說く。

㋬解洗不出。蘆の葉の亂れたる如く說き盡せぬとなり。

㋭十萬里。十萬里程も、多少離じやと。

㋮是不著便。わざ〳〵來りてももとより武帝が分らぬとは知りつゝも、歸然の不識のといひ、遂に帝も契はずと。

㋯無端。これではなるまいと、ひよいと梁朝を踏み出されて遂に蘆が折つて江を渡つて魏に入る。

㋰枝葉。木の葉の茂ることに譬へて、累の兒孫に及んで、五家七宗、又は日本の二十四流と段々蔓りたり。

㋱二千年後。黃面老漢の膝を穿たるゝより虛堂に至つて二千二百餘年。

㋲籬坍壁倒。坍は岸の壞るるなり、その間蘆稅を納めて居たゆゑ、寺が荒廢したること。

㋳道絕人荒。寺は衰廢して人の往來もなし、言ふ心は佛祖よりこのかた、蘆葉しば〳〵昌え法門の衰へたることかくの如くなりと。

㋴幸而風雲。師檀道合するに喩ふるなり。師と吳氏と互に、或るときは龍虎となり、或るときは風雲となつて、機に投合するを云ふ。際は「まじはる」會は「あつまる」なり。

㋵有力量人。佛の付囑を受けて千鈞の大法を荷擔す、故に檀

鬼を引く。三百六十日、㋐交頭結尾㋑別に生涯を展ぶ。㋒二千年の滯貨行はれず、㋓重ねて新に價を增す。㋔槍槌の火村田樂、㋕露地の牛、拈出するに勞せず。㋖金剛圈、㋗栗棘蓬、㋘鐵酸嫌、㋙正に好し施呈するに。㋚南來北往、㋛呑透するに門なし、㋜鶴眼鷹睛怎生が、㋝咄嗷せん。興聖恁麼の告報、早く是れ㋞雲頭を按下す。何が故ぞ、㋟江南地暖に寒北天寒し。

師復た云く、「諸方は㋠龍肝鳳髓を烹る、㋡我が此間は㋢荒涼にして供養すべきなし。㋣深山嵓崖人跡不到の處に向つて、㋤一物を拾ひ得て、㋥無事甲中に颺在すること多年矣。㋦今夜情を盡して拈出して、諸人と與に㋧分歲す。」拄杖を卓すること一下して、「切に忌む㋨渾嵩に呑むことを。」

㋩元宵上堂、㋪人間の燈㋫天上の月、㋬明あり暗あり、㋭圓あり缺あり、底事ぞ㋮貪り觀て心未だ歇まざる。興聖室內油なし、㋯龜を證して鼈と作すことを免れ得たり。

㋰中秋上堂、「㋱金風落葉を吹き、㋲王露清秋に滴つ。㋳厨耐なり寒山子、㋴言なうして笑つて點頭す。㋵且く道へ、箇の甚麼をか笑ふ。」拂子を擊つて。「㋶既に能く明かにして鏡に似たり何ぞ用ひん曲つて鈎の如くなることを。」

上堂。「㋷天晴れて屋を蓋却し、時に乘じて禾を刈却す。㋸皇租を輸納し了つて、腹を鼓して謳歌を唱ふ。師云く、「㋹洞山謂つべし㋺枕を高うして憂なしと、惜しい乎㋻者裏に坐在すること。興聖今日亦手を下して屋を蓋ふ、只だ是れ未だ官賦を納めず、還つて㋼古人と相見の分あり

越の異元狀を指すなり。

㋽不施寸刄。餘力を勞せずとなり。

㋾削鉢除根。巴陵の宗風を振起するにたとへる。

さつぱりと綺麗に掃除が出來て淸淨の境となり、雜稅をも取らぬこととなりぬ。

㋿便見坐致太平。雜稅も免許せられ、心安く四海浪平かなり。

㌀高歌舞目。寺門の無爲安平なことは、聖代の御蔭なりと。

㌁有何憑據。どういふわけで太平舞目なるか、證據がなくてはすむまい。

㌂公驗分明。公府より碑まで立てられたれば、これ好心でばないとなり、佛法王法の繁昌これほどの憑據はない、眼を開けよとなり。

㌃除夜小參。大晦日の夜、去舊迎新なり。

㌄灰寒火冷。興聖寺裏は上を下へとひつくりかへつてゐる。

㌅爆竹送窮。支那の風俗で、厄鬼を祓ふこと。

㌆燒錢引鬼。紙錢を燒いて窮鬼を接待して、後に送り去らしむ、除夕に行ふのである、東村の王老夜燒錢などの語あり引は引き去らしむなり。

㌇交頭結尾。交は「あはひ」と云ふ意、來年と今年との際なればなり。

㌈別展生涯。好節の時節、よろしく本分の事施設すべし。世間の世渡とは別なり、衲子向上の生涯なれば展べよとなり。

㌉二千年滯貨。佛祖は已に去れども未了の公案なり。滯貨は店ざらし、「ねきもの。」

佛が滅度よりもはや二千年餘にもなる、不行の行は「はやる」といふの意、「うるゝ」のこゝろなり。

㌊重新增價。重ねてあらたに興聖が者裏にあたひます。

㌋槍槌火。ほだの火、賤民の燒く所の火なり。村田樂は歲暮に土風を詩に賦するを云ふ、これはものに托して佛法を述ぶるなり。

㌌露地白牛。法華の譬喩品に云ふ「一色明邊無差別」の本體なり、面前了々分明なるを云ふ。露地とは靑天井の下の意白牛とは一切の塵欲俗情を脫却したる當體を表現したる語なり、要するに神の御委を意味す、熟語なり。露地は見惑思惑の迷心を去るにたとへ、白牛は無漏の智惠を以て一切を率くにたとふ。太兵衛は門松をかざり、五兵衛はかけとり、婆子は御祝のしたく、翁は宮へまゐるといふやうなものなり。

㌍金剛圈。小さき丸きもの、至小跳出し難し。至棘蓬。惡棘なること。

㌎鐵酸嫌。「まんぢゆう」なり。

㌏正好施呈。諸人に分與す。

㌐南來北往。諸方の行脚僧を云ふ。

㌑呑透無門。金剛圈と栗棘蓬とを結ぶ。

㌒鶴眼鷹睛。明眼の漢を云ふ。

㌓咄嗷。食ふこと、これは鐵酸嫌を結ぶ。

㌔按下雲頭。雲の首を抑へることと、無著は云く「宗門向上より向下に下るにたとへるなり」と。又この語は學者に係ることあり、師家に係る事あり、今は師家に係るなりと。第二義門に就いて說けばなり高貴を下るとなり、あまり向上過ぎては貫手がない故に。

㌕江南地暖云云。任運天眞、各々自知すべし、學者の根柢も同一にあらざるが故なり。

㋚龍肝鳳髓。美味の禪を謂ふにたとふ、美味ばかり御馳走ばかりなり。

㋛我此間。這理と同じ、俺の所はの意。

㋜荒涼云々。荒れすさんで貧乏なる故たべさせるものもなし、これは輪綾にして義理の禪み說かずとのたとへなり。

㋝深山云々。こんな土地は唐でも天竺でもすくなしとなり。

㋞拾得一物。これなに物ぞじや。

㋟無事甲中。空閑處か云ふ、柵の上下、重重に名あり、併し最上は物を置かぬがちなれば、これを云ふ

㋠今夜盡情。今夜は拾ひて置くと云ふこと

㋡盡情は。精出してかの一物をとり出して拈出するなり。

㋢分歲。除夜に先祖だちか祭り、長幼集りて御祝酒でも飲んで、親の詩でも作る、之を云ふ。

㋣渾崙呑。まる呑みにすることはならぬと、切に忌むと答へてある。

そこで細かに嚼めと、併しこれは拾ひ得たる一物に問はれば分らぬ。

㋤元宵。正月十五日、上元節なり。

㋥人間燈。支那風俗、元宵觀燈なり

㋦天上月。立二柱なり。

㋧有明有晴。燈を云ふ。

㋨有圓有缺。月を云ふ。

㋩貧觀。聽求の心なり、大いに蹉過

㋪證龜作鼈。香林の話の三人云云の話か轉じて用ふるなり、龜は龜、スッポンはスッポン、山は山、川は川と分明に云ふことが出來ると

㋫甲秋上堂。八月十五夜なり。

㋬金風吹落葉。秋を金氣となす、故にはら〳〵雨の降るべきなり。

㋭玉露滴清秋。皆時候を序いづるなりいつとも無く衣もしぼついて、外に立つて居られぬ。

㋮耐。耐へられぬといふこと、別けて秋の月を見ては、寒山子でもとなりと、「ほない」は恐ぶべからざらることあるものを云ふ、晉心似秋月の所なり。

㋯無言笑點頭。寒山が月を見て笑ふの圖像、古今あり、未だ何のよりどころかわからぬが、これは何とも言ひようがない、げら〳〵わらつてひとりがつてんしてゐる。

㋰且道。さあ皆云つて見よ、何が可笑しいのぢやと。

㋱既能明似觀。この一句は古句を讚案して、中秋の落句と作したるものなり、十五夜は圓滿、これを心月のなんのと云ふが、何ぞ用ひん曲げて鉤の如きことをと云つてゐる。

㋲天晴蓋却屋。この偈は四句、五言である、これは洞山の聰禪師の因事示衆の偈なり、五燈會元十五の本條にある、全篇は任運無爲の境界を示す。蓋却は屋根換へ、乘時は公儀の檢見はすむ收獲しほになつてである、皇祖は年貢、輪納は

麼。」拄杖を卓して、「㋳惜しい乎者裏に坐在することを。」

上堂擧す、「㋴楊岐、㋵衆に示す、薄福にして楊岐に住す、年來氣力衰ふ。寒風葉を凋敗す、猶ほ喜ぶ故人の歸ることを。㋶囉囉哩。㋷死柴頭を拈起して、且つ無煙火に向ふ。」師云く、「楊岐和尙、其の便を得るに慣へり、爭か奈せん㋸美食飽人に中らざることを。」

㋹新方丈に歸する上堂、「㋺松花荷葉、㋻橡栗㋼蹲鴟、㋽虎豹を驅つて禪徒を聚め、㋾荆棘に坐して寶所を興す。此れは是れ前輩㋿住持の樣子なり。㌀興聖薄緣にして、道古に及ばず、二百日の內、㌁區區役役として、我が諸人を勞して、此の丈室を成す。今日㌂還歸㌃如何が受用せん。」拄杖を卓すること一下して、「㌄佛祖を運送上納、鼓腹は年貢はしまひ、やれ安心と謳歌し、太平のはなうたでもうたふてなり禾は「いね刈」、却は「かりとる」なり。

㋴楊岐。袁州楊岐山普通禪院の

㋵衆に示す、薄福にして楊岐に住す、年來氣力衰ふ。寒風葉を凋敗す、猶ほ喜ぶ故人の歸ることを。

㋶囉囉哩。雲門四世なり。

㋷死柴頭。結構なることなり

㋸美食飽人。活脫の外なきの意。

㋹新方丈。滿山しいことなりとの意。

㋺松花荷葉。無事平常のこと。

㋻橡栗。古人は拶して洞山と虛堂と眼一般か兩般かと云ふてゐる。

㋼蹲鴟。分は分限なり。

㋽虎豹を驅つて禪徒を聚め、坐在下自らか檢點するなり、坐在下にて跡か拂ひ跡か滅す、者裏とは官賦の年貢を濟さぬにてこれはすべて洞山の境界か羨むなり。

㋾荆棘に坐して寶所を興す。此れは是れ前輩。

㋿住持の樣子なり。

㌀興聖薄緣にして、道古に及ばず、

㌁區區役役として、我が諸人を勞して、

㌂還歸。

㌃如何が受用せん。

㌄佛祖を方會禪師、慈明圓に祠ぐ、楊岐山は小院なりといふ。

㌅示衆云々。前頭は無心にして緣に應じ、後面は大活機用なり、蓋し人の者裏に坐在するか恐るればなりと、龍溪和尙は註してゐる。言うは淨福で老いすぼりて氣力は衰へ塞き風がこの葉を吹き散らかす樣な貧小院のありさまなりと所謂適々冬暮に臨めば、滿床雪の眞珠を撒して居るに暇あらずじやが、猶ほ喜ぶ、故友同參の歸し集るので之を喜ぶとなり。

㌆囉囉哩。無譜の譜を奏して活起せしことを要すと。囉々は歌調を助くるの辭。やれこそのやれこそといふ辭など。學者を接待するに譬ふ。

㌇拈起死柴頭。本分擡合の義にて、これは前の故人に祇待するの句なり、拈れ柴を引捉つ

排するに心あり、㊁諸方を笑ふに口なし。」徑山の㋮倫藏主至る、上堂、㋯無義の漢、誰か懶を謝らん。㋰口吃し耳聾して、驢㋱劣、底に到る。㋲一氣一藏を轉ず、㋳是非終に洗ひ難し。㋴大法下衰して人の脣齒を汚す。

上堂、㋶方竹杖を削圓し、㋷紫茸氈を輓却す。㋸是れ懶衲子尋常の用處なり、只だ㋹月波樓跳つて㋺蟾蜍眼裏に入り、㋻千聖小王怒發して、㋼鴛鴦湖を將つて一脚に㋽踢翻するが如きんば又作麼生。

冬至小參、㋾天地不仁、萬物を以て㋿芻狗と爲す。㌀裕僧不仁、自己を以て㌁臘月の扇子と爲す。所以に㌂儱儱侗侗として、㌃日に用ひて知らず。直に得たり㌄古風再び振ひ、㌅大朴全く彰はるゝことを。㌆一氣言はずして㌇九淵の底

で無煙火に向つて、常に焚かぬへつゝひへ蛛の巣だらけのことなり。珠曰く、「陽春か白雪か」と。

㌈美食不中飽人。飽參の故人、已に無生の話を會する故にと飽人は虛堂自を云ふ「こちらも極貧なれば其の方の薄粥もとんと聞きたくはなし」となりと。珠は注せり。

㌉歸新方丈。方丈のことは之れを略す、陽は遷陽で、「わたまし」なり。

㌊松花荷葉。大梅法常禪師の因緣なり、荷衣沼の傷に、「一池の荷葉衣盡くることなく、數樹の松花食餘りあり」と、新方丈を造るを言はんとして、古人の艱苦を並べたてたるものなり。

松花は松の蕊、荷葉は蓮なり。

㌋樣栗。とちの實やぐりの實、

㌌蹲鴟。芋がしらのこと、瓠瓜の因緣、煨芋の故事なり。

㌍驅虎豹。これは鵝山巖祐禪師の因緣、とらや豹を狩りのけて說法せられたれば、大震林となりて一千五百人の禪徒が棄りしとなり。

㌎坐荊棘。先德の山を開き寺を創む、みな是の如くならずと云ふことなし、寶所は大法寶の在る所なり。法華の化城喩品に、「當至寶所」とあり。

㌏住持。住持とは人に藉つて其の法を持して、之をして永く住して淚せざらしむるを謂ふなり。

㌐興樂藩籬。これ以下は大衆への謂語なり。

㌑匾々役々。せか〳〵と働くこと。誰々は專座、誰々は村不出し來行、誰々は地形の世話誰は職人の目付け方と、十方

にこせ〳〵と使ふことなり。

㌒遷歸。わたまし、屋移りの義。

㌓如何受用。どう住持してやらうかとなり。

㌔有心排佛祖。排ぼ斥なり、心にては佛祖も排斥するの氣なれども、止むことを得ず、學者の爲に抱泥滯水するなればなり。

㌕無口笑諸方。抑揚文を互す、これ丈室受用底なり、諸方の宗匠の落草するのを笑ふとならぬとなり。

㌖倫藏主。斷橋妙倫禪師は無準師範に嗣ぐ、淨慈に住す、人と爲り峻硬なりと傳にあり。この人は徑山の分座說法の藏主なり、故に爲に上堂して以て體重するなり。斷は「どん」よます讀みくせなり。

㌗無義漢。無義は脫體本分底なり、故に佛眼魔外も寃ひがたし、無義は倫藏主を指す、誰れか藏主がどんぞこを知るであらうと。

㌘口吃耳聾。吃は「どもり」、聾は「つんぼ」口吃で無聞無說底で、聞えぬ、把本の修行に若かずなり。

㌙驅劣到底。驅馬はとんと歩かぬじやうばりなるが故に劣と云ふ、到底は其の甚だしきを云ふなり。

㌚一氣轉一藏。一藏は藏主の職にあるもの、一代藏教を一息に轉讀しても、如是我聞などと云つてゐてはだめなり。

㌛是非終難洗。これは古句の「是非已に傍人の耳に落つ、洗つて驢年に到るも也た清からず」といふを轉用したもの、黃卷赤軸を離れずしてはとなり、倫藏主がにじりくじりと惡い所を洗濯せねばならぬと。

㌜大法云々。一氣已下、言ふは如此俊快でも、その名は人耳に落つると。これ大法が衰ふ故に、高德も凡人の口に傳ふとなり。至人もと名なしとなり、脣齒は「ほまれ」なり。

㌝削圓方竹杖。方竹は四方竹なり、削圓はけづりてまるくすること。

㌞輓却紫茸氈。紫茸氈はむらさきの毛の長き天鵞絨氈、輓却は引延はすこと。

桂苑叢談に曰く、

「方竹の故事は、李德裕と云ふ人が或は潤州の甘露寺の僧に道行孤高の人あり之に方竹杖一本を贈る、再び浙右に知事となるとき、その僧尙ほ在り、問うて曰く、前にを上げしたる竹杖は恙なしや否や。僧は喜んで對へて曰く、已に規圓に圓う削りて之に漆を塗りました、李公は情けないことしてくれたとて幾日も泣たと云ふこと。」

「紫茸氈は外國の珍產なり」と古來注す、今の天鵞氈なり。此の兩句は物と拘はらず透脫自在の境界を云ひしもの。

㌟是懶衲子。これは禪宗坊主ならば尋常の茶飯なりと、物に拘束せられてはよろしからずと。

㍀月波樓。嘉興府の西北城上にあり下に金魚池あり。

㍁蟾蜍眼裏。これ以下大悟徹底の活境界なり。

より發し、㋐初爻象なうして肇めて萬化の宗たるに及んで、舊に依つて㋑仲冬嚴寒。又見る㋒果州の飯布、作麼生か㋓遷變に落ちざることを得去らん。㋔嗚呼嗚呼、㋕只だ自知すべし。

㋖復た云く、「㋗諸方は今夜㋘盤に堆く滿て何る、㋙此間は鬪鬪揍揍として、㋚半青半黃、且つ諸人をして呑吐不下ならしむ。何が故ぞ、㋛鄭州の棗青州の棗、萬物は出處の好きに過ぎたるはなし。

上堂、「㋜盡乾坤の內、㋝一人の眞を發し元に歸するあることなし。盡乾坤の內一人の㋞佛法の名字を知るあるなとなし。直に得たり堯風㋟蕩蕩、舜日巍巍、野老謳歌し、漁人棹を鼓することを。會す麼。」喝一喝して、「㋠瑕生せり。」

㋡新修の僧堂に歸する上堂、「㋢石霜㋣千衆を坐枯するも、㋤己見未だ忘れず、㋥南泉㋦牛を牽いて巡堂するも、㋧乞兒富を鬪はしむ。興聖が㋨古屋、一旦に鼎新す、㋩坐臥經行、各宜しく㋪記取すべし。且く道へ、箇の甚麼をか記取せん。」喝一喝。

㋫上堂、「㋬椎花露を凝し、㋭梧葉秋を鳴す。㋮景に遇ひ物に觸れ、㋯分に隨つて羞を知る。」拄杖を卓して、「㋰住みね住みね、諸方聞き得て道はん、我れ㋱老婆禪を說くと。」

㋲中秋上堂、一年十二箇月あり、毎月㋳一度團圓、其の餘は盡くこれ缺く。中間の㋴晦明㋵出沒、㋶太半見えざるものあり、惟だ今霄のみあつて、分外に皎潔なり。㋷物の比倫するに堪へたるなし、我れをして如何が說かしめん。

上堂、擧す、趙州因に僧問ふ、「學人㋸乍めて叢

㋐初爻。易の卦爻の第一爻。乾元の初爻。
㋑仲冬。十月。
㋒飯布。麻布。
㋓遷變。變化。
㋔嗚呼。感嘆の詞。
㋕只だ自知。自己の本分を知るのみ。
㋖復た云く。
㋗諸方。諸國。
㋘盤。
㋙此間。
㋚半青半黃。
㋛鄭州棗青州棗。
㋜盡乾坤。
㋝一人。
㋞佛法。
㋟蕩蕩。
㋠瑕。
㋡新修。
㋢石霜。
㋣千衆。
㋤己見。
㋥南泉。
㋦牛。
㋧乞兒。
㋨興聖。
㋩坐臥經行。
㋪記取。
㋫上堂。
㋬椎。
㋭梧。
㋮景。
㋯分。
㋰住みね住みね。
㋱老婆禪。
㋲中秋。
㋳一度。
㋴晦。
㋵出沒。
㋶太半。
㋷物。
㋸乍めて。

知らず、嗜睡掉臂も自意なりと、時常受用して居ると云ふことを知らずに居るといふ。
㋹古風。禪迦、流磨も外にない。
㋺大朴。大朴は自本造りなり、上古質朴の大濟が再び彰る、諸佛無上の妙道が、不知無心にあらはるるなり。
㋻一氣。冬至にて、初めて一陽生ず。
㋼九淵之底。黃泉の下にて、一番地の下のどんぞこ。
㋽初爻無象。初爻は乾元の一爻形象はなきもの、即ち萬物化生の宗本なり、人の爲め建立の機を說きたるものなり。
㋾仲冬嚴寒。遷變の上に於て、不變を示すなり。
㋿東州飯布。四川の順慶府は古の果州なり、粗末なる衣布のこと。果州は麻布を出す所、これにて飯の上を覆ふ、方語に漏逗不少と云ふ、

枯する。
㋿盡乾坤之內。これ以下の二句は、釋迦も出世せず、達磨も西來せずの本地なり。
㌀一人發眞歸元。これ楞嚴九の上に出づる語。眞諦を發し、根元佛性に歸するものをいふ。
㌁佛法名字。南無佛と云ふことも、心地法門と云ふこともなし。
㌂蕩々。廣遠なる貌、大平の時節をいふ。野老謳歌も、漁人鼓棹も、みなこれ同じ、無修無證、無爲、天眞の法を明すことを要すとなり。
㌃瑕生せり。早や後廻りなり。
㌄新修云々。歸は還入（わたましし）なり。
㌅石霜。慶諸禪師、道吾智に嗣ぐ、石霜山にあること二十年なりと。これは僧堂の古因緣を擧ぐるなり。
㌆坐枯千衆。學者が疎劃（さだ）め、師慕して堂中に臥せずに

龍溪は閑家具を拈起して、闖（ちん）侯子れが撥轉すといへり。
㌇遷變。四時のうつりかはり不落にてその沙汰もなしとの意。
㌈嗚呼。歎辭。「あゝ、あゝ」なり。
㌉只可自知。たゞ手前で知らにやなるまい。
㌊復云。冬至小參の提綱なり。
㌋諸方。世間の叢林は、みな豊饒なり故にいふ。
㌌堆盤滿飣。堆盤は鉢に思ひきり高くなり、飣は食が盛くなり、貯ふるなり、御馳走がたくさんなり。
㌍此間云々。俺の所は何もかもごたまぜなり、闖揍は彼此投合するの意。
㌎牛青半黃。果の生熟なり、なまにえやら、にえくさりやら。
㌏鄭州棗云々。それ〳〵名物ばかりなり。

まるで枯株の如きものあるに至る天下中之を枯木衆といふ。

㋑己見未忘。化他を專らにするを云ふ。

㋺南泉。普願禪師、馬祖に嗣ぐ趙州の師なり。

㋻牽牛巡堂。趙州錄下に出づ、趙州の南泉に在るとき、泉一頭の水牯牛を牽きて僧堂の內に入つて巡堂と云ふて、大衆の坐禪するのを檢査したることあり、この因緣なり

㋼乞見闕官。首座と趙州とは互に見解を呈する故に云ふ、乞食が貰ひだめの自慢くらべをするようなものなり。

㋽古屋。僧堂なり、聊新は聊は改むるなり、聊にてものを焙し改める故にいふ。

㋾坐臥經行。經行は僧堂の中にての運動なり、へめぐる意。

㋿肥取。覺えて居れとなり。是れ何物か覺えて居るのじやと次に云へり。

㌀上堂。初秋の上堂なり。

㌁槿花。むくげの花。

㌂梧葉。桐の葉、鳴秋は秋風が吹いて鳴るなり。

㌃酒景餚物。そよ〳〵と吹く萩の上風を見るにつけて、聞くに付けの意。

㌄萩の下風を見るにつけて、聞く分知蓋。納僧の境界に於て、ほろりと涙をこぼす所。

㌅住住。もう止めよ止めよとなり。

㌆老婆禪。虛堂も年の加減にてか老婆心切なる所か悟り教へてやるといはれては。

㌇中秋。八月十五夜の月見なり。

㌈一度。十五夜の月、團圓は望を云ふ。

㌉晦明。曇つたり晴れたり。

㌊出沒。東川西沒なり。

㌋大半。三分の二を大半と爲す、大方は見えぬがちじや。

㌌無物堪云々。これは寒山詩の「吾心似三秋月一、碧潭淸皎潔、無三物堪二比倫一、教二我如何說一」の語を引く月に托して佛事を作す、比況見るべし。白隱禪師は「和レ盤托出底驪珠」と評せらる、比倫はくらべものがなし、良に言語道斷で何とも說くべき語がなしとなり。

㌍乍。はじめてなり、乍入などと云ふ、たちまちなり。

㌎乞師指示。何卒入路を御示し下されたしと。

㌏鉢盂。自分の持てる持鉢とて、めしを食ふ五つ重れか四つ重れの椀を云ふ。佛時代は一つの大なる鉢を云ひし樣子なり、今は日本式では右の通りなり。

㌐有省。悟つた氣がついた。

㌑趙州。從諗禪師、南泉に嗣ぐ。

㌒運斤。斧を振りまはすこと。

㌓具就斷。けづりに就くは、參禪の參に譬へるなり。

㌔資。氣質なり、この二語は莊子の徐無鬼篇の語を轉用したるなり、「主客相應の境界を言ふ」と龍溪は

林に入る、㋺乞ふ師指示せよ。」州云く、「粥を喫し了るや也た未だしや。」僧云く粥を喫し了れり。」州云く、「㋻鉢盂を洗ひ去れ。」其の僧省あり。師云く、「㋼趙州、㋽斤を運すの手あり、者の僧㋾斷に就くの㋿資を具す。然りと雖も也た是れ㌀地に就いて雀を彈す。」

結夏上堂、天下の禪和、今朝盡く㌁野狐窟裡に入つて㌂伎倆を做す。山僧則ち㌃水に退いて鱗を藏すと雖も、終に㌄鬻股に向つて肉を割かず。

上堂、擧す、㌅雪竇、㌆春山亂青を疊み、㌇春水虛碧を漾はす。㌈寥寥たる天地の間、㌉獨り立つて望み何ぞ極らん。㌊乳峯㌋年老いて鄉を思ふて、東に望み西に望む。㌌興聖㌍豈に道ふことを知らざらんや、㌎春波門外、㌏水あつて

注ぜり。

㋺就地彈雀。地に落ちて死んでゐる雀に彈き弓をはぢくなりこれは小僧でもすることなり功勞多しとせずとなり。

㋻野狐窟裡。黑暗鬼窟なり。

㋼伎倆。「うでまへ」をいふ。

㋽退水藏鱗。跡を閑靜の處に晦ます義、結夏、安居、禁足を云ふ。

㋾向鬻股割肉。鬻の股は方語に無用の處とあり、悟れの何のといひはぜぬと、柔かに言ひ聞かせるなり、割肉は刻期取證なり。衆に對して辛辣ならざるを云ふ。

㋿雪竇。重顯、字は隱之、智門祚に嗣ぐ、明覺大師と號す。「この語『云く』の字があるべきなり、無さも亦通ず」と古人が云へり。

㌀春山。頃しも春のことなれば山の景色も青々と。

㌁春水。雪も消えて水も增せば水の面もことゝく綠なり、虛碧は水の澄みきつたること。

㌂寥寥。ひろびろしたる天地の內。

㌃獨立。この景色何ともどうも云ひようはなし。「この句は全く任運無事、天眞獨露の境界を云ふ」と龍溪も註せり。これが雪竇の宗旨なり。

㌄乳峯。雪竇山の別名、又乳竇とも曰ふ。

㌅年老云々。望むと云ふことを破するなり。

㌆豈不知道。興聖も負けはせぬ歌ふて見せやうかとなり。

㌇春波門。嘉興府東門なり。

㌈有水無山。興聖の境內は山はなけれども、海水渺々なり。

㌉路途雖遠云々。何ほど馳走が在つても、虛堂がうちに居たる方が好し、雪豆は望み何ぞ極らんと云ひ、虛堂は家に在

山なし、尋常只だ是れ望み得ること能はず。何が故ぞ、ヒ路途好しと雖も、家に在るには如かず。

上堂、ヌ鳧を續ぎ鶴を截り、イ嶽を夷げ壑に盈つ。ロ衲僧家ハ油の麵に入るが如し、還つて㋺招寶山の㋩等子秤を把ることを知る麼。知得せば㋥南海東頭底、儞に許す商量することを。然らずんば、ト市廛邸店、チ耳語だもすることを得ず。

上堂、リ暮春には春の服既に成りぬ、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風して、詠じて歸らん。夫子喟然として嘆じて曰く、「吾れは點に與せん。」師云く、「ヌ腮を隔てて馬騎を看ることは、故に之あり。衲僧家、ル黑衣を著けて黑柱を護ることは、終に ヲ儞に向つて道はるに如かずとは何故云ふたかこゝが心を付けて看るところなり。好しとは風景の好きを云ふ。

ヌ鳧を截鶴。短しとて接がば憂へん、長しとて斬らば悲まん。

イ夷壑盈壑。日本ならば比良が嶽を毀ち湖水を埋めて眞平にしたがる、何もかも一つにして平等にしたがること。

ロ衲僧家。この禪宗坊主の所にてはの意。

ハ如油入麵。出期なきを云ふ。

㋺招寶山。寧波府に在り、無着の註に、「海商の乘る津」と。

㋩等子秤。大は秤といひ、小は等といふ、「てんびん」、又「はらぎ」、「はかり」。今の稅關のある所と見ゆ。これは禪話の不可思議なり。

㋥南海東頭底。東南海上の法窟に横行して、高談闊論することは、儞が商量することを許すと。

ト市廛邸店。町の店や宿や、はたごやを邸といふ、處々の叢林に比す。

チ耳語。さゝやくこともならぬこと。

リ暮春云々。この語は論語の先進篇にあり、春服、ひとへもあはせもやきたい、冠者として元服したる二十ばかりのものか、連れ立ちて、童子なる次郎も太郎も來れと引き連れて、沂と云ふ巷の城南の溫泉に浴して舞雩として祭天祈雨の壇に冷しき風にあたり、歌なうたふて歸らんとなり。冷しき風に乘ずるを風と云ふ、詠じては歌ふなり。夫子は孔子、喟然は大息、「ためいきする」こと。嘆は稀嘆しての玉ふ、點は曾參の父、曾晳の名、與するは夫子は深く之を許すことなり。

ヌ隔窓云々。まどの内から競馬

じ、ワ依稀たり松の屈曲、カ髣髴たり石の斕斑。」

ヨ報恩を受けて衆を辭する タ上堂、レ流虹ソ七載蚤緣盡く。又ツ天寧に向つて ネ債窠を理す、ナ驢胎を脫得して ラ馬腹に入る、ム皮毛輕重多きことを爭はず。

ル黑衣。「吾黨は春服を著けず、風物を詠ぜず、只だふだんに黑衣を著けて三條椽下の黑柱を護つて坐す、その本分眞常の旨は、終に諸人に向つて道破せず」と、龍溪は註せり。東山下の左邊底を會得したるものは、晴でも明でもなし、明晴双々でもなしとなり。儞向不道。儞とは諸人を云ふ。

ワ依稀云々。稀は當に希に作るべし。さもにたりなり、松は「うね〳〵」なり。

カ髣髴云々。斕斑はいろ〳〵のこもんまだら、是れは意解すべからざるを表示して、今諸人の爲に道破するなり。

ヨ受報恩。受は其の請待を受くるなり。

タ上堂。退院上堂なり。

レ流虹。無着云く、「理宗流虹聖地興聖之寺の八字を御書す。」興聖寺と云ふことなり。

ソ七載。紹定二年より端平二年に至る。

ツ天寧。始め報恩と云ふ。

ネ債窠。宿債の窠窟なり。

ナ脫驢胎。興聖寺を脫してなり。

ラ入馬腹。報恩に入るを云ふ。

ム皮毛輕重云々。寺兼の勝劣を較ぶ、相似て大小多分の不同なきを云ふ、驢と成りて債なかへすも、馬と成りて債なかへすも、格別違はなしとなり只だ箇の一虛堂叟なりと云ふこと。

興聖寺語錄　終

嘉興府㋑報恩光孝禪寺語錄

參學㋺可宣編

㋩師入寺、㋥陞堂、祝聖畢つて、次に拈香して云く、「此の香無事甲裏に㋭颺在すること多年矣。今日㋬貧時㋣舊債を思ふ、未だ免れず拈出して、前住㋠安吉州㋡護聖萬歲禪院先師㋢運庵和尚に供養して、用つて㋤法乳に酬ゆ。」

㋥師、座に就く、僧問ふ、「㋦金鷄曉を唱へ、㋧玉鳳花を啣む、㋨朝蓋筵に臨む、㋩請ふ師祝聖。」師云く、「㋪獨角の麒麟、㋫海嶼に登り、㋬九包の鸞鳳㋭神山に舞ふ。」僧云く、「三聖道く、『㋮我れ人に逢ふときは則ち出づ、出づるときは則ち人の爲にせず』と、此の意如何。」師云く

㋑報恩。天寧報恩光孝禪寺のこと。秀州の嘉興縣に在り、月波樓、妙莊嚴城、鴛鴦湖、南湖等の境あり。大宋八主の徽宗皇帝の香火に奉ずるなり、寺は諸郡州に在り、本朝の國分寺の如きものなり。

㋺可宣。無示禪師、明州象山縣の人。蓬萊長老といふ。法語眞贊の部に出づるが、それなり、虛堂の法子なり。

㋩師。五十一歲なり。

㋥陞堂。上堂のこと。

㋭颺在。放擲して置いて思ひ出しもせなんだ。

㋬貧時。時は當に「見」に作るべし。

㋣舊債。師家と成りて見れば昔の事を思ひて親の恩を知りぬ。

㋠安吉州。湖州府なり、宋には安吉州と云ふ。

㋡護聖萬歲禪院。湖州府烏程縣にあり、道場山といふ。

㋢運菴。字は少贍、名は普岩、虛堂の師なり、運菴は菴號なり、松源に嗣ぐ。

㋤用酬法乳。燒香師の恩に酬ゆ乳は血脈なり、嗣香は興化が開堂に臨濟先師の爲に供奉したるに始まる。

㋦師就座。立地佛事畢つて、法座に就くこと。

㋧金鷄唱曉。人間もと金雞の名

「㋕地を掘つて深く埋む。」僧云く、「興化道く、『我れ人に逢ふときは則ち出でず、出づるときは則ち㋖便ち人の爲にす』と、又作麼生。」師云く「㋗釣絲水を絞る。」僧云く、「只だ㋘判府侍郎、和尚を請じて、開堂演法、相送つて寺に入るが如きんば、何の祥瑞かある。」師云く、「恐らくは㋙一城の人を動かさんことを。」僧云く、「還つて人の爲にする處ありや也た無や。」師云く、「㋚獨り儞のみあつて皮下に血なし。」僧云く、「㋛夜來の鴈に因らずんば、爭か海門の秋を見ん」といつて、便ち禮拜す。

㋜師乃ち云く、「㋝黃葉門を遮る、拄杖子㋞者の死漢を打せず、㋟蘆花膝を擁す、㋠嗜驢兒甚の生涯か有らん。㋡大都ね㋢法未だ情を忘せず、是を以て隱せば彌露はる、㋣普化の㋤紅塵堆裏、㋥盤山の㋦猪肉案頭、㋧靈鷲の雄機を發揮し、㋨少林の密旨を顯示す。然も是の如くなりと雖も、山僧尋常、㋩曾て人の與に破口に箇の不の字を道はず、㋪今日事已むことを獲ず、㋫威光を抑下し、諸人を普請して、同じく塵中の佛事を證す。」拄杖を卓して、「㋬是は即ち是、只だ是れ不合に踏步向前す。」

㋭復た擧す、㋮王常侍、㋯臨濟を訪ふ、問うて云く、「者の一堂の僧、還つて㋰看經すや否や。」濟云く看經せず。又問ふ、「還つて㋱習禪すや否や。」濟云く、「習禪せず。」侍云く、「經も看せず禪も習せず、箇の甚麼をか作す。」濟云く、「㋲總に伊をして成佛作祖し去らしむ。」侍云く、「㋳金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。」師云く、「㋴好一局の棊、黑白已に分る、只だ是れ㋵末後の

なし、以て天上の金鑑星に應ずと云ふ、星の名なり、六つ時に鳴く、東天光と曉を唱ふるは、出世の初に時を知るを云ふ。

㋕玉鳳啣花。鳳は瑞鳥なり、師の開堂演法は、人天の昏夢を開覺す、何ぞたゞ百鳥花を啣んで來るのみならん乎。諸衲子の歸仰を云ふ、啣は外からふくむ、含は內からふくむと云ふ字なり。

㋖朝蓋。蓋は車の屋根で、勅使の法會に入るを云ふ、即ち判府侍郎等なり。

㋗請師祝聖。どうか清代有道の君主か萬歲々々と至祝し玉へ。

㋘獨角麒麟。王者至仁なれば麒麟出づ。

㋙海嶋。海中洲の上に石山あり之を神山とも云ふ、海上の三神山を云ふ。

㋚九包靈鳳。鳳に九包あり、靈は青色多きもの、鳳の赤色多きものなり。

㋛神山。蓬萊、方丈、瀛洲なり。

㋜我逢人則出。この三聖と興化との語は、虛堂が出世出不出の時節なれば問か設くるなり。

㋝捫地深埋。把住なり。こいつ婆婆に設くやつでなし、厄介もの、それ〳〵佛も魔も深く埋めて置けとなり。

㋞便爲人。出たら根機に應じてそれ〳〵に引き入れること。

㋟釣絲絞水。無用處なり。金鱗に遇はざるなり、みな此の禪客を抑ふ。絞は縛なり、糾なり、要は閑言語取るに足らぬことなり。

㋠判府侍郎。嘉興縣の刺史なり。

㋡一城人云々。嘉興府滿城の人を驚動せしめんとなり。

㋢獨有儞皮下無血。盡大地爲人の所なり。汝のみ皮下無血で死人同樣、慚愧を知らぬ可憐

生なりと。

㋣不因夜來雁。これは宗師の指示に因つて、祖師門下の格外なることを承知したとなり。南に歸る雁の鳴き渡るを聞いて、秋の樣子を見ることができようぞとなり、海門は浙江にあり。「問はずんば知ることを能はざるの義」と鶴溪の註にあり。

㋤師乃云。提綱なり。

㋥黃葉遮門。この葉に吹き埋められて、柴の編み戸に寄せもせぬが寄りつきもせぬ、山中暦日なしといへる古歌の「山里の心靜かに栖み好きは、問ふ人もなし待つ人もなしと」云ふ態なり。南陽忠國師あたりの境遇を云ひしものか。

㋦不打著死漢。虛堂が拄杖は、この佛祖あることも四時あることも知らずに居るものも、師の氣には入らぬとなり。利

觀は死漢を斬らずとなり。

㋧蘆花擁膝。上の句と同じく、只だ無意味に打坐して閑樂を貪る。政黃牛の故事、青銓山の閑豫等なり。

㋨嗜驢兒。めくら馬である、たゞ一日一日と空しく過すまでにて、何の生きかひがあるとなり、これは下語の體を以て刻蔵し了るなり。

㋩大都。畢竟する處、情を盡せよとなり。

㋪法末忘情。法塵分別は役に立たゝぬと、見地不脫と呵しくある、見地にしがみ付いて變盡して五と成るの場などは、夢更に知らぬ、知識が多き故にと球長老は書き添へたり。

㋫普化。鎭州の普化和尚は盤山に鬧ぐ。

㋬紅塵堆裏。町中の酒肆娼坊の所で町頭來也明頭打、暗頭來也暗頭打と、「ちりんちりん」

と鐸を振ふこと一下す。

㋖盤山。兩州の盤山寶積禪師は馬祖に嗣ぐ。

㋗猪肉案頭。案は机のやうのもの、肉切り臺、この因緣は、ある日市肆に於て一客人の豬肉を買ふのを見て、よき所一斤私にもくれと云ふと、屠家は刀を放下して叉手して曰く、どれもこれもよき肉ばかりといふ、師こゝに於て省あり。

㋘甕鶯雄機。枯花微笑の大機大用を開發振揮してなり。

㋙少林密旨。二祖安心、達磨西來の秘意を顯露指示す。

㋚曾與人云々。與は相手にする、破口は口を開いてなり。不の字、不可の字を云はぬ、人天衆前なれば容易に口をあいて是非も何も云はぬとなり、本據ふ底の法なければなり。

㋛今日事不獲已。今日入院開堂、辭退ならぬこと、故にいふ。

㋜抑下威光。本分安住の威光を抑下してなり、諸人は則ち人天四衆を集めて、同じく出世邊の塵中は山中の如し、市中と云ふこと、五濁世界茫茫たる中で、佛事利濟の道を證據「あらはす」となり。

㋝是即是云々。是は是、何が惡しきには有らず、不合は「でそこなひ」存じもよらぬこと、入院なれば踏歩向前、天寧に踏歩、あれのこれのと餘りすゝみすぎたと云ふことなり、出世のことなり。

㋞復舉。拈提なり、府主の諸待、朝蓋鑑鑑の處にて舉揚したるなり。

㋟王常侍。鎮州府主、襄州の王敬初濁山祐に嗣ぐ、常侍は文官の名、日本の中宮の亮に當る官職なり。

㋠臨濟。義玄禪師、黃檗に嗣ぐ、唐の懿宗咸通八年四月十日寂す、この話は臨濟錄に出ず。

㋡看經。古教照心のために、經文を研究して居るかとなり。

㋢習禪。それならば坐禪辨道してゐるかと。習は「しゅう」と讀くせなり

㋣總教伊云々。すべて彼等なほ佛になるのなんのかんのと、くづ〳〵ぐずに、單刀直入せしめるとなり

㋤金屑雖貴。是れは淨名經にも出づ。やすり屑でも貴けれども、ちよつと眼へ入れると膜がさるべからず「翳と成る」は眞くら暗になりて膜がればならぬ。

㋥好一局碁。上手と上手の出合ひ、まう已に黑白分明なり、一局は一番賓主歷然なり。

㋦末後一着。落處なり、末後の一着石の落處は、何處かと承知ができぬ、此の虛堂でなくては、落處を知るまいとなり。

㋧當晚。入寺の晚なり。

㋨與諸人相見。殊曰く「悠勝に相見するも、早く五須彌か隔つ」と大燈師も云へり。

㋩世諦。これは涅槃經に「出世の人の知る所は第一義諦、世間の人の知る所は名けて世諦と爲す」とあり、世間なみの面會ならばとなり

一着、人の落處を知得するなし。」

㋪當晚小參、作麼生か㋫諸人と相見せん、若し㋬世諦の相見を作さば、㋭寒温已に畢る、若し㋮佛法の相見を作さば、㋯問答已に周し、況んや㋰衲僧家、㋱眉、箭鋒の如く、㋲眼、銅鈴に似て、㋳未だ舉せざに先づ知り、未だ話せざるに先づ領ずるをや。甚麼の相見不相見とか說かん。然りと雖も、山僧乍めて㋴此間に到る、㋵非寵の向背㋶門限の高低を知らず、㋷未だ免れず頭めより問過することを、何が故ぞ㋸彼此知らんこと要す。

復た擧す、㋹法燈、衆に示す、「㋺本深く巖壑に藏れて、隱遁して時を過さんと欲す、㋻奈せん㋼清涼老人、㋽未了の公案あることを。出で來つて他の與に了却せよ。」時に僧あつて出でて

㋪當晚。お寒いとかお暑いとか人事の問訊はもはや仕舞なり。

㋫佛法相見。沙門出家の出合ならばなり。

㋬問答已周。金鎖、玉鳳などと已に殘る所はなし。已周は濟んだといふこと。この二相見は相見不相見の窠窟な、掃蕩せんと欲するなり。

㋭寒温已畢。お寒いとかお暑いとか人事の問訊はもはや仕舞なり。

㋮佛法相見。沙門出家の出合ならばなり。

㋯問答已周。金鎖、玉鳳などと已に殘る所はなし。

㋰衲僧家。この僧は「すれつからし」じやほとに。

㋱眉如箭鋒。鋒は矢はず、眉の眞すぐなること、ちよつと見ても面相が惡し。

㋲眼似銅鈴。銅眞鑰の如く、この二つは共に快活靈利の相なり。

㋳未舉先知。一一英靈底の人等ばかりなりと、王常侍が臨濟を訪ふたは、云はぬさきに承知してゐる。未話は早や落處を合點する、すさまじき衲僧なりと。

㋴此間。報恩寺の此所にの意。

㋵井寵向背。井戸やかまどの向きよう、西向き東向きやなり

㋶門限高低。門のかまちが高いやら低いやら。

㋷未免。頭より一々學者が勘辨するにて問過するなり。

㋸彼此要知。はてさて何處もかしこも知らればならぬとなり

㋹法燈。泰欽禪師なり、法眼に嗣ぐ、清涼に住す。

㋺本欲深藏。釣語なり。深く巖壑に藏しで、樣栗松花を食ふて、過す時で一生涯を送らんとするなり。

㋻奈。氣の毒なことにほとの意

㋼清涼老人。清涼法眼なり。

㋽未了公案。公案は中峯和尚は公府の案牘に譬へるとなり。また吟味の濟まぬこと他の與とは清涼の老人のために了却す、諸勘定濟まぬ、結算ゐせ

問ふ、「如何なるかこれ未了の公案。」燈便ち打して云く、「㋐祖禰了せざれば、殃兒孫に及ぶ」と。師云く、「法燈㋑放去は太だ奢に、㋒收來は太だ儉なり。者の僧身㋓白及を挾して㋔義氣雲に薄る。㋕檢點し將ち來れば、依前として未だ了せず。山僧箇の㋖小院に住すること七年、㋗拕泥帶水、手脚未だ乾かず、今日乍ち㋘報恩を領す、人事倥偬たり。若し是れ未了の公案ならば、敢て拈出せじ。何が故ぞ、恐らくは㋙先師を屈辱せんことを。」

次の日、㋚徽宗皇帝の爲にする上堂、㋛古佛過ぎ去つて亦久し矣、知らず何れの處にか㋜羣生に應ず。㋝紫金光聚人觀がたし、空裏惟だ聞く仙樂の鳴ることを。

上堂、報恩に㋞三件あり、㋟諸方に如かず、第一には㋠說到行不到、第二には㋡行到說不倒、第三には㋢雲。拄杖を卓して、「㋣人貧にして智短く、馬瘦せて毛長し。」

上堂、擧す、㋤楊岐、㋥慈明に問ふ、「㋦幽鳥語喃喃、㋧雲を辭して亂峯に入る時如何。」明云く「我れは㋨荒艸裏に行き、汝は又深村に入る。」岐云く、「㋩官には針をも容れず、更に一問を借り得てん麼。」㋪明便ち喝す、岐云く、「㋫好一喝。」明又喝す、岐亦喝す。明㋬連喝に兩喝す。㋭岐便ち禮拜す。師云く、「㋮喬木を下つて幽谷に入る。㋯養子の緣、慈明㋰其麼としてか連喝に兩喝す。」

上堂。拄杖子、尋常㋱口吧吧地にして道ふ、我れ㋲能縱㋳能奪㋴能殺㋵能活と、㋶他に㋷遠法師、㋸甚に因つて㋹虎溪を過ぎざると問ふに及

よとなり。

㋐祖禰。父の廟を禰といふ、清涼をさして云ふ。この語はこの話の肝心なり、殃兒孫に及ぶとある。

㋑放去太奢。ゆるしされば、のつしと重たげに、初めは柔かにかゝり。

㋒收來太儉。しまひは蓋だ一文錢も惜しさうなり。

㋓挾白及。挾は横におす、又「すれあふ」。この僧はすさまじき氣象なり。

㋔義氣薄雲。高義高天にせまるこの二句は性命を惜まずに修行するに譬ふ。

㋕檢點將來。能く〳〵見るに、依前としてやつぱり勘定が濟まぬと。

㋖小院。興聖なり。

㋗拕泥帶水。どろまみれにて、手も脚も未だ乾かぬとは、淸閑を得ざるを云ふ。

㋘報恩。領ずとは住持となつたること。人事倥偬とは、賀儀や披露やと、事繁くして困苦すること、爲人垂手の處なり。倥偬は字彙に「暇あらず」と訓ず。

㋙屈辱先師。先師は運菴なり、拈出せじは取り出さぬこと、恐らくは先師に恥かゝせることなり、此の虛堂がいつておくなりと、屈辱ははじをうくるなり。

㋚徽宗皇帝。大宋の八主、在位二十六年なり。金の爲に擄にし去らる、壽五十四にて崩ず、報恩寺は徽宗皇帝の菩提寺なれば、入寺の翌日特爲上堂なるなり。

㋛古佛。徽宗帝を謂ふ、佛法と王法と一般なり、天子は人民を惠み玉ふ故に、古佛と云ふ去亦久とあるは、帝の崩御より、九十九年になる故なり。

㋜羣生。何處に居つて一切衆生ぬ利濟なされたのであるぞとなり。

㋝紫金光聚。法身の如來光明を紫金光と云ふ、これも徽宗を申して佛の光明と同にきに譬へる人雖觀とは形は見えねども何の處にか惟だ聞く仙樂の鳴ることをと。この微妙の仙樂も聞くと、紫金もよく拳を見るが如し、これこそ眞箇の徽宗帝なりとの意。

㋞有三件。件は分次なり。

㋟不如諸方。世間の叢林とは違ふぞとの意。

㋠說到行不到。口に云ふことは云ふが、身の行ができぬ、口に一尺說かんよりは身に一寸なば行はんには如かず、說通來在なること。

㋡行倒說不到。身の行はできるが、口不訓法なり。八兩半斤なりと。

㋢雲。物を指すこと、雲ふこゝろは行が說には涉らず、唯だ直下に聞かん、さあ如何んと云ふこと。

㋣人貧而智短。貧すれば鈍するの意、貧になると、智慧がたらぬ羊になる、馬瘦せ毛長とは餌が足らぬとからだは瘦せて毛が長く見えると、宗旨の衰退に譬ふ、吾が道裏は賤劣にして如ず」と龍溪は註せり五祖法演禪師の語を用ひたるなり、この二語は脫落身心の境、一眞實の義か。

㋤楊岐。方會禪師なり、慈明に嗣ぐ。

㋥慈明。楚圓禪師なり、汾陽昭に嗣ぐ。

㋦幽鳥語喃喃。幽鳥は「ひばり」なり。人の見知らぬ鳥が、「ちゝくちやちゝくちや」とさへづる。多語なり。「こりや楊岐が虎鬚を持つる乎」と珠長老

と云へり。

㈡ 鮮雲入亂峯。鮮雲とは法性の義、向上の青雲を鮮し去りてなり、亂峯は草や木の生え茂りたる山に入りたるときは如何んと、「この意は尊が降り卑に就くの許可を望むことなり」と龍溪の註に見ゆ。

㈩ 荒艸裏。ひばら松原かき分けて、段々深村に入る、工夫の純熟すること、入深には同途を許さず、本分向上の深き所知音はないぞと。

㈫ 官不容針。公儀の前にて能く定りたるものなり。

更に一問、學者の言葉を要す。「尚ほ容接を求む」と龍溪は註ぜり。

㈬ 明便喝。後面に到りて一向に把住すと。天地も破れ、佛界魔界も粉微塵に喝したり。

㈭ 好一喝。尚ほ主を辨ぜんことを要すと。あゝ好一喝、師を弄するなり。

㈮ 連喝兩喝。李母が耳、趙襄が眉なり。

㈯ 岐便禮拜。「師弟のくんづころづの問答なり」と珠長老はいへり。

㈰ 下喬木入幽谷。これ祭を下り卑に就くの義、本分の向上を下つて幽谷第二義門に下る、獅子の子を育つるが如く、この語は詩經の小雅又孟子の滕文公篇に出づ。

㈱ 養子緣。つぎ木のようにて實はさうでではなし、揚岐と慈明とは誠に養子の如し、慈慈容接なり。

㈲ 蹇蹇。心切な辨ぜんことを要して、引攣いて喝を下す、「言中に聲あり」と古人は抄ぜり。

㈳ 口吧吧地道。吧々は口まめなることと、又大口の貌、爭ふやうなる言葉。

㈴ 能縱。放行なり、瓦礫も光を放す。

㈵ 能奪。把住なり、日月も眞くらやみなり。釋迦も達磨もなり。

㈶ 能殺。能活。餓骨ももの云はせること。

㈷ 健。やい拄杖子よ。

㈸ 困甚。なんたることぞや。

㈹ 遠法師。晉の高僧、本姓は賈氏、廬山に卜居してより三十餘年、影山を出でず、客を送るごとに常に虎溪橋を界となす。

㈺ 虎溪。九江府にあり。

㈻ 便道不得。氣を呑み聲を飲む、きよろ〳〵途方にくれてさあいふてみよ、この病はどこにあると那裡はどこにあるかなり。

㈼ 溪林葉闌。頃しも秋のことなれば谷の林々に葉がばら〳〵落ちてとこれは見の境界なり。

㈽ 塞雁聲寒。時雨か風か吹き來りて雁の聲も寒さやうなりと。これは聞の境界なり。

㈾ 見成公案。見たり聞いたり、そのまゝなり。

㈿ 大難大難。慈明も楊岐も虛堂もなみ大抵のことであるかと、以上の四句は任運天眞の境界、最大難と賞す。

(1) 百雜碎。さつぱり殺さず、打碎くなり、大難や見成公案を奪ふなり

んで、(2) 便ち道ふこと得ず。旦く道へ、病那裡にか在る。

上堂、(3) 溪林葉隨ちて (4) 塞鴈聲寒し、(5) 見成公案 (6) 大難大難、(7) 百雜碎、(8) 鐵團圞、(9) 風に和して搭在す玉闌干。

冬至小參、「(10) 天寒人寒、(11) 針頭に鐵を削る、(12) 滴水滴凍、(13) 畫餅飢に充つ。(14) 丹霞木佛を燒く、(15) 餓狗枯髏を齧む。(16) 鏡清單を展べず、(17) 胡餅裏に汁を覓む。(18) 從上の老漢既に (19) 把不定にして、未だ免れず、(20) 時に隨ひ節を逐ふことを便ち見る、(21) 陰消し陽長じ、小去り大來つて、(22) 暖律灰を飛し、(23) 繡紋線を添ふることを。只だ (24) 無陰陽地の如きんば、還つて (25) 遷變ありや也た無や。」拄杖を卓して、「(26) 月彎弓に似て、雨少く風多し。」

(1) 鐵團圞。當も立たゝぬなり。

(2) 和風搭在玉闌干。風と一つにして玉欄干にかけ置くなり、「一把柳枝敢不得、和風搭在玉闌干」と云ふ詩あり。皆無難のことを云ふ。颯と吹きなびくこと。この二句は活機用にて滿したるなり。

(3) 天寒人寒。寒いのなんのと雪はちらつく向ふ風。

(4) 針頭削。これは著語の態なり無用處なりなどと云ふ「抄は不可々々」と珠はいへり。天寒の辛辣を明すなり、いやが上にも針を立つるほどの寒さなりと。

(5) 滴水滴凍。白水仁禪師の語なり一滴水一滴凍は則ち的的無餘間に髮を容れざるの境界なり語の因緣は次に見ゆ、平たくいへば「ポント」と落ちたる水は、直凍ると、これは如何と。

(6) 畫餅飢。絵にかいた餅、腹がふくれると。これも未だ實悟實得と稱せず、これも噂物語なり。

(7) 丹霞燒木佛。丹霞が天寒に値ふて、木佛を取りて火に焚いてゐると、院主呵責して、なぜ木佛を焚いたかと。師は杖を以て灰をあばいて云ふ、吾れ燒いて舍利を取らんと、主云く、木佛には舍利はなしと師云く、舍利がなければ兩脇立ち燒いてしまうか、院主自後眉鬚墮落す。

(8) 餓狗齧枯髏。甚の滋味かあらんとなり。飢えたる犬が髑髏をかむやうなものなり。

(9) 鏡清。鏡清道怤禪師なり、雪峯存に嗣ぐ。この因緣は傳燈錄の白水仁の章に、會元の本傳にも出づ。單は「ふとん」、展は「しく」こと。このこと滴水滴凍とは同じ。人の緣なり。

(10) 胡餅。白胡麻をまぶしたもち

堅いだん子のやうなるもの。已上は句句著語を以て本則の機を奪ふなり。

㋑從上老漢、潙山、白水、丹霞、鏡清なり。

㋒把不定。疎曰く、「各々本分を守らずして垂手爲人するは、これ把不定なり」と。

㋓隨時逐節。已下、向上の第一機より寒い〳〵といひ、單な展ぶる工夫はなしと。二義門に下る底なり。

㋔陰消陽長。やれ日が短い夜が長いとやかましきなり。君子は道長く小人は道消す。小は惡去り大は吉來るなり。

㋕暖律飛灰。さあ陽氣が至ると、律管からばちりと灰をはぢく、今日から日が緩やかになると。

㋖縞紋添線。宮中が日の長短をはかり、冬至後は一筋づゝでも針仕事がよりいに出來ると喜ぶ故事を取るなり。唐時代の故事なり。

㋗無陰陽地。夜晝のなき處どこにあるか、この報恩寺にあると。

㋘有濃雲。四時寒暑のうつりかはりがあるか。

㋙月似弩弓。舞月、弓張り月、これは即今現成底か以て結びたり、會元の睦州傳に、この兩句あり、冬が月始めにありし故に之を用ふ。

㋚洞山。良价禪師なり、雲岩晟に嗣ぐ。

㋛冬夜。冬至の晩なり。

㋜菓子。蜜柑か燒餅なり。

㋝泰首座。踢天泰か、唐時代の三聖惠然と同時かと、大活機のある人なり。

㋞黑似漆。眞黑なり、本分の正位。

㋟動用中。作務や托鉢や、喫茶喫飯の中にといふこと。

㋠收不得。偏正回互上、どうとも捉へることならぬ。

㋡在甚麼處。收不得の過なり。

㋢授退菓卓。卓は案なり、食器なり机をこつちへとれとなり。

㋣金地招手。天台の智者大師の因緣神僧定光の居處を金地と云ふ、江陵は智者大師の出身地なれば、智香同士なれども、點頭は「うなづく」なり、金地は洞山に、江陵は泰首座に比す。諸人が智香底とばかり見るとなり。しかし〳〵白雲千萬里なりと呵したるなり。

㋤長蛇偃月。八陣の中にあり、共に陣の名、形の上から附けたるもの軍のすさまじき所を長蛇偃月と云ふ、丁度洞山と泰首座に比して云ふ長蛇ほたての陣、偃月はよこの晉陣。

㋥輪贏。まけかち、名將と名將なるが故負勝が法戰場中、互に機鋒を見るのみにて分らぬ、あつかりじや。

㋦檢點得來。よく〳〵見ればどうもなり。

㋧劍去久矣。もうとゞかぬとなり、論談眞を失する故に、迷ひのはなはだしき故事を引く。

㋨天基節。今の天長節のこと。宋の

復た擧す、㋑洞山、㋺冬夜に㋻菓子を喫する次で、㋼泰首座に問ふ、「一物あり、㋽黑うして漆に似たり、常に㋾動用の中に在り、動用の中㋿收不得、㌀過甚麼の處にか在る。」泰云く、「過動用の中に在り。」山、侍者をして、㌁菓卓を授退せしむ。師云く、「盡く道ふ、㌂金地手を招げば、江陵點頭すと。殊に知らず、㌃長蛇偃月、未だ㌄輪贏を見ず。㌅檢點得し來ることは㌆劍去つて久し矣。」

㌇天基節の上堂、㌈南嶽の七十二峰、㌉華頂の萬八千丈、㌊之を膽るに際なく、㌋之を仰ぐに垠なし。此の㌌無窮の數を以て、用つて㌍聖明の君を祝したてまつる。

佛成道上堂、㌎一日日、一時時、㌏臘八夜に逗到して、㌐眼上に錯つて眉を安ず、㌑東西辨ふ、逗に物の投合するなり。

㌒眼上錯安眉。衆生本來成佛、今又成道とはこれか誤つて眼の上に眉を置いたと。見星の端的を云ふ。

㌓東西不辨南北狐疑。この兩句は等正覺の端的なり、どこもかしこも平等性智なり、然るに却つて疑ふと。狐疑は故事に孟賁の狐疑などといふ。

㌔從數。まゝよといふ意。

㌕萬古業風吹。上世斯の如き惡業風の吹くことかとなり。しかー菩薩行でいへば、地獄に入り餓鬼畜生に入り、只だ一切か利するが願なり。

㌖侍者。樂普なり、洛浦山元安禪師、臨濟に嗣ぐ。

㌗德山。宣鑑禪師なり、龍潭に嗣ぐ、唐時代の高僧。

㌘要打人。打つことを手柄にして居らるる故、迷惑に存じますと。

十四代の理宗皇帝正月五日に誕生せられたるなり。

㌙南嶽。支那五岳の一の衡山なり、高さ九千餘丈、湖南省にあり。

㌚華頂。天台の中の一峯なり、總じて天台と名づく、高さは一萬八千丈、周廻は百里、浙江省にあり。

㌛膽之無際。七十二峯の横を云ふ見わたせば數峯なるが故に目も屆かぬ。

㌜仰之無垠。垠は界なり、萬八千丈のたてを云ふ、餘りたかくて頂は見えぬ。

㌝無窮數。福德壽無量に譬ふ。

㌞聖明君。今上皇帝の無爲有道なれば、御祝ひ申すとなり。

㌟一日日、一時時。この兩句は六歳の苦行日時の過ぐるを云ふ、十九にて出家、雪苦不退なり。

㍀逗到臘八夜。成道の果熟をいひ、

㋐接住。引捕へるなり、ぬからず引捕へとめよとの意。
㋑一送。すつと向ふへ推せと。
㋒管取。領取と一般なり。それでは打ちはしまい、構ふまいと。
㋓擧似。擧揚の擧で、偖てとか何とか云ふてなり。似は示す。
㋔疑著。疑ふてゐる。疑著は賞揚の義にも用ふ、合點行かぬにも用ふ。
㋕張鱗。淺瀨でえびつ鯉魚位をとる小魚を漁るなり、小機を接するにたとふ。
㋖淺潭下釣。深いふちで魚つりはできぬと、大機を接すべからざるを云ふ。
㋗荒艸堆頭。むしやくしやと草の積みある上に、うづめられ殺かゝされたりと。
㋘擡身不起。無暗に體をあげ得ぬとなり。「この話本錄と少し異なるところあり、しかし舊參底は考へて見る話なり」と珠長老はいへり。
㋙拈拄杖。この下に云の字を脫する

に似たりと古來の說あり、これは拄杖だぞよ拄杖だといへばとなり。
㋚恁麼。それならばなり、世間底なり。爲人なり。
㋛決定不肯。なるほどと納得せぬ、有功用道の故になり。
㋜不恁麼。それでなければなり、拄杖かはなれてといふ意。出世間底なり。
㋝檢點求責。親しく看るべし。無功用道の故に、とつくり工夫し盡して見よとなり。
㋞各自。自己を返照してめい〳〵の意。
㋟恁麼不恁麼。二世同體交底なり。
㋠犢鼻褌。「ふんどし」のこと、人身兩ひざ以上穴あり、特鼻と名く、揮時鼻に至つて其の短に言ふと。卑賤にして無慚愧の漢を云ふ。
㋡瀟酒器底。史記に司馬相如の故事あり。器は瓦器なり、食ふ毎にあらひすゝぐ、共に有功無功、雜亂不淨潔、無慚愧の漢を云ふ。

㋢有箇方便。上の三段を遮非して、正宗を示さんことを要す、一つの手だてがあるとなり。
㋣甘。うけがふなり、なるほどといふ意。
㋤葉。これが虛堂の方便なり、椅子のうしろへたてかけて、吾が宗の方便は無言說なりと。
㋥拈拄杖。拄杖に託して佛事を作す那一物に比すなり。
㋦凝東凝西。諸方に充塞して物を凝ふ、東にやれば邪魔になり、西にやれば邪魔になる。
㋧成立。山河大地世界ができるとなり。
㋨佛祖。釋迦や達磨なり。
㋩出興。出世興隆なり。
㋪鱗々殼々。山形の景色すれくつたろなりふり。拄杖のかたちをいふ。
㋫栗栗棚々。己に本形を現出す、栗々は堅なり、しゞまるなり、棚は音「しつ」、又は「そく」、二音あり、共に拄杖のことなり。

せず、南北狐疑す。㋬從敎あれ㋭萬古業風の吹くことを。

上堂、擧す、臨濟、㋮侍者をして、㋯德山に傳語せしむ。侍云く、「德山㋰人を打つことを要す。」濟云く、「汝但だ去つて伊が棒を拈せんを待つて、㋱接住して㋲一送を與へよ、儞を打せざることを㋳管取せん。」侍、敎ふる所に依る、果然として打せず、歸つて臨濟に㋴擧似す、濟云く、「我れ從來者の漢を㋵疑著す。」師云く、「盡く謂ふ、德山只だ淺水に㋶鱗に張ることを解して、㋷深潭釣を下すこと殊に知らず。臨濟父子、德山に㋸荒艸堆頭に埋在せられて、今に至るまで㋹身を擡げ起さゞることを。」

上堂、㋺拄杖を拈じて、「若し㋻恁麼ならば、諸方㋼決定して肯はず、㋽不恁麼ならば、各自に

㋬他。拄杖をさす、德山は平生拄杖を拈じて僧の門に入るを見て便ち打す。
㋭出氣。いきをせられたること。
㋮芭蕉。清禪師なり、南塔涌に嗣ぐ、この拄杖の緣は頌古に見ゆ。
㋯齎器。もぬけまばらになりたること。風漏は覺えず言語がもれること。
㋰諧和。箇々。諧和は禪坊主ども、箇々は人々、脚跟はきびす、他のは拄杖子をさす、みな影迹に隱ふて行ずるが故にいふ。
㋱年窮歲盡。臘月三十日に逗到してなり。
㋲不解轉身。發居して動かず、自己と身を動すことを知らず。節目不分。節目は拄杖のふし筋目も分らぬこと。道理で以て言譯することもならぬ、落在はにきりころされたること

㋳闖。闖はは拄杖子なり。
㋴三陽交泰。三陰三陽なり、天地陰陽の氣相交つて和するときは、萬成物生なり、故に通泰と爲す。
㋵萬靈。靈は「たぐひ」、類なり、亨は通なり、「やはらぎ」、「うごく」なり。
㋶要。明日は正月なればなり。
㋷畫一畫。一の字を書いたのは一線路を通ずるの義なり。
㋸退後。そこで、拄杖のとほり道なり。
㋹香林。澄遠禪師なり、雲門に嗣ぐ。
㋺萬頃。頃は百畝を一頃といふこゝには廣大の見を云ふ。
㋻荒田。不耕不耘、未だ修證を求めず、誰かが主宰とする、本分の田地なり、只だ自照すべきなり。
㋼看々。此の語を取りて結座すいつの問にやら大晦日になつ

㋓檢責して看よ。㋔恁麼不恁麼は、㋕犢鼻褌、㋖酒器を滌ふ底、報恩㋗箇の方便あり。諸人還つて㋘甘ふや也た無や。」良久して拄杖を㋙靠く除夜小參、㋚拄杖を拈じて、未だ世界あらず、未だ佛祖あらざるときに、便ち者の拄杖子あり。㋛東に礎へ西に礎へ、世界㋜成立し、㋝佛祖㋞出興するに及んで、舊に依つて㋟麒麟皷皷㋠栗栗柳柳、德山㋡他の鼻孔を借つて㋢氣を出す、㋣芭蕉㋤齒豁にして風を漏すことを覺えず天下の㋥禪和をして、箇箇他の脚後跟に隨つて轉せしむるを致す。㋦年窮り歲盡きて、㋧身を轉ずることを解せず。只だ㋨節目分たざるに因つて、報恩が手裏に落在す。我れ也た㋩懶を勸辨し得ること能はず、只だ諸人の㋪三陽交泰、㋫萬彙咸く亨くると道ふことを知らんことを

㋬要す。脫し或は未だ然らずんば、」拄杖を以て㋭畫一畫して、「大衆㋮退後。」

復た擧す、㋯香林因に僧問ふ、「㋰萬頃の㋱荒田是れ誰か主と爲る。」林云く、「㋲看よ看よ臘月盡く。」師云く、「香林能く㋳坐ながら太平を致すと雖も、㋴要且つ物義に通せず、報恩に萬頃の荒田是れ誰か主と爲すと問ふものあらば、㋵一氣に走ること五百里、更に頭を回さず。何が故ぞ、㋶者般の時節に似たらば、誰か敢て許多の田地を㋷兜攬せん。

元宵上堂、好㋸一椀の燈、只だ是れ人の㋹東に挑げ西に剔るなし。若し剔り得て分明ならば㋺前街後巷碧綠青紅、㋻總に是れ眼中の屑。且く道へ、これ那一椀ぞ。

上堂、擧す、㋼雪峯・嚴頭・欽山、河北に往いて

たとの意。

㋴要且。とんとまあ、物の義理に通ぜぬと。

㋵一氣云々。押しつまつたる臘月に、一息に痴子奮迅して、快活俊迅となり、不回頭は猛りむさんせぬこと。

㋶者般時節。者般とは此體現成底の時節なり。

㋷兜攬。とりこむこと。誰が他の財彊か荒すものがあるとの意。

㋸一椀燈。那一燈なり。珠長老は曰く、「私亮を以て云へば人々具足の一椀燈がある、これは阿彌陀とも釋迦とも云ふ」と。

㋹東挑西剔。右へ掻き立て、左へしん切り、身を入れて世話するものがなしと。

㋺前街後巷。上の町も下の横筋も、一體の碧綠青紅は燈籠の飾を云ふ。

㋻總是眼中。皆之れ目ざはりばかり、この修行者の爲には那一椀と三十棒でも與へればなほまいと。

㋼雪峯。雪峯は義存、嚴頭は全奮、共に德山に嗣ぐ、欽山は文遂、洞山介に嗣ぐ、この三人が世に雪嚴欽と云ふ。

㋽定上座。臨濟に嗣ぐ。

㋾健否。臨濟和尙は御達者で御座いますかと。

㋿已遷化。もう何時のことか遷化せり。

㌀大息。ため息つく、あゝと歎かれたるなり。

㌁赤肉團。五尺の形骸をいふ。

㌂無位眞人。佛祖の位に居らず衆生の位にも居らぬこと。

㌃諸人面門。面前で六根門頭より出たり入つたり、自由を働

㌄要殺は「しめころす」こと。

凍膿面は「うだばれたやう」なる老人の顏のことなり。

㌅爭奈何。雪峯や嚴頭には、殺のかかるのみ缺くと。

㌆緜素。白か黑かを分けること。

㌇換盞。一度ならず二度も三度も茶碗をかへての意。定上座が强いか欽山扇いか、見分るならばなり。

㌈首座。これは前堂首座なり、大衆の頭にて宗師に代つて說法する人、それを虛堂が甘露和尙を推薦しられ、その御禮の上堂なり。甘露寺は鄂江府の北固山にありと。

㌉玉在石。石は玉を出して山暉き、水は珠を懷いて川媚ぶ、温は「うるはし」、媚は「助美」、水色がきれいなること、この票は下の正人云々を起す先に譬を靠くるなり。

㌊正人云々。正人は行解相應の

臨濟を禮拜せんとす、路に㋓定上座に逢ふ。峯云く、「臨濟和尙㋔健なりや否や。」定云く、「㋕已に遷化し了れり。」雪峯・巖頭相顧みて㋖太息す、復た問ふ、「尋常何の言句あつてか徒に示す。」定云く、「㋗赤肉團上に一㋘無位の眞人あり、常に㋙諸人の面門に在つて出入す。㋚未だ證據せざらんものは看よ看よ。」㋛欽云く「何ぞ非無位の眞人と道はざる。」定㋜擒住して云く、「無位の眞人と非無位の眞人と、相去ること多少ぞ、速かに道へ速かに道へ。」欽山色動いて對ふること能はず。雪峯・巖頭㋝解せんことを勸む、定云く、「若し㋞者の兩箇の老凍膿の面を看ずんば儞者の尿牀の鬼子を殺せん。」師云く、「定上座、則ち物に對して稅を收む、雪峯、巖頭を㋟爭奈何がせん。人あり㋠緇素し得出せば、㋡盞を換へて茶を點じて儞に供養せん。」㋢首座を請ずる上堂、㋣玉、石に在るときは則ち溫に、珠、淵に在るときは則ち媚なり。㋤正人叢林にあるときは、則ち網目正しく法令嚴なり。應機通變毒藥を以て甘露と爲し、無明を以て慈悲に當つ。此の人を見んと要す麼。拄杖を卓して下座。大衆と與に甘露和尙を拜請して、㋥第一座に歸せしめん。

上堂、㋦舉す、南泉因に趙州問ふ、「㋧有ることを知る底の人、甚麼の處に向つてか去る。」泉云く、「㋨山前の檀越家に一頭の水枯牛と作り去る。」州云く、「師の答話を謝す。」泉云く、「昨夜三更月牕に到る。」師云く、「㋩王老師、㋪救手の刀子利なりと雖も、趙州に㋫減竈の法を用ひられて、㋬幾乎蔡州を打破せらる。」

人、叢林とは梵語にては僧伽と云ひ、譯して衆といふ、譬へば大樹の叢り集るを林といふが如し、綱目は規矩法度で、注令は成律如法、應機通變は甘露和上の分座說法は、衆の根機に應じて通達權變なり、毒藥なれば甘露の妙味となし、瞋恚愚癡の無明をば慈悲哀憐に當當せしむ、これは甘露寺の無明和尙と云ふより、轉用したるものなりといふ說あり。

㋥第一座。先づ々々これへと前堂の首座第一に請じたるなり。

㋦知有底人。千聖不傳の妙處あることを知る底の人、甚麼の所にか去る。死後にはどこへ行くかと思ふとなり。

㋧山前云々。門前の庄屋殿の所に一頭の女牛になりて働いてゐる、そこで趙州は師の答話を謝すとそれで落ち付ました

ありがたいと。南泉は又云ふ「昨夜三更月牕に到る」と金中至金中到の境界なり、三更は正位なりと、珠長老は云へり鶴林も此の樣なる處を見て淚かこぼさぬは禪坊主でないと仰せらる、前面は互に驗を弄し後面は各無端と龍溪は註す。

㋨王老師。南泉普願、姓は王氏自ら王老師と稱す。

㋩救手。手は助語。救手の刀子丸寸五分利なりと雖も。すさまじい切れものなれども。

㋪減竈法。孫子が故事、兵略なり、つまり言へば智を以て智を狀く、謀とに出合ふたとなり、智謀なり。

㋫幾乎。近いと云ふこと、蔡州を打破せらる、方語に「命懸絲の如し」とある、堅要を勸破するの義なり、この蔡州の故事は唐憲宗元和十三年冬十月李愬、夜蔡州を襲ふて大賊なる

吳元濟を擒にし、京師に檻送す、通鑑等の史に見ゆ。

㋬一箇夢。雙樹林中にて涅槃に入りたもふとて、生死涅槃昨夢の如しとの相を示され、至レ今未レ醒で、善知識と稱する人々が狐魅にだまされてうろたへさせられてゐる。

㋭寡不敵衆。あまり多數が睡り居る故に虛堂も中間入りしてゐると。換手推胸は左と右となり。

㋮着天々々。痛哭の切なるなり「あゝあゝ」と面を仰いで歎くこと。

㋯靈雲。志勤禪師は、長慶の大安に嗣ぐ、安は百丈に嗣ぐ。

㋰見桃。頌に曰く、「三十年來劍客を尋ぬ、幾回か葉落ち又枝を抽んづ、桃花を一見してより後、直に如今に至りて更に疑はず。」

㋱芝沙。師備禪師なり、雪峯に嗣ぐ。

㋲諦當。審實的當なり、一寸理屈はあるやうだが、未だ敢保すで、證據に立つ老兄の未徹じや徹底して居らぬと。保は任なり。

㋳一人先行不到。この一人は靈雲を指す、先に立つたが、まだ大津あたりに居るとの意。

㋴一人未後太過。この一人は玄沙を指す、これは後から行いても、もう草津あたりで、魁した、これは二人大過不及にして中實を得ざるを云ふなり。

㋵眼見鼻孔。能く不見の處を見るとなり、眼にて鼻の孔は見えぬ、これは他の是非を見ずして、諸人各々自知せよとなり。

㋶春風云々。唐の李賀の詩に、「桃花亂落して紅雨の如し」と、春の風はたび〳〵桃の花を落して、丁度紅色の雨の如

佛涅槃上堂、釋迦老子、二千年前、㋐一箇の夢を做す。今に至るまで未だ醒めず。兒孫の夢中に向つて、夢を說いて、後人を狐魅することを引き得たり。㋑報恩寡は衆に敵せず、只だ手を換へて胸を推して、㋒蒼天蒼天と道ふことを得たり。

上堂、㋓靈雲㋔見桃花悟道の頌を擧して、㋕玄沙道ふ、「㋖諦當なることは甚だ諦當、敢保す老兄の未徹なることを。」師云く、「㋗一人は先行到らず、一㋘人は末後太だ過ぎたり。報恩尋常㋙眼鼻孔を見る。何が故ぞ、㋚春風幾度か紅雨を落す。㋛深淺何ぞ曾て眼を着けて看んゝ」

上堂、德山の棒、㋜雨の點ずるが如くなるも、要且つ皮下に血なき底を打ち得ず。臨濟の喝、㋝雷の奔るに似たるも、要且つ耳朶に聰なき底を喝し得ず。直饒ひ打ち得て悟らしめ、喝し得て省せしむるも、報恩未だ必ずしも㋞横點頭だもせず、何が故ぞ、㋟我れを知り我れを罪す。

上堂、擧す、黃昏襪を脫いで打睡し、晨朝に起き來つて㋠旋、㋡行纏を繫ぐ。夜來風吹いて籬倒る、㋢知事㋣奴子を普請して㋤簸を劈いて縛起せしむ。師云く、「諸方盡く謂ふ、㋥舜老夫㋦無事甲裏に坐在す。那ぞ知らん、㋧三冬枯木の花、九夏寒巖の雪。」

結夏小參、僧問ふ、「㋨德山小參荅話せず、㋩問話の者あらば三十棒と、此の意如何。」師云く、「㋪虎を畫いて狸と成す。」僧云く、「趙州小參㋫荅話せんことを要す、問話の者あらば一問を㋬置き將ち來れと、又作麼生。」師云く、「㋭撓鈎搭索。」僧云く、「趙州德山㋮用處止だ一般なること

しと、破家散宅に齊しと古人も歎く。

㋐深淺云々。任運灰眞で、何もまあ構ふことはない、花の色の好惡には目はかけはせんといふ意「一人は悟道と叫び、一人は未徹と抑ふ、共に平實な少するものなりと」龍溪は註す。

㋑如雨點。やたらにぶちたがること。併し皮下に血なき底を得ずと、此れは眞箇大死底の漢ふ云ふて、辨道の志のなき者は打ちはせぬと。

㋒似惜奔。臨濟の一喝は雷のがら〳〵鳴るやうなものなりと併し耳朶に聰なき底と云ふて正念工夫の無きものは聞いてもだめなりと、此れ亦大無心の謂なり。

㋓槌點頭。未だかぶりも掉らぬとなり。深く肯はざるなり。

㋔知我罪我。孔子曰く、「我れを知る者はそれたゞ春秋乎、我を罪する者はそれたゞ春秋乎」と。これは我れに由つて他人に由らざる義なり、他に由つて悟らず、知音は賞し、不知音は笑はんとなり。

㋕旋。そろ〳〵なり。

㋖行纏。脚絆をはくこと。

㋗知事。監寺と同じ、取締する役僧の名。

㋘奴子。力者の久太も權次も皆來れ、人夫等かいふ。

㋙劈簸縛起。竹の籠をさいて縛り起す、この話は舜老夫の上堂の語なり。

㋚舜老夫。雲居曉舜禪師なり、洞山聰に嗣ぐ、雲門五世なり

㋛無事云々。これは石霜永和尚と云ふが、翠巖眞和尚に傳語するの故事なり、大惠武庫にあり。無事甲裏とは櫃板だんにしてあるもの一番上の甲は何も載せぬものはそれを云

ふ、乙丙はまにあはぜるもの

㋜三冬云々。舜老夫の活機は此の如し、豈に尋常の見ならんや。花の咲くまい所で花が咲く、炎天に雪を飛ばさしむる底、大自在活手段なり。

㋝德山云々。德山、不時の示衆は云はぬ〳〵〳〵。

㋞有問云々。何とでも云ふものあらば打つて〳〵打ちのめすと。

㋟畫虎成狸。德山が何を云ふかと思へば、虎を書き損ふて狸となしたるやうなと、今好語錯辭を抑ふとなり。

㋠要荅話。趙州は答話をしたがる。

㋡置將。置は設くるなり。

㋢撓鈎搭索。兜のしころに携手か引つかけひきよすること、趙州は只事が起れかし起れかしと思ふて居る。

㋣用處。はたらきなり、止だ一般なることなしやと、二つは御座るまいかと。

㋤鬼爭漆桶。方語に無分曉の義と、鬼は陰冥に屬す、桶漆は赤黑色故、德山と趙州とは反對である、丁度二つの鬼が一箇の漆桶を爭ふやうなものなりと。

㋥牛頭。法融禪師なり、四祖道信に嗣く。

㋦爲甚。異類のもの迄、ありがたがつて百鳥、花をふくんで供奉したり。

㋧武陵春色早。湖南省常德府を武陵と云ふ、春色は桃源、人間世々は格別なり。

㋨蓊樹綠陰多。土の高きを臺といひ、木あるを樹と云ふ、夏の景色なり。佛法も世法も澤山ある、見望んだ處がいやはや勝れた景色なり、この兩句は現成有功用底なりと龍溪は註す。

莫し麼。」師云く、「㋑鬼、漆桶を爭ふ。」僧云く、「㋺牛頭未だ四祖に見えざる時、㋩甚としてか百鳥花を啣んで獻ず。」師云く、「㋥武陵春色早く、㋭臺榭綠陰多し。」僧云く、「㋬見えて後甚としてか百鳥花を啣んで獻せざる。」師云く、「㋮破鏡重ねて照さず、落花枝に上り難し。」僧云く、「只だ學人今夏㋯和尙に依附するが如きんば、何の方便かある。」師云く、「㋰龐粥淡飯、分に隨つて時を過す。」僧云く、「㋱若し樓に登つて望まずんば、焉ぞ滄海の深きことを知らん。」師云く「㋲賊は是れ家親。」

㋳乃ち云く、「㋴形聲未だ兆れず、㋵岳に積み山に堆し、㋶言跡纔かに彰はれて、㋷影響を尋ね難し。所以に釋迦、室を㋸摩竭に掩ひ、㋹淨名口を毘耶に杜ぢ。㋺以て㋻西天四七㋼唐土二三、㋽天下の老凍膿、㋾機關を用ひ盡せども、手を挿む處なきを致す。只だ㋿高きを平げて下に就くことを得たり。二千年前(1)用ひ着ざる底の(2)斷貫を以て、(3)天下の衲僧の鼻孔を穿つ。之を(4)禁足護生(5)剋期取證と謂ふ。愈〻狼藉を見る、報恩修行、力なし。(6)未だ免れず例に隨つて顚倒し去ることを。」拄杖を卓して、「(7)鵬を射る手に因らずんば、誰か李將軍を識らん。」(8)復た舉す、(9)六祖因に僧問ふ、「(10)黃梅の意旨是れ甚麼人か得る。」祖云く、「(11)佛法を會する人得。」僧云く、「和尙還つて得るや否や。」祖云く、「得ず。」僧云く、「(12)甚と爲てか得ざる。」祖云く「我れ佛法を會せず」と。師云く、「(13)高山流水(14)子期 故に善く之を聽く。然りと雖も、三十年後(15)人ありて報恩を罵ること在らん。」

(1)見後甚。廣く四面より法要を聞いて開悟せられたときより、とんと百鳥も寄り付さもせぬと。

(2)破鏡不重照。馬鹿なやつ、破鏡でつらが見えるものか、落花枝に上りがたしと、落ちた花が再びさくものか、かしいけれどしかたなしと、この兩句は把住無功用底なり。

(3)依附和尙。命懸けて御願みして居ますが、何の方便があるで、どう云ふ利益か蒙るでございます。依附は隨身なり。

(4)龐粥淡飯。あさは粥を食へ、晝は飯をくへ、これほどよき方便があるかと。

(5)若不登樓望。問はずんば知らずの意なり、もし樓に登つて望まずば、何とぞと御尋ね申したればこそ、祖師門下の法深なることを承知仕りたれどなり、焉んぞ滄海の深きことを知らんとなり。

(6)賊是家親。家のうちに居ながら、せゝりぬすみをしさうなやつなり。

(7)乃云。提綱なり、これは畢論に出づるの文なり、肇は秦の鳩摩羅什法師の弟子なり。

(8)形聲未兆。本則は把住なり、形聲已前に、本有の如來の光明、山も河も、周遍したりしなり。

(9)積岳堆。一切に偏き故に、これは虛堂の着語なり、放行なり。

(10)言跡纔彰。本則は放行なり、出現已後、教内の教外の初にちよつと吐き出すと。

(11)離尋影響。所得なきが故に、虛堂の着語なり、把住なり、佛法と云ふたらば早やちがふ。

(12)摩竭。摩竭陀、此には文物國と云ふ掩室とは世尊普光法堂に禪定す。

(13)淨名。淨名は維摩の譯なり、毘耶は毘耶離、此には廣嚴と云ふ、維摩も言はざりき。

(14)以。「それで」なり。

(15)西天四七。拈花微笑、剃髮倒却、大迦葉より菩提達磨に至る二十八祖なり。

(16)唐土二三。達磨より六祖惠能に至るまでなり、教外別傳の見性成佛のと。

(17)天下老凍膿。五家七宗。

(18)機關。やれ州云く、無じやの。青州布彩じやの、何のかのと云ふても、無挿手處と云ふ、手も足もつかぬ。

(19)平高就下。高は毘盧頂行、下は道場外行。

(20)用不着。如來在世、とりあつかはずと。

(21)鵬翼。ぜにざしなり、無用處なる云ふ。

(22)天下納僧。牛の鼻づなにたとへ、つきぬいてびつくりさせた。

(23)禁足護生。夏の九十日は禁足して、ものゝ命をすくふて、やたらに歩いてふみ損することはならぬ、夏は蟲が多き故なり。

(24)剋期取證。九十日が剋期にて定むるなり。取證とはなんでもと此の公案が透過せんと、愈ます〳〵で狼藉が見る、狼藉はとりみだすと云ふ、狼が草をしきものにして臥すと云ふより轉じて狼藉と云ふ。

(25)未免隨例。未だ免れぬなり、是非はない色々と云ふて人が顚倒させる禁足安居などと雖念千萬なりと琢長老は抄してゐる。

(26)不因射鵬手。くまたかを射るやうな上手の手でなくば、李公が知るまいぞと、この虛堂も知音底でなくば知るまい、常流の知るところではないと

次の日上堂、㋐釋迦を呵し彌勒を叱す、衲僧家氣宇王の如し。甚麼としてか、今朝㋑草繩自縛する。㋒拂子を擊つて、㋓火を竟めては煙に和して得、泉を擔つては月を帶びて歸る。

上堂、擧す、㋔藥山久しく上堂せず、知事云く「大衆久しく和尙の示誨を思ふ。」山云く、「鐘を打著せよ。」衆方に集る、山㋕便ち門を掩却す。知事云く、「㋖既に大衆の興に上堂することを許す、㋗甚麼としてか一言も施さざる。」山云く、「㋘經に經師あり、論に論師あり、㋙爭か老僧を恠み得ん。」師云く、「㋚古人物の爲に慈を傷す中に於て失あり、㋛者の僧當時纔かに門を掩ふことを見て、便ち地上に就いて、一圓相を畫いて、各自に散じ去らば、藥山、門を開くこと得ざることを管取せん。」

徽宗皇帝㋜大忌の上堂、㋝聖人已なく已あらずといふこと靡し、塵刹を總べて是ならずといふことなし。之を毫釐に差ふれば千里に失す。㋞仙仗颯颯として去つて還らず、從敎あれ六合淸風の起ることを。

上堂、擧す、南泉住菴の時、一僧到る、泉云く、「我れ㋟山に上りて作務せん、齋時に飯を做し喫し了りて、一分を送り來れ。」其の僧飯し了つて家事を將つて、一時に打碎して牀上に就いて臥す。泉伺ふこと久しけれども來らず、遂に歸つて僧の臥すを見て、泉ち亦臥す。僧便ち起き去る。泉、住して後云く、「我れ往前住庵の時箇の靈利の道者あり、今に至るまで見ず」と。師云く、「王老師若し㋠錐頭の利なることを願みずんば、者の僧起き去ることを要すとも、未だ

なり。

㋡復擧。拈提なり。

㋢六祖。惠能大鑑禪師なり、五祖弘忍に嗣ぐ。

㋣黃梅。五祖大師の居るところ蘄州に在り、今の安徽省なり

意旨とは室中の一大事、このおれがじやと云はさうとかゝた、甚麼人が傳へたとなり。

㋤會佛法人得。どつこいとずかして呑みこんだものが受け取つた、和尙はまた得たかと云ふと、おれは得ずと。

㋥甚麼不得。そりや衆の外なりなんとして得ずとは我は佛法などは得はせぬと、こゝが五祖と六祖との密旨なり。あゝら面白いことかな、膽魂を失する場合があると、球長老は抄してゐる。

㋦高山流水。これは只知音を貴ぶ、知音なくんば、聞きうることなし、黃梅の密旨なり。

㋧子期故善。子期は鐘子期なり列子の湯問篇に、伯牙善く琴を鼓し、鐘子期善く聽くの故事を引く、知音同士のこと故、子期が死んだら伯牙は琴をこはして仕舞ふた。

㋨人馬糞恩在。三十年後とは一世といふこと、今一線道を開く故に、いらざる氣を付けて知音などと見たくもないと罵るであらうと。

㋩阿難迦。法に因ると法に因らざるとなり、氣宇王の如き、坊主は隨處に無長自在なり、これがなにとしてじや。

㋪繩自縛。安居禁足といふやつにしばられる。

㋫擊拂子。拂子は佛の時、敏なはらふために許されたものが今は法式に用ゆる、ことに禪宗は重要なる法具は杖拂と云ふて、拄杖と拂子なり、この繫は虛堂が一機を呈した斗り

なり。

㋬竟火和煙。煙に用はなけれども、つれてこればならぬ。泉を擔ふて來れば月はともに桶にうつりて來るなり、期剋の法を據りどころとして、自然に取證の妙を得る。いやでも佛法は其の中にあり、しかし悟後の修行もすんでじや。

㋭藥山。惟儼禪師なり、石頭に嗣ぐ。

㋮便掩却門。方丈の門をぎりぎりびしやりと閉ぢた。

㋯既許。ややあ、おそろしい和上やな。

㋰豈甚麼。それはまあ無慈悲なされかたでござります。

㋱經有經師。此れはまあすぐれた語なり、經文は經文の講師あり、論部は論師あり、邪正を辨ずるほどに。

㋲爭怪。なんで老僧が一言施さぬとて、はら立つことはないと。

㋳賞物傷慈。古人もとかくに人の爲に慈悲が傷ずる、傷は痛む、世で惡子が孫を可愛がると同じで、しまいには病人にする。於中有失は少ししぞこなひがある、中には慈悲の中になり。

㋴者僧。知事なり、あのときちよつくら門を閉づるを見たならば、やにはに一圓相をまんまるとかいてみよ、各自に大衆は散じ去らば、藥山が門をひらくこと得ざることなし、もう出づることも入ることもなるまいに、はたらけなんだ、殘念々々。

㋵大忌。大忌は國忌を云ふて大と稱す。

㋶聖人無已。聖法師の論に出づる語、已なしとは無我の義、命根截斷の時なり、已あらずと云ふことなしと、森羅萬象

得ず。然りと雖も、㋕石壓して笋斜に出で、岸懸つて花倒に生ず。」

上堂、舉す、㋖洞山因に僧問ふ、「寒暑到來、如何が㋗回避せん。」山云く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。」僧云く、「如何なるかこれ無寒暑の處。」山云く、「寒の時は㋘閻梨を寒殺し、熱の時は閻梨を熱殺す。」師云く、「當時者の僧、但だ冷笑一聲せば、洞山身を隱すに路なきことを管取せん。」

上堂、㋙始めて安居を見、又中夏に逢ふ。㋚孜孜矻矻底、鬼神も其の由を測ること莫し。㋛奘奘莫莫底、佛祖も他を辨じ出さず。報恩門下還つて此の人あり麼。家に㋜白澤の圖なし。

上堂、舉す、寒山子因に㋝衆僧茄を炙る次で、茄串を將つて一僧の背上に向つて打つ。僧首を

一全身なり。言うは聖人は自己の別なし、故に博く民に施して能く衆を濟ふ、萬物を會して自己となし玉ふ、國土座々刹々で、刹はクシエートラこゝには國土と譯す、國土のことなり、一切をひつくるめて是ならずといふことなしで、かやうなと云ふこと、みな帝の力なりといふべし、之を幸釐に霑ふれば、わづかに彼我の異念を生ずれば、その失は千里もへだつるあやまりができる、清代も亂世も元は一分一釐からわかるなり。

㋞仙仗鑾飆。仙仗は帝の御とほりの行列儀かなり、鑾飆は上り行く風なり、今は登遐の事を述ぶるなり、去つて還り玉はず、今は何處に、おはしますやら、まゝよ六合天地四方に、清風は聖君の德風が漂々として起るので天威に觸るべからず。

㋟上山作務。作務とは叢林では雜務をなすのを云ふ、この作務は今日はひよりなれば、枯れ木でもひろはんと山に上りてゆくなり、ひろはんと山に上りたならば、御身はとつくりたべてその一分を遺りて來いと命ぜられた、それに其の僧は自已は飯を腹一杯食つて家事、すなはち家具をもつて一時にぶちくだいてれどこの上にとり去つてしもふた、南泉は伺ふこと久しうして、日はかたむいた、もう來さうなものと、來ないから腹はへるし、とう〳〵もどられたら、かの僧はぐう〳〵れてゐる、そこで南泉もまたれてしまはれた、僧はこつそりと起きて、つつ走しつた、南泉が南泉山の御住持さまになりてから、大衆へ昔物がたりに云ふには、「往前

住菴の時、これ〳〵靈利の道者があつたが、今どころはとんと見當らぬ一と。

㋚不顧錐頭。きりのさきほどの鋭利の小智惠ある：この僧をば、伶利と思はずに、すて〻置けばよいに、そのつれになりて傍臥はして見事は見事なり、臥せずんば僧は起さ去るなせえぬに、それはさうじやけれども。

㋛石壓笋。この詩は詩人玉屑の三に出づ、衡州の蔣道士の詩なり、應緣自然、執則に拘はらずの意なり逸堂曰く、「此の僧逆境界をば行ふ故に、南泉赤逆境界を用ふ、石がおさへつけたけのこはよこに出る石は南泉に、笋は僧に比す、岸が懸崖じやで、花はさかさまに生えるかゝと思ふと」なり。

㋜洞山。良价禪師なり。

㋝回避。今日でいへば避寒避暑の意

㋞閻梨。こゝでは貴僧とか、あなたとか云ふの意、閻梨は梵語で、こゝには軌範と言ふ、「この世の中が何時も春や秋ばかりだと暮しよいが、土用のあついのと寒中の寒いのとには、どうも大閉口です、何とかこれをさける工夫はないでせうか」と尋れた、そこで洞山和尙は「なぜに寒も暑もない處にゆきて、避寒なり避暑なせぬのじや」と答へた、その僧は理論がましくは「無寒の寒、無暑の暑のところとはどこのことですか」と又問ひ返した、そこで洞山は「寒いときには貴僧を凍死せしむるほどさむく、暑いときは貴僧をやけ死にさせるほど暑いところこれなり」と、この話碧岩の四十三則にも出でゐる。

㋟冷笑。えへへと、せゝらわらひ也「笑ふたら洞山和尙も指をくはへたでらう」と珠長老は抄してゐる

㋠始。四月十五日結夏安居に掛錫したり、安單したり、六月の旦となつて中夏とにあふ。

㋡孜々矻々。孜々は汲々なり、勤むなり、矻々は勞祿なり、勤作なり三時の勤行、四時の坐禪、晝夜骨を折つてゐる、鬼神でもそのわけが測り知ること六ケしいとなり。

㋢奘々莫々。「れつけつ」は節目多きなり、すれくりものと云ふこと、不和合にして同居しにくきやつ、やれ知客だの、副寺だの、何のかのと云ふやつは、佛祖でも他を辯じ出さず、正とも邪とも分ちえず、こんな逆行無礙のの物故に。

㋣白澤之圖。まじなひの神獸の繪なしとなり、そのおれの處堂の門下にはかやうなけちなやつはないと

㋤衆僧。おほぜいの坊主が天台の國清寺で、茄子を炙りてゐたので、寒山はぶつきらぼう故、だれも茄の串一つくれぬ故、つゝと差して見せて「これなんぞ」とやつた、僧云く「風顚漢このどきちがひめ」と」又傍の坊主に「お身はどうじや、云ふて見よ、多く鹽醬を費して飯を食ふと、くそこく事より知らぬと、(功虛りに施す故と註して

回す、山、茄串を呈起して云く、「是れ甚麼ぞ。」僧云く、「風顚漢。」山却つて傍僧に向つて云く、「儞道へ、者の僧多少の鹽醬をか費す。」師云く、「敵を欺くものは亡ぶ、者の僧還つて甘ふ麼。報恩若し他の茄串を呈起して、これ甚麼ぞと道ふことを見ば、㋟便ち聽く勢を作さん、擬議せば茄串を奪つて便ち打たん。」

上堂、㋡五祖凡そ衆に示すに、㋣東邊に一句を掉ひ、西邊に一句を㋢掉ふ。㋤大いに雪に蘸して冬瓜を喫するに似たり。㋥喚んで楊岐の正傳東山の暗號と作す。特に知らず、法出でて姦生じ、事久しうして變多きことを。

上堂、㋦一日陞座、衆集り定まる、文殊㋧白椎して云く、「㋨諦觀法王法、法王法如是。」世尊便ち下座す。師云く、「㋩是は則ち是、只だ是れ椎を擧ぐること、較重きこと些子。」

㋪監收を請ずる上堂、㋫無生の田地、㋬種あり收あり、時節到來すれば、㋭自然に成就す。㋮衲僧家、口を開着して、他を少くこと一時子も得ず。㋯若し本色の人に非ずんば、以て滲漏を絕し難からん、且く那箇か是れ本色の人、拄杖を卓して、「公。」

解夏小參、僧問ふ、「三月㋰安居今已に滿つ、九句㋱功用の事如何。」師云く、「㋲眼前舊に依つて急絣絣。」僧云く、「西天㋳臘人を以て驗と爲す、㋴甚の死急をか著たる。」師云く、「㋵者の漆桶。」僧云く、「指示を謝す。」師云く、「黃連は未だ是れ苦からず。」

乃ち拂子を竪てて云く、「㋶恁麼は則ち易く、㋷不恁麼は則ち難し。恁麼は則ち易し、㋸結あり

ある。そこで虛堂和尙は「敵を欺くものは亡ぶ」と、これは者の僧が寒山、欺いて風顚漢といふたればなり、しかし者の僧還つて甘ふ麼で、寒山が後語の多少の、鹽醬を費すとのことは、なる程尤じやとがてんが入つたかどうじや」と。串は串に作るべし、串にあらず、串は音「せん」で、又「さん」で、肉を炙る器なりとある。

㋟便作聽勢。虛堂がもしあのとき寒山が茄子の串を呈起するのを見たならば、耳を傾け聽く勢を作さん、擬議したならばぶつてこまらさうにと。

㋡五祖。法演禪師なり、白雲端に嗣ぐ、五祖山は蘄州にあり

㋣東邊。沒蹤跡の義、この二句は言語の跡をとめざるを云ふ

㋤掉。なぶりおだてるの意なり

と、音「ちよう」、楚語、大能掉小と、註に作なりと、掉なり振なり說なりと。

㋥大似蘸雪。方語に沒滋味の義と、どうもこう味はるゝものでない、百人が百人、はきだす、崖を臨んで退くと云ふ五祖の宗旨なり。

㋦喚作楊岐。喬くも林才中興の祖じある、東山暗號とは東山とは白雲未來在から出た語で五祖演は東山に塔せらるゝ故に、暗號は密令軍中に用ふる秘密の通信の如し、法出姦生とは虛堂は五祖を抑へて法皮があまりすぎると僞ものができる事久多變とは、正傳の、暗號のと、名付けて弊害が出來て殃が見孫に及ぶとなり。

㋧一日陞座。講肆には陞座、禪林で上堂と云ふ。

㋨白椎。椎は又槌とも書く、この文殊の白椎は世尊が法座にのぼらせられて、まだ何も御說きにならぬ先に、はや文殊はこの語を唱へて、「一切無用なり、何も法王法は如是なり」とやつた、世尊もそれでこの氣轉に大贊成して下座なされた。

㋩諦觀法王法。あきらかに法王の法を觀るにとよむのが、訓讀なり、古來音讀するのならばせなり。諦觀はよく注意して見ることゝか、熟觀精究などと同じで、法王法は佛陀の法で、正法眼藏涅槃妙心とか佛心印とかの意で、平易に言へば、佛祖の御說法である。如是と云ふに參禪辨道し實悟實參もいるものである、たゞ某氏の和解のやうに宇宙に充滿してゐるゆゑ、法として別に御說きなさるは無用じやくらゐの話なれば、大死一番とか絕後に蘇生とか云ふほど骨折ることはなんのたはけがすることぞ、如是か如是か、如何にかやうであるか、虛堂老師は矣にいふてゐる。

㋪是則是。是は則ち是なるが、椎が重かつたさうな、がいに手まが入つたと、未陞座の先きならばよかつたにとなり、些子はすこしばかりなり。

㋫請監收。監收は領地から年貢などをとりなさめる役なり、この上はその財分に托して說禪せらるゝなり。

㋬無生田地。人々具足底、佛に在つて增さず、衆生に在つても減ぜず。

㋭有種有收。春種まけば秋收む種は發心修行、收は破相入理にたとへるなり。

㋮自然成熟。菩提の果がしぜんにみのる。

㋯衲僧家。釋迦も達磨も、慧命かつなぐには田地の米がなくば、一時もすごせぬと、宗旨

の本分にたとへて寸時もなければならぬと、開着の着は得ると同じにて、他か缺くは御米がなくてはとの意。

㋐若非本色人。本とうの禍子でなくば、相續無間なる能はず、蹉跎は淳朴の人でなくば。纔ヲ以絶ニ滲漏一、と滲漏とはもれもらすで、無明煩惱にたとへる、粒米を一粒もわきへもらさぬとは六ヅかしい、公とは公平、無私なり、分明にして無私なりと。

㋑安居。禁足なり。

㋒功用。功勳受用なり。

㋓眼前依舊。まのあたり佛祖の模範の通りに規矩が、きつとして好かつたゆえと、絣はなはか以て物か直すか云ふ、きそくどほりに行はれたと云ふこと。

㋔鳳人。鳳は法鳳か云ふなり、解制受鳳の日か法鳳といふ、長老幼者か序次して行粥を喰むるなり。

㋕著甚死急。世俗に云ふ、何をしにあがりぞと云ふ、正意か失すとな。

㋖者漆桶。無分曉の義、うぬがなに知つたと云ふ、いらぬことか問うな、僧云く「御指圖を御禮申します」と、虛堂は黃連未だ是れ苦からず、おまへの樣なものは黃連に比べても苦いことはまだない。

㋗恁麼。かくの如くならば、拂子は拄杖。

㋘不恁麼。かうでもないものならば

㋙有結有解。夏入りから夏あきまで

㋚把橈放船。ともづなをとつて船をはなす。

㋛有始有終。始終正念、四月十五日は始め、七月十五日は終り。

㋜無事不辨。凡そ修する所の事、成辨せぬことはない。

㋝過生纔。無理に悟らせる虛堂が、這裏はさうでないと、狂げて鉗鎚か下すか厲る、特牛は「をうし」、むりなはなしじや。

㋞買朝相頭。自然に寔か費す、機器か買ふに頭を察して應接する、朝か買ふに頭

のすぢなはかるのと一つなり。家の豐儉に關ふてとは身代相應のはからひをする。

㋟解開布袋。禁網か出づる義、布袋の口をひらきて、勝手に分散する

㋠道著。「いひあてれば」なり。

㋡諱知。子は父の名か忌むといふか虛堂はきらはぬとなり。

㋢秋風滑水。この詩は賈浪仙か詩なり、謂ふ意は、そよと吹き出すともう〳〵たまらぬ、木の葉か雨の如く長安に一ぱいになる。この虛堂離の名である、何ぞ諱知することはない、現成底か不現成底か時節底か、と古人は評してゐる。

㋣復舉。拈提なり。

㋤師僧。衆僧か指す、師父の義にあらず。

㋥只麼。只なり、止となすが正當なり。

㋦正因。心性のとりさばき、頓に正因かさとるは出塵の階級なり。

㋧蝟連。蝟は犀の振ふなり。「けちけちと云ふなと」。

解あり、㋨纜を把つて船を放つ。不恁麼は則ち難し、㋩始めあり終あり、㋪事として辨せずといふことなし。諸方は㋫生纔を逼めて繭を作らしめ、特牛、兒を產せしむ。我か者裏は㋬帽を買ふに頭を相す、家の豐儉に隨ふ。覺えず也た一夏を過了す。來朝㋭布袋を解開して、各自に儞は東我れは西、前程忽ち人ありて、報恩か爺の名を㋮道著せば、㋯諱却することを須ひざれ、何か故ぞ。」拂子を擊つて、「㋰秋風滑水を吹けば、落葉長安に滿つ。」

㋱復た擧す、昔老宿あり、一夏㋲師僧の爲に說話せず。僧あり、嘆じて云く、「我れ㋳只麼に空しく一夏を過す、敢て和尙の佛法を說くことを望まず、㋴正因の二字を聞くことを得ば也た得。」老宿聞いて云く、「闍梨㋵誓速すること莫れ

㋶一字也無。正因の當躰は一字もないと。

㋷扣齒。はをかち〳〵とかみならす、後悔するなり。

㋸無鍋。ふと。

㋹好一釜羹。よい一つ釜のごちそう。

㋺兩顆。老宿の初說と齒を扣くと老僧は此の僧となす。

㋻一箇。蓋し關壁の老宿をさすちつとかゝつたところがある

㋼搨板漢。板をかついで右も左も見むきはできぬ。

㋽較些子。まあ、すこしは話になるとか話が出來るとかを云ふ唐宋代の俗語なり。

㋾歷鼓待椎。たゝかばならんと問話の者か待つ。

㋿入水云云。人の水中に立てば身の長短をあらはすが如し、問はずんば知らずの意なりと云ふ、眞の燈籠に入れて見れば、こいつは衲僧の機用ある

かなきは知れぬとなり。

㍀行住坐臥。之か四威儀と云ふ

㍁險。あぶないところがあゝ、魔外もえよりつかぬところがある、行路難なり。

㍂檢點。「みつける」なり。

㍃許儞。祖師門下の眞の衲僧なり。

㍄天津橋。預め機鋒をしる靈利の漢か云ふ、天津橋は河南府の西南に洛水の上に架す、隋の煬帝之か建つと、これに故事あり、略す。

㍅險々。そりやあぶない〳〵。

㍆雲門。匡眞禪師なり、雪峰存禪師に嗣ぐ。

㍇洞山。守初禪師なり、雲門に嗣ぐ。

㍈近離。ちかごろどこからきたか。

㍉查渡。地の名。

㍊夏。在鍋か夏と云ふ。

㍋湖南報慈。報應寺、天下の選

若し正因を論せば、㋐一字も也た無し」と道ひ了つて、㋑齒を扣いて云く、「我れ㋒端なく恁麼に道ふ」と。隣壁に老宿あり、聞いて云く、㋓好一釜の羹、㋔兩顆の鼠糞に汚却せらる。」師云く、「三箇の㋕擔板漢、㋖一箇は㋗些子に較れり、報恩一夏、㋘鼓を懸けて椎を待つ、佛法の二字人の問著するなし。何が故ぞ、㋙水に入るに因らずんば爭か長人を見ん。」

次の日上堂、㋚行住坐臥、四威儀の中、常に一處の㋛險あり。只だ是れ諸人檢點し出さず、若し㋜檢點し出だすことを得ば、㋝儞に許す是れ箇の㋞天津橋上の漢なることを。若し檢點し出さずんば、九十日の內、枉げて精神を費さず。且く道へ、那箇の一處ぞ。拄杖を卓して、「㋟險險。」

㋐無佛處。佛見法見の沙汰のあるはよくない、その反對で、悟り臭くないところも同じと

㋑急走。そんなところはさっさ

㋒ととほりすぎてしまへと。

㋓三千里外。諸方に徧歷してなり。

㋔不得錯過。めつたにあごたたくまいぞと。

㋕與麼則。それならば參りまぜう。

㋖楊花。おさらば〳〵と、離別の意なり、曲の名、陽春白雪高妙の曲。

㋗神臂弓。名代の强弓なり。

㋘由基箭。養由基は楚の大夫、善く射るものなり。

㋙赤眉除。前漢末の賊黨、大賊、あみにもちにもかゝらぬ、耳を朱にして敵兵との見分けにしるとした。

㋚南禪雲壑。雲壑は未詳なれども來訪せらる、新維那とのた

上堂、擧す、㋛雲門因に㋜洞山到る、問ふ、「㋝近離甚の處ぞ。」山云く、「㋞查渡。」門云く、「㋟夏甚の處にか在る。」山云く、「㋠湖南の報慈。」門云く、「幾時か㋡彼を離れし。」山云く、「八月二十五。」門云く、汝に㋢三頓の棒を放す。」山、次の日問ふ、「昨日、和尙の三頓の棒を放すことを蒙る、知らず、過甚麼の處にか在る。」門云く、「㋣飯袋子、㋤江南湖南、便ち與麼にし去るか。」山言下に於て㋥省あり。師云く、「㋦見亡じ執謝して、方に本色の衲僧たり。洞山の㋧錯は、何ぞ雲門の錯に似かん。」

上堂、擧す、趙州因に僧㋨辭す、州云く、甚の處にか去る。」僧云く、「諸方に佛法を學し去る。」州云く、「㋩有佛の處住することを得ざれ、㋪無佛の處急に㋫走過せよ。㋬三千里外人に逢ふめに上堂。

㋭維那。華梵並ねたる語、維は支那ことば、綱維那は梵語で、羯磨陀那、此には課して悅衆と云ふ、大衆のひきまはし役、今では經文を首唱しはじめる役になつてゐる。

㋮道人相見。知音底の相見は、雲の空に升り、水の谷にながれこむやうに、無心應現な表する也。

㋯張騫子。騫は未審と古人も云へり、胡のあやまりとならん胡長三黑李四などの如し、品藻はしなさだめとなり、是非なさうだんするなり。

㋰擣濕穀。濕穀はかわかぬ不出來の飯と云ふこと、新長老の未熟の食を擣いて喫して居るな云ふ、無事閑話の條子なり、これは師と雲壑と寐もの語りなり。

㋱倘漢。具眼の一人飛び來りて

これより已下は維那に係る。

㋲低靡々々。これはあまりことばが高いとなり。

㋳令嚴。法令嚴重なり。綱維の故に。

㋴人長短。人の是非長短なり。休し去るにて、虛堂もうわさ噂をやめにするとなり。

㋵禹力不到。これは虛堂が手のとどかぬところは、維那が令嚴で正すであらうと、不到はとゞかぬの意、河靡流向西とは唐詩歸の三十五の周朴が詩の句なり、大禹の疏決するところ、みな東流なり、西に向ふはその反對で、維那の力でなければ大衆はみさまらぬとのこと。

㋶同參。興化と同じく修行したるもの同志。

㋷法堂。禪宗では「はつたう」とよます、これは說法をする堂なり、須彌壇を中央に高く

て　㋓錯つて舉することを得ざれ。」僧云く、「㋔與麼ならば則ち去らじ。」州云く、「㋕摘楊花、摘楊花。」師云く、「㋖神臂が弓、㋗由基が箭、趙州之を用ふるに、的に中らずといふことなし。爭奈せん者の僧、これ㋘赤眉隊裏より來ることを。」㋙南禪の雲壑和尚幷に㋚維那を謝する上堂、㋛道人の相見、雲の空に升るが如く。水の壑に赴くが如し。㋜張翰子が頷下に鬚なきことを品藻し、諸方の㋝濕穀を擣いて飯を喫することを罵詈す。忽ち㋞箇の漢あつて出で來つて道はん㋟低聲低聲、新維那㋠令嚴なり、㋡人の長短を說くことを要せざれと。山僧只だ休し去ることを得。何が故ぞ、㋢禹力到らざる處河聲西に向ふ。

上堂、㋣擧す、與化㋤同參來つて纔かに㋥法堂に上るを見て、化便ち㋦喝す、僧亦喝す、化又喝す、僧又喝す。化棒を拈ず、僧又喝す。化云く「儞看よ㋧者の漢、猶ほ㋨主と作ること在り。」僧㋩擬議す、化便ち打す。侍者云く、「㋪適來者の僧、甚の觸忤かある。」化云く、是れ他也た㋫權あり。也た㋬實あり。也た㋭照あり。也た㋮用あり。我れ手を將つて他の面前に向つて、㋯橫兩遭すれば、便ち去ること得ず。㋰者般の瞎漢に似たらば、打せずんば更に何れの時をか待たん」と。師云く、㋱劍及上に馬を走らしめ、㋲火焰裡に身を藏すことは、與化門下㋳分外と爲す。端なく者の僧に㋴放乖せられて、却つて侍者の處に向つて㋵翻本す。

上堂、㋶汝諸人、盡く㋷聲色の所轉を被る、何ぞ鼓聲未だ動せざるに、法堂前に來つて、行

くしつらへ、この上において上堂はみなこゝにてするのが本式なり。

㋓喝。これは他を勸辨するが爲の作略なり。

㋔者漢。或は瞎漢にも作る。

㋕作主在。主となりさへすればよいと思つてゐる。

㋖擬議。言句がつまることなり

㋗遭來。さきにより、甚の觸忤はぞんざいな、無禮なことがありましかなり。

㋘權。方便を具して。

㋙實。見性受用慥かなことで實相なり。

㋚照。鏡の照らし、凡か聖かと學者をてらし見るなり。

㋛用。互用また、臨機應變なり。

㋜橫兩遭。遭は匝と同じ字なり、二三返手を橫にぐるりぐるりとまはし、去ることは透過し去ることはさすがのやつもびくともすることならぬ。

㋝者般。これつらで、このやうなと云ふ意。

㋞鈍及上。活手段なり、騎馬の名人けがはさゝぬ、聞いてもひやいな、初め一喝よりおい出す處までを云ふ。

㋟火焰裡。安住不動で、一くべないふ、この二句は奔流度及棒喝全提の大活手段を云ふ。

㋠分外。分限外量、無端はひよつくらなり。

㋡放乖　ひきつばなされて、かまはぬを云ふ。

㋢翻本。商人の語である。資本をとりかへす。與化の此僧がしたゝめたる處を、諸人に知らせん爲に上の如く云ふ也。

㋣汝諸人。僧俗男女を指す。

㋤聲色所轉。聞く上見る上で、輪廻するなり、鼓聲未動で、たいこの音のどん〳〵音のせぬ先き、しづまり返つて居る處で、法堂の前に來て行くこと一兩遭と、威音王以前、乃ち父母未生前に、行道めぐりにめぐるでなければとなり。

㋥點火。ちふそくをともしてお前達のつらをみればならぬとなり、子細に照鑑して始めて證明すべしと。

㋦開爐上堂。十月朝日なり。

㋧丹霞。この因緣は上に出づ。

㋨如蟲禦木。無心無義味のこと丹霞の木佛を燒くのは、偶爾は「おもひがけ」なり、成文即ちいろどりしは院主なり。

㋩些無明火。本分の那一火明、焰に涉らざる底なり、常に汝等諸人のかほのまへへあらはしてと日短夜長はなほ晝夜と云ふが如し、時空しくすごすことなかれ、あぶない〳〵みな油斷はならぬ、めい〳〵に足もとをみよとなり。

㋪東去也得。無佛世界だもの、縱橫自在なり。

㋫少林壁觀。達磨が嵩山の少林寺に寓止、九年面壁して坐す人之を壁觀婆羅門と云ふ。

㋬雪庭墮臂。二祖惠可が雪の庭に立つて自らの左の臂を斷して達磨に呈す。

㋭一地裡人。一地裡は猶ほ天下といふが如し。

㋮重擔。二百貫餘の重荷、羊額嶺は明州第一の高山杖錫山の障、形羊額の如し、峻險なり、これは枉げて苦辛を喫するにたとふ。

㋯箇仲冬。平常無事、黃連は苦く、甘草は甘し、布裩赫赤は玉泉皓禪師が赤ふんどしをこしらへて、歷代祖師の名を書してまはしにしてゐて云く、猶ほ文殊普賢のみあり、些子に皷れりとて帶の上に書す、この因緣を云ふ、これは祖證の端由は任運受用、別の清新奇妙の事なきを云ふ。

くこと一兩遭せざる、然りと雖も、報恩更に㋐火を點じて、爾が面を照すこと在らん。

㋔開爐上堂、「㋕丹霞の木佛を燒くを擧して、師云く、「丹霞は㋖蟲の木を禦むが如し、院主偶爾として文を成す。報恩今日開爐、且つ木佛の燒くべきなし、只だ㋗些の無明の火あり、常に諸人の面前に在り、日は短く夜は長し、各自に照顧せよ。」

冬至小參、釋迦已に滅し、彌勒未だ生せず、恁麼の時節、㋘東に去ることも也た得たり。西に去ることも也た得たり、端なく㋙少林の壁觀㋚雪庭の墮臂、㋛一地裡の人を引き得て、一百二十斤の㋜重擔を荷ふて、羊額嶺に上るが如くに一般ならしむ。其の端由を詰るに及んで、㋝箇に依つて㋞箇の仲冬嚴寒、布裩の赫赤を出でず

㋐久默斯要。この兩句は法華の藥艸喩品に出づ、今言は者箇天眞の法なり、久默は機未だ堪へざるを以ての故なり、速說はいそいでとくなり、今までではとかぬが、今日大衆の爲に說き出すなり、虛堂は點滴も施さずじやと。

㋑復辭。冬夜の拈提なり。

㋒曲祿。木のすぢのまがつたのに頓着せず。

㋓無厭消老翁。五祖演をさすなり、この胴欲な人と飽足なき底なり。來處は菓子の出どころなり。

㋔一一知得。諸人に綿密に工夫して契せよと、爲人の示しなり、龕に入り細に入り、理に入りて底を盡くせよとなり。

㋕古德。疎山匡仁禪師なり。

㋖冬來事。冬がきた、受用底如何で御座らう。

㋗京師大黃。現成直示の端的、名古屋からは「宮重大根」、京からは「みぶな」といふたやうなもの、これは古德の境界を知ると云ふ枕ことばなり。

㋘金以石試。金は石でためいて見れば、眞僞が分る、人はたつた一言で到未到が知れる。

㋙古人。疎山和尙が自分では金璧歸ると、相如が和氏が璧を得たので、秦の昭王が十五城と易へてほしいとて、だんだん交涉したが、うまくきりぬけて遂に秦王をたぶらかし璧はやはり趙王のものにしたと云ふ故事にたとへて云ふ、要するに本分の處に疵もつかずにと云ふの意なり。

㋚不知身。身のむさ〳〵しいところにあるを知らぬとなり、「虛堂腕力さらに一轉あるを知らしむ」と古人も抄してゐる。草裏は草庵位のことなり。

㋛執事。執事は知事なり。

報恩㋐久默、斯要不務速說。

㋑復た擧す、五祖演和尙、衆に示す、「但只菓子を喫せよ、誰ぞ樹の㋒曲祿を管せん。」師云く、「者の㋓無厭消の老翁、與麼に來處を知らざることを得たり。報恩は菓子の貴賤、價數の高低、也た諸人㋔一一に知得せんことを要す。」

上堂、擧す、㋕「古德因に僧問ふ、「如何なるか是れ㋖冬來の事。」德云く、「㋗京師に大黃を出す。」師云く、「㋘金は石を以て試み、人は言を以て試む。㋙古人自ら謂へり、璧を全うして歸ると、㋚知らず身の草裏に在ることを。」

㋛執事を謝する上堂、㋜一跳一躑、㋝師子嚬呻す、㋞一新一舊、和氣春の如し。報恩㋟尺、寸に如かず、㋠羸ち得たり癡坐することを、㋡何ぞや家裏に人あり。

㋢一跳一躑。知事のはたらきを云ふ。

㋣師子嚬呻。師子のせのびするを云ふ、勞倦をくつろぐなり好き役位はとりまはしがよくてこれにたとへる。

㋤一新一舊。舊執事、新執事との交代は、和氣如春とてよく和合すること、春のあたかゝなるが如しと。

㋥尺不如寸。その器各々用ふるところあり、尺は虛堂に、寸は執事にたとへる。

㋦羸得。まうけものなり、とりえにはとなり、癡坐はむつとすわりて、ぶじなのは何ぞや。

㋧何家裏。よき執事があればこそ安心が出來るとなり。

㋨京。ある抄には、東京であらうと、西京は鎭州とはよほど遠いと云ふこと、この因緣は林才でなくして黃檗なりと云ふ、この說可ならん。

㋩敎化。托鉢なり。

㋪家常活鉢。家常は平生のできあはせ、鉢盂を乞ふた。

㋫門首。門前なり。

㋬太無厭生。飽くことを知らぬなりっ大ぐらひなどないふ。

㋭閉却門。把住の處なり。

㋮蝎見血。はへは臭きところによる、同類相求むるなり。

㋯鶻捉鳩。くまたかはにらみすゑたらしてやる。

㋰膠漆相投。ぶつたら一つになる、同類相感す。

㋱拳來踢報。こぶしを以て打てば脚を以て踢る、拳は婆子、踢は臨濟に比す、彼此勝負なし、以上の四句は主客恰合の義を述ぶるなり。

㋲雜提鳩處。「一等不淨潔、かへつてこれ好處」と、龍溪和上は註してゐる、提掇はとゝつぎがたき、兩人の手段面白いところがあるとなり。

上堂、擧す、臨濟㋐京に入り、㋑敎化して云く、㋒家常添鉢。」一家の㋓門首に到る。婆云く、「㋔太無厭生。」濟云く、「㋕飯も也た未だ得ず、何ぞ言ふ太無厭生と。」婆便ち㋖門を閉却す。師云く、「㋗蠅は血を見、㋘鶻は鳩を捉ふ。㋙拳し來れば踢をもつて報ず、㋚膠漆相投ず。㋛提掇し難き處轉た風流。」

㋜天基節の上堂、「㋝乾坤を定むるの句、㋞今古共に遵ふ。㋟虎兒を擒ふるの機、㋠聖凡辨ずること莫し。㋡此を以て無爲の化を助くるときは、四海㋢晏清に、此を以て㋣無上の尊を祝するときは、萬邦㋤〻壁を喞む、時聖誕に臨んで、㋥預め珍筵を啓く、㋦一句無私如何か擧似せん。」拄杖を卓して、「㋧暗に消す溪畔の雪、㋨輕く拆く壠頭の梅。」

㋜天基節。理宗誕生日、正月五日なり。

㋝定乾坤句。無明六賊を平げるなり、天下太平。

㋞今古共遵。天眞無私の句、故に久遠劫より久遠劫の後までも。

㋟擒虎兒機。兒は牛に似て一角青色、重きこと千斤、皮は堅厚にして鎧に製すべしと。

㋠聖凡莫辨。佛も衆生もうかゞはれぬ故なり、大活越格の機の故に。

㋡以此。乾坤を定むる等の語を云ふ。

㋢晏清。晏ははれて雲なきなり「晏でき」なり、日はやく出づれば雨ふり、おそく出づればなり。

㋣無上之尊。天子なり。

㋤〻壁。歸降の義、歸降の義、後手にしばられて口にふくむ、左傳に「僖公六年、許男面縛〻壁」とあり。

㋥預啓珍筵。御所醍の法筵を啓建するなり。

㋦一句無私。無私に三あり、天私に覆ふこと無く、地私に載すること無く、日月私に照すこと無しと、天子の御威德をさす、天下皈服する底の一句なり。

㋧暗消溪畔。雪は小人に比す。はや、いつのまにやら時節到來すれば、山々の雪もきえてと、現成底の無私を示すところを云ふ。

㋨〻折壠頭。梅は君王に比す、自然に壠は隴で、こだかき丘の梅がひらく、これ即ち皇化の無私を云ふ。

㋩徑山無準和尙至る上堂、擧す、㋪仰山道く、㋫東寺の師叔若し在さば、㋬慧寂㋭寂寞を致さず。」師云く、「仰山㋮水を飲んで地脈を貴ぶ。報恩㋯久貧乍ち富む、㋰豈に敢て墾に效はんや㋱未だ免れず㋲一條の小路子を借つて行くことを。何が故ぞ。」拂子を擊つて、「㋳花を移しては蝶の至るを兼ね、㋴石を買つては雲の饒きことを得たり。」

除夜小參、「㋵去年の貧は未だこれ貧ならず、㋶株を守つて兎を待つ。㋷今年の貧は始めてこれ貧なり、㋸賊を認めて子と爲す。去年の貧は㋹卓錐の地なし、㋺癩狗枯椿に繫ぐ。㋻今年の貧は錐子も也たなし、㋼職に和して欵を納る。㋽與麼與麼、㋾三百六十日循環して已まず、㋿不與麼不與麼、㌀七十二氣候去つて復た還り來

㋩徑山無準。理宗誕生日、正月五日なり。

㋪仰山道。惠寂なり、潙山に嗣ぐ馬祖四世、虛堂も密菴四世なり。

㋫東寺。湖南、東寺の如會禪師は馬祖に嗣ぐ、師叔は法に於ては夫（かぢ）の意。

㋬慧寂。仰山みづからを云ふ。

㋭不致寂寞。さびしくはあるまいと。

㋮飲水地脈。仰山曾て東寺の法味をなめて、その所出の貴きことを知る。

㋯久貧乍富。今無準が來臨した故、ひさしくさびしくあつたが、急に富貴に法が繁昌するとなり。

㋰豈敢效墾。なにはゞかりながら、仰山、小耨迦のまねを致すではござらぬ。仰山寂寞語なり。

㋱未免。まだのがれはない。

㋲一條小路。やつぱりお影を蒙られねばならぬと、師叔の一路行なり、無準の一條の小路子を借りて我が法をとりひろめたきとなり。

㋳移花兼蝶。花と石は無準に比し、蝶は大衆に比す、雲は道能く潤澤に比す、饒は拜なり。

㋴買石雲饒。饒は多なり、おかげをかうむると云ふ、無準が御出なされたは、山門の光輝を添へるとの御驅走のため、この語を引き出せしなり、同門の和氣は花と蝶との如くなり。この詩は姚合が武功縣の詩の略なり、このあとに「自レ是心中樂、從他笑二寂寥一」の二句あり。

㋵去年貧。本則なり、香嚴擊竹

る。㋑橋柱を抱いて澡洗する底、底に到ること知らず、㋒様に依つて葫蘆を畫く底、轉だ忘想を增す。直饒㋓悃じて㋔結交頭に到るも、舊に依つて㋕眼睛烏律律。報恩方便あること莫からん麼。」拄杖を卓して、㋖皇天苦屈。」

復た擧す、㋗踈山、衆に示す、「老僧㋘感通年已前、㋙法身邊の事を會得し、感通年已後、㋚法身向上の事を會得す。」師云く、「古人㋛明に棧道を修し、暗に陳倉を度る。山僧㋜端平二年、此の山に住す、㋝長を牽いて短を補ふ、分に隨つて時を過す。若しこれ法身邊の事ならば、㋞巢父牛に飲ひ許由耳を洗ふ。」

正旦上堂、㋟年年是れ好年、日日是れ好日、甚としてか新あり舊ある。若し箇の㋠隔手の句子を道ひ得ば、爾に許す㋡鐵輪峰頂に足を翹て、

第二の頌なり、師は毎句下語を附す。

㋑守株待兎。愚癡の義なり、實に道貧ならずの故なり、故事あり、僥倖の心などを云ふ。

㋒今年貧。無思想、無能見、無所見で、いつかなこと、ぴた一文もない。

㋓認賊爲子。第六意識は賊なりこれを認めてはその家の財寶ついに成就せずと同じなり、破滅に及ぶ。

㋔卓錐之地。きりをたつるところもなかつた。これは貧の極を云ふ、富者の田は阡陌に連る、佛法の知見はすつきりやむの意。

㋕瘸狗枯樁。かつたゐびやうやみの犬の子を、かれくひにつなぐやうな不自由で、伎倆已に窮まることを云ふ。

㋖今年貧人。能所混滅なり。

㋗和驢納獄。驢は盆の物を持ち

ながら、獄は白狀することを、とりは致しませぬと云ふたり。

㋘異麼々々。さうじや〳〵、

㋙三百六十日。やれ〳〵見ておくれやれ、循環不已で、よるとなくひるとなく、去年も今年も、更に奇特玄妙はないよ。

㋚不與麼。さうではない〳〵。

㋛七十二氣候。五日を一候となす、一月に六候、十二月に合せて七十二熟候なり。やつぱり去復還來で、葉がおつるかと思へば、目つくろひをする環のはしなきが如し。

㋜抱橋柱。古人の深致を缺くを云ふ、放手不得で、はしのはしらをだいて、みづあみするやうなものなりと、我と云ふものを抱いて、とらへて居てなり、底に到ることも知らずと。

㋝依樣畫胡蘆。てほんによつて

大洋海底に沙を算ふることを。然らずんば㋞野火燒けども盡きず、春風吹いて又生ず。

上堂、擧す、藥山、衆に示す、「我に一句子あり、㋟特牛の兒を生ずるを待つて、即ち汝に向つて道はん。」時に㋠僧あり、出でて云く、「特牛、兒を生じ了れり也。甚としてか道はざる。」山、侍者燈を㋡將ち來れ」と喚ぶ、其の僧便ち衆に歸す。師云く、「者の僧、衆に歸すること㋢太だ速やかにして、藥山を蹉過す。」

上堂、㋣春風は刀の如く、春雨は膏の如し。㋤祢僧門下、何ぞ切切たることを用ひん。

上堂、擧す、㋥資福因に僧問ふ、「㋦古人㋧拈椎竪拂、意旨如何。」福云く、「古人恁麼。」僧再び問ふ、福便ち喝す。師云く、「㋨好大衆、馬前の厮撲の如し、者の僧㋩若し恁麼ならば、甚の資福

ふくべをかく、本形を見ず、自己の腕力なきを云ふ、だん〳〵忘想をますだけなり。

㋐輥。車輪の動くなり、ひつくるめての意。

㋑結交頭。歳末年頭のつきあひ、死に至るまでなり。

㋒眼睛烏律々。律々には烈々のごとし、高大の貌。今は貝だ眼の黑貌を表す、まつくろ眼玉が飛出ること。

㋓皇天苦屈。時節の遷變は免れぬ、あれなげかはしく、むなしく一年を過ぐる故に、皇天を仰いで苦屈と叫ぶ、苦屈は大骨折損なり。

㋔棹山。名は匡仁、洞山价に嗣ぐ、洞下の人。

㋕感通。唐懿宗の年號。

㋖法身邊事。悟道得力の時。

㋗法身向上事。宗乘向上の大事か會得した時。

㋘明修棧道。賊寇人を欺くの計略なり、ひるはかけはしの道を修理して、この道をとほるとみせかけて、夜は凍倉道を越ゆるとなり。

㋙端平二年。理宗の年號。

㋚牽長補短。制裁宜しきを、從ふて隨分過時、おれが器量相應にして暑いなら暑い、寒いなら寒いでと。

㋛巢父飲牛。不欲聞の義なり、許由も巢父も堯の時の人、由は堯が天下を謗らんとし玉ふときいて、箕山の下に遁れ隱る、堯父召して九州の長とせんとするも、之を聞くことを欲せず、耳を潁水の濱にあらふ、時に巢父といふものあり、犢をひいて之に飲かはんと欲す、由が耳を洗ふときいて、吾が犢の口を汚すとて、上流に飲かはしむの故事。

㋜年々是好年。去年も目出たい、今年も目出たい、吹毛吹

けども入らずと。

㊁隔手。碁の先手と同じ、新看なへだつるの謂なり。

㊂鐵輪。輪は圍と同じ、舊には鐵圍山と云ふ、梵語には耆迦羅と云ふ。大洋海底に沙を算ふと、みな大活自在三昧なり。自在の用なり。

㊃野火燒。これは白樂天が艸の詩で「離々原上艸。一歲一枯榮。野火燒不盡。春風吹又生」これは隔手の句なり、外から燒いたのでは根が殘る、もうきえたかと思へば、いかなやはり春風が吹くやうになれば、芽が生える、野火は舊年に、春風は新年に比せしなり。

㊄特牛。をうし「且つ道へ、廡前の一句か淡句の一句か」と、或抄に出づ。

㊅有僧。この伶俐の僧。

㊆將燈來。火を點じてきさまのつらみも一べん見てやらうと、便ち衆に歸すで、引つ込んでしもうた。

㊇太速。全體作用なり、しかし衆に歸せずして、とくと藥山が跛過させればよいこと、「未だ底裡を看盡さず」と龍溪も註してゐる。

㊈春風如刀。この兩句は楊岐の語なり、千紫萬紅、ふく風が萬卉を剪裁する故に、春雨は色つやを出して盛えさせ、成長をさすが、はるさめじや。

㊉衲僧門下。現成の端的、これが衲僧家の受用底なり、公案なり、何ぞ佛を求め祖を求めて、千辛萬苦することを用ひん。切々は憂勞なり、任運天真、何ぞかほをしかめることはないとなり。

㊋資福。名は如寶、西塔穆に嗣ぐ、穆は仰山に嗣ぐ。

㊌古人。馬祖、百丈、溈仰等なり。

㊍拈椎豎拂。一境なり、說法のやうすなり、悠麼はまづかうである、資福は再びくりかへし問ふたら、資福は喝とどなりつけた、金毛獅子の勢あり。

㊎好大衆。みんな見よ、こりゃしい手きはじやないか、如馬前厮撲とは馬の前ですまうをとるやうなもの、たふれさへすれば取りくむことはいらぬ「厮撲は資福と僧との手段の。間に髮と容れざる轉轆々地なるを云ふ」と或抄に出づ。

㊏若悠麼。この僧、初め問ふのみで休せば、資福の威勢もあるまいが、再問の上で、二人の作家手段が見えた、若悠麼の資福を要することがあらん、古人の悠麼の如くにして頓脫せよとなり。

㊐重午上堂。五月五日午時を天中節と云ふ、五月を午の月となすを以て重午といふ。

㊑四百四病。四大の中、一つ損しても百一の病が起ると、四大みな損すれば四百四病一時に起る。

㊒毛病。人の毛穴は八萬四千あり、三毒の病に比す、瞋恚癡等。念起念滅、無量なるが故なり。善財童子が文殊に一枝艸を拈じて文殊に度與す、文殊提起して衆に示して

があらん。」

㊓重午上堂、人間の㊑四百四病、病病藥あり、唯だ㊒毛病のみありて醫し難し。直饒善財手に信せて拈じ來るも、也た只だ是れ病に對して藥を與ふ。要且つ無病の藥を得ず、且つ作麼生か是れ無病の藥。」拄杖を卓して、「先づ口を忌まんことを要す。」

上堂、㊔涼颸乍ちに起つて㊕玉露初めて垂る㊖蟬は高梧に噪ぎ㊗蛩は古砌に吟ず。臨濟、黃葉の處に在つて㊘棒を喫する底の意旨を發揮す誰か肯へて承當せん。直饒ひ㊙言外に歸を知るも、也た是れ秤椎醋に蘸す。

㊚上堂、擧す、㊛玄沙㊜鏡清に問ふて云く、㊝一法を見ざる是れ大過患、汝道へ甚麼の法をか見ざる。」清㊞露柱を指して云く、㊟是れ者箇

云く「此の藥亦能く人を殺し、亦能く人を活す」と云ふ因緣を云ふて、信手拈來るもと引きて用ふるなり、無病の藥、悟なく迷なき底の無病の藥は得られぬ、要忌日と毒をくはぬやうにせよ、禪宗の毒だちは文字語言じやから、生死はこれ大病なり。

㊔涼颸乍起。すゞしき風がちよつくりおこりて、あはれもよほす秋の風。

㊕玉露初垂。じみ〳〵寒うて、まう露がおりる。

㊖蟬噪高梧。ひるはみいん〳〵と蟬がたかい梧の木にないてゐる。

㊗蛩吟古砌。よるはきり〳〵すがさびた敷き瓦の下などでなく、好箇清寒、白妙の時節なりこの四句は頭に顯露物々全眞のことを云ふ。

㊘喫棒底。臨濟が黃葉のところで、三度棒を喫した意をいふ。風物が一々此意を發揮するなり。乃ち佛法の大意をば

㊙言外知歸。おれが云ふ言語を離れ切つて林才底の歸（おもむき）を知るも、也是秤椎醋で、はかりの分銅の醋和尙にしたやうなもの、沒意味で口を下すところなけんと。

㊚上堂。この玄沙鏡清の因緣は古歌の意か、「耳に見目にきくならば、うたがはじ、己れなりけり軒の玉水。」

㊛玄沙。名は師備雪峰に嗣ぐ。

㊜鏡清。名は道符、同じく雪峰に嗣ぐ。

㊝一法。心法なり。

㊞露柱。大黑柱なり。

㊟是者箇法。是れこれじやないかと、目のさきへひつ付けた。

㊠浙中清水。鏡清は即ち浙江の溫州の人なればなり、おぬしが國の水や米は食ふのはかま

の法を見ざること莫し麼。」沙云く、「㋚浙中の淸水、白米は汝が喫するに從す、佛法は未在。」、師云く、「也た好し ㋛莫是の兩字、會す麼、㋜寒雲幽石を抱き ㋝霜月淸池を照す。」

退院上堂、擧す、㋞高亭江を隔てゝ德山を見て便乃ち橫趍して去る。後來開法して德山に承嗣す。師云く高亭㋟錐頭の利なるを見て、㋠鑿頭の方なるを見す、當時若し江を過ぎ來らば、㋡豈に止だ住院のみならんや。人ありて會得せば拄杖子㋢兩手に分付せん。然らずんば、㋣雲は嶺頭に在つて閑不徹、㋤水は磵底に流れて太忙生。」

報恩語錄 終

はぬが、拈花微笑、的々相承の大事は、なか〳〵じや、それで佛法は未在と呵したるなり。

㋛莫是兩字。茫の好處があらんやなり。

㋜寒雲幽石。こはは寒山詩の「庭際何所有、白雲抱幽石」の句を轉用したるものなり、にはの尤物がみどり子がだいて居るありさまなり。

㋝霜月淸池。光と光が相映じて、歌にも詩にも述べられぬありさまなり。千古淸風凜々地の境界じや、これは莫是の兩字の悠長を表示するなり。

㋞高亭。名は簡、德山に嗣ぐ。高亭師禪師は初め德山の江岸に在つて坐するを見て、即ち江をへだてゝ問訊す、山扇を以て之を招く、師忽然契悟す橫趍はうれしがつてよこちぎりに成つて往く、これを退院の事によせるなり、開法は住持

㋟錐頭利。きりのさきのするどきとは契悟の處を云ふ、するどくきびよきところなり。

㋠鑿頭方。のみのさきの四角なるは、德山に往かずして過ぎ去るを云ふ、今の退院のところへひゞかすなり。

㋡豈止住院。當に人天の大依止とならんにをしいとなり。

㋢兩毛分付。さつぱりをしげもなくくれてやると。

㋣雲在嶺頭。閑不徹は閑靜靈き絕えざるなり、大閑寂平等の大智でなくては、常寂光土安住はならぬ。

㋤水流磵底。よるひるちんつんちんつん流れて、ぢつとしてはゐぬ、共に常無心の境界を云ふ、今慶元寺退院にたとへる。磵底は或は磵は澗、底は下に作る。

㋑慶元府顯孝禪寺開山語錄

㋺侍者無隱編

師入寺上堂、祝聖畢つて、次に拈香して、「㋩律を革めて禪と爲す ㋥功德主侍讀尙書の爲に、㋭祿算を資陪し奉る。」師座に就く、㋬乃ち云く「㋮青蓮瞬視、㋯微笑して歸を知る、㋰遞代相承、㋱滋蔓を圖り難し。㋲直に得たり天回り地轉じ、㋳虎嘯き龍吟じ、㋴合浦珠還つて、雲山觀を改むることを。㋵所以に道ふ、㋶大人は大智を具し、㋷大機は大用を得と、㋸蜂房を翦つて ㋹獅子の窟と爲し、㋺荆棘を變じて ㋻旃檀の林と作す。㋼香風四に馳せ、㋽狐兎跡を屏く、㋾此を以て法幢を建て宗旨を立し、㋿此を以て

㋩律を革めて禪と爲す。西天の四七、東土の二三と、今に至るまでをいふ。

㋥功德主侍讀尙書。「しげりはびこる」。

㋭祿算を資陪し奉る。五家七宗と枝葉の繼燈聯芳するをいふ。

㋬乃ち云く。

㋮青蓮瞬視。存眸の力を以て、律を革め禪と爲すを云ふ、凡を轉じ聖と成すは虛堂の力なり。

㋯微笑。

㋰遞代相承。西天の四七、東土の二三と、今に至るまでをいふ。

㋱滋蔓。「しげりはびこる」。五家七宗と枝葉の繼燈聯芳するをいふ。

㋲直得天回。存眸の力を以て、律を革め禪と爲すを云ふ、凡を轉じ聖と成すは虛堂の力なり。

㋳虎嘯龍吟。だん〳〵、れきれきができて。

㋴合浦珠還。合浦は顯孝に、珠は師自らに比す、祖宗家の興復を表す、合浦は廣東廉州府にあり、珠多く產す、雲山改觀は寺の美麗に復するを云ふ

㋵所以道。圓悟の語、もと空豆の語なり。

㋶大人。大人は道公に比す。

㋷大機。大機は虛堂に比す。

㋸蜂房。數律、小量小見の僧侶群居するは蜂の羣集するに似たり。

㋹獅子。虎や象の及ぶものでない格外のものの居處となつた。

㋺荆棘。身うごきのならぬ叉非僧の小見なり。

㋻旃檀之林。ふん〳〵たる薰、旃檀の如き住み家となつた。

㋼香風四馳。禪風の四邊に達するなり。

㋽狐兎屏跡。獅子の威德に恐れて、ばけの皮の小根機はなれ

君親に報じ、聖化を助く。然も是の如くなりと雖も、且く君臣㋓慶會の一句作麼生。」拂子を擊つて、「㋔九萬里の鵬纔かに翼を展べ、㋕一千年の鶴便ち翱翔す。」

㋖復た擧す、㋗良遂㋘座主、麻谷に參ず。谷來るを見て、㋙鉏を携へて去つて艸を鉏く。次の日又來る、谷便ち門を閉却す、遂此に因つて契悟す。乃ち云く、「和尚、良遂を謾ずること莫くんば好し、若し來つて和尚に見えずんば、幾んど㋚十二分數に一生を誤却せ被る。」遂、㋛房計を將つて賣却して、一の㋜罷講齋を作る、衆に示して云く、「㋝良遂が知處、㋞諸人知らず、諸人の知處、良遂惣に知る」と。師云く、「㋟禮は玉帛に非ざれば表れず、樂は鐘鼓に非ざれば傳らず。㋠是は則ち是、才を量つて職を補ふ。中ぬやうになる、律小乘家に比して狐兎といふ、

㋡以此建法。此の禪林の虛堂は見性成佛、直指人心の法幢、五家七宗の大事なる宗旨を立てる。幢はほたなり。

㋢以此報君。侍讀尙書は此の功德を以て、天子や父母に報じ天下太平の聖化を助けたてまつる。

㋣慶會。目出度い出合の一句子は如何。

㋤九萬里鵬。今上皇帝に比し奉る、聖德の翼をのぶると。

㋥一千年鶴。侍讀尙書はおつとまかせと、ふわり〳〵とまふ、二句は皇帝萬歲と群臣千秋を頌したもの也。

㋦復擧。律を革めて禪と爲すから引きだして。

㋧良遂。麻谷寶徹に嗣ぐ、谷は馬祖に嗣ぐ。

㋨座主。講敎の者を高座の主と云ふ。

㋩鉏鉏艸。全體作用の直示なり、次の日又來てきなふは不機嫌なりと思ふて、不來見和尙と一度兩回來て、あなたに御目にかゝらなんだならばと。

㋪十二分數。一代時敎を十二に分ち、この十二分數につきまはされて、一代をあやまるのである。

㋫房計。家具子なり、拂子見臺皆賣つて。

㋬罷講齋。講經をやめて一會の齋供を營む、大衆を供養する故に、罷講齋と云ふ。

㋭良遂知處。水の冷暖、自知するが如くなり。

㋮諸人知處。文字葛藤、一代藏敎。

㋯禮玉帛。これは論語の陽貨篇に出づ。玉帛で信不信が見える、悟は言說に非ざれば露はれず、樂非二鐘鼓一而不レ傳、

に就いて㋰些子の語訛あり、只だ是れ人の檢點して得出するなし。」

㋱上堂、擧す、㋲金牛和尙、毎日㋳齋時に自ら飯を將つて僧堂前に於て、舞を作して呵呵大笑して道く、「㋴菩薩子㋵喫飯來と。師云く、「㋶等しく是れ普同供養、誰か知る飯裏に沙あることを。」

冬至上堂、僧問ふ、「㋷羣陰消盡して一陽復た生ず、衲僧家此に到つて如何が㋸轉身せん。」師云く、「㋹老鼠牛角に入る。」僧云く、「和尙㋺武殺だ方便。」師云く、「㋻仁者は之を見て之を仁と謂ふ。」

乃ち擧す、趙州因に僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「㋼庭前の柏樹子。」僧云く、「和尙㋽境を將つて人に示すこと莫れ。」州云く、

㋰些子語訛。些子は良遂の悟處は語訛なり、あやまりがある。只是と特に一關が設けた。人檢點得出と。とくと、吟味するものがない。「語訛は失策といふことばにあたる」と或る抄にあり。

㋱上堂。この話は碧岩の七十四則にも出づ。

㋲金牛。馬祖に嗣ぐ。

㋳齋時。雲版がなると午食のとき飯器を將て、僧堂の前に於て舞をなすは、さあ〳〵みなさん御飯をあがれと、喜悅のやうすをあらはして呵々大笑す。から〳〵とあは〳〵と滿悅の意をあらはす笑なり。無我の笑なり。

㋴菩薩子。菩薩は佛の下位に居るものなれば、佛樣の御子達よと云ふ意。

㋵喫飯來。來て御飯をおあがりなさいと、雲水が好遇してるるのか、金牛和尙の得意であつた、受用親切の處なり。

㋶等是普同。無差別で、法界の有情に供養すると、誰知飯裏有沙と金牛が手童は油斷はならぬ、もしも底に堅きものがあつてはなり、上はやはらかでも。

㋷羣陰消盡。十月陰盛既に極まり、冬至はすなはち一陽また地中に復生す。

「我れ境を將つて人に示さず。」僧云く、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子。」師云く、「趙州ヘ己を割いて人を利す、ト明月夜光、多くは劒を按ずるに逢ふ。忽ち顯孝に問ふもの有り、『如何なるか是れ祖師西來意』と、只だ他に向つて道はん、チ山深うして過客なく、リ終日猿の啼くを聽くと。」

上堂、ヌ言ふて足るときは、終日言へども盡くに道なり、言ふて足らざるときは、終日言へども盡く物なり。且く道へ、ル道と物と是れ一か是れ二か、若し是れ一と道はゞ、甚麼としてか、ヲ客山は高く主山は低き、若し是れ二と道はゞ、甚麼としてか、ワ天地一指萬物一馬なる。箇の裏カ細素得出せば、ヨ個に草鞋錢を還へさん。然らずんば、但だタ來年蠶麥の熟することを願つて、レ羅睺羅兒に一文を與へよ。

上堂、ソ杜宇不如歸、ツ竹雞泥滑滑、ネ深山巖崖の中、誰か道ふ佛法なしと。佛法あり、衲僧只だナ三隻の襪あり。」

上堂、舉す、ラ長髭、ム廊下にして僧のウ問訊するを見る。髭云く、「ヰ步步是れ汝が證明の處還つて知る麼。」僧云く、「知らず。」髭云く、「ノ賴に汝知らず、若し知らば我れ甚麼を作すにか堪へん。」僧便ち禮拜す。師云く、「長髭釣を垂る、オ綆短うして深泉に搏らず、者の僧ク放乖す、好し連腮に一掌を與るに。ヤ作家分上、マ鳳林咤之。」

上堂、「ケ渾て今日に似たらば、達磨大師、フ多少の光彩をか添へん、コ更に若し踏步向前せば便ち不是了也。」

イ軀身。二氣のかぼるとき故に衲僧にも出身の一路を得るでござる。

ロ老鼠牛角。あとへもさきへもゆきつまつた、伎倆のつきたところ、倒斷か見るより仕方なし。

ハ殺活方便。いきつまつたところが、轉身の一路でござると早合點したので、活殺は過分なこと、うまいことを仰せらるとなり、方便がうまいとほめたるなり。

ニ仁者見之。これは見處の差別に任す、おぬしが見るところでは方便と思ふが、百姓は日に用ひて知らず、仁者はさうさう器量ほどにみて取つたとなり。

ホ柏樹。にはのかしのき、祖佛已前の本分の事をさす、ヘ路を着くべからず。

ト明月夜光。不知音の義。いふ意は趙州深切に人の爲にすと雖も、此の僧猶ほ境色の會を作す、好心好報を得ずじや、又くらがりよりひよつと出せばきもをつぶすぞと。

チ山深過客。此の顯孝寺は出て來る御客もない、山おくなれば じや。

リ終日猿啼。一日中さるがないてゐる、「虛堂がこの二句は柏樹子と一般か兩般か」と或る抄に書いてある。

ヌ言而足。莊子の則陽篇の語、禪宗の見解にすれば、已了底は「えへん」と云ふても三世古今咸言已前已後、あらゆる佛敎龍錄一毛ものこさぬ、未了たけしきを以てなり。

ル割已利人。賢愚因緣經に出づる故事なり、飢人に我が肉を刻いでくはせた樣なものなり

ヲ羅睺羅。乞食のことなり、梵語には阿修羅、秦には障と云ふ、月明か障ふるなり、又僧鬼の類なり、日本の厄はらひのこと、春ごまのやうなもの、福の神を持ちあるき、家々豐年の御祈禱をするものなり、今は學者のうか〳〵と諸方に一言半句を求めまはるをいふ。

ワ杜宇不如歸。ほとゝぎすの。「ほぞんかけたか」。

カ竹雞泥。水雞の木魚たゝくやうになく、夢窓國師の歌に、「月はさす竹雞(くひな)はたゝく樞の戸か、主がほにてあぐる山風。」

ヨ個草鞋錢。空しく行脚せずと草鞋錢を還し功に酬ゆること

タ來年蠶麥。これは古人も、佛法の實報を成ぜんことを願ふ底のものは足らざるときは、物みな是非憎愛となる、「道は精なり、物は粗なり非言非默の中、自ら至極の義あり」と或注に見ゆ。

レ羅睺羅。にはのかしのき、祖佛已前の本分の事をさす、ヘ路を着くべからず。

ソ杜宇不如歸。ほとゝぎすの。

ツ竹雞泥。水雞の木魚たゝくやうになく、夢窓國師の歌に、「月はさす竹雞(くひな)はたゝく樞の戸か、主がほにてあぐる山風。」

ネ深山巖崖。人跡不到の處、水鳥樹林念佛念法の義なり佛法なしと道ふへからず。

ナ三隻襪。一足半、かたあしかたあしの足袋なり、なんの用に比す。

ム廊下。乞食のことなり、梵語には阿修羅、秦には障と云ふ、月明か障ふるなり、家々豐年の御祈禱をするものなり、今は學者のうか〳〵と諸方に一言半句を求めまはるをいふ。

ウ問訊。禮拜。

ヰ步步是れ汝が證明の處。

ノ賴に汝知らず、若し知らば我れ甚麼を作すにか堪へん。

オ綆短うして深泉に搏らず、者の僧ク放乖す、好し連腮に一掌を與るに。

ヤ作家分上、マ鳳林咤之。

ケ渾て今日に似たらば、達磨大師、フ多少の光彩をか添へん、コ更に若し踏步向前せば便ち不是了也。

上堂、顯孝力を盡せども、只だ中下の機の爲にし得たり、㋓要且つ向上の機の爲にし得ず。㋔拄杖子、覺えず出で來つて㋕冷笑して道く、「㋖大丈夫の漢、㋗等しくこれ人の爲にす、何ぞ㋘他をして㋙籠頭を脫し㋚角馱を卸し、㋛白衣の拜相の如く一般ならしめざる、甚麼の向上向下とか說かん。」山僧道く、「拄杖子、㋜果然として㋝作家、㋞我れ儞に如かず。」

除夜小參、「年去り年來つて、新を迎へ舊を送る。山僧諸人を㋟謾ずること一點も得ず、㋠大盡三十日、小盡二十九、諸人山僧を謾ずること一點も得じ、既に㋡賓主相謾せざることを知る、彼此㋢飯を喫して、須らく㋣噓ぶことを論ずべし。㋤禿僧家、㋥各〳〵一片の田地あり、年頭より年尾に至るまで、裡許に在つて活計を作す。只だ是れ㋦蹈不著、縱饒㋧蹈得著するも㋨己靈を埋沒し、㋩先聖に孤負す。且く道へ、是れ甚麼の田地ぞ、㋪拂子を擊つて、「㋫春來艸自ら生ず。」正旦上堂、拄杖を拈じて、「新年頭の佛法を㋬道著することを得ず、㋭禪和家、㋮面噤地なり㋯那裡か肯て時に隨ひ節を逐はん。顯孝從來㋰柳下惠、拄杖を卓して、「伏して惟れば、㋱狸奴白牯、㋲玆を履んで去る。㋳各各水草常に甘うして、㋴背長く毛瘦することを致すことなし。」

上堂、㋵舉す、㋶大愚歸宗を辭す、宗云く、「儞甚れの處に向つてか去る。」愚云く、「諸方に㋷五味の禪を學び去らん。」宗云く、「我が者裡、一味の禪あり、甚としてか學びざる。」愚云く、「如何なるか是れ和尙一味の禪。」宗便ち打す、愚云く、

にもたゝぬ、此は衲僧が受用の活處ぞ。

㋒長髭。名は驥、石頭に嗣ぐ。

㋓要且。どうしてもまあなり。

㋔拄杖子。禪宗向上の大事に比した、馬鹿利口といふこと、遲鈍は頓及び鈍を掌する、主賓共に罪案を結するなり。

㋕作家分上。爲人底、宗師分上の長髭。

㋖風林吒之。方語杜撰の義、又胡亂義、これは東坡が弟の蘇子由を試みて、多聞にほこるを試めたる語なりといふ。

㋗渾似今日。休歇無事にして、當處滿然として、他日の走作に似ず、二六時中四威儀の中も、是の如く腹橫鼻直ならばなり。

㋘多少光彩。今日の如くならば塗磨の威光も多少は增さうものか。

㋙更若踏步。それならば、この上へ猶ほも進まんとしたらば不是にし了れりで、そでもないことにしてしまう。

㋚要且。どうしてもまあなり。

㋛拄杖子。禪宗向上の大事に比してもち出す。これなんのかたちかと。

㋜冷笑。「あざわらぶ」、欺き笑ふなり、これは虛堂和尙が笑ふなり。

㋝大丈夫漢。男たらんものはなり。

㋞等是。貴賤男女の隔てなくなり。

㋟他。大衆學者の爲めに。

㋠脫籠頭。人馬の口にはめるがどないふ。ともある馬のおもがいをはづしてなり。

㋡卸角馱。牛の重荷をおろしたごとく、角に一種の裝置するものか角馱ともいふ。

㋢白衣拜相。凡を轉じて聖と成すの義なり、無位無官のものが、天子の卿相大臣になるやうなもの、煩惱の中で、菩薩の頂上に上るやうなものなり。

㋣甚麼向上。八歲の龍女や廣額やが、成佛するじやもの。

㋤作家。伶利の漢をいふ、「しごとし」、又はさかしきやりての意に用ふ。

㋥我不如儞。向上向下の異はない、自己返照して見よなり。

㋦謾不得。馬鹿にすることならぬ、一點つめのあかほどもなり。

㋧大盡小盡。除夜の現成事を用ふ。

㋨賓主。賓は諸人、主は虛堂。

㋩喫飯。此れは古來禪林の語にて、鹽崖手を撒する底にして、謾とも不謾ともいふべきなり。

㋪噓。食ふさかつて氣通ぜざるなり、これは悟時の端的をいふ。

㋫一片田地。本分一片の田地をもちながら、裡許に在り、本分田地の中に活計(くらし)を食ふたり飲んだりして居る。

㋬蹈不著。諸人がふみいたることは六づかしい。

「我れ會せり。」宗云く、「道ひ來れ看ん。」愚、口を開かんと擬す、宗又打す。師云く、「㋔是は則ち是、青は藍より出でゝ藍よりも青し、若し㋕其れ鋒を交ふるの際ならば、冰は水より生じて、水よりも寒しといふは、則ち未可なり。

解夏上堂、「㋖十五日已前は休す、㋗十五日已後は住す、㋘正當十五日、休するも也た休し得ず。住するも也た住し得ず。㋙何が故ぞ、況んや諸人九十日の內各各所證の法門、未だ嘗て一一に㋚引驗せざるをや。」拄杖を以て㋛畫一畫して。過。

㋜上堂、舉す、雲門因に僧問ふ、「初秋夏末、前程に㋝忽ち人あつて問はゞ、㋞未審し他に對して甚麼とか道はん。」門云く、「大衆㋟退後、僧云く、㋠過甚麼の處にか在る。」門云く、「㋡我れに九十日の飯錢を還し來れ。」師云く、「者の僧は是れ㋢王小波が艸鞋なり、雲門は㋣縱奪觀んべし」と雖も、未だ免れず㋤暗中に箭に著ることを。」

上堂、山僧は恰も㋥璞を抱く者に似たり、但だ風に臨んで涕泣することを缺く。世を舉つて人なしとは道はゞ、只だ是れ可惜許。」

上堂、舉す、㋦玄沙、衆に示す、「㋧諸方盡く道ふ、㋨接物利生と。㋩忽ち三種病人に遇はゞ、作麼生か接せん。患盲の者、㋪拈椎豎拂他又見じ患聾の者、㋫語言三昧他又聞かじ、患啞の者、㋬伊をして說かしむるとも又說くこと得ず、㋭若し接することを得ずんば、佛法靈驗なけん。師云く、「大凡㋮病豈に三種に止まらんや、玄沙人の接する能はざらんことを恐れ、又佛法に靈驗なきことを憂ふ。老僧眉毛を惜まず、試に此の三種の人を接せん看よ。」拄杖を卓して、盲聾瘖

㋔蹈破著。千に一つも隻手の聲でもきいたならばなり。

㋕埋沒已靈。もつたいない、大切な、自己の彌陀が埋んでしもうて。

㋖先聖。釋迦達磨の本意にそむり。

㋗春來艸。向上の無功用の田地なり、されども春がくれば、げんげもよめなも莨りあやめも、しぜんに生える「虛堂がこゝへもつてきたは、東山下の暗號令がある」と珠長老はいふてゐる「當體即是のところじや」と或抄にあり。

㋘頭著。心もことばも及ばぬ、目出たい。

㋙禪和家。和は和合の義、大衆いうれも。

㋚面嗜々地。嗜は口を閉ぢ、つむぐなり「いかめしいつらつき」。口さきをとがらして。

㋛那裡背。時節に拘はらず、時に隱ひ、元日じや遙節大年じやと一向かまはぬ。

㋜柳下惠。魯の大夫なり、これまで虛堂は柳下惠のやうに可もなく不可もなし、個は痛たり、我は我たり。溫和簡漫にして好惡取捨の相なき此の如しと、この顏孝人情にかまはぬ。

㋝狸奴白牯。狸奴は猫、白牯は牛也、獅太も平太もと同じ。

㋞擺鼓面去。主丈子なり。

㋟各々水艸。水牯牛に付いてこれなにもあぢないものはない。

㋠鬚長毛瘦。ひだるい目に逢ふことがない、故にこれは祝語なり。

㋡大愚。歸宗常に嗣ぐ、常は馬祖に嗣ぐ。

㋢五味禪。五味は酸、鹹、甘、苦、辛、差別の法水法味を表す。

㋣是則是。我れ會せり也といふたも尤もなり、大愚は親にまさつてあるやうに見えるとなり。

㋤其交鋒。「一場の法戰の際なれば、先達は先達、皈宗にすくれた大愚といはゞ、そりやさうでない、やはり未可なりで、大愚は餘勝の作なきことか」と龍溪も注してゐる、交鋒は「きりむすぶ」こと、一問一答の機鋒なり。

㋥十五日已前。解夏の日の前後に寄せて、修行の因位果位を示す、休は萬機休罷、是れは則ち金剛無間道、過去のことについてほと見てよい。

㋦十五日已後。住は究竟安住、是れ則ち後智解脫道、未來のことについてのことに見てよい。

㋧正當十五日。前でもなし後でもなし、ちやうど今日なり、心頭がさわがしくて、これはすなはち、懸崖纏壁で、伎倆愼に盡くるの端的なり。

㋨何故況。これより具下は、諸人の從前の所得を證明せしことを要するなり。

㋩引驗。それ〳〵に詮議して見んとなり。

㋪畫一畫過。しきりかいて、過は用過の路を示すなり、休か住かと「過の一字は參すること三十年ぜよと、鐵橛子の如くじや」と或る抄に書いてある。

㋫上堂。恐らくは前の上堂の拈古のみ、當に亦舉すといふべし。

㋬忽有問。一夏已來、何の所得あるやと。

㋭未審。いぶかしと思案におちませぬと。

㋮退後。そこのけ〳〵、是れ縱なり。

㋯過在甚麼。どこに無調法かゝ

啞底、近前し來れ。」又拄杖を卓して、老僧に孤負することを得ず、更に若し會せずんば、又倆が輿に箇の註脚を下さん。」拄杖を卓して、「㋓平生肝膽人に向つて傾く、㋔相識は渾て不相識の如し。」

上堂、「尋常㋕口を開著して合することを得ざることは、蓋し語言の間に在らざればなり。㋖若し語言に涉らば、㋗摩竭提國遂に虛設と成らん、畢竟那裏にか在る。」拄杖を卓して、「㋘巡人犯夜。」

上堂、「㋙常年の九日は、籬下の黃花粲然として目に在り、今秋旱甚だしうして未だ一枝をも見ず。賴に㋚汾陽老人に、一句子あることを得たり。㋛妨げず時に應じ節に及ずことを。旦く道へ、これ㋜那一句ぞ、㋝喝一喝。」

顯孝寺語錄　終

ざりますか。

㋐我九十日。是奪なり、苔話も云ふ餘せず、むだぐちしたと云ふか。

㋑王小波。このやつは宋太宗淳化四年春二月曹城の民なり、今時の社會主義者なり、財產平均を企てしもの、貧富均一を主張せしものなり、やつかいものなりといふこと。

㋒誤奪可觀。さすがの雲門故、見事なものだけれども。

㋓晴中著箭。おぼえず者の僧に見透さるとなり。流れ箭のことを轉用したるなり。

㋔抱璞者。これは韓非子の和氏篇に、楚人和氏、玉璞を得て之を厲王に獻ずるの故事による、璞は荒玉にて、未だ加工ざる玉なり、俱鈌臨風涕泣、あしきられればじや、悲しや〳〵と泣きはせぬ、舉世千人萬人の内、一人も無し、これが玉であると知るものがないとは、いはぬ、石じやなどゝ此の大事を知つたものはないではないけれども、只だ意到句到を盡したものがない、只だ是可惜許、(許は助語)で「まだなか〳〵じや」と殘念々々、「是ば深く學者の法寶の所在を知るもの少れなるを嘆ずる也」と龍溪は註してゐる、可惜許は唐宋時代の俗語であるさなしむべきかなと」みてもよい。

㋕玄沙。晩年僧で、年三十で僧となつて、之は南臺江の漁夫であつた、この話は玄沙三種病人として、碧岩第八十八則にも出てゐる。

㋖諸方。あちらの老和尙も、こちらの老禪師も。

㋗接物利生。人物に接し、衆生を利益するにて、こんにちの布敎傳道なり。

㋘三種病人。めくらでつんぼで

をしでと云ふ人なり、三とは盲聾啞を兼ねわづらふ人で、三人の病人ではない、作麼生か接せん、どう引き入れたものかと。

㋙拈椎竪拂。これは禪宗師家の思想を表現するおりさまなり別に椎を打ち拂子を竪起するのではない、他又不見でいかな〳〵見えはせぬ。

㋚語言三昧。三昧は梵語で、譯すれば一心不亂のこと、雀のやうにしやべり〳〵つゞけて見たところで他又聞かじで、かなつんぼで一つもきこえぬ。

㋛敎伊說。さあ云ふて見よと云ふても、又說不得で、舌がまはらぬ故え說かぬと。

㋜若接不得。もしか、このやうなやつかいものを濟度をせぬようでは佛法無靈驗なり、何の利益、ねうちがあらうぞと、今時の金のあるものだけだすけ、貧乏人をみかぎる不肖ものには、よき公案なり。

㋝病豈三種。これは虛堂和尙、病は中々三種だけではあるまい、玄沙は他の老宿どもが接物利生をよくせぬを恐れ、又佛法にねうちがなきことを憂ふるが、老僧は不惜眉毛じや、しんだいありぎりほりだして試めしに、此の三種の人をたすけてみるべし、近前來は「ちかうひざもとへよれ」、孤負は「そむくなかれ」、下註脚は「くはしきいひわけを言ふてやらう」なり。

㋞平生肝膽。つねよりの密事、はらのそこのこんたんも、其の方たちにみなを〳〵さつぱりまき出してしまうた。

㋟相識渾。至極のなじみあひは出合ふたところでなにごともない、不見不聞のやうなもので、識と不識とは一如なりと。

㋠開著口。著は助語なり、人の爲に朝から晩まで澤山さうに口をきけど、口をふさぐこともできぬのは、不レ在二平語言之間一で、終日言ふて未だ曾て言はずにて、いくらほざいても、眞の妙道ほ。文字や、ことばのうちに在らざればなり。

㋡若涉語言。萬一にも、ことばの上にあるものならばと。

㋢嶄竭陀國。摩竭に室を掩ふの事は報恩錄にあり、虛設はむだごとと云ふものなり、畢竟即ちとつくと算用仕つめたところで、妙道は那裏即ちどこにあるか。

㋣巡人犯夜。夜まはりをつげてをけば却つてそれが夜盜をなすやつなりと、この言句は東山下の暗號なり、これは虛堂和尙が自らが讚賞するの語。

㋤常年九日。毎年の重陽にはなり、黃花は菊のこと。燦然はてら〳〵うつくしいこと。今秋は日やけして、まだ一本もさかぬ。この旱は佛法のおとろへてゐるにたとへたるなり。

㋥相識渾。至極のなじみあひは出合ふたところでなにごともない、不見不聞のやうなもので、識と不識とは一如なりと。

㋦汾陽老人。善照禪師のこと、一句子ありは、「三玄三要の總頌に云く「三玄三要事離レ分、得二意忘レ言道易レ親、一句明明該二萬象一、重陽九日菊花新。」

㋧不妨應時。一枝なくてもよい、一句子でちやうど時節をえて、目出たく師句をする。

㋨那一句。龍溪は注して「說破せざる處却つて親切あり」と。

㋩喝一喝。やいみたか知つたかえ。

慶元府㊀瑞巖開善禪寺語錄

侍者㊁梵閱編

師入寺、㊂山門を指して、「㊃出出入入、汝諸人と者の一路子を共にする非ずといふことなし、甚に因つてか㊄門限の高低を知らざる。喝一喝。」

㊅方丈に據る、「㊆爐韛の所、鈍鐵尤も多し、㊇阿那箇か鉗鎚を受けざる。」拄杖を以て畫して云く、「㊈者邊に過ぎて立て。」

㊉法座を指して、「㊋說は飯を建つが如く、㊌坐は山嶽の如し。㊍下きに就いて高きを平ぐ、㊎牙を咬むこと爆爆たり。」

㊏師、拈香祝聖畢つて、㊐衣を斂め座に就い

㊀瑞巖山。浙江の寧波府定海縣東南九十里に在り、上に青松峰あり。

㊁梵閱。鏡潭と號す、虛堂門下なり。

㊂山門。三解脫門と云ふ、空、無相、無作なる云ふ、吾が宗逸院の人、必ず山門を指して法語あり、みな門の事に托して佛事を作す。

㊃出出入入。出でたり、入つたり、行つたり、來たり、おれもそちらもわき路はない、一切の賢聖、八千の夜叉、地獄、天堂、みな此の一路なり。

㊄門限。限は「しきみ」、高いの低いのとありさまを知らぬ、喝一喝と直に參取すべし。

㊅爐方丈。室中の間なり。

㊆爐韛。叢林に比す、鈍鐵は學者に比す。

㊇阿那箇。どれでも鉗鎚を受けぬものはない、鈍參の士を云ふ。

㊈過者邊立。鉗鎚にあづからぬ眞箇のものをさして云ふ、立は住立せよとなり。

㊉指法座。法堂の須彌壇をさして云ふ。

㊋說如建飯。法座の法の字み形容して說と云ふ、たとひ富樓那も及ばぬ、建「はくつかへす」こと、「こぼす」こと、飯は水かめである、その所說は此の如

て云く、「㊌離婁力を極む、白浪滔天、㊍罔象無心神珠掌に歷、㊎化儀に涉らず如何が相見せん。」僧あり出でゝ便ち喝す、師亦喝す。僧一圓相を打して便ち禮拜す、師云く、「㊏恠力亂神。」㊐乃ち云く、「大道只だ目前に在り、要且つ目前に覩がたし。㊑大道の眞體を識らんと欲せば、聲色言語を離れず。㊒與麼の說話、大に㊓草を折つて虛空を量るに似たり。㊔禪僧家、㊕諸聖を求めず己靈を重んぜず、㊖眉毛を眨上すれば、早く已に蹉過す、甚麼の㊗口頭聲色とか說かん。㊘野狐鳴獅子吼、㊙三千里外敢て眸を擡げず、直饒ひ臨濟德山㊚棒喝交馳するも、且く請ふ之を束ねて高く閣け。何が故ぞ。」拂子を擊つて、㊛金革聲を銷して自從り後、㊜惟だ聽く堯民擊壤の節。」

く凝滯なきことを表す。

㊋坐如山嶽。法座の座を形容して坐と云ふ、須彌高廣、安住不動で、阿修羅も動すこと能はずと。

㊌就下平高。凡夫の爲めの故に衆生の根機に上下あればなり差別の見を治して、中道に歸せしむることは、宗師家、說法爲人の體裁なり。

㊍咬牙爆々。はがみをならしてばり〳〵すること、人を罵ること、火急にして近づくべからず。

㊎師拈香。此れは釣語なり。

㊏歛衣。法衣をかきなをして、法座に就いて云くなり。

㊐離婁極力。目のよく見ゆるにたとふ、智情を以て大道を求めば、白浪が天にはびこるやうに六づかしいとなり。

㊑罔象。かげぼうしのことなり寓して人の名となす、無心なものなり、いつのまにか、神珠は掌に歷ると、神珠が道なり、聰明言辯はみな以て道を得べからず、無心にして後に得るなり。

㊒不涉化儀。此の端的はどう方便にわたらず眞箇の相見なり如何が相見ぜんやと。

㊓恠力亂神。論語に、君子は語らず、恠力亂神かなり、そんなあやしいことは話にもならぬ。

㊔乃云。提綱なり。

㊕大道眞體。大道の眞實本體。この語は誌公の大乘の讚にある語なり。

㊖與麼說話。これより以下は師の辭なり。

㊗折蚌虛空。蹇一本かふりまはして、何百萬里とある、虛空を計るやうな馬鹿なせんさくなり。

㊘不求諸聖。石頭和尙の語なり

㋓復た擧す、㋔本朝の太宗皇帝、㋕寶鉢を托起して、㋖王隨相公に問ふ。「㋗既に是れ大庾嶺頭提不起、甚に因つて寡人の手裡に在る。」相公對ふることなし。後來㋘慈明代つて云く、「㋙陛下腕頭力ありと。師云く、「㋚君臣慶會、日のごとくに照し天のごとくに臨む。若し是れ大庾嶺頭底ならば、㋛物は有主に歸す。」

當晚小參、僧問ふ、「承り聞く、和尚言へることあり、衲僧家、諸聖を求めず、己靈を重んせずと、還つて㋜端的なりや也た無や。」師云く、「㋝聽教あれ分曉なること。」僧云く、「只だ㋞三條椽下の如きんば、甚麼邊の事をか明む。」師云く、「㋟兩箇の石人相耳語す。」僧云く、「與麼ならば則ち德山臨濟も㋠倒退三千。」師云く、「㋡也た恐る此の如くならんことを。」僧云く、「㋢人天交接兩得相見の一句、作麼生。師云く、「㋣大家者裡に在り。」僧云く、「但だ㋤大衆の觀光するのみに非ず、㋥學人小出大遇」師云く、「㋦偷心の鬼子。」僧禮拜。」

㋧師拄杖を拈じて云く、「若し㋨是れ我が虎丘ならば、直下に積世の富兒の一錢も亂りに使はざるが如くにして、箇箇生生獰獰、局局促促たり。只だ家法太だ嚴なるに因つて、以て門庭の冷落を致す。山僧㋩沒興にして也た者の保社に撞入す、人に喚んで松源の嫡孫と作さる。㋪謂つべし浪りに其の名を得たりと。今夜已に展ぶるをば縮めず、未だ免れず人の眼を著くるなき處に向つて、一星子を拈出して、也た諸人をして、㋫十二峯頭に元靈芝仙艸ありと道ふことを知らしむ。」拄杖を卓す。

百姓無事ゆゑ、つちくれをうつて、哺を含み、腹を鼓し、太平を謳歌した、今は入寺開堂故に、言句や棒喝はよしにして、無爲の觀を致すなり。

㋒復擧。拈提なり。

㋓本朝太宗。趙宋第二代主、諱は炅、名は光義。

㋔托起寶鉢。寶鉢は梵には鉢多羅、此には應器と云ふ、今略して鉢と云ふ、托起は手のひらへ捧げ上げてなり。

㋕王隨相公。王隨丞相は嘗て首山省念禪師に參じて、言外の旨を得。

㋖既是大庾。もはや大庾嶺で、明上座と云ふが六祖大師と爭ふて力をつくしても、もちあぐるごとをえぜぬになり、大庾嶺は南安府にあり、この事は六祖壇經に詳なり。甚に因つては「どういうわけで」、寡人乃ちおれの手のうちに在るぞと、寡人は天子が謙損して自を稱せらるゝなり、德すぐなしとのことか、されども王隨相公はなしいことには、御對へみなにもせざりき。

㋗慈明代云。よほど後になりてから慈明和尚が王隨に代りて云ふのにはなり。

㋘陛下腕頭。陛下出身の一路ありて、うでさき御力がありますと、白雲端は「腕頭の力が天下に主たる力か」と拈じてからるる。

㋙君臣慶會。太宗と王隨との目出たい出合い、德光は日の如く照し、天の如く臨みて、四海に拔らしむとなり。

㋚物歸有主。大庾嶺頭底ならば乃ち鉢盂のことならば、物歸有主で、君臣の義此くの如し、若し是れ祖宗下の事ならば、人人本具なり、なほ物のその主に歸して、寡ふべからざるが如し、太宗を指して祝し奉るの意なるが、底意は虛堂にかゝる。

㋛端的也無。なんと、これが眞にたしかなことでござるかと。

㋜聽教分曉。まゝよ、大だ分明に會取せよとなり。

㋝三條椽下。三條椽、七尺單とは僧堂の坐位の區別なり、言ふは、もしかやうならば僧堂裏に工夫坐禪して、甚麼事を爲すとなり、椽下は一人が居る床には、たるき三本うつから云ふたるなり、明むといふて、諸聖を求めず、己靈を重んぜずと、これを明めるなり。

㋞兩箇石人。石佛が二人集つてひそ〳〵ばなしをしてゐる、堂裏の事、外人の知ることを許さずとなり。

㋟倒退三千。尻みかすみにおつぱしらうものなと。

㋠也恐如此。わるくしたら、そ

㋡眨上眉毛。眨は目を動す、「まどろぐ」なり、まゆ毛をうどかせば千里萬里くひちがふ、蹉過するなり。

㋢口頭靡色。これは「口頭の靡色と點ずるは非なり、口頭靡色と讀むべし」との說あり。

㋣野狐鳴。こん〳〵、うゝ〳〵云ふてもなり、橫說竪說、大活自在の義。

㋤三千里外。佛祖出で來つて大光明を放つとも、敢不擡眸なり、ふり返りて見もせぬと。

㋥棒喝交馳。たとひ臨濟や德山が出合つて、棒する喝するしても、まあちよつど、どうか之を束れて一束にして高く閣け、天下太平を致せと。

㋦金革銷靡。金革は軍器なり、金はどら、革は大鼓、陳平、樊噲が出で來つて、うぬめ〳〵と一靡にしがると。

㋧惟聽甕民。甕の民は天下平和

復た舉す。㊊感首座、㋐法昌に問ふ、「昔日北禪、㋑露地の白牛を烹る、今夜㋒分歲何の施設かある。」昌云く、「㋓臘雪天に迸つて白く、春風戶に逼つて寒し。」感云く、「大衆㋔箇の甚麼をか喫せん。」昌云く、「嫌ふこと莫れ冷淡にして滋味なきことを。一飽能く萬劫の飢を消す。」感云く、「未審し是れ甚麼人か置辦する。」昌云く、無慚愧の漢、來處も也た知らず。」師云く、「感首座、當時若し一飽能く萬劫の飢を消すといふ處に向つて㋕箇の和尙の供養を謝すと道はゞ、法昌の㋖貧を拔いて富と做すことを管取せん。

元正上堂、「㋗嘉熙運を紀め、淳祐圖を開く。㋘曆數既に長じ、指を倒して數へ難し。且く道へ、今日是れ甚麼の日ぞ。」拄杖を卓して、辛丑の歲烏飛兎走る。」

㋔人天交接。これは法華の授記品に出でゐる文、人間天上、一所に出合ふたる端的なり。

㋕大家者裡。大家ばれき〳〵、衆人同會、別處に在らず、天堂地獄もみな者裡に在り。

㋖大衆觀光。大衆が法席の光輝を觀光するのみではない。

㋗學人小出。私ちよつと出まして、大いに利益を得ましたとなり。

㋘偷心鬼子。てくせのわるいやつなり、猶ほ法見を存すと、僧の賊精を抑へるだが、僧はあり繼うと雖非した。

㋙師拈主丈。以下提綱なり、凡そ上堂は放瞻、故に單に宗綱を提ぐ、小參は小心、故に細に家事を談ず、斯の文に據りて知るべし。

㋚是我虎丘。虎丘紹隆禪師は圓悟に嗣ぐ、火憲は放行を專らにす、虎丘は把住を專らにす、直下はすぐさま、積世の富兒は累世代代の讓りの金もち、一錢不二亂使一は把住綿密の義、生生穆々はいき〳〵かひ〳〵しく快活嚴辣の手段、近かよりがたし、局局促促は減小のこと、「ちゞまりちいさくなる」こと、ものごと規矩たゞしくなり、只因二家法太嚴一は家がらが餘りきびしいからなり、以致二門庭冷落一は門風が峻險なるにより、納子共があまりよりかつぬからさびしいと。

㋛沒興。不意のこと、存じよらぬ、也撞二入者保社一は保は堡と同じ、小城なり、この虎丘下の中間入りをする、撞入は飛び入るなり、保は保伍なり、同社を云ふ。

㋜可謂濕得。さうはいへらちもんなこともあらうと、僧を弄す。

㋝天基節上堂、「㋞河、圖を出し、洛、書を出す。㋟雷霆の變化、㋠鬼神も其の由を測ること莫し。且く道へ、是れ何の祥瑞ぞ。」良久して、「㋡聖人復た生ず。」

上堂、舉す、趙州因に僧問ふ、「㋢至道㋣無難、唯嫌、㋤揀擇、これ㋥時の人の窠窟なりや否や。」州云く、「㋦曾て人ありて我に問ふ、直に得たり五年分疎不下なることを。」師云く、「㋧大海を觀る者には、水を爲し難し、聖人の門に遊ぶ者には、言を爲し難し。㋨者の僧に因らずんば、趙州老子を見難からん。」

㋩維那を謝する上堂、「㋪古佛只だ椎頭に在り、每日呼び來し喚び去る。惟だ綱令の淸嚴なるのみに非ず、下下縕素を分たんことを要す。㋫興化當年、錯つて用心す、㋬月の明かなることはない、今夜已展不レ縮はまさに大に開展すべし、堪忍袋の緖がきれた、無二人著レ眼處一はまだのがれこはない、釋迦も達磨もめをつけぬ測り難たないところに向つて、一星子は些少の義、宗上向乘の一星子、すこしばかりを拈提してとなり。

㋝十二峯頭。此れ箇の瑞岩山の十二峯にひじりたち、靈芝不死の草、仙艸あり知らしむと、拄杖を卓すと、これで眞箇の靈芝仙艸を指示す、これは瑞岩の境致に託して、本分の事を開示するなり。

㋞感首座。黃龍南の法嗣、福嚴の慈感禪師と云ふあり、此の人か。

㋟法昌。名倚遇、北禪賢に嗣ぐ、雲門五世の孫なり。

㋠露地白牛。この語、前の興聖錄除夜小參に見ゆ、脫落現成の御佛の麥。神の麥、歲ごしのにぎはひに。

㋡分歲。こちらではこのとしごしに、どのやうなふるまひがござるぞ。

㋢臘雪迸天。大晦のゆきは、あゝさむいな、微骨じや、たまらぬやうなと。春風が戶のすきまからひう〳〵と、寒うどざる、現成底なり。

㋣喫箇甚麼。大衆たちは何の馳走にあづからうぞ、臘雪の一句があるに嫌ふことなかれ、冷淡味はなけれども、一飽能消二萬劫飢一と、一口で藏未來際も腹はふくつん、未審はわかりません、誰か按排料理して、置辦で指揮排辦してもうぞ、無慚愧漢とはこのはちすでどころもしらぬやつ、來處也不レ知はどこからと功の多少を計り、彼の來處を知るかと、食物に托して商量す、

豊に珊瑚樹に在らんや。

上堂、擧す、趙州侍者報じて云く、「㋐大王來也。」州云く、大王㋑萬福。」侍云く、「未だ到らず。」州云く、「又來也と道ふや。」師云く、「趙州年㋒老いて事を聽くこと眞ならず、侍者㋓王令已に行す、猶ほ門外に在り。」

上堂、擧す、臨濟因に趙州遊山して院の㋔後架に到つて、洗脚する次で、濟便ち問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「㋕恰も老僧が洗脚するに値ふ。」濟近前して㋖聽く勢を作す。州云く、「㋗會することは即便ち會す、㋘啗啄して甚麼をか作さん。」濟㋙便ち方丈に歸る。州云く、「三十年行脚、今日錯つて人の爲に解註すと。」師云く、「㋚金を攫む者は人を見ず、鹿を逐ふ者は山を見ず。」

五觀の中の語を借る。

㋛筒和尙。はてさて、未曾有の御馳走、ありがたしと云ふたならばと。

㋜拔貧飯苦。貧は惑首座を引立て大知識にしてやること、法昌門下不レ致二寂寥一となり。

㋝喜熙。四年にして淳祐と改元紀は歲星天を一周するを云ふ圓は曆圓なり、閏は改なり。曆數既長。曆　日年無延長、倒指はゆびをなり算へてもかぞへられぬ、これは運祚の延長か覩す、甚麼日ぞ、いかなる吉日ぞ、幸丑は淳祐元年、烏飛兎走は烏兎は日月を謂ふ、飛走は月日のたつことを云ふ。

㋞天基節。理宗の誕生日正月五日なり。

㋟河出圖。伏羲氏、天下に王たるとき、龍馬、河に出づ、遂にその文に則りて以て八卦を畫す。禹、水を治するとき、神龜、文を負ふて背に列す、數あり、九に至る等の奇瑞なり。

㋠雷霆變化。聖德物を化育するに比す。

㋡見神其山。春夏秋冬、冷暖の變化は、鬼神も其の竭山を測りがたしと。

㋢聖人復生。眞の聖人を指示す。

㋣至道。向上宗乘の事、今の經劇の眞理などと云ふ、これが禪の極意、如來正法眼藏なり。

㋤無譯。むづかしいものではない、即佛即心と云ふも、萬里をへだつとなり。この四字の合點がゆけば、人天の師なり。

㋥操擇。差別的の見解、比較辨別の意をきらふとの事迄ふことなかれ、認むることなかれか、雪竇も樞前山深ければ、水寒し、言端語端、二にして二ならず、一にして一ならず、操擇はこれは差別、明白はこれ平等なりと、これを道ひこして來いとなり、この六字、三祖の信心銘から出た語なり、揀擇明白、君自ら看よとなり。

上堂、擧す、潙山、㋦仰山に問ふ、「寂子、㋧心識微細の流注、㋨無にし來ること幾年を得。」仰山敢て答へず、却つて云く、「和尙無にし來ること幾年ぞ矣。」潙云く、老僧無にし來ること已に七年。」潙山又問ふ、「寂子如何。」仰云く、「㋩悲寂正闇、師云く、「㋪古人玄微を及め盡す、猶ほ走作を恐る。今人只管㋫孟八郎にして道ふ、㋬總に是れ五逆の人雷を聞くと。」

上堂、擧す、㋭夾山、衆に示す、「若し㋮此の事を論せば、直に須らく劒を揮ふべし、若し劒を揮はずんば、漁父巢に棲むならん。」師云く、「夾山㋯未だ物と俱に化することを得ず、㋰影艸の流をして、驢を認めて馬と作さしむることを致す。」

結夏小參、「㋱等しくこれ㋲恁麼の時節、何そ便れは者の僧を扶竪せんことを要す」と龍溪は註してゐる、湓州灘のやうな大海を覆たものでなければ、近江の湖水ぐらゐは自慢してはならぬと同じと。

㋳不因者僧。言を爲し難きところにおいて、者の僧が言を爲す故に。

㋴維那。維那は叢林の綱紀、大切な役なり。

㋵古佛椎頭。白椎にて佛名を唱へるか云ふ、十佛名と云ふて清淨法身盧舍那佛をはじめ、それ〳〵佛の名、これは維那の役、たゞ綱目法令の清規謹嚴なるのみではない、下下椎を鳴す音一つ一つ〳〵、それ〳〵差別智が簡要、著著知法の眼を具すとなり。

㋶興化。興化が克實維那に對する因緣、むかし錯用心すと「ひよいといらざることに苦勞し

ち領取し去らざる。西天の㋕廣額旃陀羅、屠刀を放下して、我れは是れ千佛の一數なりと、可愍だ性燥なり。㋖若し禪僧門下に約せば、猶ほ是れ半提、而も況んや期を立て限を立つ、坐ながら化城を守るをや。㋗麟に張らんと比擬すとも、兎にも亦遇はじ、㋘息耕寥、尋常多くはこれ㋙三句の前兩句の後に向つて、一線地を放つて、諸人の與に手脚を整頓せしむ。若し也た慚を知り愧を識らば九十日の內、㋚老僧を忘却することを得ざれ。」

復た潙山の㋛大安和尙、衆に示す、「㋜有句無句は㋝藤の樹に倚るが如し、」踈山參問する次でといふを擧して、師云く、「㋞矮師叔、當時若し潙山の㋟未だせざる已前に向つて、箇の㋠警脫の處を得ば、㋡聲色を認むるの流の、東に卜してなるに、この虛堂は我慢を云ふたが」と璞長老はいふてゐる。

㋢月明豈。珊瑚は石の上にはえる、月か感じて生ずと云ふ。言ほ興化ほ克賓を接すること「徹困にして用心太だ過ぎたり、人人具足、箇箇圓成、月の明かめること、豈に珊瑚樹に在るのみならんや」と龍淡は註してゐる。

㋣大王。儀州の大王と本錄に見ゆ。

㋤萬福。やれ〳〵ごきげんよう先づあれへ御通りあらせられよと。又來也と道ふと、先刺大王が御出じやと云ふたではないかと。

㋥年老聽事。年がとると、耳はとほく、氣もとほくなるので、ききちがへする。

㋦王令已行。大王來也のとりづき奏者はしたれども、猶在二門外一で、未だ大王に對することは能はずとなり。

㋧後渠。うしろのたなの下。

㋨老僧洗脚。ちやうど老僧がしをあらふところへ出くはした。

㋩作聰勢。れきへよりて、へいときくまれをする、是れ賊々となり。

㋪會即會。合點したならばしたでよい。

㋫唱豚。鳥の啄むやうに、ほぜぐりちらかしてどうするぞ。是れは勘驗の大切なるを云ふ。

㋬便歸方丈。全躰作用、趙州を取りて檢崖より推撥すの機あり、すうと方丈へかへられた、そこで趙州は云ふ、「三十年行脚、東走西奔とてあちこちへめぐりたれど、巴鼻を見せたことはないが、今日錯過レ人解注」と云ふてゐる、これは主客相應の義、互に他を勘ぜ

西に卜することを免れ得ん。今既に漏逗す、千古の下。豈に人なしと曰はんや。」拄杖を卓して、住みね住みね、人を趕つて趕ひ上すことを得ず。」

次の日上堂、「㋭一人あり、日に萬兩の黃金を銷す。此の聖制に同じうすれども、只だ是れ人の認得するなし、若し人ありて認得せば、却つて伊をして、日に萬兩の黃金を銷することを許さん。」

上堂、擧す、㋮五洩初め㋯石頭に參ず、洩云く「一言に㋰相契はゞ即ち住まらん、契はずんば即ち去らん。頭坐に據る、洩便ち行く。頭云く、「闍梨。」洩首を回す、頭云く、「生從り老に至るまで、只だ是れ者箇、頭を回し腦を轉じて、甚麼をか作さん。」洩言下に於て大悟す。師云く、

んとおもふて、他の己を勘ずるを知らなかつたとなり。

㋱擺金者。これは列子の說符篇に、むかし齊人、金をすりとるの故事あり、逐鹿もそのとほり、互に脚下がおるすじやと「心迷ふところあれば此に至る」と龍淡は注してゐる互に西來意一枚になりきつてゐるゆゑに、わきめはふらぬとのこと。

㋲仰山。惠寂禪師、潙山に嗣ぐ、潙は百丈に嗣ぐ。

㋳心識微細。心識は阿梨耶識なり、第八識なり、習氣はぼんなうを云ふ、中下根にあるものなり、意識なり、微細は三細の中の無明藥相なり、流注とは水の流れそゝぐ如く、未だ始よりしばらくも停まらず この話は爲仰宗の骨髓なり。

㋴無來幾年。さつぱりとして、なん年程になるぞ、仰山は敢て答へて、憚り恐れて直には返答せぬ、却つて和尙は無にし來りて何年程になりますかと。

㋵正闇。闇はいそがはしきこと朝から晚までもちやくちやと心識微細の流注だらけじやとしかし「正闇大に工夫あり、尋常の看を作すへらず」と龍溪はいふてゐる。

㋶古人玄獵。潙山、仰山などの謹嚴なる宗師、山の頂、海の底、さがしにさがした上、至極をきはめつくしてゐるが、猶恐二走作一は。なほも大切を踏まるで走作は念の紛飛を云ふ。

㋷孟八郎。「とりしまりのないこと」を云ふのを「まんばらう」と云ふ、ではうだい斗り、孟浪の言などと同じ、只管はくちぐせのやうに。

㋸總是五逆。頓悟死の義、五逆

「㋐稲ね載せて往き、棗を垂れて歸る。」

上堂、擧す、巖頭衆に示す、「大凡そ㋑唱敎は、須らく無欲の中從り三句を流出して、只だ是れ㋒咬去咬住し、㋓去らんと欲して去らず、住せんと欲して住せず、或時は一向に去らず、或時は一向に住せざることを㋔理論すべし。」㋕應菴拈じて云く、「㋖從上の老漢、㋗須らく箇の些子の說話を得べし。」師云く、「巖頭㋘若し一丈を行せば、應菴只だ八尺を行せん、巖頭若し一尺を行せば、應菴只だ二寸を行せん。何が故ぞ、從來㋙把本の修行、敢て因果を棄嫌せず。

とは父を殺し、母を殺し、佛身血を出し、阿羅漢を殺し、和合僧を破る、要は鴻仰の如きも尙ほ此の如し、況んや今の人、工夫著實ならず、空腹高心にして、只管に道ふは頓悟を得べしといふ故に、特に之を戒るなり、大死一番底でなくてはとなり。

㋚夾山。この話はありがたい語なれば、虛堂和尙、之を擧して評するなり。

㋛論此事。此の向上の一大事をいふならば、直須拯救と、物來らば照せと云ふものなり、佛來祖來、きつて三段となす、悟りも途もこなみぢんなるが若不拯救ならば漁家のおやぢが水の上の巢に止つてゐては水の上に住まれば不恰好なりと、若し當頭に直截サずんば、道と相應ぜざるの義なり。

㋜未得與物。夾山は人と中がわるい故に、未だ無爲の化を得ぬゆゑに。

㋝影艸。之流。これは魚が草のかげをばみとめて、その下にあつまり居るを云ふ。あなたこなたへたよりまはる驢を認めて馬と作さしむることを致すで、馬をよらへて鼻をかむやうなことをさせる、人をまどはするなり、龍溪は誤つて「直截を認めて道と作す可ければなり」と注してゐる。

㋞等是。大衆が指す、煩惱に非ず、菩提に非ざる底。

㋟悠悠時節。この結夏は面前露堂々となり、直下便ちこれ平等天眞なり、急に領らく領取すべし、何ぞ便ち領取し去らざるや、ぐつ〳〵してゐるぞ、ひつとりてしまへと。

㋠廣額旃陀羅。これは涅槃經に出てゐる、波羅奈國に廣額と云ふ、旃陀羅は此に屠兒と云

瑞巖寺語錄　終

ふ、日本では穢多非人であるが、屠肉の刀をほりだして、わたくしも佛種はどざりますから、やはり千佛中の一人でござると、大乘門中には善惡邪正のきらひはない、是れはは、なはだ性燥で、てはしかいやつなりと。

㋡衲僧門下。約するば「あてゝみれば」なり、的的相承の處よりみれば、なほこれ牛提で、牛ぶんみて十分でない、而るなましてなや、みなのやうに結夏なりと。三月安居なりと、坐りてゐて化城といふて、諸佛方便國城を化作すると法華の化城喩品にもある、坐禪するも化城なり、之を守るなや、寶所に趣ますてはなるまいと。

㋢比擬張麟。これは虛堂和尙が學者を接する底なり、網を張つて麒麟を獲やうと、比擬は畫りしも、兎すらもえとりえぬ、麟や鳳のやうな衲僧をこしらへやうためでこそあれ、小知見の坊主にもおほはぬと、大事と小事に比したのである。

㋣息耕。息耕は師の別號で、寥は老人の稱。

㋤三句前。言ふは、尋常から多語に渉らず、三句兩句の間に於て箇の一線地を放つて、入路を示してとなり、みなのものをして整頓手脚と、趺坐底の自由を得せしむと。

㋥知慚知愧。自らに恥づるを慚といひ、他に恥づるを愧といふ、自心に恥ぢて惡を輕拒す、「今知二慚愧一」は、法を得るものを云ふと龍溪注に見ゆ、實悟の處。

㋦忘却老僧。吾が開示に依りて得法のものは、この九十日の內、吾が微困を忘るゝなとなり。

㋧大安。百丈に嗣ぐ、懶安と號す。

㋨有句無句。有と云ふも無と云ふもとなり。

㋩如藤倚樹。彼此無心、どこからどこまではびこる如くなる義なり。

㋪矮師叔。疎山和尙はせがひくうて時の人「ちびをしやう」と呼ぶ。

㋫未圓已前。潙山和尙が未だ氣息を出さざるまへにと云ふ義なり。未說已前なり。

㋬脫處。目をちらりとすることを云ふ、頓脫と一般なり、はつきり悟られたところを得たならばなり。

㋭認犀色之流。色を見、犀を求むやうな庸流、すなはち文字言語を認むるやうな。手あひは東に卜し西に卜して、推量ばかり、有句じやの無句じやのと云ふことは得たであらう。

㋮今既漏逗。今と虛堂和尙がもはや漏逗した、此の本則の意をもらした、千古の下で像季のすゑの今でも、豈曰レ無レ人で、舜何人ぞ、我れ何人ぞやだ、住住と。よせよせと、拄杖を。ぽんとついて、趕レ人とは疎山和尙をは趕ひ上すことを得す、あまりきつうせめるなとなり。

㋯有一人。那一人ありで、眞の出見、面前露堂々と、明眼の人なら

ば日館に萬兩黃金一ともとなり、同ニ此聖制で如來の立制ゆゑ聖制といふ、みなが禁足安足して居ても、諸人が皮夏を認得せらるゝことなしと、もし認得しくれるならば、虛堂和尙から許してやらう、認得した人にじや。

㋐五洩。名は靈默、馬祖に嗣ぐ。

㋑石鞏。名は希遷、靑原に嗣ぐ。

㋒相契。一言の下におさとりができましたならば。おりますが、さとれなんだならば。外へまゐります、我がまゝ千萬なやつなり。石頭は坐位になほられる、洩は便ち行く、さらばおいとまするとて、石頭云く、闍梨、おいぼうさまと、洩、へいとあたまをさげる、石頭は生れるから死ぬるまで、只だ是れなり、その通り頭をさげたり、腦天をまはしたりと、なにをするのじやと、こゝで五洩はいかにもと大悟なした。

㋓稻載而往。これ管子にもとづく語なり、籠頭角馱と同じ、大ばん袋一ぱい背負つてもち來つて、からつぽのかぶくろにしてかへると云ふやうな譯になる、五洩が從前の所得底を脫して契悟するにたとふ稻は五洩、袋はそこなきふくろ、日がそこでしめくくるふくろなり。

㋔唱教。唱導教示で、爲人說法は無所得の心で、無欲の中よりこれが法の根源なりと維摩經の觀衆生品に、「從無住本位一切法」とある。

㋕咬去咬住。咬去は放行なり、咬住は把住なり、截流の機を奮つて、倒退三千とも隨波逐浪衆流截斷と云も同じこれは下根の人を接するなり。

㋖欲去不去。家舍をはなれて途中に在らず、中根の人を接す、上は放行の中に把住あり、下は把住の中に放行あり。

㋗一向不去。上上の根機を接するなり。

㋘理論。方便門より弘く一切を度するなり。

㋙應菴。名は曇華、虎丘に嗣ぐ。

㋚從上老漢。岩頭ばかりではない、佛祖とても同じことだ。

㋛須箇些子。委悉を要するの義、些子は三句を云ふ。

㋜若行一丈。「巖頭は放行なり、應菴は把住なり、優劣の處に於て强ひて優劣を辨す」と龍溪の注に見ゆ、一丈は放行、八尺は把住、一尺は放行二寸は把住。

㋝把本修行。本法を把りて修行す、超越ぜざるの義、巖頭の示衆の如きは、吾が宗の本法のみ、若し之に據らば、豈に豁達の空の因果を業鑑するが如くならんや。中峯山房夜話の中に、古人謂く、「持戒學道是れ把本の修行」と、應菴は因果を恐るるの人なるが故こ、切りに放行せず、眉毛を借取す。

慶元府萬松山㋐延福禪寺語錄

侍者㋑德溢編

師、㋒啓霞に在つて㋓請を受けて、衆を辭する上堂、拄杖を拈じて云く、「㋔此の事は通人分上に在つて、言を以て言ふべからず、跡を以て跡はすべからず、設使へ㋕言跡雙泯するも、猶は斷常の見に落つ。㋖而も況んや朝遊夕處、賓主歷然、㋗鳧知鶴長、彼此有ることを知るをや。㋘萬松孤頂の雲と作ると雖も、終に霞峯の老人石を憶はん。㋙風に臨む一曲別に希聲あり、㋚水遠く山長し。如何が指を按せんといふて。」㋛拄杖を卓す。復た擧す、㋜長慶、㋝衆に示す、「㋞道伴に撞著

㋐延福。行狀に、「侍郎黃公、堅請して之を主らしむ」とあり。

㋑慮溢。斷雲と號す、育王に在りて都寺と爲る、不幸短命なり。

㋒啓霞。山號なり、寺を華嚴といふ、見そこに二三年居る、出世を杜絕して單に大器を接す、瑞岩を辭してこゝに居るなり、只だこの上堂丼に偈のみあり、故に延福錄に入る。

㋓受請辭衆。延福の請を受けて啓霞の衆を辭す。

㋔此事通人。この一大事の因緣は、通方の作者分上に在りては、不レ可ニ以レ言言一で、毘耶、口を杜ぢ、不レ可ニ以レ跡跡一で、摩竭掩レ室じや、この語は藥論中より出でしなり。

㋕言跡雙泯。大事をきはめるとき、なほ斷常の見に落つ疊へえず外道斷常の見に落つるとなり、未だ二邊の內を免れず。

㋖而況朝遊。ましてや、朝遊夕處で、啓霞に在りては、しばらくであつた、實は大衆、主は虛堂が歷然で、全機處に隨つて彰はると。

㋗鳧知鶴長。この句は興聖錄に見ゆ、長あり短ありで、彼此知ありで、頭々顯露、物々全眞なり、、彼は實此は玉なり。

㋘萬松孤頂。この虛堂は萬松の住持となるけれども、終に翳

して肩を交へて過ぎば、一生㋓參學の事畢んぬ、㋔也た是れ㋕靈龜尾を曳く。山僧㋖芝峰を退いてより、跡を茲に託して、㋗三び寒暑を歷、又㋘他の古人に勝れるもの多し矣。㋙今海山を過ぐ、攀感なかるべけんや、一偈を綴り成して以て㋚分違を表す。㋛

斂二影窮原一懶レ出レ扃　曉雲如レ送又
如レ迎　因思執レ手經行處　幾聽沙泉
遶レ磵鳴

師、㋜入寺上堂、祝、聖畢つて座に就く。僧問ふ、「㋝聲前の一句常機に隨せず、㋞位を轉じて功に就く、㋟如何が相見せん。」師云く、「㋠問訊して手を出さず。」僧云く、「㋡且く道へ、天子萬年作麼生。」師云く、「㋢瑞草嘉運を生じ、林花早春を結ぶ。」云く、「直に得たり㋣九州四海、

處雜忘で、霞峯老人石、啓霞の境致にあゝ老人石を愷はんで、此の地に退藏して休歇無事なり、落草なき故に。

㋕龜尾。方語、拂レ跡々生、しりつぼがみえたと。

㋖芝峰。瑞岩なり、鼓は啓霞。

㋗三歷寒暑。この啓霞に退居すること三年、その間に頌古代別を作られた。

㋘他古人。古人は長慶にすぐれたところが、今啓霞は道伴多きを以ての故に、たくさんござると。

㋙今過海山。海山とは霞嶼は湖中に在る故に、海山こえて、攀感は攀仰感傷で、嗚呼なごりをしいとなり。

㋚分違。分は別違、離なり、偈を作りて別離の情を表す。

㋛斂影窮原。窮原は僻陬の地に人をさす、扃を交へて過ぎばは、啓霞の大衆への挨拶なり。

㋜參學事畢。參禪の大事はざつぱりしまひなり。

雷動き風馳することを。」師云く、「㋝門を出でては惟だ恐る先づ到らざることを師云く、「如何なるか是れ延福の境。」師云く、「㋞天の高きも蓋ひ盡さず。」僧云く、「如何なるか是れ境中の人。」師云く、「㋟月中峰に到れども未だ歸らず。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「㋠迦葉門前、箇箇踏著。之を問へば則便ち道ふ知らずと、㋡老胡帶び來つて人人有ることを知る、㋢之を叩けば則便ち道ふ會せずと。衲僧家㋣刺蝟子の如し、儞が近傍の處なし、甚に因つてか㋤鐘聲を聞いて、各七條を披す。與麼に會し去らば、㋥純ら無爲の化を樂み太古の風を追回して便ち見ん、田を耕し井を鑿つて、曉に作き夕に息ふて、自然に敢て時に違ひ、候を失せざることを。然も是の如くなりと

靜退すべきの處なり、出世を好まず、扃（どほそ）を出づるにものういとなり。

㋝聲前。世人と相交らぬを表す、無心の嶺の雲も、なごり心でみれば、袖ひきとめるやうにも、手をとりて迎ふるやうにもみえる。

㋞位轉。別後延福に在りて思ひ出すと、かなたの山やこなたの水のあたりを、道伴と手をひきあふて經行（うんどう）したところはと。

㋟未歸。これは無心の道友の交情を述べてある、なん度もつれ〴〵にきいていた、ちんつん〳〵、沙泉はすな川の谷をぐる〳〵まはつてながれてゐる音を思ひ出せば、泣き出したくなる、田立でなり耳についてゐるから行くのもいやになると。

㋠迦葉。入寺。延福寺へなり、師六

十歳の時なり。

㋡聲前。聲前の一句は向上の妙旨、千聖不傳底なり、擧か敢て常機則ち常流の分別計で較に墮せんやとなり。

㋢轉位。就功。これは入院の垂手なれば、本分の正位轉じて、第二義門の功勳邊に下り就いてと。

㋣如何相見。正位の中に賓主なきが故に、世諦と如何が交渉してとなり、是れは洞上の宗旨でよく云ふところなり。

㋤問訊出手。手を出さずしては簡慢の義なり、領らく合掌して問訊すべきが故に、非常の禮數を以て本分の相見を表す無禮の義なり。

㋥且道天子。そりや、まあそれでよい、祝聖の一句承りたい。

㋦瑞草嘉運。靈芝ひじりたち、嘉祥運氣を生ずで、林花結早春とは萬木も春めきわたる、

雖も、畢竟何を以てか驗と爲ん。」拂子を擊つて、「㋐九皐鶴舞ふ威音の外、㋑三島花敷く大塊の初。」

㋒復た擧す、㋓孝宗皇帝、㋔佛照禪師に問ふ、「世尊雪山六年、成す所の者何事ぞ。」佛照奏して云く、「㋕將に謂へり、陛下忘却すと。」師云く「君臣の慶會、日のごとく照し、天のごとく臨む。㋖造化の元樞を斡旋し、㋗風雷の大用を奮發す。然も是の如くなりと雖も、還つて㋘太平象なきことを知る麼。」

當晚小參、僧問ふ、「安居禁足、西天令嚴なり、和尙甚としてか㋙明かに知つて故に犯す。」師云く、「㋚樵子の徑に因らずんば、㋛爭か葛洪が家に到らん。」僧云く、「㋜文殊三處に夏を度る、未だ衆疑を決せず、和尙㋝霞峯より來る、㋞

いはゆる和氣、春の如し。

㋟九州四海。世界國土は聖德化その遠なること、雷動は遠に德化のゆきわたるを云ふ。

㋠出門惟恐。出格のものでなくば、かなはぬを云ふなり、來朝するものは、その國門を出づるに、人に後れて德化に赴くの遲きを恐るゝと。

㋡天高蒼盡。本分の境を示す。

㋢月到中峯。半夜の謂なり、蓋は月の西に入るを云ふ、「奪人底の語なり」と或る抄に見ゆ。「この虛堂の三句の答話は東山下の暗號令あり」と珠長老ほいへり。

㋣迦葉門。千聖不傳底、向上の一路なり、迦葉の金襴傳衣せられし外に、この何なか傳ふ、阿難の問ひしに迦葉は門前の刹竿を倒斜せよと、我慢の幢を立て、言中に錄を藏すかやめよとの因緣を云ふ、箇々は一々、悟つても悟らいでもなり、之を問へばと、他の愚を問へばとなり。

㋤老胡帶來。達磨が西來してから、各々不傳の妙道あることを知るとなり。

㋥叩之則便。問ふてみれば、しらぬと云ふ、人々具足なり、何の知らぬことがあるとなり。

㋦如剌蝟子。げはりねずみなり近くよるとちくりとさす、納僧家、向上か手に入れたるものならば、上件の迦葉門前や老胡帶來を知つた人ならば、けばりねずみみたやうに、うつかりと傍へはよれぬ。

㋧開鐘擊。雲門の云はれし午齋の鐘を聞けば、各々七條の袈裟を披す、この話は親しらず子しらずと云ふほどの難關なり、與慶に會去とはかくの如くに會したならばなり。

㋨純樂無爲。さつぱり外ごとは

群心鵠望す、還つて文殊と相去ること多少ぞ。」師云く、「㋩好事忽忙に在らず。」僧云く、「大善知識、㋪豈に方便なからんや。」師云く、「㋫老僧が罪過、僧禮拜す、師云く、「㋬我れを謾ずることは即ち得たり。」

乃ち云く、「㋭大家者裏に在つて、誰か敢て㋮個諸人を謾せん、若し各々㋯頭を道はゞ尾を知つて、人我の擔子を去却せば、自然に㋰長者は長法身、短者は短法身ならん、㋱目連鶖子も個が眼を著くる處無からん。山僧尋常、曾て人の與に㋲註脚を下さず、個若し㋳山を隔てゝ煙を見て、便ち是れ火なることを知る處に向つて會し去らば、又爭か得ん。㋴今夜已に展ぶるをば縮めず、未だ免れず㋵東に拏ひ西に撮ることを一上子して、且く㋶死馬醫と作すことを。」

ない、拈花微笑、單傳心印なと、無爲鼓腹壤擊の歌なして、太古の風を追回し、達磨や迦葉のむかしの門風を思ひやられる、堯舜の御代にもかばらぬめでたい、耕田鑿井はこれも世間事でいへば、みな帝の恩力で、何ぞ我にあらんやとなり、本分の田地を耕し、法性やすむと、自然にまあ時にも候にもたがはぬやうになる、天下の豐げさ知るべしである。

㋷九皐鶴舞。やれ目出度いや、鶴は九皐として九折つゞらなりにないて、佛の出世已前でも、威音王則ち空王佛已前もとなり。

㋸三島花敷。三島は海上の三神山なり、蓬萊、方丈瀛洲なと云ふ、天地未分已前より、春のまつたゞ中に此の花は開いてゐるぞで、大塊は天地の初め大古の無爲無事又は虛界なと云ふ、この話、始は宗綱なと提げ、與慶より下は國家なと觀す。

㋹復擧。この話は與慶錄にもあり。

㋺孝宗。南宋の第二主なり。

㋻佛照禪師。德光、大惠杲に嗣ぐ、育王靈隱等に住す、この話は師靈隱に住するの日、帝詔して道を問ひ、留めて內觀堂に宿せしむ。

㋼將謂陛下。如來會上、我が法は國王大臣に付すと說かせられた、今ま帝には忘却すべしと、還つて記得してめされると。

㋽斡旋造化。萬物を造り出す、即ち自性の妙用、元樞は根元、樞は本なり、斡旋は帝の問に御ほれなり申すこと、八識なと轉じて三身四智と成す底なり。

㋾風雷之大用。風は順なり、雷は逆なり、大機大用なと奮發す、

㋐復た擧す、㋑雪竇、衆に示す、「㋒龍泉と刀斧と同じく鐵にして、利鈍懸に殊なり、㋓駑駘と驥馬と同途にして、遲速異なることあり。酌然酌然、㋔一出一入、半合半開、㋕平展の流、試に緇素を辨せよ。」師云く、「㋖明覺は一代の龍門なり、只だ是れ取捨の心未だ泯せず、山僧は、㋗毛凡道等なれども、一目して之に歸す。何が故ぞ、㋘切。」

上堂、擧す、潙山、仰山に問ふ、「大地の衆生、㋙業識忙忙として本の據るべきなし、子作麼生か他の㋚有と無とを知得せん、」仰云く、「㋛某甲箇の驗處あり。」時に僧あり、面前より過ぐ、仰召して云く、「闍梨。」僧首を回す、仰云く、「者箇便ち是れ業識、忙忙として本の據るべきなし。」師云く、「仰山㋜知人の鑑あり、只だ是れ用處照の答み云ふ、互に佛事を成就す、無爲の大化み助くる故に。

㋝太平無象。德化自然に行はるゝ故に、底意は雪山の事、本分の處なり。

㋞明知故犯。西天印度の佛制で夏中令制が嚴重で、禁足するなり、虛堂和尙玆に知る、夏破りて來つて入寺せらる故にことさらに犯すと云へり。

㋟不因檀子標。これは問はずんば知らずの義、向上の一路を槌すにたとへる、犯も不犯もその境界に至らざれば知らぬ

㋠爭葛洪家。虛堂自らに比す、葛洪は仙人、どうして仙人のすみかへこられるものか。

㋡文殊三處。この話は與聖錄に見ゆ。

㋢來自霞峯。啓霞より延福に來る。

㋣羣心鵠望。僧俗男女、貴賤老少、悅ばしく思ひくびをのばしてまつてゐた、文殊は衆決、虛堂は鵠望。

㋤好事忽忙。好事をときかせうにも忙しき時はならぬ、住持事繁の故に、よくゆる〳〵思案せれば云へぬものじやと

㋥豈無方便。まさか第二義門に下つて、何ぞ方便あらう。

㋦老僧罪過。夏中にあちこちしたのは、われ方便なし、もとより罪過なりと。

㋧謾我即得。道箇の禮拜、これ却つて我を謾すとなり、こしやく千萬な佛法は未在なるほどに不會不會なりと。

㋨大家。一會の大家れき〳〵。

㋩謾個諸人。人天交接の故に。

㋪道頭知尾。衆利の義、回也、一を聞いて以て十を知るが如しのゐゐなり、未レ擧已前に擧一明三、目機錄兩なり、去三却人我擔子一で、人我と云ふ

おもにをおろしてしまへば差別の異見なばなりと。

㋫長者長法身。一物一太極なり。形質は長短ありとも、法身を成するに至るまでは、即ち平等なり。短者短法身で、やつぱりかはらぬ、佛の全身なり。

㋬目連驚子。目連は神通、驚子は舍利弗の譯名。智惠。この二つがそちらでも、無傳著眼處で、法身ともいかゞとも、手もつけやうはないと。

㋭註脚。うんだとも、つぶれたとも。

㋮山見蝗。隔てゝは山どしに、頓機伶利底なり。あゝ法身は無形無相なり、などと思ふて、是れ火なることみ知るとも、會し去りてもまた爭か得んとなり。虛堂和尙の妙處はこゝなりと。

㋯今夜已展。展は放行縮は把住、今入寺したからにほ。

㋰東祭西撮。おつちへひこじり、こつちへひきじりで、所謂かけづりまはる、第二義門に下りて、東語西話一上子は一回すればとなり。

㋱作死馬醫。或抄に「荒療治の義」と既に是れ死馬なり。「無用處なるが、化度門に下りて向下に入るを云ふ」と龍溪の註に死は廢辱の謂、死郎雷等の例の如し、馬醫と賤術なり。宗師家は衆生之病を療するに依つて、自ら謙して死馬醫と稱す、殊長老は乃ちこれ上にある人我の擔子み去却するの語を指すなりと云ふ。

㋲復擧。この示衆は雲門宗の宗旨一。

㋳雪竇。名は重顯、明覺大師と賜ふ。

㋴龍泉。鐵鏌三枚の內なり、狀、高山に登り、深淵に臨むが如しと云ふ名劍なり。刀斧はなただのまさかりだの、普通のきれものを云ふ、同じく鐵でここへたものなるが、龍泉は利で、吹毛刀斧は鈍、ばた〳〵してもきれぬ、大分そこにだんがある。

㋵駑駘與驥馬。駑はせんだれで、驥は千里のはやごま、一途にかけだして遲速に異なりて。無差別の中に差別あることみ證據だてて、酌然ここは是非分明であると、酌は灼に作るが正當なり。誤りてあるとなり。

㋶一出一入。出は放行、入は把收、合は把收、開は放行、皆差別の義を明すなり。

㋷平展之流。平常展演で、無事の見をなすの漢、子細に是非を知らざる底を云ふ、試緇素とは緇素は黑白の意味にて、善惡邪正み辨別せよとなり、これ實に納僧が寿命の神符なり。

㋸明覺一代。雪竇和尙は道眼一時に挺拔するの意なり、龍門は活脫自在の儀表なり、只是取捨の心未泯とは取捨は是非の義、鈍を捨て利を取り、遲を捨て速を取るの心がうせぬと。

㋹毛凡道等。この虛堂老僧は、毛道梵

には婆娑と云ふ、行心不定なほ輕毛の風に隨つて東西するが如き云ふと、凡夫な毛渣と云ふ、これはきつい御謹退、ふけばとぶやうなものと云ふ、上の一代の熊門に對して、しかゝはれしなり、一目而歸之とは入寺の始め即今一見して此の延細に歸す。更になんの緇素得失をか辨ぜん、ちよと見れば、なる程と合點すると一致の處をいふ。

㋓切。なぜならば、切は急なり、間に髮と容れず、況んや餘心をや、この一字は慈明の傳にも、楊大年問ふ、「如何なるか是れ土塵爲人の一句」、師曰く、「切」とあり。

㋔業識忙忙。このわれ〳〵凡夫衆生は、無始よりこのかた、業識と云ふて、見聞覺知、うか〳〵と六道輪廻して、忙々いつもいら〳〵迫むも退くも、本の據るべきなしで取りつきやうがない。地獄へ行くやう畜生へゆくやう、さあ無念無住が本になつてゐるとなり。

㋕有之與無。なんとらちがあけるとなり、他は現前の衆を云ふ、有と無とは業識を云ふ。

㋖有菌論處。や、よろしい、子細はこのむねにあると出た、人をしるの識おりとなり。

㋗知人之識。邪正善惡を知るの明鑑はあるが、たゞこれ用處太過ぎたり、あまり用ひやうがひどがつた、太だ過きたりで、者箇便ちこれ業識忙忙の句をさす。

㋘我稽首。山僧ならばさうでない、稽首ぜずに、頭を地につけて禮儀みつくしてやる、析牛裂とは一はぼろぎれのこと、つゞれ、二つにひつさけて三つにひつさけてと云ふこと、襟を捉へると肘がでる。今勸せざるに自ら破する窓を取る。

㋙護鵝。昔身命を惜まず、鵝をかばひし戒律僧の故事あり、雪の如しと持戒の潔白をたとへる。

㋚守臘之行。報恩解夏、小參に見ゆ法歳長幼行業染淨。

㋛田單火牛。田單は齊の國の諸屬、（うときたぐひ）なり、これは護鵝守臘の二行を兼修するはみなりと。

㋜三吳百越。會稽を吳郡となす、すなはち吳興丹陽とて、二吳となす百越は南蠻の總名なり、みな無碍自在を云ふなり。

㋝正恐坐在。遊戲自在の窠窟に坐在するを恐るるとなり。

㋞有箇道處。上の二途を離るるを云ふ。諸人は大衆たち、道處は云ひぶんがあるとなり、しかし大衆たちはがてんゆくまいぞと。

㋟茱萸。鄂州の茱萸和尙は南泉願に關ぐ、趙州は昆弟なり。

㋠作甚麼。やれ、ことありげに、なにをめさると。

㋡探水。清水薄海ば深いか淺いか、枝を以てさぐつた。

㋢一滴也無。わきに行いてさぐれ

太だ過ぎたり。山僧は則ち然らず、他頭を回さば㋣我れ稽首せん。半を析き三を裂いて、襟を捉れば肘を見はす。

解制上堂、㋤護鵝の戒は雪の如く、㋥守臘の行は冰の若きも、也た是れ㋦田單が火牛なり。衲僧家、朝には㋧三吳暮には百越なるも、㋨正に恐る者裡に坐在することを。萬松㋩箇の道處あり、只だ是れ諸人未だ肯て點頭せず。」

上堂、舉す、趙州㋪茱萸を訪ふて、「法堂に上つて東に覷西に覷る。」萸云く、「㋫甚麼をか作す。」州云く、「㋬水を探る。」萸云く、「我が者裡㋭一滴も也た無し、この甚麼をか探る。」州杜杖を以て壁に靠けて出づ。師云く、「㋮盡く道ふ、一滴も也た無しといふて、㋯滔天の浪を鼓起すと、殊に知らず、㋰趙州平白に㋱一條の杖子を失却〳〵、已に塗漏を絶するなりと。

㋲盡道。世界國土、みた〳〵いふてゐる。

㋳滔天之浪。大つなみをうたせたとなり、世間只だ把住の處即ちこれ放行なることを論ずるのみ。

㋴趙州平白。平白は「ひろひなか」、道忠曰く、明白の義、きつぱりとの義、なぜか趙州和尙はこう云ふた。

㋵一條杖子。ひたすら、他を驗みんことを要して、自ら失ふことを覺えず。

㋶監收。米麥を收納するを取り立つる役なり。

㋷千鈞大器。梵鐘を云ふ、千鈞は三千鈞のことを云ふ、萬鈞とも云ふ、十六兩を一斤と云ふ、三十斤を一銖と云ふ。

㋸已自陞樓。鐘を挂くるを云ふ時節いたればなり。

㋹萬斛。瓊球。米を云ふ、瓊球は米粒をさして云ふ、途方もない諸侯の知行ほど。

㋺屬。くらなり、是れは監收を謝する語なり。

㋻捧鉢昇堂。鐘を聞いて僧堂に上る。

㋼開單辰鉢。雲板がなると自分の單を出て、持鉢を展ぶる、これも監收を謝す。

㋽是少林客。これは顯難辛苦を云ふ、監收の役に比す、此の甚深の恩力識者にあらずんば以て話しがたし、少林の門下のものでなければ、雪庭は二祖斷臂の辛苦を話すことはならぬとなり。

㋾法身還。說法。「佛は法を以て身と爲す、清淨なること虛空の如し」と、華嚴經の六にあり、みな法身の說法の故にききてがない、天親菩薩の偈に、「報化は眞佛に非ず、亦說

することを。

新鐘を挂けて ㋓監收を謝する上堂、「㋔千鈞の大器、㋕已に自ら樓に陞り、㋖萬斛の璣珠、已に自ら㋗廩に入る。衲僧家、㋘腹を捧へて堂に昇り、㋙單を開いて鉢を展ぶ。且く道へ、誰が恩力を承く、柱杖を卓して、㋚是れ少林の客にあらずんば、雪庭を話するに難爲ならん。」

上堂、㋛舉す、仰山因に僧問ふ、「㋜法身還つて說法を解すや也た無や。」仰云く、「㋝我れ說くこと得ず、㋞別に一人の說き得るあり。」僧云く、「說き得る底の人、甚の處にか在る。」仰山㋟枕子を推し出す、潙山聞いて乃ち云く、㋠寂子㋡劒刃上の事を用ふ。」師云く、「潙仰の一宗を、㋢滅却することは、㋣只だ此の語に因る。」

上堂、㋤舉す、趙州、僧に問ふ、「曾て此間に到る

法者にあらず。」

㋝我殺不得。合點して居るとも居らぬとも云ふ事はならぬ。

㋞別有一人。別にわけ子細を云ぶ人がある。

㋟推出枕子。或る抄に「此の法身に說法させた、」枕子の製法寄歸傳に委し、略レ之。

㋠寂子。仰山の名は惠寂。

㋡劒刃上事。近傍し難き處、知見解會を截斷する、生死の根元をきるところの劒を用ふ。

㋢滅却。潙仰宗は三世にして斷絕した、即今盛りと思ふていはれたが、但しは滅却と思ふて、虛堂が云ふたが面目坊にきけ。

㋣只此語。劒刃上の古事を用ふ故に抑揚なきの機なし、太だ淳倒の故に此の例あり。

㋤喫茶去。お茶まゐれ。

㋥一處打者。茶をふるまひ得たりうちおぼせた活人じや

㋦一處不打者。うちはづした殺人なり、趙州は一等に道ふ、今師特に分明す。

㋧不招茶。お茶をのめとも云はぬ。

㋨不相問。曾て到るか到らぬかともいはぬ。

㋩賢聖法來。佛弟子となつてよりこのかた。

㋪未曾殺生。「逢レ佛殺レ佛逢レ祖殺レ祖」の手段は趙州の手段なり、上の句とこの句とは、鷲殫摩羅經及び增一阿含經三十一に出づる語なり、「我れ人をして疑殺せしめざるなり」と龍溪は抄してゐるが、「十重禁を會得した人でなくば、なんとも沙汰は出來まい」と珠長老はゞふてゐる。

㋫僧。守廓侍者なり、興化に嗣ぐ、此の緣會元十一に出づ。

㋬從上諸聖。釋迦、達磨より歷代の祖師、向三世諸處一去る

處。」僧云く、「曾て到る。」州云く、「㋭喫茶去。」又僧に問ふ、「曾て到る處。」僧云く、「曾て到らず。」州云く、「喫茶去。」師云く、「趙州㋮一處ぼ打著、㋯一處は打不著、萬松僧を見ば亦㋰招茶せじ、亦㋱相問はじ。何が故ぞ。㋲賢聖の法に從つて自り來、㋳未だ嘗て殺生せず。」

上堂、舉す、德山因に㋴僧問ふ、「㋵從上の諸聖甚麼の處に向つてか去る。」山云く、「作麼作麼。」僧云く、㋶飛龍馬を勅點すれば、㋷跛鼈出頭し來る。」山休し去る。來日山浴する次で、僧茶を過す。山、僧の背を拊つて云く、「昨日の公案作麼生」、僧云く、「者の老漢、今日方に始めて㋸瞥地なり。」山又休し去る。㋹明覺拈じて云く、德山は㋺己を以て人に方ぶ、者の僧還つて同じく屈を受く。師云く、「盡く謂ふ㋻恒山の蛇、之に

と、天堂へいつたか、地獄へいつたか、山は作麼〳〵、どうかなあ〳〵。

㋷飛龍馬。德山の作麼の機鋒を奪つたところ、馬は凡そ八尺以上を龍馬と云ふ。天子が馬を召すを勅點すといふ。

㋷跛鼈出頭。あしなへで、へたへたとした。

㋸瞥地。ちらりと、この老漢、今日ははじめてやうやう氣がついたとなり、山又休去とばなかなか手にあはぬ。

㋺明覺。雪竇なり。

㋻以己方人。これは論語の憲問篇の語をとりもちふ。それ相應に應接せねばならぬに、鑑察がとゞかぬ。還同受屈とは屈は苦屈とて、辱を受くと、ほねをりぞんのくたびれまうけなり、德山は己を以て人に方ぶ、早く休して再勸せず、故にこの僧氣を出す處なくして、同じく屈を受くるなり。

㋻恒山。北嶽なり、常山とも云ふ、孫子に此の語出づ、德山と僧との出合せ。すさまじい、よりつかるるものでない、この首尾俱應すとは、主客相應の義なり。

㋼一得一失。東をふめば西があがる。

㋽傍不甘。傍には虛堂が承知はいたさぬぞと。

㋾遠在。兩處休去の機を扶起す要見は雪竇の見處では、まだ〳〵及ばぬとなり。

㋿處々　京も田舍も、燈籠をつるしてゐる。

㌀享上帝。上帝は太乙星、享は祭るなり。

㌁請　おまねくもらさず、しやうだいしてと。

㌂四聖。聲聞、緣覺、佛、菩薩なり。

㌃六凡。六道の衆生。

觸るゝときは則ち首尾俱に應ずと、殊に知らず㊁一得一失なることを。雪竇是は則ち是、㋐傍に甘はざるあり。德山を見んと要せば、㋑遠きこと在り。」

元霄上堂、「今夜㋒處處、燈を燒いて以て㋓上帝を享す、萬松例に隨つて也た一椀を燒いて、㋔普く㋕四聖㋖六凡を請じて、同じく此の㋗影子裏に入れて、㋘叩出頭沒せしむ。設し入らざる底あらば、德山の杖子を拈起して、㋙劈脊に便ち打たん。何が故ぞ。㋚過去燈明佛、本光瑞如此。」

佛槃涅上堂、「㋛今日は則ち有、明日は則ち無、釋迦老子㋜一生賣峭す。死に臨んで㋝自ら敗闕を納れて、後代の兒孫をして、㋞箇箇鍛を以て目と爲さしむることを致す。萬松㋟丈人、屋上の烏、之が與に救はん看よ。」拄杖を拈起して㋠吹一吹す。

上堂、「㋡破家散宅、㋢祖を毀り宗を滅す、㋣條絲を挂けず獨り㋤象外に超ゆ。此の人只だ㋥接手の句を會得して、㋦未だ透關の眼を具せず若し能く㋧面を洗つて鼻を摸著し、茶を啜つて㋨胷を濕却せば、倆に許す是れ㋩半箇の衲僧なることを、未だ全く鉢盂を展べて、飯を喫すべからず。」

上堂、「㋪一線道を放つときは、㋫四方八面遮欄を絕す、一毛頭を收むるときは、㋬無邊刹海㋭煙塵起る。㋮收めず放たざるときは、萬松㋯口磉盤に似たり、是れ汝諸人、也た須らく㋰救取すべし。

上堂、舉す、㋱白雲の端和尙、衆に示す、「古人

㋐頭出頭沒。ねたり起きたり。
㋑劈脊便打。急に打つを云ふ、肩よりせなかへせばねがぶちくだくるほどぶちてやらうにと。
㋒過去燈明佛。これは法華の序品にある語なり。過去の故に之を用ふ。人々自己燈影あり何ぞ入らずと言ふことを得ん本光瑞如此、いつもかはらぬ那一椀の燈。
㋓今日則有。この語は涅槃經後分上の意にとる、この續輯に詳かなり。
㋔一生賣峭。峭は高峻なり、言ろは一生自ら高尙にして貴價を求むとなり。高賣りをせられた。三賢四果も目も及ばぬ人天八萬、ふんでも見ることならぬ。
㋕自納敗闕。今日は有、明日は無と。
㋖箇々以鍛。箇々とは自己の天眞佛を知らず、外に向つて有相の佛を求む、鍛は鍛に作るべし、自己の分なきを以て、個個歸依佛の故に。
㋗影子裏。燈籠の光明の內へなり。
㋘丈人屋上。丈人は釋迦を、鳥は虛堂を指す、蓋し佛家に依止する故なり。杜詩に「丈人屋上烏。人好烏亦好」と、之が與めには佛が其の敗闕を救はれる。
㋙吹一吹。氣を出すこと急なるを吹と云ふ、緩なるを噓と云ふ、ふつ〳〵これで救はれたかどうかしれぬ。
㋚破家散宅。淨躶々赤洒々の境界なり。
㋛返祖滅宗。四七二三、らりこつぱい。
㋜條絲。寸條寸絲なり。
㋝超象外。萬物の外へ立ちて乾坤只だ一人。

㋞接手句。本分の手引をする意如上の見處、只だ人を接することを會す、接手は和讃の「あひて」なり。
㋟未透關眼。なほ自らの大悟を缺くとなり、自己分上の眼をもたぬ。
㋠洗面云云。この二句は皆自得を表す、よく見徹したならば東山下の晴號令はしれやうぞ。
㋡半箇衲僧。まだ〳〵半人前の坊主なりと。未全展鉢盂喫飯とはまだ〳〵、禪宗の飯はくわせぬ。
㋢放一線道。緣起法界、則ち放行なり。
㋣四方八面。諸佛淨土なり、遮欄は闕に作るべし、遮きるなり放處に收ありと。
㋤無邊刹海。緣起無性、則ち把住なり。
㋥煙塵起。收處に放ありと。
㋦不收不放。二途の外に超出す
㋧口似磉盤。磉はいしづゑ、盤は礎を承くる石なり。不動の義を取る、おれが口はにつこりとせないとの義なり。
㋨胷。不收不放の處を會得せよとなり。
㋩白雲端。楊岐會に闖ぐ。
㋪一言半句。無一物なり、無字なり、柏樹子なりと、なにの爲めぞ、知見生死の根を切りとり、大解脫の梯となさしむ留下は垂示と同じ。
㋫撞著磯壁。離透離解なり。血眼になつて、ゆすつて見ても行くものでない。
㋬使是磯壁。自らに由つて他に由らざること、是れ什麼ぞ、これなんぞ〳〵。
㋭依文解義。これはていねいに磯壁を解釋するを云ふ「文に隨つて義を取るは、三世の諸佛の怨なり、速に我が法を滅す」と像法決疑經にあり。

の留下する㋓一言半句、未だ透らざる時は、㋒鐵壁に撞著するに相似たり。忽然として一日透り去らば、方に知る自己㋔便ち是れ鐵壁なることを。且く道へ、如今作麼生か透らん。」乃ち云ふ、「鐵壁鐵壁。」師云く、「白雲人の會せざらんことを恐れて、只管㋕文に依つて義を解す。衲僧家、㋖萬象を目前に融し、㋗虛空を掌上に搏るも、猶は是れ㋘轉句、況んや㋙那邊の事を耶。」上堂、舉す、臨濟、衆に示す、「我れ㋚先師の會中に於て、佛法の大意を問うて、三度打たる、㋛蒿枝の拂ふが如し、如今㋜一頓を得んことを思ふ。誰か爲に手を下さん。」時に僧あり、出でゝ云く、「㋝某甲手を下さん。」濟捧を拈ず、僧㋞接せんと擬す、濟便ち打す。師云ふ、「者の僧其の實は只だ臨濟を㋟見盡さんことを要す。」

㋒萬象目前　無礙解脫、萬物萬象を一つに融合するはと、

㋗虛空掌上。神通自在なり、大活現成の境界なり、搏は「まろめる」なり。

㋘轉句。轉身の轉、ゑいやつと法身分際なり。造作にわたるの義物に轉ぜらるゝの義なり

㋙那邊事。向上全提を指す、こつちに大事のことがある、存じもよらぬ、自己の那邊の鐵壁においてをや。

㋚先師。黃檗希運禪師なり。

㋛蒿枝拂。こつづいには徹せぬちやうどこれはよもぎの葉で臉をなでたやうな、仙術家にも小兒の無病無災を咒するによもぎのはでなでる。

㋜一頓。一うち、黃檗に代つてとこの老賊を。

㋝某甲下手。私が黃檗の名代を仕らうと。

㋞擬接。棒をひつたくらんとした。

㋟要見盡。林才の手本を見盡さんと思ふたと云ふ語なり。

㋠拄杖。拄杖に向つていふ。

㋡面赤。慚色をいふ。

㋢道道。拄杖に向つてしかいふ

㋣悲聾悲啞。拄杖子やい、つんぼでなければごろじやな、聾云く、和レ盤托出夜明珠をまき出した。嗚呼見事々々。この一章は無聞無說の端的也。

㋤巖頭。德山に嗣ぐ。

㋥西京　長安なり、京兆とも云ふ、（唐末代）今の西安なり。

㋦黃巢　これは唐の僖宗時代の軍事的掠奪團の首領の名である。黃巢の賊團の意、不平家である、社會主義である。雪峯はこの賊の起つた四年前に雪峯山に住してゐる。

㋧敢劍。拾つてきたか。

㋨引頸。岩頭がそれならば、その劍でわしの頸をはねてくれ

上堂、㋩拄杖を拈じて、「㋪面の赤からんよりは語の直からんに如かず、㋫道へ道へ。」拄杖を靠けて云く、「拄杖子、是れ㋬患聾にあらずんば便ち是れ患啞」

上堂、舉す。㋭巖頭、僧に問ふ、「甚の處よりか來る。」僧云く、「㋮西京より來る。」頭云く、「㋯黃巢過ぎて後、㋰劍を收め得る麼。」僧云く、「收得す。」頭㋱近前して㋲頸を引いて云く、「㋳囚。」僧云く、「㋴師の頭落ちぬ也。」頭呵呵大笑す、僧後に雪峯に到る、峯云く、「甚麼の處よりか來る。」僧云く、「巖頭より來る。」峯云く、「巖頭近日何の言句か有りし。」僧前話を舉す、峯打つこと㋷三十拄杖して趁ひ出す。師云く、「者の僧當時、若し巖頭の笑裏に向つて機を知らば、雪峯の拄杖子更に長きも、世た他を打つこと著じ。」

㋩拄杖。拄杖に向つていふ。

㋪面の赤。林才の手本を見盡さんと思ふたと云ふ語なり。

㋫道道。拄杖に向つてしかいふ

㋬患聾患啞。拄杖子やい、つんぼでなければごろじやな、聾云く、和レ盤托出夜明珠をまき出した。嗚呼見事々々。この一章は無聞無說の端的也。

㋭巖頭。德山に嗣ぐ。

㋮西京　長安なり、京兆とも云ふ、（唐末代）今の西安なり。

㋯黃巢　これは唐の僖宗時代の軍事的掠奪團の首領の名である。黃巢の賊團の意、不平家である、社會主義である。雪峯はこの賊の起つた四年前に雪峯山に住してゐる。

㋰敢劍。拾つてきたか。

㋱引頸。岩頭がそれならば、その劍でわしの頸をはねてくれていふ。

㋲頸。陰は色受想行識の五陰。界は根塵識の十八界。

㋳出息萬緣。刹那の間、無住無念なり。萬法にことよせて云ふ。萬緣は朝より暮に至り、古歌に「古里と定むるところなき人は、いづくへ行くも家居なりけり。」

㋴甚麼。言ろは此の如く本分に安住する人は、甚として取捨去就あると。

㋵會得。拄杖裝具を高く閣いて行くまいにと。

㋶一生定力。こなたの叢林、あなたの叢林と、宿業の餘風に轉ぜられて如此也と、逍遙任運底、行藏は論語の逸而に出づ、用レ之則行、舍レ之則藏」と

と云ふ勢かを示す。

㋷[力]。これは日本人の「えー」とか「こわーあ」とかに當る。支那人のこゑを形容した字で、きばりごゑなり。

㋸近前。ちかより。

㋹師頭落也。この僧も大ぶん出來たとみえる、あなたの頭はおちてしまひました。

㋺三十拄杖。こゝのはたらきはどうも〳〵、そんなうつかり坊主はおれの手にはおけぬとて、おひ出してしまつたと。雪豆は三十山藤且輕恕、得二便宜一是落二便宜一と頌せられた、碧岩六十六則にもこの因緣出づ。

㋻雙林。傳大士の開基なり、次の寶林寺。

㋼入息陰界。胸中のことによせ

㋚雙林に赴いて衆を辭する上堂、㋛入息陰界に居らず、㋜出息萬緣に涉らず、㋝甚麼としてか萬松を棄てゝ雙樹に入る。㋞會得せば拄杖子之を束ねて高く閣かん。然らずんば自ら笑ふ。㋟一生定力なうして、行藏多くは業風に吹かるることを。」

延福寺語錄終

國譯虛堂和尙語錄　卷二

㋑婺州雲㋒黃山寶林禪寺語錄

侍者㋓惟俊㋔法雲編

師入寺、山門を指して、「㋕彈指を勞せず、豈に思惟に涉らんや。㋖現成の門戶、到るものは方に知る。」

佛殿を指して、「㋗前釋迦、㋘後彌勒、且く道へ㋙阿那箇か是れ正主。」㋚喝一喝。

㋛帖を拈じて、尋常㋜雲水家、㋝或は凝り或は流る。㋞初めより㋟固必なし、甚に因つてか㋠者箇の手に入ることを得て、便ち者裏に從つて住する。試に㋡一轉語を下せ看ん。」

㋑婺州。浙江省にあり、又金華府とも云ふ。

㋒雲黃山。義烏縣の南にあり、一名松山と云ふ、梁の傅翕大士此に於て行道し、黃雲盤旋して、その狀ち蓋の如し、相傳ふ山に玄熊赤豹多し、大士之を化度す、後また出でずと寶林寺はその山の下にあり、大士を開山とす、七墖あり、支那十刹の一なり。

㋓惟俊。虛堂に嗣ぐ、天台の萬年に住す。

㋔法雲。承天の閑極法雲なり。虛堂に嗣ぐ、無衣と號す。

㋕彈指。傳大士は彌勒の應身なれば、善財が彌勒の樓閣に到つて、暫時念ををさめて、彌勒が彈指一下すれば、閣門開くといふ、この意をとりもちふ、まさか善財の思惟にわたらず八字に開いたにて、桃紅李白八字に開くじや。

㋖現成門戶。言は今この現成天眞の門戶は、彌勒の彈指を勞せず、又善財の思惟にも涉らず、師入寺、山門を指して、

㋓諸山の疏、「㋔居は必ず隣を擇ぶ、㋕鑑は止水に非ず、㋖明暗相凌ぐ、㋗言猶ほ耳に在り。」山門の疏、「㋘門を關著すれば、㋙盡く是れ自家屋裏、何ぞ須ひん㋚冷言冷語して、㋛暗地に人に敵くことを。信せずんば㋜下文を聽取せよ。」

法座を指して、「㋝草を聚め石を積んで、㋞有と說き空と談ず。㋟古を取るに尙ほ賒かなり、㋠一時に拈却す。何が故そ、㋡別に一路子あり。」師、陞堂、祝、聖畢つて座に就て云く、㋢大凡そ善く射るものは、發するときは必ず的に中る、若し的に中らざれば、㋣徒に羽を沒するに勞す。善く射るもの有ること莫し麼、㋤試みに一箭を發せよ看ん。」僧問ふ、「㋥天從り降らず、地從り湧かず、㋦須彌山甚れの處從りか得來る」

ず、只だ到入のもの皆方に知るとなり、更に隱すことなし盡十方世界、これ箇の解脫門なり、この虛堂も方に諸人も方に知るとなり。

㋧前釋迦。釋迦已に滅す。

㋨後彌勒。未だ出現せずにて、傳燈二十七に善慧大士傳に、天嘉二年、陳の文宗時代に大士松山の頂に於て蓮埋の樹を逃つて行道し、七佛相隨ひ、釋迦前に引き、彌勒後を接することを感ず、唯だ釋尊のみ數たび顧みて共に語る、我が補處なるが爲めなり。

㋩阿那箇。且道は中間底なり、正與麼ならばどれが正主じゃと乾坤只だ一人の主ぞ、これは二佛に於て正主を辨ぜんことを要す、二佛の中間に於て正主を辨ずべし、即ち虛堂自ら當れり。

㋪喝一喝。やい見たか、正主の端的意氣をば。

㋫拈帖。守護職よりたまはるところの虛堂和尙を請する公帖なり。無礙自在に說法開示せよと云ふなり。

㋬雲水家。修行してゐる僧をいふ、凡そ沙門の世に處するば風雲流水の去住無心なるが如きを云ふ。

㋭凝は雲なり、流は水なり佛法世法にとゞこほらぬを指して云ふ、所謂一所不住の境界なり。

㋮固必。これは論語の子罕篇に子四をて絕つ、意毋く、必毋く、固毋く、我毋しとあるに取る樹下石上の境界なれば、固はこること。執偏なり。必はかぎるあてるの義なり、ことびつかぬなり。

㋯者箇。公帖なり、者裏はこの寶林に請を受けて住持する端的はどうじやと。

㋰一轉語。學者たちに、從來去住自由ナニョウテ公帖を受

師云く、「㋱突出辯じ難く。」僧云く、㋲只だ者箇眞の消息を將て、用ひて吾が皇の億萬春を祝したまへ。」師云く、「㋳巢は風を知り、穴は雨を知る。」僧云く、「㋴雙樹の勝所、大士垂化の方、㋵應菴の雲孫、㋶今の虛堂、高く其の轍を蹈む、還つて端的なりや也た無や。」㋷師云く、「人を誣るの罪、罪を以て之に加ふ。」僧云く、「㋸爭奈せん、是非已に傍人の耳に落つることを。便ち天河を挽いて洗へども清からず。」師云く、「㋹面の赤きよりは語の直からんには如かじ。」僧云く、「㋺只だ判府直院侍即の、和尙を請じて㋻此の名山に住せしむるが如きんば、何の方便かある。」師云く、「㋼劒は甑人の手に握る。僧云く、「還つて學人が箇の消息を露すことを許さんや也た無や。」師云く、「㋽杜鵑啼く處花狼藉」僧

けて此の寶林に住することを得るか、諸人に一轉語を下して看よとなり、竹窗隨筆に「轉話は眞實大悟大徹の中より流出すべきものなり」とあり、轉語は今日の言葉でいふならば、小感想の意で、或は格言の意である、通俗的に云へば洒落文句である。

㋱諸山疏。列剎よりの請、すなはち勸請の疏なり。拈出するとき唱へる謝語なり。

㋲居必擇隣。所謂擇んで仁に處らずんば、焉ぞ知ることを得んの意なり、孟母三遷の敎育の如き、兎角に好き人に交はるやうにする、仕合なことには近くはみ榑檀の叢林。

㋳鑑非止水。世間なみ〳〵の勸疏ではない、この語は莊子の德克符の伸尼の曰く、人流水に鑑みること莫くして止水に鑑みむ」と云ふにとるなり。

今諸山を望むに止水にあらず臥龍の宜しく鑑むべきところなり、球長老は曰く「其の人に鑑みて水に鑑みるに非ず」と。

㋴明暗相凌。明は放行、暗は把住なり、これは隣交の交情を逃ぶ、言ろは平昔交會の間、明暗相凌奪して「理論商量するなり、無着曰く「明暗は相反するの法なり」。

㋵言猶在耳。その言なほ耳に在りて忘れざるなり、慶賀勸勉の言は入寺以前に在り。

㋶關著門。門を關鎖する、しめつくるなり、無着曰く「我れ未だ門に入らざる已前は、我れ亦仙家の人、若し既に門に入り已つて、却づて門を關鎖し來つて、之を視れはじや」と。山門の故に門內の事を用ふ。

㋷自家屋裏。一家の父子と同じ

禮拜す。

師乃ち云く、「㊁一絲拄げざるも、㊂猶廉纖に涉る、㊃獨脫無依なるも、未だ極則とせず。」㊄衲僧家、去來象を以てせず、㊅動靜心を以てせず㊆冥運無方、群機頓に顯る。㊇便ち見る雲黃峰頂、㊈鐵樹枝を抽んで、㊉小白華邊、㊊風なきに浪を起すことを。㊋處處普門の境界、㊌頭頭彌勒の道場。」㊍萬線に應せず、靈然として自得す。㊎直に得たり、堯風舜日、共に昇平を樂み樵唱漁歌、成く㊏聖化に霑ふことを。畢竟何を以てか驗と爲ん。」㊐拂子を擊つて、「㊑當涉歩み入つて祥麟穩かに、海樹飛び來つて白鳳閑なり。」復た擧す、㊒閩王㊓羅山を請じて開堂せしむ。纔かに座に登つて、㊔手を以て僧伽梨衣を斂めて、大衆を顧視して便ち下座、㊕王、近前して

や、兩序勤舊とて、東序西序五侍者などと云ふて、役々の僧たちをば同じく本分家裏の人なりと、自家はこの寶林寺のことなり。

㊆冷言冷語。冷は陰の義、當陽に言語せず、冷眼冷笑冷地等の類の如し、かげ日なり、みな〳〵骨肉の內なれば、さゝやくやうに言ふことはいらぬとなり。

㊇暗地敲人。あからさまに扣問せずして、疏に憑伏するなり人に手をとらせるやうなことはせぬと、暗地はかたかげ、敲は問ふなり、賓問の矢をはなつなり。

㊈下文。疏の文を指して云ふ。繼那がまだ疏を讀まぬ前に、此の法語を唱ふ、故に下文と云ふ。

㊉聚神積石。草座石床に坐して如來は隨宜說法す、說法することは古の風儀なり、石を積むとは生法師と云ふ人は羅什の弟子なるが、石を以て聽徒と爲して說法せし故事あり、佛も忉利天、善法堂の金石に坐して說法し玉ひしことあり。

㊋說有說空。有は河含部、空は般若部、第二義門に下つて、或は有と說き、或は空と談じ玉ひしも。

㊌取古尙除。除は遠なり。今年代が深遠にして取るべからず故に又有相の座にして方便權敎を談ず、之を空王已前に比するに、太だ遠きことあり、それは昔のものがたりなりと云ふこと。

㊍一時拈却。拈は指にて物を取るなり、此れは捨てゝしまうごと、古きことはひつかたげてと、雲竇頌古に「去却一拈得七」は、みなこの意なり。

㊎別一路子。古を取らず、別に

通霄の路あり、釋迦の法によらず、達磨の法にもよらず、方便を假らずとなり。

㊏大凡。これ以下は索話なり。

㊐徒勞漫羽。勞して功なしとあたつたら矢をつひやす、沒はかくすこと、たゞぐつと中へいこむなり、こがす」と調す。

㊑試發一箭。これは釣語なり。堡生招箭をいふ。

㊒不從天降。そら矢か、あだ矢か、由基が矢乎。

㊓羅山。唐には妙高と云ふ、これは即今法座、すなはち須彌壇上の法座を指して、虛堂和尙に商量しかける。黃處より得來ると、これは本分の大事を以て須彌山に託す。

㊔出離辨。端的は面前に突出する故に辯じ難しと也、そこの處は返事はちよとしにくひと天よりも下らず、地よりも湧かずして、ひよつと出た故に、辨じがたしとなり眞箇本分の須彌の端的ぞ、珠長老は「合頭乎是什麼ぞ」と云ふてゐる。

㊕者箇眞消息。者箇すなはち須彌山には、突出辨じがたしと仰せられしは、合點しましたが、このあつばれ不思議の大陀羅尼なる消息やうすをもつて吾が皇の今上皇帝の萬々歲を祝國して下されと。

㊖巢知風。巢居は鳥鵲のるゐ、穴處は狐狸のたぐひ、己がみちみちを能く知つた、眞實祝しやうは、知る人は知る、其の方共の知つたことではなしと、今は他の指數を待たずと云ふ知分相應のあいさつなり。

㊗雙樹膠所。この雲黃山は一名松山とゝふ、傳大士は松山の頂の雙樹の樹に因つて寺を剏む、故に雙林と名つく、膠所は名所と云ふことの樹木のかれてくひのやうになりている木なり、大士は「傳大士、又は善慧大士と云ふ、大士とは人心大行あるを云ふ」傳大士はこの婺州生れで、法號は善慧、本名は「傅翕五月八日生、北周の武帝、天和四年化す、日本の欽明帝三十年に當る、垂迹化導の方は處なり地なり。

㊘應庵雲孫。支孫の子を雲孫といふ虛堂は應庵五世の法孫なり。

應庵曇華——蜜庵咸傑——松源崇岳——運庵普岩——虛堂智愚

㊙今虛高。應庵も曾てこの寶林に住せられた。故に虛堂もその途轍あとをばふむとなり、還つて端的なりや也たいなやとは、正理であるかまださうでないかとなり、なんとそれが眞實でござりませうかとなり。

㊚師云誣人。師云は自己を把住するなり、誣は無を以て有と爲するなり、難を云ひかけるなり、以罪加之はおはせる罪をおれにおわせるかなり、重罪の義なり。

㊛爭奈是非。あゝまうらちあきませぬ、皆人がかくれもない運庵の子じやと知つてゐますゆへ、しかた

がないと傍人は諸方の人をさす。便挽三天河「洗不ㇾ清とは天の河をせきとめて耳を洗ふ也、虛堂の是非をば、龍溪は「たとひ把住綿密なるも、已に人耳に落る」といへり。

㊄面赤語直。また是把住なり。面赤はうそをいふ也。綺語妄語を云ふには愧をかくより、正直にいへと。

㊅判府。ところの守護職、直院とは學士院に直すること「とのゐ」せしむ、侍郎とは諸殿門を宿衛するを通して侍郎と云ふ。

㊆住此名山。この雲黃名山に住持せしむる　、方便爲人の處があるかと。

㊇獨握甑人手。權柄手に在り、殺活時に臨むの義なり、甑人を以て自らに比す、それはしれたこと、この虛堂が住持するからには、活殺はおれが手の內にありと楚王と眉間尺との故事あり、略す、甑山と云ふところの客あり云云とあり。

㊈學人簡消息。學人にこのありさまをのべることを御許しになりますかどうかと、おそろしいやつなり。ちと申し上げたいことがございますと。

㊉杜鵑啼處、ぼとゝぎすが花を啼き落して散々なものになしたとなり杜鵑は此の僧の言句にたとふ、現成天眞、甚の消息を通ずる處かあるとなり、僧禮拜とはいありがたふございますと、珠長老曰く、「錄中にこれほどの問答はあるまいおもしろい」。

㊉一絲不挂。これ以下は提綱なり、全體を拂ひつくして一絲も挂けざるとは、無想無念なり、面目に逢ふたものでなければ、かうはまゐらぬ。まだそれでも廉纖に涉ると微細に些子物のある在りて、明師にあはねば、こりやとれぬ、これは阿修羅が藕絲孔中にかくるゝのところ。碧岩の第三則の垂示に大廉生とあり、些細なやつの義。

㊉獨脫無依。たとひ佛菩薩等を取らず、三界の殊勝を取らず、適然として獨脫して物と拘はらざるも、尙ほ未だ極則とせずで、途中家舍に在らず、向上の宗のと云ふともまだ〳〵中々ゆるさぬと、至極の法則とはせぬ。

㊉衲僧家。かくの如くせんさくしつめた、去來は十年二十年、數箇所の住持すれどもびくともせぬ、步いたことない、像通じて巢と作す形なり、興聖の入寺の詩にも見ゆ。

㊉動靜以心。去來動靜とも無形無心である。

㊉冥運無方。無形無心は冥運無通で無邊無方にして羣機頓に顯發する也所謂直下更に纖翳なし全機處に陞つて齊しく鄣はるゝ故なり、冥運はくる〳〵歷つて京の田舍の地獄の天堂の、方所わけへだてはない、羣機は一切來機に盡く應じ利

山の手を執つて人く靈山の一會、何ぞ今日に異ならん。」山云く、「㊉將に謂へり、儞は是れ箇の俗漢と。」師云く、「㊉羅山當時、者の一着を下す妨げず群を驚し衆を動ずることを。賴に大王是れ佛法中の人なるに遇ふ。今日忽ち人あり、㊉新寶林に問はゞ、只だ他に對して道はん　將に謂へり、人の知音なるなしと、㊉自然に頭正し　尾正しからん。」

當晚小參、師云く、「㊉往々に多くは是れ㊉蓍草影邊に向つて、胡卜し亂卜す。㊉今夜諸人の與に卦文を旁破し了れり也、請ふ㊉欺欺に出で來つて商量せよ。」問答罷んで、㊉師乃ち云く

㊉「客は是れ主人の相師、㊉未だ寶林に到らずんば則ち已んなん。一たび寶林に到らば、山僧が伎倆、㊉諸人探頭の一覷に出でず。㊉賴に堂

㊉頭々彌勒。この語で雲黃峰を結ぶ「傳火士は彌勒の應身なるに依りて、閑宴修道の處なり、頭々とはどつちもこつちもといふ意、「傳火士は遺命して、上に浮圖を建て、彌勒の像を以て、其の下に處く。

㊉不應萬緣。頭々處々、觀音の境致、故に萬種の諸緣に應ぜず、胸中和平、靈然として測るべかざる不思議に、おのづから得るとなり、引いて國家の和樂に歸せんことを要すで妙應無方の意なり、こちらから無理には應ぜぬ、自然自得となり。

㊉直得蕩風。一件の通りなれば太平の御代となつてと。

㊉成霑聖化。國の爲に開堂して皇化を翼贊す。

㊉富莎步入その證據には麒麟がゆたり〳〵と步み入りてとなり、富莎はまつ角の處、即ち

綻するなり、この語までは結前生授なり。

㊉雲黃峰頂。上の冥運無方群機頓顯の證語なり。

㊉磯樹抽花。咲くまい木にも花をさかす。

㊉小白碧邊。梵語、補陀洛迦、こゝには小白華と云ふ、觀自在菩薩の遊舍、「傳普俠は文殊の化身、慧集は觀音の化身、同じく來つて贊助す、此の山中慧集所居のところを小白華と稱す、觀音應化の跡を欲する耳。

㊉無風起浪。四海の衲子寂定海中に四弘願に鞭つてとなりこの二句は皆山中の奇瑞を表するなり。

㊉處處普門。これは小白華を結ぶの語、どつちへ向いてもこつちへ向いても、觀音圓通の世界なり、圓通を出て又圓通に入るとなり。

中に一箇半箇の、㋐髣髴地にして、是れ舊時の相識なるありて、㋑行道塔の風鐸の亂鳴を指出し、㋒梁の寶公の多口饒舌を罵破す。㋓便ち見る、主賓の和氣彼此疑なきことを、然も是の如くなりと雖も、且く道へ、㋔慈氏宮中、今日甚麼の法をか說く。「拄杖を卓して、㋕鋼刀利なりと雖も、無罪の人を斬らず。」

復た擧す、㋖當山の善慧大士、因に㋗天竺の嵩頭陀に遇ふ、曰く、「我れ汝と㋘毘婆尸佛の所にして㋙誓を發す、㋚今兜率天宮に、衣鉢現在す何れの日か當に還るべき」といつて、大士に命じて、㋛水に臨んで形を觀せしむ。㋜圓光寶蓋を見る、大士之に謂ふて曰く、「㋝爐鞴の所鈍鐵多く、㋞良醫の門に病人足れり。」師云く、「㋟好笑好笑、當時他の請ふ、大士水に臨んで形を觀よ

太平無事の家なり、誰か此の德に應ぜぬものはなし、莎は すげ也、海樹食來白鳳閑。鳳凰がふらり〳〵と飛び來ると、海樹は海邊の樹より風枝を動かさぬ世の中、いづれも祝語なり、この二句は雲寶の祖英集の下にある「曾推官が嘉遁に示すの什を和ず」と云ふの偈頌の句なり、錯綜の句法でさかさまに云ふた句勢なり、今取りて祝語と作す。

㋠閻王。後唐の王審知なり、字は信通、光州固始の人、後唐の同光三年卒す、忠懿と謚す長子延翰立つ。

㋡羅山。道閑禪師、巖頭に嗣ぐ。閩の帥、その法味を飲み、請じて羅山に居らしむ、法寶禪師と鍵す、この因緣は禪林類聚一に出づ。

㋢僧伽梨衣、僧伽梨は唐には重複衣と言ふ、正に僧揭諦と云ふべし、此には和合衣と曰ふ威儀をつくろひ、しやんと坐してとなり。

㋣王近前。帝代な貴い大王なり靈山の一會は世尊の拈花微笑の一著子は、何ぞ今日と異なることはなからうと。

㋤將謂儘是。還つて這般の事を知ると俗漢と思ふてゐたならば、佛法中の人でありしよと。

㋥富時下者。龐山があのとき下座の一著を下してゐる、すさまじい、妨げず群を驚し衆を動すで、佛祖も氣を呑み靡を飲むなり、頼にこれ大王が佛法中の人でありしに遇ふてよかりしが、若し知音がなくば羅山も一場の慚儡でありしならん。

㋦問新寶林。閻王の問ひの如くこの新命寶林にそはゞ、無人知音で、俗漢と云ふのは、言亂なればなり。

㋧自然頭正。かう云ふたらよからうものを、どこやら全備して、宣句共に叶ふで座しきぶりがよからうとか。われはどことなく、頭が正しければ、尾も正しと云ふておく寔なり。

㋨往々多是。今時往々に江西でも湖南でもとじや、未だ面目を見ざる底。

㋩著草鞋邊。めとぎぐさのかげのあたり、これは言句の影像に向つて胡卜し亂卜すで、推量してあつちへ占ひこつちへとらはる、諸經論などを引き出してまよひまはる、中庸にも見三千著龜」とあり、うらなひにいふくさの名。

㋪今夜諸人。おし推量斗りで居る故こよひみなの爲に卦文（うらなひの文句）を。古今の葛藤を割破すると「殆は剩なり」古則公案も佛敎祖錄をも取りのけてしまふ。

㋫欺欺出來。欺は徐なりで、心しづかになり、中情欺欺などと云ふて心にまことあることなりて、たゝきて商量をせよと。

㋬師乃云。これより以下は提綱なり

㋭客是主人。客は大衆、主人は虛堂

相師とは人相見る物ぞ。客はいつでも亭主の氣に合ふやうにする役なり。善く主人の是非善惡を見るものなり、主客相應の義なり。

㋮未到寶林。まだこの寶林に來ぬ、それですんで、何の申分もないが一たび到らばとはさらば來てみれば、この虛堂が伎倆はだ、智惠才覺はとなり。

㋯諸人探頭。みなが探頭は勘驗の義吟味してとなり、一齕とば、一日みておいたに。不出はもれはせぬとなり、よいもわるいも、皆が見る通りなりと。

㋰頼堂中。心安いことが、堂中乃ちこの修行場の中でと一箇半箇は一人半人かなり、あまり澤山はないものなりと。

㋱髣髴。にたか依たかの樣なものもある、知音を舊時の相識といふ、舊道友に相似たりと。

㋲行道塔。行道塔は寶林七境の中の一なり、「傳大士が此に於て行道す、七佛菴行道塔あり、風鐸は塔の四方の風鈴が風で、しきりになるをと、指出は評判して其の方達をあひてにしてとなり。

㋳梁寶公。梁の寶誌和尚が、武帝に奏して、「傳大士を請じて壽光殿に於て金剛經を講せしむ、大士、座上に登りて案を揮ふこと一下乃ちまへの机をぐらつかせて、さつさと下座せられた、武帝はおどろいて、寶誌和尚に問はせらるには、「これはなんとしたことか」と、誌公云く、「陛下はまう御わかりになりましたか」と、帝云く、「不會」誌公云く、「大士はもはや金剛經を講じてしまひました」と、このことを誌公の多口饒舌と云ふて、いらぬことをくちや〳〵おしやべりしたものなりと、どなつてゐるとのこと、この公案は碧岩の六十七

と道はんを待つて、㋚門椎拍板を拈起して、㋩劈脊に便ち摑たば、尙ほ且つ一半を救ひ得ん。更に甚麼の爐鞴の鈍鐵良醫の病人とか說かん、㋥本を翻得し來るも、劒去つて久し矣。山僧尋常、㋭理に黨して親に黨せず、大士の爲に主と作る底あること莫し麼。如し無くんば、㋬夜深珍重。」

上堂、擧す、㋮晏國師、衆に示して云く、「鼓山門下㋯咳嗽することを得ざれ」と。時に僧あり咳嗽すること一聲す。山云く、「甚麼をか作す。」僧云く、「傷風」。山云く、「傷風ならば即ち得てん」と。師云く、㋰是は則ち是、梁生りて箭を招く。㋱若し一向に與麼ならば、道絕え人荒れん。」結夏小參、拄杖を卓して、㋲必ずしも善財念を歛め、彌勒彈指せざれども、㋳普く四聖六凡を請じて、此の大光明藏に入らしめて、互に主伴と爲つて快に㋴禪病を說いて、瞽者をして明かに、聾者をして聽き、㋵迷者をして悟り、縛者をして脫せ使めて、㋶是の九十の期に於て、各〳〵本法を證して、然して後雙樹の堂に升り、息畊が室に入つて、㋷無星の等子上に向つて、其の重輕を較べて、以て賞勞に憑らん。會す麼。」拄杖を卓して、㋸力囝唏、咄咄咄。」

復た擧す、㋹天平滸和尙、行脚の時、㋺西院に參ず、㋻毎に云ふ、「道ふこと莫れ佛法を會すと箇の擧話底を覓むるに也た無し」と。㋼一日西院召して云く、「從滸、平、頭を擧す。院云く、「㋽錯。」㋾平行くこと三兩步、院又云く、「錯。」㋿平近前す、院云く、「(1)適來者の兩錯、是れ西院が錯か、上座が錯か、平云く、「(2)是れ從滸か錯。」

則にも出でゐる。

㋚便見賓。そこで皆うちとけて と、客はこれ主人の相師の故に、その道話自然に相似て同じとなり、無疑はすなはち隔心なきなり。

㋭慈氏宮中。彌勒を慈氏と翻す所謂彌勒の道場、これも寶林七塔の一慈氏堂あり、この事によせていふ。

㋬鋼刀難利。拄杖を指して云ふ堅鐵は銳利なれども、この虛堂の所持の寶刀は無爲無事の人はきり申さぬと、これは賢聖衆前には法を說くべからずの意なり。

㋮富山。寶林寺の開山なればいふ。

㋯天竺蕎頭陀。達磨大師と云ふ說あれども非なり、別人なりとの說多し。

㋰毘婆尸佛。亦維衛と名づく、此には勝觀と譯す、七佛の首なり。

㋱發誓。一切を利益せんと欲すと。

㋲兜率天宮。兜率陀此には妙足と云ふ、佛地論には意足と名づく、謂ふ意は發身の菩薩中に於て敎化して、多く意足を修するが故に、衣鉢現在すと今そのまゝある。

㋳臨水觀形。大士の本形を水鏡にうつして見せた。

㋴圓光寶蓋。後光がさして寶蓋おさしかけた、圓身圓滿の光明なり。

㋵蠻雜之所。佛如來のみもとには、あら金が多くつんである鈍鐵で佛とも法とも知らぬ凡夫が多いと。

㋶良醫之門。耆婆、扁鵲の如き名醫の門には、四百四病の患者が一杯つまつてをると、方に度生を急にすべし、何の暇あつてか兜率などを思はんやと。

㋷好笑好笑。をかしいわい、をかしいわいと、大士何をほざき出すと、上の臨水觀形事を弄す。

㋸門椎拍板。門椎は大きな木の槌、拍板は拍子をとる板なり、この二具は傳「大士の隨身所持の具なり、初め武帝、大士の神異を聞いて、即ち試みに闇人をして預め諸門を鎖さしむ大士心に先づ知る、預め大木槌一双を作る、先づ一門を扣くに、諸門悉く啓く、拍板は大士之を執りて經を唱ふ。

㋹勞贅便摑。口のいがむほどほほげをたゝかばなり、上の發誓と云ひし口さきをば、尙ほ且つ一半を救ひ得んと、十分ではなけれども、まあ半分はたすけ得たであらう。

㋺翻得本來。これは虛堂が我れ今代りて本手を取りかへさんと思ふても、已に落節し去りて今拔本し來ればなり、もはや遲八刻なり、劍去久矣で、これは楚人舟を刻むの故事で圓悟心要に「爾、方に舟を刻む、豈に曾て夢にも祖師を見んや」とあり、おそい〳〵、船は赤問關を越して、とつくに神戸か大阪に着いてゐる、蹉過了也だと。

㋻黨理。これは偏頗なきを云ふ親でも子でも天理にはくみするが、世間の親交にはくみせず、「傳大士はこの山の開基なれども、爲二大士一作レ主底あることなしやと、さあ大士の味方となつて、一と合戰するものはないか、作主で、なるものはないか、如し無ければないか〳〵。

㋼夜深珍重。夜が深けた、ねやれ〳〵、禮話なり、小參の故に云ふ、珍重は大切にの意義

院云く、「錯。」平休し去る、院云く、「且く者裏に在つて夏を過して、上座と共に者の兩錯を㋐商量せんことを待て。」平當時起ち去る。後に住院衆に謂つて云く、「我れ當初行脚の時、㋑風に吹か被て、思明㋒長老の處に過つて、他に連りに兩錯を下さる。更に我れを留めて㋓夏を過して商量せしむ。㋔我れ那時に錯るとは道はず㋕南方に發足せし時、早く錯り了れり也。」師云く、「㋖藏を慢せにするは盜を誨ふるなり、㋗容を冶かにするは淫を誨ふるなり、㋘雙林今夏、還つて箇の兩錯を商量する底あり麼。」

次の日上堂、「㋙箇箇天を頂き地を履む、甚麼としてか、㋚二千年前底の影子を踏著して、㋛便ち一動子を做すこと得ざる、㋜者の影子を蹈まざる底あること莫し麼。」主丈を卓して、「㋝有ることは則ち有り、只是れ今日來らず。」

㋞頭首の秉拂を謝する上堂、「㋟壇を以て將を拜するは、活國の英を求むるが爲なり、㋠拂を以て人に授くるは、枯心の士に見えんと要してなり。雲黃峰下、㋡象龍の歸する所なり。虛堂、㋢薄處先づ穿つ、㋣龜を證して鼈と作すことを引き得たり。」

㋤開山忌日の上堂、「㋥正法像法、㋦知んぬ他は此れ幾年ぞ、尙ほ且つ拈弄し出さず、㋧那ぞ堪へん忍俊不禁にして、㋨出で來つて攪行奪市するも、㋩既に未だ箇の補處を得ず。㋪又却つて恁麼に去る、㋫是にして去るか非にして去るか。」拄杖を卓して、「㋬露。」

上堂、㋭擧す、與化因に僧問ふ、「㋮四方八面來の時如何。」化云く、「㋯中間底を打す。」僧便ち禮拜

加保重のこと。

㋐曼國師。福州鼓山神晏興聖國師、雪峰に嗣ぐ、この話は聯燈二十四に出づ。

㋑嗽歇。方書に痰なくして聲あるを之を咳と云ふ、痰ありて聲なきを歇と云ふ、鼓山のこのおれの處では、鼻もかませぬ、せきばらひもさせぬ、況んや言句をやとなり、時に僧ありて、くつしやん、えへん〳〵とやつた、山は「こらどうじや」と、僧の云ふのには「私は傷風で風を引いてをります」と、山云く、「風引きならばそれはゆるす」と、得てんといはれる、疎山の樹倒れ藤枯る時如何と云ふに似てゐる。

㋒是則是。虛堂はよいはよいが墜なりて箭をまねくで、一箭射かけて來いと待ちかけた、箭は僧にたとへる、此の示衆は來問を招くが爲め而已。

㋓若一向。もしひたすらにそれならば、上の嗽歇し得ざれの語を指す、遺たえ人もすさまじと、法堂前神深きこと一丈、掃地の人を求むるも得べからず。

㋔善財童子。五十三問の中の五十一參の下、「善財、數を受けて海岸國に至る、大莊嚴園といふあり、その中の廣大樓閣を毘盧舍那莊嚴藏と名づく、一心に彌勒菩薩に見えんと願ふ、彌勒彈指して聲を出す、其の門即ち開く、善財に命じて入らしむ」と、新華嚴七十九に出づ。

㋕四聖六凡。おまさずもらさずにと、四聖は聲聞、緣覺、菩薩、佛、六凡は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の衆生をいふ、入三此火光明藏」とは脫體現成の處なり、即ち神通光明の藏なり。

㋖禪病。圓覺經の普覺章の大悲世尊、快に禪病を說くと、註に禪病は四相なりとある、作止任滅の四病なり、一に作病即ち心に造作を生ず、二に任病、即ち緣に隨ひ性に任す、三に止病、即ち妄を止め眞に即く、四には滅病、即ち寂滅の謂なり、亦云く、「禪堂に病あらんや、參ずるもの、用心差錯するにあるのみ」と圭峰はいへり。

㋗迷者縛者。煩惱菩提の綽が、ぐわらりとほどける、めくらが見え、つんぼがきこえるなり、まるで弘法大師のやうなことなり。

㋘九十之期。夏の結制九十日の期限に於て、各々とて僧俗男女が、本法を本來の面目、父母未生前の本參の妙法を證して悟りて、然後それから雙樹の堂に升るで明師の室に入得し、これば入口で淺いが、この息耕が室に入るは深いぞ息耕は師の別稱である。

㋙向無星等。目なしの秤、本分の秤子也、面目坊なり、本分の勘驗をするの具に向ふて、その重さ輕さをひきくらべて賞勞に憑らんで、よく骨折つたと褒美を下さる慰安せらるゝなり、夏明きの月を償勞の月と云ふ。

㋚力㕘喝。力㕘喝はえいやらさあえいやらさあと聲と力をいふ、えいやらさあ〳〵力を出して物を引く聲なり、喝喝喝はうぬめ〳〵〳〵〳〵なり、大機大用、大自在なり、卓主杖の機用なり、喝々は物を拂ひのけるやうなことに用ふ。

㋛天平。平は「びやう」と音するよみくせがよろし、天平山の從瀉は清溪道に嗣ぐ、道は玄

沙に嗣ぐ。

㋣西院。名は思明寶壽沼に嗣ぐ、沼は臨濟に嗣ぐ。

㋥録云莫道。毎云は口ぐせに天平は尋常悟りじまんが、有つた故、箇の舉話底を覓むるに、また無しと、古則さばきをする舉話は話しのできるやつなり。

㋦一日西院。向上の舉話底を示してもよからうと思ふ。

㋧錯。そりや取りちがへた、うぬほれるなよとしかられた。なんとこしやくな事を云ふとなり。

㋨平行三兩。祖宗門下にはめづらしからぬ御示しなりと、活處を彰はした、然れどもてぬるい不平面して自分の室へゆきかけた。

㋩近前。近寄つて何を云はんとするとなり、やかましいことを云ふと思ふて、些子擽觸の勢ありとなり。

㋪適來。前刻より、このわしは二度もおまへに錯と云ふたがと。

㋫是從蕭錯。私がかす妄想大きなはきちがへでありましたと、院云く錯、まだか、平休し去るで、はらもたてられず、なきもならずなり、這裏は思明の寺、休去は安心すること。

㋬商量兩錯。兩錯で、筋骨をぬくべくらちあけやうと思ふたに、商量とは議論しやうと、あきうどの量り目を以て中平を失はず、御得意先きの信用を保つより出でし語なり、祖庭事苑に委し、西院のとめるのもきかずに「平がそのときふつと起ち去りたは佛法」とをやすらかに覺えたせいか、殘念じやと或る抄に云ふてゐる。

㋭被風吹。柴風に吹かれてとは因緣がありましたのでなく、日本でいふと狐にばかされて位のところなり。

㋮長老。たつとんで和尙をいふ。

㋯過夏商量。親切なことなりと。

㋰那時錯。那時は西院に見るときに那時はそのときといふこと。

㋱發足南方。南方は西院のところへ行脚するとも、早や錯なりと、天平山は相州、西院は汝洲なれば、天平からは南方にあたる。

この話は碧岩の九十八則にも出てゐる。

㋲慢藏。此の兩句は易の繫辭上一傳の文なり、西院の關鑰の餘ならざることを屬りて、今天平を留めて兩錯を商量せんことを要するが故にくらをゆるがせにするはとは、西院が老婆心切に乘手する故に、天平の那時に錯と道はず等の語を引き得たり、此れ盜が淫を誨ふるゆゑんなりと、前句は西院放行の所、後句は奇特玄妙の處をはき出せばなり。

㋳雙林今夏。吾がこの會下に、今夏にはこの兩錯を議論するものがあるかと。

㋴箇箇頂天。人々かうべには天をいただき足には地をふむすべて欠少

する所なしと、頭午夜の月を藏き足黃金の地を踏む、なんとしてか眼橫鼻直をば知らんやとなり。

㋵二千年前。釋尊が二千年前にきめておかれた安居禁足の佛制作法の敎迹(かげぼうし)を踏著して(守りて)と。

㋶使飯一鍋。安居禁足とて、九十日のあひだ、身うごきもようせぬのはと。

㋷香影子底。これは虛堂が自問である、二千年前に涉らざるかげぼうしありやいかゞと、所謂圓覺の伽藍にも住せず、三期をも守らずといふ底ありやなしやとなり。

㋸有則有。これも自答である。餘味あり、不去不來といふことあることはあるが、けふは御留主か、此の樣な自由なことを云ふが、唯だ〳〵知音がない」と珠長老はいへり。

㋹頭首。これは「てうしゆ」とよます又は「ぢゆうしゆ」ともよます、叢林の役位に東序西序といふて、これは西序の方の首前堂首座である人が四節といふて、年に四度衆の爲めに住持に代はりて、秉拂といふて拂子を取りて說法す、住持は別の日に之を叙謝といふて、御禮の上堂がある、今は冬至と結制との兩度だけ之を行ふなり。

㋺以壇拜將。これは史記の韓信が傳にある、蕭何が漢王に告げて曰ふのには「諸將は得易いが、信が如きえらものは國士の中でも二人とない」と、王曰く「それでは大將にすべきか。」何曰く「幸甚々々」と、そこで王は信を召して大將としようと思召す、何曰く「王必ず信を大將となされようとならば、良き日を擇んで齋戒して、壇場を設けて禮を具へばよろしからん」と、王之を許すと、これをこゝへもて來て、頭首の面々に配したるものなりなせならば、爲し求二活國之英一で、いはゆる無雙の國士と同じであるから、亂賊を平け天下を蘇活するの手腕を有すると。

㋻以拂授人。これは禪坊主であれば拂子を以て頭首人に授與するは、枯心則ち生氣なき貧惰無心の衲子火死一番して、その上に心識をころし盡したるものをみつけ出さうと要してゐる。

㋼象龍。龍象とかくのを顚倒したるなり、この雲黃山は衲子たちよりあつまるところなり、龍は水行中の力大なり、象は陸行中の力大なり」と智度論にあり、今鉅禪碩師のえらものたちを、之を龍象に比していふ。

㋽薄處先穿。これはうすきところさきにらくと、あながあくと云ふに比して、氷のうすきところは一番さきにあながあくと云ふより用ふる語なり、薄慢にして濃厚ならず故に頭首等を引き得たり、これを謙損して虛堂がいはれしたり。

㋾證鄭作證。これこの虛堂が胡亂に

す、化云く、「㋚昨日箇の村齋に赴く中路に、一陣の狂風暴雨に値ふ。㋛古廟裏に向つて避け得て過ぐ。」師云く、「興化、者の僧に㋜無刄の斧子を拈出せら被て、便乃ち高く降旗を竪つ。寶林當時若し他の禮拜するを見ば、便ち休し去らん何が故ぞ、且つ者の漢をして、㋝一片の板を擔ふて空しく一生を過さしめん。」

㋞大士生日の上堂、「㋟一たび嵩頭陀に道破せられて自り後ち出た來らずんば是れ好手。端なく㋠貧時舊債を思ふて、㋡再び家醜を揚ぐ、大士を見んと要す麼。」拄杖を卓して、㋢空手にして鉏頭を把り、步行にして水牛に騎る。」

上堂、擧す、㋣臺山路上に婆子あり、凡そ僧ありて、臺山の路、甚麼の處に向つてか去ると問へば、婆云く、㋤驀直に去れ。」僧纔に行く、婆云く、「好箇の師僧、便ち與麼に去る。」趙州聞き得て云く、「我が去つて者の婆子を勘せんを待て。」州到つて前の如く問ふ、婆亦前の如く答ふ。州院に歸つて云く、婆子我れに㋥勘破し了らる也。」師云く、「者の婆子、㋦寸艸生せざる處に向つて、箇の陣子を打す、㋧趙州韜略を施さずして、直に之を破らんと欲す。鋒を交ふるの際に及んで、㋨又却つて利を失して道ふ、我れに勘破し了らると。㋩大いに別人の棺木を扛いて、屋裏に歸して哭するに似たり。㋪趙州の爲に主と作る底あること莫し麼。」拄杖を卓して、㋫勘過し了つて一道に打たん。」

上堂、「㋬水中の鹽味、色裏の膠青、㋭祖師只だ箇の相似底を認得す、㋮何ぞ楚人の鷄を以て鳳と爲るに異ならん。我が者裡、任ひ儞、㋯三頭

證據すとなり、重んじやうもしらないで、名人にしたいは山々なれども、「これは虛堂が我儘が、それでも五家七宗がこもつてあるので、しかたがない」と球長老は抄してゐる。

㋛開山忌日。傳大士は陳の大建元年四月二十四日示寂す、日本欽明天皇三十年に當る。

㋝正法像法。釋迦の正法、世に住すること五百年、像法一千年、末法一萬年、或は正法を一千年とす、此れ佛法一萬と二千年。

㋠知他是。今は知らずの義、他は大士を指す、言ふ意は正法像法の間は知らず、大士は幾年を歷て、當來龍華三會の曉に於て成道する故に、尙ほ且つ拈弄し出さずと云ふ、まだまあ、さばきができぬ、工夫拈弄が成熟し出かさぬとなり

これは、傳大士は彌勒の化身なれば、釋迦が補處の菩薩なり。

㋡那堪惡儉。どうしてたへられやうぞ、惡儉は儉貧を惡ぶに堪へざるの義なり、こらへかねて、龍華三會を待たず。

㋢出來擔行。「さんかう」はおしうり、奪市はおしがひ、行市は市場で賀易する處。やれ布袋じやの傳大士じやのと强ひて出世し來つて、衆生を惱亂するとなり。

㋣既未得箇。まだ〳〵時節が到らぬ。故に補處乃ちあとつぎの成佛を得ぬ、五十六億七千萬歲を經て、釋迦に補處として、成佛すべしとなり。

㋤又却恁麼。暴竟虛生浪死すと也、今月今日寂滅し去るを謂ふ。

㋥是去非去。一拶して結座す、つまりいへば法にかなふて去

云く、「㋦者の婆子、㋧寸艸生せざる處に向つて、箇の陣子を打す、㋨趙州韜略を施さずして、直に之を破らんと欲す。鋒を交ふるの際に及んで、㋩又却つて利を失して道ふ、我れに勘破し了らると。㋪大いに別人の棺木を扛いて、屋裏に歸して哭するに似たり。㋫趙州の爲に主と作る底あること莫し麼。」拄杖を卓して、㋬勘過し了つて一道に打たん。」

上堂、「㋭水中の鹽味、色裏の膠青、㋮祖師只だ箇の相似底を認得す、㋯何ぞ楚人の鷄を以て鳳と爲るに異ならん。我が者裡、任ひ儞、㋰三頭

るか、法にかなはずして去るか。

㋱響。拄杖を卓して、さあだうじや、響と雲門大師にまかせた、是非を拔却して大士を點出す。

㋲四方八面。法戰の敵を受くる底の時節なり、これは參話なり。

㋳打中間底。獨坐大雄峯で、正しく此の僧を打着する手段なり、且く道へ、中間底これ什麼れの處ぞ、僧禮拜をしておいて興化の刄を奪はんとす。

㋴昨日鶴村齋。この僧に禮拜せられて、南無三寶、しまつたと。

㋵向古廟裏。中間底は古廟裏なり、「再釋一遍す、義知るべしである」と龍溪は注してゐる。

㋶無刄斧子。はもないをのをひねり出して、これは禮拜を云ふたのじや、この禮拜が最毒なり、高竪降旗、又一遍するが故に、かうさんした樣なことを云ふたとこれは虛堂でなくば見えまい。

㋷擔一片板。橋板漢で、一代をあだに了らせんと、中間底と云ふ、板をになはして風通のきかぬものにしてしまふたであらう、「好評なり、子細に參究すべし」と、球長老も抄してゐる。

㋸大士生日。傳大士は南齊の明帝建武四年五月八日生る、日本の仁賢天皇十年丁丑に當る

㋹嵩頭陀。嵩頭陀が何れの日か當に還るべきと云ふたよりこのかた、ひつこんでしまへばよいにとなり。

㋺貧時舊債。昆婆尸佛のみもとに共に、誓を發せしことを舊債と云ふ一切を度せよと思ふた、古借金得力省覺のものがあれば、富貴と云ふものなり

六臂にして、㋒其の來機を盡すも、也た儞が湊泊の處なけん。何が故ぞ、㋓三尺の喙を將つて、五湖の僧を罵倒するに慣ふ。」

上堂、擧す、㋔雲門、衆に示す、「㋕直に觸目滯りなきことを得れば、㋖名身句身に達得す。㋗一切の法は空なり、㋘山河大地は是れ名なり、名も亦不可得なり、㋙喚んで三昧性海俱に備ると作す。㋚猶は是れ風なきに市市たる波あり、㋛直に知を覺に忘ずることを得れば、覺即ち佛性なり矣、喚んで無事の人と作す。更に須らく㋜向上の一竅あることを知るべし。」師云く、「雲門大師、今日㋝儞諸人の髑髏裏に入つて、横三竪四すれども、儞が不覺不知なるを見て、㋞乃ち云く、土曠く人稀にして、相逢ふもの少しと。」解夏小參、僧問ふ、「㋟長期已に滿じて、㋠布袋頭開く、㋡江南江北、舊に依つて水鄉。㋢黃葉黃花、秋色に非ずといふことなし、學人便ち與麼に去る時如何。」師云く、「㋣地を掘つて深く埋まん。」僧云く、「與麼ならば則ち㋤柳栗横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去らん。」師云く、「㋥露濕ふて艸鞋重く。」僧云く、「若し㋦芳餌を垂れずんば、爭でか碧沼の深きことを知らん。」師便ち喝す、僧禮拜す。

師乃ち云く、「㋧一葉落ちて天下秋なり、㋨奴を認めて郎と作す。㋩一塵起つて大地收る。㋪猶ほ跡の在るあり。㋫初秋夏末、㋬直に萬里無寸艸の處に向つて去るべし。㋭乾茅火を引く、㋮門を出づれば便ち是れ艸。㋯人の富貴なるを見て、常に懽喜せよ、心頭を把つて火の燒くに似せしむること莫れ。㋰恁麼恁麼、㋱四路の葛藤好きものがない。

㋲再揚家醜。凡世の惡願を滿つるが爲に、再び佛家の大化を稱揚す。醜と說き細と說く、我が家の大事なり。

㋳空手飢兒。これは傳大士の法身の頌の上の二句なり、下の二句は「人從二橋上一過、橋流水不レ流」これ圓融一際の境界、蓋しこの偈は本法身の理を明すのみ、今拈起して大士の眞法身を見んと要す、これは無相の義を云ふたるものなり空手の處がはやすきのあたまを把つたものぞ、歩行の處が則ち水牛に騎たものぞ、これは華嚴の四法界が手に入ると、この樣なことはからよいのことじや、法性現前すると面前了了と、此の句通りが見える。

㋴臺山。この山は支那の高野山ともいひうるものなり、この山上に五つの峰ありといふ、大原府の五臺山なり、今の山西省にあり、文殊が乘迹の山なりといふ、文殊は理智圓融の菩薩である、理は心の體なり、智は心の用なり臺山の路上とは五臺山へ行く路すがらどう行けばよろしいと問ふたなり、これを祖宗門下に於ては死活當頭の二路、大智の發する處を云ふなり、圓智圓理の一路本有の路を、活文殊の境界を問ふたるなり、この公案は無門關にも出でゐる。

㋵驀直去。まつすぐにゆきなさいと、これは當頭の一路を指すなり、こゝで此の僧にすこし活機あらば婆子をはねとばして去るべきなれども纔に行くこと三五歩とはてゐるい、そこで婆子は好箇の師僧も恁麼(あれもあゝゆく)にし去るとは能く心得られたる御坊樣たちよ、百千の佛祖も我れもおまへさまも、此の一路をばかやうに去ると、この僧の一向足もとが定まらぬやつよとしたゝか罵破するなり。

㋶勘破了也。檢査してしまふたとか取調はまうすんだとかの意。勘は元郭人を鞫問するより出し語なり。

㋷寸艸不生。本分の地位に居して劍客を待つ洞山の所謂萬里無寸艸處なり、何の要害もなき處に龍虎の陣か假月の陣かを張つた、こはものなり。これは驀直に去るといふを評したじや」と珠長老はいへり。

㋸不施韜略。六韜三略の兵法を施しもせず、前僧の模樣で直に婆子を勘破せんとおもふたさて交鋒の際に婆子に出逢ふて大にしくじつた。

㋹又却失利。へらずぐちをたゝくどこじやない。どこか利を失するか。しくじりながら云ふことなり。

㋺別人棺木。他の死人を內へかきこんで、ないてゐるにひとしいと、自分には何の所得もない、自己勘破の分なし。

㋻爲趙州。趙州のかたんずるものがある乎、趙州をたすけるものはあるかと。

㋼勘過了。一道は一列の義、趙州も婆子も及び、作主底も共に一列にぶつてやらうにと、「和尙の棒、誰をして喫せしめん」と珠長老はいへり。

㋽水中鹽味。この語は傳大士の心王の銘にあり、此の次の句に云く、「決定是有、不レ見二其形一心王亦爾、身內居停、面門出入」とあり、人々此の通り、諸佛の心性を具して居れば水中の鹽の味の如し、膠が漆の具の彩色の靑黃等の中にありとも、にかはの色は見えぬと

㋚一時に拈却す。㋛不恁麼不恁麼、㋜九旬の功用、驗今霄に在り。㋝十洲三島遨遊に任せ㋞鴈蕩天台出沒に從す。㋟只だ雲門の我れに九十日の飯錢を還し來れと道ふが如きんば、又作麼生。」

復た舉す、㋠黃檗因に臨濟辭す、檗云く甚れの處にか去る。」濟云く、㋡是れ河南にあらずんば便ち是れ河北。」㋢檗便ち打す、㋣濟棒を約住して遂に一掌を與ふ。㋤檗呵呵大笑す。「㋥侍者、百丈先師の禪板拂子を持ち來れ」と喚ぶ。濟も亦、侍者、㋦火を持ち來れ」と召ぶ。檗云く「汝但〻將ち去れ、已後天下の人の舌頭を㋧坐却すること在らん。」師云く、「㋨明投暗合することは、則ち二大士なきにあらず、㋩爭奈せん久しうして弊を成すことを。㋪寶林に僧ありて、

同じで、貶躅現成の時向上宗乘の大事がある、知るものは知るで、まことに顯味や腦背の如くなり。

㋜祖師只認。祖師ば傳大士を云ふこの段では佛でも似せものを、水中の鹽味の何のかのと云ふのは。相似は似よりなり。

㋝楚人以鶴。昔時楚人が山鷄を擒ふてとほりしに、路人が問ふ。「何の鳥ぞや」と、之を狀ひて曰く、「鳳凰なり」と、路人曰く我れ鳳凰と云ふ鳥は今始めて見る、汝之を賣らんや請ふ、千金を償はん、與へざればもつと金を出す」と、之を買ひ之を楚王に獻せんと欲す、一ぱんで死んでしまうた達に王之を聞いて召して厚く之に賜ふ、鳥を買ふの金に過ぐること十倍すと、これと同じで、まがひものでどゑかさうとするなり、之とかはつたことはないと。

㋞三頭六臂。我者裡、この虛堂のところでは、たとひおまへたちが不動に成りても、降三世明王に成りても、傳大士をさしてなんぢと云ふ、八部衆三頭六臂なりみな奇形。

㋟盡其來機。神通三昧を、しつくしても、吾が宗では僅がつまだてさするまでもない、傳大士ばかりではない佛祖ともに、海泊は碇泊のこと無海泊處とはとりつくしまがないといふこと。

㋠將三尺喙。喙は音けい、鳥のくちはし、長きときは鳴くこと能はず、口まめに人の是非を云ふなど、五湖と云ひ四海と云ふはすべて惣天下の事、天下中の坊主共を罵り倒ずが慣ふはくせになつてゐる、五湖は支那には大なる湖水が五つあるところより云ふたるもの

の開山の大士でも許さぬとなり。

㋡雲門示衆。これは雲門錄に出てゐる「この錄中の名語じや」と珠長老はいへり。

㋢直觸目滯。直に法身を得ると、うんと云ふてもすんと云ふても、泣いても笑ふても、眼處に於てとりまはさうことなしや、直得の二字を「たとひ」と訓するかな付けもある。

㋣名身句身。「名は自性を詮す、句は差別を詮す」と、成唯識論にあり、身は依聚を義とす、名は能說の法、句は所說の法、これみな幻法也と達得するなり。

㋤一切法空。已上の名句とも幻法なれば眞實の妙法にはあらず、故に達得したる上においてみれば、わーわー云ふところに靜なところがある。

㋥山河大地。堂じやの宮じやの、松じやの杉じやの、男や女やのと名を付けたもの、名亦不レ可レ得とな り、空名なり。

㋦喚作三昧。「三昧は定性、海は慧、俱備は圓明じや」と珠は云ふ、三昧は此に正定と譯す、亦正受とも譯す、「言は一切法空の眞理を證して、諸の名句を受けず、正定に安住するときは、性上無量無邊海の功德、俱に備つて、皆慧明を得なり」と龍溪は注せり。

㋧猶是無風。一は周なり、無事に事を生ずるなり、而而はうちかへし〳〵なり、まだ〳〵なさけないことには、ふつと津波が打つて家財がしまはるゝことがある。

㋨直得忘。分別して知るのを知と云ふ、自身に覺するを覺と云ふ、知は隻手の聲を聞いた處なり、本覺の自性を忘れることができれば、覺はすぐ佛性である、楞嚴五の上に「知見無見斯れ即ち涅槃の窟也」と、さとると云ふこともなく、悟らると云ふこともなしと、喚似ニ無事人一で、無爲無事、凡夫中間はぬけたと。

㋩向上一竅。竅は關、竅は關要の義、穴なり、向上の一路と同じ。

㋪僞諸人。雲門大師が即今今日僞らがほていつぱらの中に入りてと、僞儺は五臟六腑なり、橫三豎四とはよこに三返、竪に四返、たてよこ十文字にけりまはられて、見ニ僞不覺不知一でいたいとも痒いともおぼえずしらず、死人同樣なるを見られてとなり。

㋫乃云土牘。そこで云はれるには、京も田舍も、ところがひろうて、人もちらほらてであふものも、一向すくないと、これはつまり知音なきの義、雲門の示衆と虛堂の評とはたてが違ふたやうなこゝに妙がある。と珠長老はいへり。

㋬授期。閏月あるゆゑなり、長期は百二十日、中期は百日、短期は九十日。

㋭布袋頭開。雲水のにもつもときほどけてに比す、禁足安居の自恣の

日を云ふ。

㋔江南江北。あちらへ行つてもこちらへ行つてもなり、依レ舊水郷とは皆澤國の故に、水澤山なり。

㋕黃葉黃花。程途の時とて、一條に展開する物々全眞なり、古歌に「なにとなく心ぞとまる宮城野は、花のいろ〳〵虫のこゑ〳〵」と、みなのものが便ち異麼（そういうよう）には、此の如く說體現成のときどうでござると。

㋖掘地深埋。虛堂は之を把住して、生死煩惱にからまつてゐるから、地を掘りて七尺埋めんと、僧の見處を招く。

㋗柳栗橫擔。異麼（さやう）ならば匝遍仕りますでござりませうと、柳栗は栗に似た木にて、支那ではよくこの木を杖に用ふる、この一本の杖を擔ひて、千峰萬峰、奥深き山の中に入りて、白雲を友として宇宙の美觀を讚美しやうと云ふ意

㋘露紳濕鞋。秋の露で、濕ふてわらぢが重たい、まだ〳〵足が重たい。

㋙若芳餌。問はずんば知らずとなりよき餌を以て釣を垂れたればこそ、碧沼湖水の深いことがしれた口を開いて問へばこそ、法海の甚深がしれた、芳餌は學人に、湖沼は虛堂和尙自らに比す、しかし虛堂は便ち喝して「くそぬかせ」と、直下に那箇の消息を示さる。

㋚一葉落。桐一葉落ちて天下の秋秋をしると、蓋し聰明の故なり、眞淨の語なり。

㋛認奴作郎。これは下語である、ちやうど下男をつかまへて檀那とするやうなこと、若し聰明を取らばとなり。

㋜一塵起。これは洛浦和尙の語。雲門錄上に見ゆ、これは頓機なり、一點の塵があつても、地が包含されてゐると云ふこと、宇宙の眞理なり。

㋝猶有跡在。かやうに頓利頓發なるも猶ほ蹤跡の在るあり。

㋞秋のはじめ夏の末、これより潤山の語。

㋟萬里無寸。草一葉、穀が一とめもないところにむいて行け、これは潤山の示衆をこゝに出して云ふ、この錄の櫪山後錄に見ゆ、正位なり、正中來なり、掃蕩貧窮底。

㋠乾茅引火。これは習氣の滅盡せざるに喩ふ。無寸神の本地を認む、同氣相應の義、枯れたかやには火はつきやすしと。

㋡出門便是神。これは潤山無寸神の代語、石霜の語、建化門爲三富貴。「衆中至なり、門は建化門なり、富貴底なり。

㋢見人富貴。鬼家の活計なれば、酡酒を認むる故に、こゝに位がある。衆中到なり、人の富貴を見ては、常によろこぶべしと、嫉妬や瞋恚の心を生ずるなと、之を猛火のやくに似させるなと、石霜冷地に此の語を下す、大いに嫉妬を生じて瞋恚を發するに似たり、この兩句は古語なり。

㋣恁麼恁麼。さうだ〳〵と、物を肯定することば、支那の宋時代の俗語である、瓦礫も光を生ず、恁麼は建立、これほ罪なり。

㋤四路茫然。上の一葉落ちてより以下の古語を擧げて著語するなり、眞淨、洛浦、潤山、石霜。

㋥一時拈却。拈却は掃蕩、ひとくるめにうちやつてしまふ。

㋦不恁麼。さうでない〳〵と物を否定することば、唐宋の俗語である。眞金色を失ふ、不恁麼は掃蕩、これは奪なり。

㋧九旬功用。九十日の骨折も、悟未悟透不透も、今宵は結算の金拂なり、これは不恁麼を以て試驗する也。

㋨十洲三島。これは四海九州、あすからは、心のまゝに、いづくなりとほしいまゝに遊べと、十洲は海外、諸國の附く所、一には祖洲、二には瀛洲、三には玄洲、四には長洲、五には炎洲、六には元洲、七には生洲、八には鳳麟洲、九には聚窟洲、十には檀洲、三島は蓬萊錄に見ゆ。

㋩鷹蕩天台。鷹蕩は浙江温州府にあり、此の山天下の奇秀。谷蹇うして峰巒めり、谷に十八寺を列らぬ同じく衢州府に天臺山國清寺、天封寺等の名刹あり、高野山へまゐらうとも叡山へ上らうとも、それはかまはんと、解夏請暇分散底なりと。

㋪還我九十。又作麼生、雲門大師が道はれたやうに、汝等が分散し去るに任すと雖も、今夏の中の所得如何、若し無所得ならば徒に佛飯を費したるなり、さあおれに九十日の飯代をかへせ。さあどうじやと。

㋫黃檗。この語は臨濟錄の行錄に出づる語なり。

㋬不是河南。珠云く、「一顆の明珠じや」と。

㋭檗便打。珠云く、「駕三奥青龍」。

㋮約拄棒。臨降は黃檗のもちし棒をひどらまへて、一掌は手のひらでびつしやりと一つまいつた。「此れは是れ臨濟打斧之拳なり、「たゝかせぬとは出來したりな」と珠はいへり。

㋯呵呵大笑。おのれ檗ぢやくものめと、「是れ證明か嘲笑か」珠は云へり。

㋰百丈先師。百丈は黃檗の師、「その傳來の禪板と拂子とを侍者にもつて來い」と、これは臨濟を印可をしてやるに依つてとなり、拂子は臨濟錄には几案に作る、これは付法の信證なり、禪板ば佛制には倚板と云ふて、除勞の爲に當ふることを許さる、そのつくり方は三尺ほどの板にて作る、今は除眠の具とはなり、叢林に用ひてゐる。

㋱將火來。臨濟はなんの禪板の拂子のと、なんのみたくもない、なんの印可のじや、火でやいてこまさ

出でゝ辭せば勞脊に便ち棒せん。何が故ぞ、㊐寧ろ堂上に苔生ずべくとも、㊑終に人を引いて艸に落さじ。」

上堂、擧す、雲門因に僧問ふ、「如何なるか是れ㊀超佛越祖の談。」門云く、「㊁胡餅。」師云く、「㊂弓を傷らるゝの鳥は、曲木を見て高く飛ぶ。人あり、雲門に見え得ば、㊃善く我が爲に辭せよ。」施主、田を捨して、㊄達磨忌を建つる上堂、「達磨大師、汝諸人の㊅飯を喫して鼻孔裏に向ひ去らんことを恐る。所以に㊆得得として西天自り來つて、既に見得分曉せしめ了つて、還た西天に復り去る。今道人、㊇劉善富といふものあり、路不平を見て、膏腴を捨して常住に入る、年年此の日に於て供を設けて、他の㊈鼻孔を穿たんことを要す。㊉今第一供に當れり、㊋旦くうと、火をもつてこいといへり。

㊌天下人。世間の人が、臨濟は黃檗の直傳ではあるまいなどゝ云はんときの證據に、此の禪板や拂子を見せたならば、信を天下に取らんとなり。

㊍切投暗合。機機相投合すること、黃檗臨濟の二大士が、明暗等の諸處に於て、師資の道が互に相呈露する。

㊎爭奈久而。どうも、しかたがない、末世に成りて、烏焉馬となりて、にせが澤山できてはと。

㊏有僧出辭。この寶林が處で僧がありて、けふ請暇をするものがあれば、せなかをくだけるほど、棒でぶつてやるに、何が故ならばと。

㊐堂上苔生。珠云く、「此れは大事の拈語じや、なくてならぬ子細あり、其の故に虛堂の法は今日でも盛んじや」と、これはたとひ法堂の上に艸が一ぱいに生えても、無雜作には印可はせぬぞよとなり。

㊑終引人。「今時は法がおとろへて、東道西說する故に、特地にことさらに全提し、之を救はんと呪するなり」と龍溪は注す。

㊒超佛越祖。佛も越し祖師も越した談話で、絕對も相對も超越した說はどうでござると、佛臭くない祖師臭くない御談をうかゞひますと。

㊓胡餅。白胡麻饅頭なり、一つどうです、これも佛臭いかと餅ともかく、支那では外の皮に白い胡麻をつぶした饅頭を製するが是なり、不立文字と口さきばかりでは面白らござらぬ、實際社會に於ての有樣や思想界の趨勢は、屁理屈ばかりでは滿足は出來ませぬ

道へ者の老子還つて來るや也た無や。」拄杖を卓して、㊎金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る達磨㊏初忌の拈香、㊐六宗の執を破して、㊑道五天に被らしむ。㊒二祖の疑を斷つて、㊓光華夏に流ふ。㊔以て齒を擊たれ毒を服することを致す。㊕何ぞ斯に由ることなき。言ふことを休めよ、㊖隻影流沙を渡る、㊗熊耳峯前月晝の如し。㊘瓣香杯茗、遺音を追慕す、㊙一念萬年、㊚眞風墜ちず。」

上堂、擧す、黃檗、衆に示す、「汝等諸人、盡く是れ㊛噇酒糟の漢、與麼に行脚せば、何れの處にか今日あらん。㊜還つて大唐國裏に禪師なきを知る麼。」時に僧あり、出でゝ云く、「只だ諸方の徒を匡し、衆を領するが如きんば、又作麼生。」㊝檗云く、「禪なしとは道はず、只是れ師なし。」

㊀超佛越祖の談。門云く、「㊁胡餅。」師云く、「㊂弓を傷らるゝの鳥は、曲木を見て高く飛ぶ。人あり、雲門に見え得ば、㊃善く我が爲に辭せよ。」

㊄達磨忌。十月五日の達磨大師を御祭する法要を建立するなり。

㊅飯を喫して鼻孔。達磨さん皆のものとの問なり、碧岩の七十七則にも出でゐる公案なり。

㊆傷弓之鳥。あらおそろしの胡餅やなー、これは史記かなんぞに出でゐる語なり、「胡餅の下で悟つたと聞いても、身の毛がよだつ」と珠は云へり、「擧動有レ禮、曲木の下を過ぎてわしりて之を避く」と宋の徐伯珍はいへり、雲寶も「超談禪客問偏多」と頌せられた。

㊇善爲我辭。これは論語の雍也の篇にある季氏と閔子騫との問答にある、使者をして善く己が爲に辭せしむるを云ふ、龍溪は「今此の話を聞いて見ゆることを欲せず」と註す、珠長老は其の胡餅、とんと望みがござらぬと云ふ。

㊈建達磨忌。十月五日の達磨大師を御祭する法要を建立するなり。

㊉今當第一供。今日は御祭の始まりなりと。

㊋若老子。者の老子は達磨大師が還り來りて、供を受けめさるゝや、そこで虛堂は拄杖をぼが、只だ敎義に依りて悟らんとして飯を食ふに鼻に飯を食ふことを氣の毒に思召されてとなり。

㊌得得。わざ〳〵西天からどざつた、それは支那には大乘の根器ありと知りてなり、既見得分曉了とは支那では二祖惠可を始めとして皆のものをして法を傳へしめ。また故鄕無しとおかへりになつた。

㊍劉善富。大樓越がありて寶林寺の常住の太平でないのを見て、捨二膏腴一は上田を捨施して、常住は棗所に入る。

㊎穿他鼻孔。他の鼻の孔を穿開し、氣息を通ずるの義、他とは祖師に差排するなり。

㊏若老子。者の老子は達磨大師が還り來りて、供を受けめさるゝや、そこで虛堂は拄杖をぼ

師云、「㋐箇の些子の說話、蹉過するもの多し。㋑眞點胸の道く、㋒霧豹毛を澤しうして、未だ嘗て食に下らず、㋓庭禽勇を養つて、終に人を驚かさんことを待つ。㋔也た只だ其の士を養ふの心を知つて、㋕死灰裏の火蛇の面を燒くことを知らず。㋖透得せば親しく黃檗を見ん、然らずんば切に忌む、噇酒糟の漢の處に向つて會し去ることを。」

冬至小參、僧問ふ、「㋗文殊は是れ七佛の師、「㋘甚に因つてか女子の定を出づること得ざる。」師云く、「㋙家鬼祟を作す。」僧云く、「㋚罔明は是れ下力の聲聞、甚に因つてか却つて出し得る。」師云く、「㋛半幅全封す。」僧云く、「㋜不落因果、甚に因つてか野狐に墮す。」師云く、「㋝池を鑿りて月を待たざれども、池成りて月自ら來る。」僧云く、「㋞不昧因果、甚に因つてか野狐を脫す。」師云く、「㋟錦に特石を包む。」僧云く、「㋠老觀、僧に逢ふて麵を引く時如何。」師云く、「錢あれば鬼を使ひ得て走らしむ。」僧云く、「㋡魯祖、僧に逢ふて、面壁する時如何。」師云く、「㋢寸艸生ぜず。」僧云く、「學人今日㋣小出大遇といつて便ち禮拜す。」師云く、「㋤腦後に一錐を少く。」乃ち云く、「㋥衣穿つて肘露はれ、㋦戶破れて家殘ね。」㋧否極り泰來ることを知らんと要せば、自然に時あり節あり。㋨衲僧家更更夢を做す、㋩一日、一日を趲得せば是れ好手、誰か管せん、㋪布裩洗ふに懶く、臥單を展べざることを。㋫縱饒ひ㋬十二時を使ひ得るとも、㋭贏ち得たり口邊に白醍を生ずることを。㋮寶林與麼の告報只だ淨潔の毬子を打す。㋯和泥合水して、物と

んとついて、達磨來也と。

㋐箇の些子　なくそが結構でも、眼へはいつたならば眼病となると、龍淡は「認取せば不是なりとの義」を註す。「達磨が來ても釋迦が來ても、寄せつけんと云ふ勢じや」と珠は云へり。一絲云く、「金屑は佛の言句なり　これを求めて入道の助とせば翳膜となるべし。」

㋑眞點　田地寄進の初めの達磨忌ゆ一供なり。

㋒霧豹毛　六宗之執。これは正宗記や達磨傳に其の國に僧あり、佛大勝と云ふ、六宗を建つ、一に有相宗、二に無相宗、三に定慧宗、四に戒行宗、五に無得宗、六に寂靜宗と、學者之に趨くもの甚だ多し、その徒各千百に下らず」と、達磨一一其の執着を拆破す。

㋓庭禽勇　五天。五天竺中に單傳心印の妙道を光被せしむ、これは西天の事迹なり。

㋔也　二祖之裔。それから二祖惠可大師の安心等なり。

㋕死灰裏　光流華夏。見性成佛の光明が華夏乃ち支那中に流布すこれは支那の事跡なり。

㋖透得　擬齎服毒。傳說に達磨が支那に來りて、流支光統等の諸法師と論議す、法師等、論に屈す、偏局の量を以て自ら堪任せず、當門の兩齎をうちかくと、これは傳說に止まるといふこと、服毒のことは、第二忌の語に見ゆ。

㋗何莫由斯　何莫由斯。この本分の道に由ることなきが故に、此の蘇を受け玉ひしなりと。

㋘隻影流沙　隻影は獨身をいふ　流沙は沙州の西八十里に在りその沙、風に隨つて流行す、故に流沙と云ふ、肇者は樂の大通元年に熊耳山に葬る、其の後魏の使宋雲といふもの、西域より歸る、達磨と葱嶺に相過ぐるときは、その獨隻履を携へて威儀を備へて征くを見ると。

㋙家鬼祟　熊耳峰前。熊耳は鄭州で、河南省の中の少林山五乳峰、嵩山等列立するなり、「眞僧の面目、儼然として明白なり」と龍溪は註す。

㋚罔明　瀉香杯茗。それで張恩の爲め一ひらの香を炷き一杯の御茶を備へてと、其の微供を謂ふ　罔は切れなり、茗は茶の芽なり。

㋛半幅全封　追慕遺音。遙に其の德音を欽み慕ひ奉ると。

㋜不落因果　一念萬年。念は刹那、此に念と譯す、千古萬古の心、今古變らぬ。

㋝池を鑿りて　眞風不墜。一念萬年、終に宗旨遺風は、どこまでも地におちずとこれは祝語のつもりで虛堂がいはれたるなり。

㋞噇酒糟漢　これは唐宋時代の俗語で、圜悟の評唱に「唐の時愛して人を罵しるに噇酒糟漢と作す」といつてゐる、善意で人を罵るの意である、日本の俗語、「さかしほに酔つたやつ」と云ふに似てゐる。行脚は諸方を徧歷すること、黃檗が座下の禪僧達に向つて、お前達は「さかしほねぶり」と云ふやつなり。あの寺に百日この寺に五十日と方方歩きまはつてばかり居るが、そんな乞食雲水は何時までたつても悟りの一つも開けるやうなことはない、今日あらんとは安心立命乃ち立脚地は何處に行つたつて、手足を安ずることが出來やうか、伸ばすところが出來るものか。

㋟大唐國裏　大唐國裏。この大唐國中に、參禪の師家などを尋ねても一

人もをりはせぬぞよ、それがお前達には分らぬか、大死一番底の涙でなくばと叱りつける、すると一人の僧が飛び出して、現に大唐中に處々方々に陣を張る師家が澤山ござります、あれはみな大禪師ではないのですかと。

(ク)不道無禪。いや禪がないとは言はぬが禪は天地間に充滿してゐる、目前に露布して居るが、唯だないのはその禪を敎へるよき師家なしと。

(ヤ)些子說話。この大事のはなしは蹉過するもの多くして、あやまるものが澤山なりと、やりすごすことしくじるとも失敗とも譯してよい

(マ)眞點胸。翠巖、可眞は慈明圓に見えて來りて、爽氣逸出、機辨迅捷で、氣諧方を壓す、人眞點胸と稱す。

(ケ)霄豹澤毛。この亦は興聖錄にも見ゆこれは眞の衲子は長養聖胎で、容易にいかな〳〵餌はみをはせぬ黃檗が爲人手段は心切なりとのことを比して云ふ、把住底なり、「眞胸點は黃檗の老婆心切なる、大用をば知らぬ」と戒抄に見ゆ。

(フ)庭禽發勇。靈禽蛩ばす鳴かずたり逞かれ早かれ、終始の處に世界國土の人を驚き動さんことを待つてゐること、黃檗が氣を養ひ物を隱して居るを云ふ、これも把住なり

(コ)也只知。これから以下虛堂の評、只だとは、眞點胸は發士の心で、衲子をそだてることは知りて居るがと、翠岩は語意を拈破するなり言ろは翠岩は只だ黃檗の自ら雄機を養ひ得るを知りて、這の僧をして、冷地に禪中の師に見えしむることを知らずと。

(エ)死灰裏。水がめから閻魔大王の髮に火がついたことはしらぬ。死灰はひえきつたはひの其の中に火蛇は火のもえ上るなり、かほを燒くのもしらなんだ、これは禪の中に師のあることを知らずとなり、「大悟の端的を表するの語なり」と龍溪は註す。

(テ)透得親。黃檗の示衆や虛堂の評唱をばなりと、死灰裏のところを、見透さにや、まのあたり黃檗には御目にかゝれまいと、然らずんば乃ちさうでなくては切に忌む、いや〳〵ながら嗔酒糟の漢の處へ行つてしまへと、「一向に呵罵の處に就いて領會すべからず」と龍溪も註してゐる。言句の上に向つて會するなと云ふ心なり、あながち嗔酒糟の處にあらずとこの話は碧岩の十一則に見ゆ。

(ア)文殊是七。これは普超三昧經に云く佛の言はく、「我れ今佛身を得る皆文殊の恩、本是れ我が師、過去無央數の佛、皆其の弟子、當來の者も亦これ恩力の致すところ、文殊は即ち佛道中の父母なり、爾時衆念へらく、文殊佛前に在りて、何ぞ成佛せざる耶、佛の言く、文殊は深く善權に入りて衆生を化す故に道をば未だ取らず」と。

(サ)因蕾女子。文殊が女人を三匝し、指を鳴すこと一下す、そこで托して梵天に至りて其の神力を盡せども、而も出づること能はず、世尊云く、「たとひ百千の文殊なりとも、亦此の女人の定を出づること得じ」と。女人の定とは業識の正定なり。元來無作の妙覺の位に近さことなり。神通力の及ばざるところなり、それで世尊はたとひ百千文殊でも、智見を以て出さんとせば出し得まじと、古則にある女子出定なり、無門關に出づ、參照せよ。

(キ)家鬼作祟。「家の鎭守、虛堂門下の大事じや」と珠は云ふ、女子の自作自受なりと、女子の定相を表す或抄には「家の先祖などが鬼と成り、却つて祟るなり、文殊は大乘なる故に、大乘が祟る」と。

(ユ)罔明是下。罔明は頌古の部には委しく出づ、四十二位の初位を下方と云ふ、十地の初めの觀喜地なり初心の菩薩なり、世間から見れば何の事か分らぬが、遂に佛は罔明に勅して文殊のするやうに、女人の前に於て指を鳴すこと一下す、女人に立ち去れと云ふ、女人は是に於て定より出でたが、たゞ出でよと云ふたので、出たまでよ、別に何でも心持も無きことなり、罔明の無智と女人の業識と流通するなり、自然の時節なりと、是れが正定は是の如く見るべきなり、白隱の歌に「きかせばや信田の森の古寺の、さよあけ方の雪のひびきを。」

(メ)半幅全封。半幅の紙を以て全くの封皮と作し露はさゞるなり小乘の罔明が女子の小定を出し得るが如し。

(ミ)不落因果。これは百丈野狐の話として、やかましい公案である、人間ではござらぬ、過去の迦葉佛のとき、釋迦已前にこの百丈山に住してゐましたものなり、その時、ある學人が大修行底の人は還つて因果に落つるやと問ふたとき、私は不落因果と云ふたその罰で五百生野狐身に墮しました。なんと、和尙さまどうぞこの野狐に代りて一轉語を與へ玉へと。

(シ)鑿池待月。「これは野狐心にたとふれば、受生の端的を云ふ任運受生は月の池に沈むが如し、求めずして殘勝至る、是れ自然相應の境界今墮を以て相應の順境界と作す頌古の部の圓悟の則の如し」と龍溪は註す。

(ヒ)不昧因果。百丈和尙は不昧因果と仰せらる、中々因果歷然じやぞと也、只だ凡夫の因果に落つるのとは別なり、凡夫の因果は因果に繫留す、善知識の因果は因果に繫留せられず、因に落つるかとすれば果に果に落つるかとすれば因に、玉の盤に走るが如し、生死岸頭に

俱に化する底あること莫し麽。近前來、我れ儞を識らんことを要す。」良久して、拄杖を以て畫して云く、「㋕將に九仞の山を成さんとして、一簣の土を進めず。」

復た擧す、㋖明招衆に示す、衆纔かに集る。招云く、「㋗者裏風頭稍硬し、且く暖處に歸して商量せん」といつて便ち下座す。衆隨つて方丈に至る、招便ち打つて云く、「纔かに暖處に到れば便ち瞎唾を見る。」師云く、「㋘喑嗚叱咤㋙萬人氣索くることは、㋚則ち明招なきにはあらず、㋛只だ是れ未だ甲を棄て兵を曳く者あることを見ず。㋜同死同生底あること莫し麽」といつて、喝一喝。

次の日上堂、「㋝寂寥の景、㋞清白家に傳ふ。纔かに㋟萬緣に應ずれば、石人掌を拊つ。㋠地天泰を明め得れば、吉にして利あらずといふことと無けん。然らずんば、㋡峋嶮峰頭神禹の碑。」

㋢天基節上堂、「㋣風に磨するも劫石堅うして猶ほ潤ふ、㋤雪に傲つて孤松韻轉た青し、㋥四海隆平にして煙狼靜なり、㋦斗南長く見る老人星。」

臘八上堂、「㋧山に入ること深からざれば、㋨見地脫ならず、「㋩漆桶を引き得て、㋪頭を排して忘想すること歇まざらしむ。寶林、㋫箇の見處あり、只だ是れ說かず、何が故ぞ、㋬臘月苦寒にして風雪吹く、急急に身を抽んずるも早く是れ遲し。」

上堂、㋭僧問ふ、「雪千山を覆ふ、甚に因つてか㋮孤峰不白なる。」師云く、「㋯龍王、多少の風をか消得す。」僧云く、「㋰大小大の虛堂、今日失

於て大自在を得と云ふも同じ無因果と見れば空見なり、惡見なり、故に野狐身におちるなり、こゝで不昧因果はうけたまはりて、野狐身を脫して死んだ、あくの日僧の亡者の式を以て禮葬をせらる。

㋱錦包特石。特は大石なり、是れ不相應の義、今脫を以て不相應と爲す、逆境界なり、上の答に准じて知るべし、「特は牛の特牛と曰ふが如し」と龍溪の註に見えたり。

㋲老觀逢僧。烏石山靈觀禪師は黃檗希運に嗣ぐ、麵はうどんこ引きては引きのばす時はどうじやと、或僧が參じたとき麵粉を引きのばして藥石に雜水にて入れようとて之を示す僧便ち去る、觀暮に至りて、小師(こぞう)幃に問ふ、「適來(さき方)の僧はどこへいつた小師曰く、「あの時いつてしま

いました、」觀曰く、「是は即ち是、祇だ一纔を得たり」と。

㋳有錢使得。放行如意なり、珠云くやかましいことを云ふなやい錢さへあれば、鬼でもつかふ」と、これはなあ道德さへみちてあればなり、その受用底ばかりしることはならぬと。

㋴魯祖逢僧。魯祖山の寶雲は馬祖に嗣ぐ、この緣は頌古の部に出づ、こゝには略することにする。

㋵寸艸不生。把住枯心なり、或る抄に「面壁は把住、還つてこれ放行の義なれば、故に寸艸不生じや、」「くそのやくにもたゝん」と珠長老はいふ。

㋶小出大迴。小出はちよつと出てなり、大きな御厄介さまゝありがたうと禮拜する。

㋷隔後一錐。一棒を放つなり、隔後はうしろから、一錐は一

棒少はゆるす與へてくれんものぞと、禮拜をおさへた。

㋸衣穿肘露。延福錄の穢を提へ肘を見るの類、徹骨の貧窮淨盤盤寸絲を挂けざる底。

㋹戶破衣殘。皮膚脫落し盡して眞實頓に現ずるを以て一陽來復に准ずべし、破家散宅の時節なり。

㋺否極泰來。否は陰の否塞、泰は陽の通泰、天地否極、地天泰、これ剝して一陽來復の謂なり、小去大來と同じ、珠云く大死一番骨を折るときは夫の地天泰の卦じやと。

㋻更更做夢。更々云々はよいから朝まで、ぐう〳〵と大いびきのてい。

㋼一日纔得。纔は散走なり、走過なり、一日ぐらしのこと、一日に一日だけのことをかせぎ出すなり、却て閑事の心頭に掛かる、なくんばこれ好手と無事でよい。

㋽布裩懶洗。この二事は報恩錄に見ゆ、それにはかまはぬ〳〵、精をだせ、玉泉の故事と鏡清の故事となり、誰か節せんは關に任するなり。

㋾使十二時。たとひ一二時中に使はるゝと使ひ得ると、これは趙州の語を引く。

㋿贏得口邊。かち得たりはとりえとするの義なり、かちにして居るなり、口のあたりに白い饌が生きる、不言の義なり。だまつてゐるが、いつちのとりえなりと、十二時を使ひ得ると云てもなり。

(ア)興慶告報。この寶林がかう云ふも只だ纔を出せと云ふことときれいな大手まりをもてあそぶ、淨躶々赤酒々の處を愛するに比す。

(イ)和泥合水。和光同塵なり、珠云く、「者箇更々做夢、日々走

作する底を超出して更に高きこと一重なり、偶に化する底と無事底があらんとはなり。

カ 將成九仞。まあこちらへ來い、我は儞等を試驗しようとおもふてゐる、とやゝ久しうして主丈で、一まはりとんとやつてなり、仞は八尺を云ふ、七十二が九仞か、さうではない、大きな山なり、一簣は一ともつこの土をもちあげもせぬこれは衆を警策する爲に云はれる。言ふは山成りても但だ一簣を少くその止むもの、吾れ自ら止むのみ「蓋し學者自ら奮ひて息まざるときは少を積んで多きを成す、中道にして止むときは、前の功盡に棄はと龍溪は註す」「この語は實に絕唱驛々と珠は云へり。

キ 明招。名は德謙、羅山閑に嗣ぐ、閑は嵩頭蓋に嗣ぐ、德山四世なり。

ク 者裏風頭。きびしい者裏はおれのところ、禪堂か法堂かを指すならん、寒風が稍乃ちち〳〵かたい

强さで、たまらぬ、またぬくい處の方丈へうつりて商量をしようと云つて、法座を下られた、大衆はその方丈へついてゆくと、招はとんと拄杖をついて。ちよつとぬくいところへきたと思へば、はやぐう〳〵ゐねむりをすると、是れは大衆は未悟の處にたとへて云はれる也。

ケ 喑嗚叱咤。嗚は唖に作るべし、大いにしかることなり、史記の項王喑嗚叱咤千人皆廢と云ふが如し閻魔王の怒りうなるやうな、うぬめにくいやつと憤る、喑嗚は虛堂の作用なり、叱咤は明招の機鋒。

コ 萬人氣索。氣を失ふて、おそるゝことといきもえせぬこと大活機用は歇し難き也。

サ 則不無明招。此の如き大活機用は明招に於て見るべしと。

シ 只是未見。なさけないことには、其の威に觸るゝものなし、棄甲曳死兵とはよろひをなげすて、戎器をすてゝ敗走するの義「明招がうなる下に、煩惱も菩提も迷悟も打ち捨てゝ仕舞ふものがない、むだ狂言じや」と珠長老は云ふ。

ス 同死同生。「明招が知音相應底なり、喝一喝と虛堂自ら知音と爲る底、この金剛王寶劍の喝は知音底の機用を示す」と或る抄に云へり。

セ 寥寂之景。群陰剝盡して、又命根盡き大死一番し、蘇息し來た上なりこれは世緣の闌熟を杜絕してとなり。

ソ 清白傳家。清廉潔白を以て吾が衲僧家に傳はるなり、祖々傳來なり、むまみがない、無欲ですりきつたところなり。

タ 脆萬緣。無心にして緣に應ず、全く世累なしで、石人も掌を拊ち露柱も點頭して稱賞す」と、珠云く、「面前六塵の諸法に少しもさへられざるときは、石人も拊掌をよろこぶ」と。

チ 明得地天泰。一陽來復なり、陽明の智光を回復するときは、則ち陰暗の惑障、自ら剝盡す、故に吉無不利なり、地獄も天堂もと。珠云く、「面前了了分明なれば、何でもかでも、吉無不利じや」と。

ツ 峭嶮峰頭。然らずんばさうでなくばなり、衡州府の峭嶮峰は高一千五百丈と云ふ高山なり、別名は南嶽といふ、これは禹が天長地久、國泰民安の八字を刻める碑あり、此に云ふは長劫久遠須く修練すべきを云ふ、方語無分曉と云へり、字が磨滅してよみにくいから、この方語があるものなり。

テ 天基節。理宗の降誕正月五日。

ト 風磨劫石。風磨するは寶祚の長久なること、風が(劫石はごつ石ともいふ)因きことが劫石をする如くに堅固で、石のせいが、つや〳〵してゐるやうに、御日出度いと申し上げるなり。

ナ 雪傲孤松。萬年の松を以て聖躰の寶算にたとへ雪が松におもるやうにいさざきよさゆゑ、風がふけば松風が韻く、その音が轉た胄しとは其の堅固不變を表していふ。

ニ 四海隆平。天下中が盛隆太平で、煙魚はいくさののろしもあがらず靜謐であるゆゑなり。

ヌ 斗南長見。南極の壽老人の一星は天子の御寶算御長久に比し來る。

ネ 入出不深。出家、此れが大事なり、重々無盡、百煉千鍛。

ノ 見三不脫。成道、悟りなり、見地が悟うては煩惱の臭みも菩提の臭みもとれにくいと。

ハ 引得漆桶。漆桶は無明にたとへるもの、わからぬものなり、後代の宗習の兒孫なり。

ヒ 排頭忘想。排は列で、つらねてかたばつしから、定坐縱心の忘想がとれぬ。

フ 有箇見處。賓林は釋迦のはじすゝぐことを知りて居ると、只是不說とはこれが不說は見處の端的なりなぜならば。

ヘ 臘月苦寒。即今はおしつまりて、しはすのことなれば、風雪の苦みにたへられぬ、愈々に身を抽づるも、早くこれ遲じと、にはかに身をおつたてゝ方丈にかへるもはやこれ、遲くなつてしまつた、この故に說き出す間がないと其の意味は別に長し」と龍溪抄にあり。

ホ 僧問雪覆。これは僧がむかし曹山本寂禪師に問ふた、答へて云く、「須らく異中異あることを知るべし」云く、如何なるか是れ異中の異、」答へて云く、「諸山色に殫せず雪がどのやまもこの山も一ぱいつもりしにと。

マ 孤峰不白。一つの峰ばかり黑いのであらうか、なぜなればと。

ミ 龍王多少。珠云く、「雲を拏ひ霧を攫むの勢あり」と、曹山と云ふ人は、すさまじい八大龍王を尻にひつしいて、大雨小雨をふらせる、風は威風なり。

ム 大小大。さすが、さばかりのなど云

利。」師云く、「㋛手臂終に外に向つて曲らず。」僧云く、「㋜普化木鐸を搖して、空に騰つて去る。」未審し甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「㋝三九二十七。」僧云く、㋞畢竟甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「㋟人の屎橛を咬む、是れ好狗にあらず。」僧云く、「學人今日、小出大遇」といふて便ち禮拜す。㋠師云く、「窮鬼子。」乃ち擧す、㋡百丈因に僧問ふ、「如何なるか是れ㋢奇特事。」丈云く、「㋣獨坐大雄峰。」僧禮拜す、丈便ち打つ、師云く、㋤百丈は故に是れ大機大用、若し㋥劍手相酬ゆるに非ずんば、㋦幾乎ど落節せん。」

除夜小參僧問ふ、「舊歲送るに去らず、新年迎ふるに來らず、新舊本無情、㋧去來誰か擬すべき。」師云く、「㋨門前の石敢當。」僧云く、「只だ舊歲已に去り、新歲已に來るが如きんば、衲僧家、還つて寒暑の所遷を被らざる底あり麼。」師云く、「あり。」僧云く、「那箇か是れ不遷底。」師云く、㋩「增下の雪師子。」僧云く、「㋪舊に依つて跳不出。」師云く、「㋫蒼天蒼天。」

乃ち云く、「㋬寒暑不到の處、㋭露柱證明、㋮歲月改遷なし、㋯道人眼活す。㋰所以に一年三百六十日あり、年頭從り數へて年尾に到るまで㋱未だ嘗て一日も、一日の用を作さずんばあらず、今日㋲正當臘月三十夜、㋳將に謂へり、㋴寒灰餞を發し、㋵枯木重ねて榮えんと。子細に思量するに及んで、㋶元來前頭大いに雪の在るあり、寶林與麼の告報、㋷自ら㋸窮厮煎じ、㋹餓厮吵すと道ふことを知る、諸人の與に㋺箇の鬪熱子を做すべきなし。何が故ぞ、㋻曾て霜雪

ふ義多少の人と云ふこと。竺仙梵僧に云く、「大小大は北人人を罵る發噱の話なり、」「大小の德山と嵩嶽の云はれしごとく嘆德の義なり、小の字には義なし、この虛堂と云ふのは、いかな〳〵虛堂も褒揚せり、今日失利とは貶抑なり、敗軍なり。

㋷手臂終。珠云く、「さうさ〳〵しかたがない、老僧住持事繁しとの意に同じ、」龍溪は「理常に如是」と註す、格外の處は知るまいと。

㋸普化木鐸。これは前に見ゆ、鐸は大鈴なり、普化全身脫去す、祇だ空中に鈴の響くことは隱隱として去るを聞くと、論語の八佾篇に、木鐸の註あり「金口木舌」とあり、未審は不詳のこと。地獄へいつたか極樂へいつたかなり。

㋺三九二十七。「三九は即ち二十七なり。甚の來去の處がある」と龍溪は註す、又の義は鐵橛子、又は去處の端的なりと、此れはいくさの奧の手なり、世上只だ沒滋味に去れ。

㋻畢竟。普化はつまりいづくへ往つたのだらう。

㋼咬人屎橛。「人の小便をかぎまはるやうなやつは、よい狗ではない、どこまでも跡を追つてくる、それより三九二十七を見よ」と珠は云へり。

㋽窮鬼子　龍溪は「與麼の禮拜は餘心の窮鬼子なり」と註す貧乏がみめと云ふこと、とりえはないと、小餓鬼目なり。

㋾百丈。百丈山は江西省南昌府にあり、吳源の水倒出して、千尺を飛び下る、故に百丈と號す、其の勢、羣山に出づるを以て、又大雄山と名づく、下に大智院あり、百丈は山の名で、大智は寺名で、通名は

懷海、唐の支宗開元八年に生る、日本の元正天皇榮老四年に當る。その示寂は唐の憲宗元和九年、日本の嵯峨天皇弘仁五年である、日本では空海が高野山を開くは弘仁七年である、非常に學者僧であつたことは、百丈清規を襲しられたので知れる。

㋿奇特事。これは今日の言葉でいへば、和尙さま、何かめづらしい斬新なことはございませぬかなり、はいからなことがありはしませんかなり、超佛越祖、別に禪師の大事なことがと。

㌀獨坐大雄峰。百丈は、相も變らず私は獨りで、この大雄山にすわつてゐるとさうすると僧はありがたがつて禮拜をする、それに妙な和尙さまなり、その僧をびつしやり打つ、これは虎鬚をなづるに似たりと古人は評す、實に危險なり、びしやつとせられたも無理はない、拵はなづる、ひつぱるなり。

㌁百丈故是。百丈和尙がわざと大活動のていなりと、これは百丈と僧とはよき出逢でけがもなかつた、大機大用はをしへもらつてはとても〳〵となり。

㌂劍手相酬。「利劍と好手と相得て酬ふ」　龍溪は註す、僧が禮拜はこれ劍手、丈が便打は劍手を以てむくゆるなり、劍手は兵法の手なり。

㌃幾乎落節。落節は俗語のしぞこなひ、幾乎はちかいなり、龍溪は「若し此の如くに非ずんば殆ど節度を落失する也、是れ者の僧を扶助す」と註すあぶない加減で、づんばりとやられん。けがをするところであつたと、「落節と云ふこと

の苦を經で、楊花の落つるにも也た驚く。」復た擧す、北禪、歲除に衆に示す、「年窮り歲盡く、諸人と與に分歲すべきなし。㋺一頭の露地の白牛を烹て、㋻黍米飯を炊ぎ、野菜羹を煮、㋼榾柮の火を燒いて、村田樂を唱ふ。㋽他の門戶に倚り、他の墻に傍ふことを見ることを免る」といつて、便ち下座す。時に僧あり、出でゝ云く、「和尙㋾牛を宰す、甚に因つてか筋角を納めざる。」㋿北禪、帽子を拋下す、僧拈起して云く、「天寒、和尙に帽子を還す。」師云く、「㌀簫韶九成すれば、鳳凰來儀す。」

上堂、㌁毎日蒲團上に妄想す、㌂儞が手を揷む處なし。以をもつて南に奔り北に走ることを致す、㌃鴨の螺螄を呑むが如し。山僧今日㌄聲氣を動せず、儞諸人をして㌅箇の入處あらしめは、本は寶買の上にて揖をすることなり」と方語解に見ゆ。

㋽去來誰擬。人々新舊の去來は知りてをるが、誰がなにものが去來を自由にする。擬は擬議で、思量安排の義なり。

㋾門前石敢當。これは諸人明見の義なり、輟耕錄に「今人家の正門の巷陌橋、道の衝に當つて、俗に云ふつきあたりに則ち小石將軍を立つ、鐫つて石敢當といふ、石敢當といふのは支那の五代時代の力士なり、これは無心去來の當位也つまりいへば門前の石にしつかりと書きある、みてゆけと。

㌀堵下雪郎。きざはしの下のこまいぬ。今ちようど雪剛子がその形に似てゐる、目が出づると、じみ〳〵きえる、此れは千變の上に於て、不遷變底を示すなり、これも諸人明見の義。

㌁依舊跳不。それは日がでると直に消える、未だ所遷底を出でずと。

㌂蒼天蒼天。これは僧の領會せざるを歎息するなり、珠云く「世上一統に皆さうじや、それでは如來の正法は滅絕す、嗚呼かなしや〳〵じや」と。

㌃寒暑不到。寒も暑もいたらぬところは、皆人に具してをるなり。

㌄鐵柱。上の着語なり、大黑柱が證明をすると。

㌅歲月無改。「天地開闢以來、かばりはないと、此の處をけやぶると、眼睛皮ほころびて、領彌を盡す」と珠は云へり。

㌆道人眼活。人々の面目には衰老はない、來機を彈じ縞素を分つこと、此れは提綱の中の肝要のところ。

㌇所以。この二字が下の一日の用までに蒙むる、珠は、「滌一

ん。」良久して、手を拍して云く、「㌈一半は入得一半は入不得。」

上堂、擧す、㌉龐㌊居士、㌋藥山を辭す、山、十㌌禪客に命じて、送つて門前に至らしむ。士空中の雪を指して云く、「㌍好雪片片、別處に落ちず、時に全禪客といふものあり、云く、「㌎甚麼の處にか落在す。」㌏士便ち一掌を與ふ、全云く、「居士且く㌐艸艸なること莫れ。」士云く、「㌑恁麼にして禪客と稱せば、㌒閻老子、未だ儞を放さざること在らん。」全云く、「㌓居士作麼生。」士又一掌を與ふ、師云く、「則ち是れ兩掌なりと雖も、㌔其の間擡あり搦あり、㌕收あり放あり。」

㌖小師㌗供を設くる上堂、擧す、㌘章敬因に小師㌙遊方して回る。敬く、「汝此間を離るゝこと多少時ぞ。」僧云く、「已に八載を經。」敬云く

物の無盡藏」と云へり。

㌍未曾一日。「功用間斷なき也」と溪註に見ゆ、之が來參不到の處を知らんと思へばなり。

㌎臘月三十。結尾究竟の時節。

㌏將謂。「正しく思ふてゐたならば、大いに相違じや」と珠は云ふ。

㌐寒灰發焰。ひえきつた處に春の氣をだす、これは三陽交泰の時節なり。

㌑枯木重榮。かれきも花が又ときさかゆる、この二句は溪註に「皆大悟の端的で、所謂絕後に再び蘇生する底を云ふ」と。

㌒元來前頭。自然智の開發を示すとなり、まだ寒氣はゆるまぬ、さむい十月よりの雪をもつてゐるゆゑ、めつたにはあたゝかにはなるまいと。前頭は前面なり、即ち面前なり、又已前の義にも用ふ。

㌓自知。これ把住なり。除夜の供物なき底の意、闇熱に說破せざるの義、思案も工夫もつかぬと自知した。

㌔覆斷煎。吵は炒に作るが正し 弄さう、熬なり。いるなり、皆迫切の義なり、煎じつめ、あぶりつめなり、貧窮なり。

㌕闇熱子。溪註に「窮と餓と互に急迫の故に、闇熱の分歲を做し難し」と、馳走することはできぬと云ふことなり、丁寧の供養はせられぬと。

㌖曾經霜雪。何ぜなればなり、雪霜にも堪へて身をやつした故に楊の花がおちるのを見ても、びつくりすると。五家七宗の大事に骨を折りてまりぬいてをる故、ちよつとしたことにも驚く、溪注に「闇熱に說破せざるの意也」と。

㌗一頭露地。これは前に見ゆる故に略す、「體鉢現成、妙法蓮

華じや」と珠は云ふ。

㋟黍米飯。きびめしに大根菜のごちそうなり。

㋠燒榾拄火。こけらくづ、ほだの火をたき、村の太鼓でもならしてひなうたでもうたつてと。

㋡他門戶他墻。溪注に「皆是れ自家本具の物、今之を用ふ、他に馳求することを免る」と。

㋢宰牛。牛を料理する、宰はきるなり、牛皮錢と云ふて、筋や角は官へ納むるなりと、御法度を破つてござると。

㋣北禪。智賢禪師、福嚴雅に嗣ぐ、雲門。洞山初。福嚴雅。北禪賢。

㋤簫韶九成。簫韶は北禪の示衆に喩へ、鳳凰は此の僧に比す、示衆がよければ九返まで奏すれば鳳凰來り舞ふて、賓儀をなすと、此の兩句は書經の益稷の文なり、簫韶は舜の樂の總名なりといふ。

㋥毎月。汝等諸人。

㋦僧掃手處。坐禪工夫すと雖も、未だ下落の處を知ずと、磯墩祖山くわらりと打ち破ることはならじ、これは工夫純熟ならぬによると。

㋧鴨呑螺蛳。方語に眼睛突出すと、つらを見れば目玉ばかりひよろりと出て、呑むことも吐くこともならぬ、更に所入なし、かもがしゞみがいや。たにしをのむようなりと。

㋨不動聲氣。音聲、氣息（いき）をもせず、言語造作をもせず、面色をもかへぬ。

㋩入處。悟入なり、見性なり、良久して、手をうつところを見よと。

㋪一半入得。一半入不得、一人の半分は見性悟入するが、一人の半分はえせぬと、良久の鍵的に於て入得不入得を分つ。

㋫鹿居士。衡州の人、儒者なり、後襄州に居る、字は道玄、名は蘊、馬祖に嗣ぐ、鹿居士語錄あり、この話は碧岩四十二則にも出てゐる。

㋬欒山。名は惟儼、唐の玄宗の天寶十年、日本の孝謙天皇天平勝寶三年に生る、唐の敬宗の太和八年、日本の仁明天皇、承和元年に示寂す。

㋭居士。意味から云ふと、處士と同義であるが、處士は仕官せず、風流を友とする儒者など、日本でいふ布衣と云ふと同じ、禪的悟りを開くが居士なり。

㋮禪客。參禪のためにきてゐる坊主たち十名に門前まで見送らせた。

㋯好雪片々。時恰もこれ冬の日なれば、雪がちら〳〵と空中を舞つてゐた、詩人肌の居士はこの雪景色にみとれて空中の雪をさして、どうも美しい雪ですなー、雪片は別々になりてゐますが、決して別々の處にはをちて居ませんよ」といつた。

㋰落在甚麼。その十人の禪客中に一人の全禪客と云ふものが、かしこげに口を出して、「元來あの雪片はどこにおちるのですか」と云ふた。

箇の甚麼をか作し得る。」僧地上に就いて㋱一圓相を畫く。敬云く、「此の外更に有ること莫しや。」僧近前して圓相を畫破して、作禮して退く。師云く、「㋲嚴師好弟子を出す、㋳二林は㋴子を養つて父に及ばず。㋵但だ只だ伊をして大衆に供養せしめて、必ずしも見解を呈せしめじ。何が故ぞ、㋶恐らくは薄禮怨を致すことを。」

上堂、僧問ふ、「㋷露雲、桃花を見て悟り去る、學人も毎日也た一枝兩枝を見る、甚に因つてか悟らざる。」師云く、「㋸血を含んで人に噴く、先づ其の口を汚す。」僧云く、「甚と爲てか㋹玄沙、他を肯がはざる。」師云く、「㋺他は是れ他の屋裏の人。」僧云く、「學人者裏に到つて、大いに㋻胡孫の生鐵を咬むに似たり。」師云く、「㋼儞只管に頭に上り面に上ること莫れ、僧云く、「也た㋽

㋱便與一掌。これを聞いた居士は、何に全禪客の頰をびしやつと打つた、打たれた聲をあらゝげて。

㋲且莫婢婢。草卒のことである何をなさいます、「あまり亂暴をなさつては、承知しませんよ」と云つた。

㋳恁麼禪客。居士は「君はあの雪の落處をもわからずして居て恁麼にして禪客などと酒落れた、生意氣な名を擅いて居る」と。

㋴閻老子。閻魔大王は、とても君をのがすようなことはあるまい、君のやうなうぬぼれはと云つた、今生で禪客が死んだら閻王が云はすまい。

㋵居士作麼。全禪客はます〳〵せきこみ、「居士、あなたは一體あの雪片がどこにおちると思つて、ゐらつしやるのですかとせめかけた、居士は又びしやつと打つておいて云くと碧岩の本則には「打云、眼見如レ盲、口說如レ啞」との話あり、これは君等は眼はあるが無總子の看板じや、開いてはゐても一向知れはせぬ。」盲人と同じ、口は巾着の看板だ、あけたところでも啞と同樣じやと、（雪竇は別にて云く、「初問處但握雪團便打）と、はじめ居士が好雪片々不落別處なんかと、恬つたやうなことを云つた時に、すぐさま雪だまをこしらへて、彼の頭にぶちつけて、あの高い鼻を捏いてやればよかつたものを、殘念なことをしたものなりと、雪團打、雪團打、鹿老機關、沒可把じや、このやうに雪竇自ら頌してゐる、沒可把は把捉すべきことがなし、盡くるの意なり。

㋷有擡有搦。上へあげたり下へ

和尙の委悉せんことを要す。」

師乃ち舉す、㋙雲門首座に問ふ、「㋚山河大地と自己と是れ同か是れ別か。」㋛座云く、「同。」門云く、「㋜一切の物命、飛蛾蟻子と自己と是れ同か是れ別か。」㋝座云く、「同。」門云く、「㋞好好に借問す、何ぞ干戈をもつて相待することを得たる。」師云く、「㋟雲門は見易く、首座は見難し、何が故ぞ。蓋し㋠他は無變異の鄉に坐在せず、㋡所以に同と曰ふ。」

㋢智者和尙至る上堂、「㋣淨餅裏に澡洗し、㋤古檮下に終身す。㋥彼此寸は長く尺は短し、㋦何ぞ妨げん、忝く切隣たることを。㋧相見又無事、㋨來らずんば還つて君を憶ふ。㋩杜鵑啼き斷えて月晝の如し、㋪尋常空しく春を過すに似かず。」

をしつけたり、珠云く「虛堂それはしれたことさ、みたくもないことを云ふ。」と

㋫有收有放。收は奪、放は縱、「一喝賓主を分つの機」と溪はいつてゐる。

㋬小師。梵語には鐸曷羅、唐に小師といふ、受戒十夏已前は西天皆小師と稱す、今は所度の弟子をいふ。

㋭設供。大衆のために施食を設ける、ごちそうを振舞ふ、今時でも臨濟宗の上堂では、この例あり、或は僧、或は俗よりの施主にて設くる也。

㋮章敬。名は懷暉、馬祖道一に嗣ぐ。

㋯遊方。遍參、行脚のことなり此間は師匠敬の下をはなれて幾年になるぞと、已に八年もたちましたと。

㋰一圓相。まん丸い○をかく、敬云く、「この外になにも得たことはないか」と、僧はちかよりて、その圓相をこはしてしまはれた、此の僧は好くでかした、全羅客とは大ちがひなり。

㋱飯師出好。きびしいよき師匠にはよき弟子が出來る。

㋲二林。雙林と云ふこと。

㋳聲子不及。ひともおれにはたやつがないゆゑ。

㋴但只教伊。器量なければしやうが無い、大衆へ振舞でもさせて、不三必是三見解」とは章敬の弟子のやうに圓相を畫いたり、畫き破つたりするやうな見解を呈せしめはせぬと、なぜなればと。

㋵恐薄禮致。このわづかの設供は薄味にして、大衆の悲念を生ぜんことを恐る、珠云く、「設供の一挨拶はない、好き人の多く出來たのも道理なり」と。

結夏小參、「㋷此の事は青天白日の如し、一絲頭許りも、㋸障を爲し礙を爲すなし。自ら是れ儞諸人、㋹智眼高からずして、㋺區宇に墮在す。故に㋻我が竺乾の大士を勞して、期を立て限を立て、㋼病に對して藥を與へて、以て中下の機の爲にせしむ。若し是れ上流ならば、豈に肯て㋽儞が者般の茶飯を受けんや。況んや今夏㋾恰恰に㋿一百二十日なるをや。儞諸人甚麼の處に向てか㌀手を挿まん、若し手を挿む處なくんば則ち笠乾の大士に㌁孤負せん。若し㌂箇の手を挿む處を得ば、期の滿ずるを待つこと莫れ。便ち請ふ、說かん看よ。何が故ぞ、蓋し老僧急に㌃明窓下に安排せんことを欲す。

復た擧す、㌄首山、衆に示す、「㌅咄哉㌆巧女兒㌇梭を擔つて織を解せず、㌈看よ他の鬪鷄の人、

㌉靈雲挑花。この話は報恩錄に見ゆ。

㌊合血噴人。「來問賊意の故に」と、溪注にあり、問端毒氣あり、故に之を抑下する也、悟道などと云ふはけがらはしいことなり。

㌋不肯他。靈雲の桃花を見て悟道の頌、玄沙が聞いて云く、「諦當なることは甚だ諦當。」これは一寸理屈あるやうなるが、未だ徹底して居らぬと、それで敢保す老兄の、猶ほ未徹在なることをと云へり。

㌌他是他屋。一つ家内の人なり他は靈雲、下の他は玄沙、同じく是れ箇中の人、故に時に臨んで拈揚すと、靈雲は大安に嗣ぐ、百丈三世なり、玄沙は雪峰に嗣ぐ、德山三世なり、豈に一家と謂はんや。

㌍胡孫生鐵。沒滋味、解不得の義なり、胡孫はさる、一名王孫、一名猢孫。

㌎具管上頭。胡孫に寄せて禮度なきことを罵る、上頭上面は此は僧の再犯を責む、うぬめはさるがしこくと云ふこと。

㌏和尙委悉。和上さまも御用心なさりませ、あたまからのぼらうやら、面にのぼらうやらと、委悉はがてんすること。

㌐雲門首座。雲門師下にあり。

㌑山河大地。依報、正報なり、これは器世間を問ふ。

㌒座云同。山河の器界は自己唯心の所變の故なり。

㌓一切物命。これは有情、世間を問ふ、共に細蟲に至るまでと。

㌔座云同。物命の根身は自己唯識の所變の故なり。

㌕好好借問。如法(ねんごろ)に問を設けたこと、借問は試に問ふこと、何得三干戈相待」とは如法の答を以て干戈と作す

㋟水牛も也た識らず、㋠咄哉拙郎君、㋡巧妙人の識るなし。㋢鳳林關を打破して、㋣靴を著いて水上に立つ。」師云く、「㋤首山自ら謂へり、臨濟の正傳を得と、㋥却つて野狐鳴を作して、天下の兒孫をして、㋦箇箇拖泥帶水ならしむることを致す。」

次の日上堂、擧す、「㋧應菴㋨師祖、㋩昔日事を當山に謝して、夏を淨明に奇せて、衆に示す、㋪「三十三州、七十の僧、㋫驢腮馬頷、人の憎を得たり、㋬諸方若し羅籠の手を具せば、㋭今日淨明に到るに因なけん。」師云く、「當時の龍象を想ひ見るに、㋮拙孫褊短にして、敢て㋯諸方を貶剝せず、只だ多くは㋰幾州子を得て、㋱暗地裏に他に褒ゆるのみ。何が故ぞ。」拄杖を卓して㋲「君に勸む㋳荊棘を栽うることを用ひざれ、後

其の意。情解すべからず、雲門と首座との出合にて奥ぞこがしれぬ。

㋴雲門曷見。淡注　「也たこれ格外の判を著く」とあり、「首座は同といふ處に、權あり實あり照あり用あり、故にその機を測り難し」と或る抄に云へり。

㋵無變異鄉。なぜならば、まあ俺が押しはかつて見るに、他の首座は無變異、則ち同の鄉（ところ）に坐在せずと、じつとしてはゐぬわい、無變異は佛祖も識らず、正位にも偏位にも居らぬくせものゆゑに、其の意は情解すべからず。

㋶所以曰同。「故に能く同といふに自在なり、別と云はゞ變異なるが故に」と或る抄にいへり、「實に虚堂和尚は此の言句は、雲門宗のちやき〳〵を出した」と珠長老は云へり。

㋷智者。婺州の智者、慶福禪寺の和尚なり、數者と見ゆる金華府にある寺なり。

㋸淨餅裏。此の句は智者の淨潔の操履を述ぶ、淨餅澡洗は故事あり、以下押韻の句なり。

㋹古樹下。これは虚堂が自身の寶林雙樹下に在りて、身形を蕭條するを述ぶ、わしは古るさびた木かげで、條身錬形してゐると。

㋺彼此寸長。彼此は智者と寶林とを謂ふ、寸長尺短は一味無差別の境界なりと、宗旨宗旨に依つて好きことも惡きことも、互に同道一味平等の境界なれば、佛法護持の人と云ふものなり。

㋻何妨黍。なにもさはりもないかたじけないことには、となり合はせなりと、切は近なり彼此共に金華府に在り。

㋼相見無事。互に義理ばつた挨

拶もいらぬ。

㋽不來還憶君。見えねば戀しい、營策高標あり。

㋾杜鵑啼斷。その時の景象を述ぶ、夜話しが過ぎてほととぎすの啼くまでしてゐた、月の明いことは、まるで晝の如しと。

㋿尋常空過。今智者和尚に對して道話を打する故なり。以上四句は押韻なり。いつもの夜話とはちがふて不似なり、空しく春をこえて好き和上に出合つた故、覺えず月の落ちるまで話した、珠長老は「これ軀薄か追從か、めつたほめたばかり乎」と云へり。

㌀此邪。人々具足の面目なり。青天白日とは法々隱藏せず、古今恒に顯露す。

㌁爲障爲礙。本際眞箇、此の如し。

㌂智眼不高。諸人、如來の五眼を具足して居るけれども、手前からくらまして居る。

㌃匾字。楞嚴九にも「色陰の匾字」とあり、性眞を匾局す、故に匾字と名づく、今は道場安居の境界に隱在するを云ふ、火うちばこで年を取つてをるなり、匾字ば和語の「くぎり」なり。

㌄竺乾大士。釋迦如來を云ふ、わざわざ御苦勞をかけてと。

㌅對病與藥。一切衆生の病に對して行の藥を與へる、頓漸秘密不定等の衆藥なり。

㌆香殼茶飯。これつちの食ひのこし釋迦達磨のおせわにあづからん、日用受用底なり。

㌇恰恰。丁度きつかり。

㌈一百二十日。長期也、蓋し今夏は閑餘あるのみ。

㌉揮手處。巴鼻を摸著するの義なり悟處なりいづれの處に向つて會せんとなり、無くんばはもし一句を云ひ得ずんはなり。

㌊孤負。苦勞のかけぞんなり。

㌋箇揮手處。本來の面目を取つてまわす、若しとは佛も足をふみこまれぬ「これが手の揮みやうじや」と珠抄にあり。

㌌明憲下。明憲下は高賓を接遇し、尊宿を管侍するの所、即ち方丈の内に在り、安排は安置なり、和しなほして聽走せんとなり。

㌍首山。名は省念、風穴延沼に嗣ぐ、臨濟三世なり、この示衆は正燈錄にある三首の中の後の二首のみをあぐ、嗣宗の偈の三首なり、汾陽の註あり、之をこゝに出す。

㌎咄哉。しかるこゝ、佛祖にもつらだしをさせぬ。やいと云ふかけどゝ

㌏巧女兒。利口發明のむすめ、汾陽の註に「妙智と圓融と理と」

㌐瀧棱解織。無間の功立せず、不解織は蓋し純無漏相續無間、然して其の功に居らず、大巧は拙の如き故なり。

㌑他闍鶴人。旁觀者かにあしくびをあぐ、功を爭つて自ら傷らず、赤男を云ふ。

㋐水牛不識。全力能く負ひて頭角を露はさず、水牯牛も也た識らずと人の知ること希なこと。

㋑咄哉拙郎。汾陽の註に「素濤條然」と。つたないかな、あはうな殿御。

㋒巧妙無人識。何をさせても機妙なり。大巧は拙の如し。

㋓鳳林關。首山の居らるゝ近くに湖廣の襄陽府に在り、首山は南陽府の汝州に在り、それで隣境なり、汾陽注に「玲瓏恠を蕩盡す」とあり鳳林關の嚴密なるに喩ふ、「究竟解脫する也」と溪注に見ゆ。

㋔著靴水上。汾陽注に「塵泥自ら異なり」と、蓋し究竟解脫の故に、自在三昧を得て活潑々地なること、此の如く他の塵泥に立つものと自ら異なりと也。

㋕首山自謂。「傳法綱要の偈なる故に、これは又どうしたものじや」と疑はいへり。

㋖作野狐鳴。何だかへつて野狐のなくやうにぎやう〳〵と。

㋗猶々拖泥。猶々は人々、拖泥とは人の此の傳法偈を滯着するを恐る故に此の語を拈して著く、拖泥帶水は第二義門に下つて化度するを云ふ、人を引き立つるには、老婆心切、又は大しくじりのことにも用ふ。

㋘應菴。諱は曇華、虎丘に嗣ぐ、臨濟十二世なり。

㋙師祖。虛堂は師より五世なればなり。

㋚謂事當山。この寶林を退院ぜられて、寄二夏淨明一とは寄假は寓なり、淨明は饒州の堯山と云ふところに在り。

㋛三十三州。淨明に聚會する僧が、三十三州より來りて都べて七十員なり。

㋜鏡聞馬領。いづれも人のいやがる火惡口。聞いて佛祖を呵罵する事や方々を貶剝するやで、人に憎まれるの活漢、鏡聞は鹿形異相なり。

㋝諸方若。世間に若し惡剝宗匠、寧命の神符をにぎる人はなり、鏡聞は龍鳳の手段、諸方は諷刺諸方の意。

㋞今日淨明。淺泊顧みず、俺の鏡聞をしてと。

㋟拙孫福短。福は衣の小なり、順隨なり、拙孫は虛堂が卑下して云はれる、福短は智德がせばきゆゑなりと。

㋠貶剝諸方。あちらこちらを是非せぬと。わるくは云はぬと。

㋡得饒州子。三十餘個の人。

㋢暗地裏。どこともなくなり、他には應菴先師に、賽はむくゆにて告報するなり、「應菴よりはまさりすぐれたところがある」と疑は抑せり。

㋣勸君。應菴を指す、又末代の兒孫を指す。

㋤我荊棘。荊棘は必ず六づかしいことを云つてをかしやるが、後代の者は大に難義する、後代兒孫悲二著衣一とは兒孫の虛堂が、今又舊

代の兒孫衣を惹著せん。」

上堂、擧す、㋥肅宗皇帝、㋦忠國師に問ふ、㋧「百年後所需何物ぞ。」國師云く、「老僧が爲に箇の㋨無縫塔を造れ。」帝の云く、「請ふ㋩師塔樣。」國師㋪良久して云く、「會す麼。」帝云く、「不會。」國師云く、「吾れに㋫付法の弟子㋬耽源といふものあり、㋭却つて此の事を諳んず。」國師遷化の後、帝耽源に詔して之を問ふ。源云く、㋮「湘の南潭の北、中に黃金ありて一國に充つ㋯無影樹下の合同船、㋰琉璃殿上に知識なし。」師云く、「肅宗當時、若し國師良久の處に向つて一喝を下し得ば、耽源の㋱坑に墮ち塹に落つることを致すことを免れん。無縫塔を見んと要す麼。」拄杖を卓して、㋲君に勸む此の一杯の酒を盡せ、㋳西のかた陽關を出づれば故人なから

規に習ふは、棘に衣をひつかけられたるものと同じなり、

㋥肅宗皇帝。この話は碧岩十八則にも出づ、肅宗は李唐第八主、名は亨、玄宗の第三子なり、唐の玄宗、肅宗、代宗の三皇帝は、中々えらい佛教信者である、日本では元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁の七帝の在位と同時でありますから、唐でも全盛の時代で享樂主義の太平時代なり、肅宗と代宗とが昔から間違つてゐると云ふこと。

㋦忠國師。南陽慧忠國師なり、唐の西京の光宅寺に住せり、この人は南陽の白崖山に四十年間も隱者生活を送りて居た唐の肅宗の上元年に、帝の請ひを受け、山を出で早速宮中に迎へられて、皇帝の侍僧となりたり、日本の道鏡と同じやうなもなり、當時は少し見識の高い坊さんは名利に耽り人間に戀着するとまで云つて、大事な忠國師を罵詈した位なり、忠は六祖慧能大師に嗣法す、代宗太曆拾年に示寂す、日本の光仁天皇寶龜六年に當る。

㋧百年後。これは肅宗が忠の病を問ひ給ひて仰せられしなりこの需は碧岩には順の字に作る、百年後は死んでのちのこと需はもとむるで、つまり使用するの義「あとにのこされた弟子共は、あなたの紀念を致したものでせうか」と。

㋨無縫塔。立派な三重塔や五重の塔には及ばぬ、土饅頭の墳墓で澤山でありますと、卵形の塔を無縫塔といふ。

㋩請師塔樣。これは帝が無縫塔の形は御存じがないゆゑ、卵形か鐘形か尖字形かと、その形狀を問はれたり。

ん。」

上堂、僧問ふ、「參は須らく㋑實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし、作麼生か是れ實參。」師云く、「㋺歷歷寂寂。」僧云く、「㋩長期已に半を過ぐ、㋥猶ほ冷水に冬瓜を浸すが如し、㋭和尚何の方便かあらん。」師云く、「㋬精精靈靈。」僧云く「㋣趙州、僧に示して、鉢盂を洗ひ去らしむ、其の僧便ち悟る、此の意如何。」師云く、「㋠錢を燒いて鬼を引く。」僧云く、「我れ等粥を喫し了れり也、鉢盂を洗ひ了る也、甚と爲てか悟らざる。」師云く、「㋡甜瓜は蔕に徹して甜し。」僧禮拜す、師云く、「㋢果然。」

乃ち擧す、㋤鹽官一日㋥侍者を喚ぶ、「㋦犀牛の扇子を將ち來れ。侍云く、「已に破れぬ。」官云く、「扇子既に破れなば、我れに㋧犀牛兒を㋨還し來れ。」侍對ふることなし、師云く、㋩鹽官侍者の不在なることを恐る。㋪二林が扇子は、暑月用ひんことを要す、必ずしも侍者を勞することあらず。若し是れ犀牛兒ならば、國師に㋫輸與す。」

上堂、「二林㋬初めより門戶の人に與へて近傍せしむるなし。」亦之を㋭無何有の鄉に置かず。㋮只だ諸人の鐵の土に入つて土と俱に化して、然して後以て發越すべきが如くならんことを要す㋯其の糞を運んで入るものゝ如きんば、㋰吾れ之を如何ともする末し。」

上堂、僧問ふ、「㋱法身病めば色身不安、色身病めば㋲法身不安、作麼生か免れ得ん。」師云く、㋳「口上より著す。」僧云く、色身の病めること故に之れあり、法身作麼生か病む。」師云く、「㋴他の

㋑實參。實參實悟。功用と無功用と深く云へばなり、參中に悟あり。

㋺歷歷寂寂。歷々はあり〳〵とみえること。乃ち權實照用なり、寂々は萬機休罷で、二名一體、更に異時にあらず、珠云く、「ありや燈籠じや、柱じや、こりや胡餅じや須彌山じや」と、「これは修心の要なり、

㋩長久。病んでくるしきときゆゑ、やゝ久しくしてなり。

㋥忖法弟子。これは禪宗では得度の弟子、嗣法の弟子とある後者なり。

㋭耽源。名は應眞、吉州耽源山に居す。

㋬印諸此事。とつくりとよく知りてゐる。

㋣湘之南。湘も潭も川の名で、湘水はその源を零陵の陽海山から發し、潭水はその源を武陵の成玉山から發して居る、無縫塔を形容して云ふ、これは隻手の聲であると云ふのが雪竇の着眼するところ湘水は北に流れ、潭水は南に流れてゐる。即ちこの天下には黃金が充滿してゐる。

㋠無影樹下。この宇宙を無影樹といふ、合同船とは乘り合ひ舟、この宇宙に充滿して居る有象無象、有形無形、有心無心、あらゆるものを集合的に表示したる詩句である。

㋡瑠璃殿上。これもやはり詩人的の表現である。この宇宙を樂觀的方面から形容したもの知識とは知音とか知人友人とかの意で、世間でいふ知識、えらい人ではない、「何人も唯我獨尊、各自佛祖であり、神樣であるから、怨親平等なるが故に、從つて故人の記念に塔を建てると云ふやうなのも畢竟無用の業であると云ふのが耽源の着眼點であるであらうと、或る抄に見ゆ。

㋢隨坑落墜。あとへもさきへもならぬと云ふこと、釆の目の離義なり、さいの目をよくふらねば目がこされぬと云ふこと、「耽源が本分の理に備はずして、漫に註脚を下せば也」と溪抄に見ゆ。

㋣勸君云々。この二句は唐の王

維が、元二が安西に使するを送るの詩の三四句なり、勸君とは學人を指す。これさう云はずにもう一杯まゐれと、この一句は無縫塔の當體なり、「これは知音の用處なるが故に、知音で無くては、この無縫塔をば知るまいぞ」と或る抄に云へり。

㋤西出陽關。故人は處堂自らを云ふ、他所へ往つたならば、俺如き知音底はあるまい、やれきたかと云ふ人もあるまいと。

㋥實參實悟。功用と無功用と深く云へばなり、參中に悟あり

㋦歷々寂々。歷々はあり〳〵とみえること。乃ち權實照用なり、寂々は萬機休罷で、二名一體、更に異時にあらず、珠云く、「ありや燈籠じや、柱じや、こりや胡餅じや須彌山じや」と、「これは修心の要なり、

謂つべし實參底と、正位じや」と或る抄に云へり。

㋧長期已過。百二十日もつい六七十日も過ぎてござる。

㋨冷水冬瓜。沒滋味の義なり、言うは半夏を過ぎても未だ實悟を得ざればなり、法に於て滋味を得ずと妄想も分別もなくなり、味もしや〳〵らもかいと」

㋭和尚方便。此れは實悟を問ふ、和尚さま、どうぞ仕方はござるまいかと。

㋬精精靈靈。直に明了の心體を開示す、生死の本、無量劫の本體なり、やはりさうしていよと也。これほどよき方便はないと。

㋣趙州示僧。これは與聖錄に見ゆ。

㋠燒錢引鬼。珠云く、「趙州が此の如く示して、此の僧此のとく悟つたも、紙錢を燒いて餞

病最も苦し。」僧云く、「大いに㋓維摩老子の以て衆生に代るに似たり。」師云く、「㋔爾他を識ること未だ盡さず。」僧云く、「是れ㋕佛手も遮ること得ず、㋖人心は等閑なるに似たること莫しや。」師云く、「㋗波を撥つて水を求む。」僧云く、「畢竟如何。」師云く、「㋘爾が鼻孔、氣なからんを待つて、却つて汝に向つて道はん。」僧便ち喝す、師云く、「㋙死を怕るゝの漢。」乃ち云く、「㋚水牯子、數日より來、㋛水艸に快からず、蓋し㋜之を牧ふに功なし。若し一回艸に入り去らば、㋝驀鼻に拽き將ち來れと言はば㋞此れ又未だ是れ牧牛の法にあらず、且つ作麼生か牧せん。」㋟禪牀を擊つて云く、㋠叱叱叱、者の畜生。」

㋡鳳林庫を建つる上堂、「㋢鳳は竹實に非ざれば鬼を祭り、もてなしていんでもらうやうな」と、「これは得悟の機を抑ふ」と溪注にあり。

㋣甜瓜蔕甜。まくはうりを甜瓜と云ふ、「各々法回の種性」と溪注に見ゆ、あまいものはどこまでも甘い、その方が悟らぬはどこまでも悟られぬと云ふこと、さて〳〵この鈍まん漢なりと。

㋤果然。そりやこそ云はぬことかと。

㋥鹽官。この話は碧岩の九十一則にも出でゐる。杭州鹽官の海昌院齊安國師、馬祖に嗣ぐこの國師を日本の嵯峨天皇の皇后檀林皇后が、日本の承和元年、特に慧尋を唐に遣して御招侍になりたり、されど老體であるから、その弟子の義空を日本に送りたり、それで洛西の嵯峨に檀林寺を建立して、禪を御研究なさつた。

㋦侍者。これは禪寺住持の秘書官である。五侍者などと云ふて、五人の侍者が本來あるのが叢林の制度なり。

㋧犀牛扇子。扇子の面に犀牛玩月の圖を描いてある。

㋨犀牛兒。この兒は子供の兒ではない、日本語の犀牛のやつと云ふのである、この公案を平たく談話體にいへば、ある日のこと、鹽官齊安和尙が侍者を呼んで、「侍者あそこにあつたあの犀牛の扇子を持つて來ておくれ」と云つた、すると侍者はありていをつゝみ隱さず、「あゝ、あの扇子でございますか、あの扇子はもう破れてしまうて居ます」と答へられた、これを聞いた鹽官は「扇子が既に破れてしまつたならば、あの扇面にかいてあつた犀牛のやつを賠償して持つて來い、扇子の破れたのは

構はないが、あの犀牛はをしい、あの犀牛をもとの通りにしてをくれ」と云つたが、これに對して侍者は何とも返答が出來なかつたといふことなり、或抄に「元來この公案の眼目は何であるかと云ふと佛教哲學の常套問であるところの現象對實體論である、扇面に犀牛の畫である寫體は現象即實體の表現とも見られる」と云へり、又云く、「扇子を以て宇宙一箇の靈體じや」と、犀牛の扇子は誰でももつてゐる、無限の清風、無限の頭角雲雨去來それはそれのごとく、追來も把住も不得じや」と、又或抄に云く、「此の犀牛扇子の話は、翠巖眉毛の則より八疊も高しと白隱和尙も評せられてゐる「頗る向上に拈弄せられた公案じや」と。

㋩遺。重々の慈悲心なり、扇子がもう破れたならばと、これこゝでは賠償の意の遺で、かへすの意ではない。

㋪鹽官恐。「古德は他人の造次の間も、此箇の中に在らざらんことを恐る、故に物に托して以て激發す」と溪注にあり、「不在は工夫の中に居るか悟の中に居るか」と珠は云へり。

㋫二林扇子。この雙林の虛堂が扇子は扇さの月にも他の力を假らず、自ら用ひんと要すれば便ち用ゆ。なんで侍者などはつかはぬと。

㋬輸與國師。珠云く、「若し是れ虛堂が齊安國師に送り與へると云ふたならば、鹽官はなんと云ふか、云ふて見たいものじや、扇子の外に犀牛兒をばじや、」これは龍溪注に云く、「意に云く、我れ唯扇子を要して、犀牛兒を要せざればなり」と、虛堂は入らぬ程にと、輸は任なり、送なり。

㋭初無門戶。珠云く、「宗乘向上はじめからさりたがつてあがくけれども、こゝからと教ふるところはない、教ふる處あれば生死の根本」と。

㋮無何有鄉。無何有の鄉は廣莫の野なり、言うは自然の造化は至道の中、自ら樂むべきの地あり、それならばどうじや、目前におけどもめつたには見えぬ、平常無事の事にもと。

㋯只要諸人。師資の道、自然に冥合し根器成熟してなり。これ鍊鐵の事なり、冶工器を造るに、先づ鐵を以て泥土に和して、後爐鞴に入れて以て精光を發越すべし、鐵は學者に、土は大道に、化は融に比す、是れは學者の千鍛百鍊を歷て後、大器を成すべきにたとへる、發越は千聖に超越するなり、大活用を得るなり。

㋰運糞入者。「これは根器未熟下劣の漢を謂ふ」と溪注にいへり、珠云く、「佛語祖語今の內に入れるは私修行」と、この語は報恩經の文より出づと百丈廣錄三に見ゆ、又珠云く、「二乘辟聞に取り付いては。

なれないものは。ゆきたいところへゆけと。陰篆と云ふこと法華の信解品にあり、あくたをはらふ、見思を斷ずるを佛法と思はしむなり、あくたをはらふ」と訓ぜり。

㋐吾末如何。吾れは何ともしやうがない、この語は論語の子罕篇に出づ。

㋑法身病。忠曰く、「古語乎、」このとき虛堂和尙、微疾ゆゑ此の問ある。

㋒法身不安。幻化の空身、即法身の故なり、この語も古語乎。

㋓日上著。珠曰く、「うぬらの病は日上より出來る」と、溪註に「病は即ち汝が問頭に即して得」と。

㋔他病最苦。他は法身を指す、乾峰の法身に三種の病ありといはれしが如し、儂は命にかけてやう〳〵まめになつたと。

㋕維摩老子。これは維摩經の問疾品に維摩詰の言く、「癡に從つて愛あり、則ち我れ病生ず、一切衆生の病を以て、是の故に我れ病めり、若し一切衆生の病滅せば、則ち我が病滅す」と。

㋖觸識他。他は維摩を指す、「今只だ他の一等を見る故に」と溪抄にあり、他は法身の病なり、「維摩と同じことなりと云ふが中に維摩の足もとをも知らずして」と珠は云へり。

㋗佛手遮。遮は斷なり。たとひ佛手も遮斷すること、此の病にはできぬと、古句に佛手も他を醫することと得ずとある類なり、珠曰く、「いかな私でも、遮ることは得ずじや法身は遮ることできぬ。」

㋘人心等閑。珠曰く、「目に用ひて相知ずじや、況んや凡夫心分別を計る者は、いたつらごとではあるまいか」等閑はむだごと。

㋙撥波求水。「今尋問する底が即ち是病なり、直下に休歇する、即ちこれ奚なり、是を離れて別に求めば、是れ則ち波即ち水なることを知らず」と溪抄にあり、珠曰く「色身を援つて法身を求む、喩へばなみをはらひのけて水を求むるがごとしじや。」

㋚鼾鼻孔。「求心頓に息んで大死一回の時節じや」と溪抄に見ゆ、珠曰く、「そなたらが死に盡して盡しきつて、氣息なき時節、山河大地に云はせる」と。

㋛怕死漢。大悟を欠くなり、珠曰く「此のしにぞこなひめ、臘病もの死にかねる」と。

㋜水牯牛。めうしなり、忠曰く「師自ら病を得るを遮ぶるなり、「水牯子病あり、水草を喫することを得ざる也。」

㋝不快水神。不安、工夫しかねる、食事がうまくないと。

㋞牧之無功。珠曰く、推量して見るに、牧いやうが無功な、とつくりのみこまず」と。

㋟鼻孔撩來。珠曰く「すぐにじや、」州云く「無とひきもち來る」と。

食はず、醴泉に非ざれば飲まず、甚に因つてか。

㊀却つて板橋村に在る。「拄杖を卓して、㊁林あれば自らこれ眞の棲處、㊂風淡くして惟だ聞く靜夜に鳴くことを。」

上堂、擧す、雲門因に僧問ふ、「佛法は㊃水中の月の如し、是なりや、否や。」門云く、「㊄清波に透路なし。」師云く、「㊅雲峰道く、「雲門の禪は㊆九轉の透餅丹の如しと、㊇若し果して是ならば恐らくは未だ是ならじ。」

上堂、諸方は㊈朝咒暮咒し、㊉儞を兜へて羹飯の主と做さんことを要す。㊋我が者裏は、㊌疥狗生天を願はず、儞若し㊍人行なき處に向つて、㊎一條の路子を尋ね得て、㊏蕩蕩地に㊐機に臨んで自由自在ならば、㊑便ちこれ我が同流。」

解夏小參、僧問ふ、「㊒初秋夏末、衲僧家氣宇王

㊓風非竹實。鳳凰は竹の實でなくば食せず、鳳ば瑞鳥にて太平の世には則ち見はる、梧桐にあらざれば栖まずと、醴はあまきいづみ。

㊔板橋村。こゝには鳳も醴泉も、竹實もなきこと。

㊕有林自是。「庫倉が豐饒なれば大衆を安居させる所以を云ふ」と溪注に見ゆ、忠曰く「梧桐があれば棲遲する、師家道德盛大にして、叢林が繁茂すれば、僧中の英傑や麟鳳が集まる、庫内の一物が澤山なれば自然に大衆が寄り附く」と林とは珠曰く、「禪宗坊主の工夫公案、これを林と云ふ、棲處は遍一切處じや」と。

㊖風淡惟聞。これは祝語なり、淡はやはらかにそよ〳〵と、靜中に鳳鳴を聞く、」段こゝちよし、これは衲僧の類、道德に歸して潛行密用和嘗する

㊗此乂末是。珠曰く、「禪宗の向上よりみればまだ〳〵なり」馬祖下の石鑒の故事を、こゝへもてきて云はれたるなり、且作麼生。牧はまたどうして牧するぞと。

㊘禪牀。僧堂内に於ける坐禪する場處、住持は椅子、雲水は單位なり。

㊙叱叱叱者。虛堂は自分のこしかけてゐる曲錄下を、一つとんと拄杖でうつて、日本でいへば一むちあてゝ、ちよいちよい牛をおふ、こんちくしやうと、これは活機用なり、當機直示なり。

㊚鳳林庫。庫倉の名、板橋にあり、村は必ず寶林寺の莊地、領地の内なる耳、今此の地に於て、新に庫倉を建てゝ鳳林と名づけて、特に上堂して以て記念とするなり、年貢庫なり。

の如し、㋐雙林を離却せば、途中如何が受用せん。」師云く、「㋑踏著すれば爛れて泥の如し。」僧云く、「㋒只だ者れ便ち是れ途中受用底なること莫し麼」「師云く、「㋓南辰北斗。」僧云く、㋔「領」。師拂子を以て㋕一指す、僧禮拜す。

師乃ち云く、「一夏㋖伽藍地上に行く、未だ嘗て敢へ㋗重歩して、常住㋘一片の甎を蹈著す。㋙來朝期滿つ㋚合に作麼生か賞勞すべき、若し首座㋛板頭從り數へて、㋜聖僧侍者に到るまで㋝普く請じて之を與にせば、猶ほ諸人の以て㋞山僧縞素を分たずと謂はんことを恐る。更に若し㋟其の重輕を較へば、又山僧が㋠惠心普からざることを見ん、㋡作麼が相當ることを得去らん。所以に道ふ、㋢重賞の下には、必ず勇士ありと。㋣重賞は則ち故に辭せず、㋤阿那固か是れ勇士。」驀に拄杖を拈じて、指して云く、「これ㋥儞。」

復た擧す・黄檗因に臨濟、半夏に山に上つて問訊す、檗の㋦看經するを見て濟云く、我れ將に謂へり、是れ箇の人と、元來是れ㋧淹黑豆の老僧」と。住まること㋨數日にして乃ち辭す。檗云く、汝夏を破つて來る、何ぞ夏を終へて去らざる。」濟云く、「㋩暫く來つて禮拜す。檗便ち打つて、其れをして去らしむ。濟行くこと㋪數里にして、㋫其の事を疑ふて、㋬再び回つて夏を終ふ。師云く、「㋭黄檗當時、若し大機大用にして臨濟の㋮偷心を死し盡せば、今日子孫、㋯未だ尾巴焦黄することを致さじ。㋰樹林に再び來つて夏を終ふる底あること莫し麼。」喝一喝と。

㋱上堂、僧問ふ、「㋲世界興廢に廣闊なり、甚

ありさまたりと、溪抄に「此の父鳳に託して衆の棲止を遠ぶ」と、これが鳳林の境致なりと云はんばかりなり。

㋓水中月。金光明經の四天王品に、佛の眞法身は猶ほ虛空の若く、物に應じて形を現ず、水中の月の如し」とあり。

㋔清波透路。珠曰く、「さつさ、さゞ波のたつところへ月のうつる、沙汰はないすきまはない、此の句は入りくんだ語なり、雲門宗の大事をいはんが爲めなり、波に月の透る路がどこに有らう」となり。

㋕雲峰。この話は會元十七に出づ、雲峰悅は大愚芝に嗣く、芝は汾陽に嗣ぐ、これは虛堂と雲峰と同じく歎美す。

㋖九轉透鞚。鐵を點じて金と作すは九轉の丹砂なり、九返稽環を九轉と云ふ、九度やけばもとの色になる、透鞚丹とは

甎を漏る、いれものに依つてもらぬこともある、これは出處わからず、鐵をきたふるにもちゆると金になると。

㋗若果是。珠云く、「雲峰の喩へて云はるゝやうならば、清波の句も似たるもの喩へるものあり、喩へるものあらばよくないほどに。

㋘朝兒暮兒。兒は睨と同じ、諂なり、顧なり、まじなふことねがふことなり、諸方の宗師は其夕に教授してと。

㋙兒儞做羹。兒はとらへるとあるが、惑なり、亂なり、學者達を惑亂さして付法の弟子となし、寺院の主人となさんと要してゐると。羹飯主とは粥飯の主人と言ふ意なり、お齋に行つたり布施をもらつたり、檀那にせようとかゝるといふやうなもの、患の抄と球の抄と同じきゆゑ、一つにすると

このやうなものなり。

㋚我者裏。俺の處では疥狗（やまひいぬ）が天へ上らうとはせぬと、分を守り神妙に骨を折つてゆくゆゑなり、疥癩なりとある、只だ素分を守るの意なり。

㋛向無人行。人のとほらぬところ、向上險崖なり、「人の香も佛の香もない、打成一片の田地じや」と球は云へり。

㋜一條路子。球曰く、「十方の佛もつらのぞきのならぬ處のたび路へとび出る」

㋝蕩蕩地。大なり、廣平のこと大手を振つてなり、さはりなきことなり。

㋞臨機自由。これは朝兒暮兒を待たず、自悟自得の方なり、應機自在なり、臨は當るなり。

㋟是我同流。これは豊干の語なり、佛祖寒山詩に見ゆ、「虛堂が中間なるが故に、お茶まゐ

㋠「れ」と球は云へり。

㋡初秋夏末。三期の制を過ぎてなり、隨往自在無礙の故に、この語錄は報恩錄結夏次日の章に見ゆ。

㋢離却雙林。今日までは和尚に隨侍す、今はなれてはと。

㋣踏著爛如泥。氣宇如王をおさへたるなり、「本分の途中を示す」と溪注に見ゆ、あまりふみつけると、とろける、へたに見るとつゝちがふ。

㋤者莫便是。爛泥の如しと、その處直に途中受用修行底ではござらぬか。

㋥南辰北斗。遙かに天涯を隔つ南辰は南斗なり、遠くして遠しとなり。

㋦領。がてんしました、遠うして遠しといふところを、とつくり呑みました。

㋧一指。點破の義なり、球曰く領じたるは其の方が、僧禮拜

はぬからぬかぼでじや」と。

ツ 伽藍。衆園と譯す、興聖錄に見ゆ。雙林の伽藍なり。

ネ 重步。重は去聲によませてある、「ちよう」、しかとふみつけて、謹嚴のこと。

ナ 一片瓦。庫裏よりこゝまで來たか。しき瓦一枚をも踏まぬと、本分の履踐をゐふなり、夏中のこと故、虫もころさぬと。

ラ 來朝期滿。あすのあさ、解制なりと。

ム 合作麼生。合は畢竟の意なり。

ウ 板頭。板は版にあらざるかと思ふがいかゞや、首座は前板後板との別があるが、僧堂の上位より下位に到るまで、數へては次第にかぞへて最下位に至る。

ヰ 聖僧侍者。これは僧堂の本尊の御守り役で兼て、堂內の大衆の世話役をするもの、僧堂の本尊は文殊菩薩なり。

ノ 普請。殘らず呼び寄せて、御茶でものめと、之れとともにせば賞勞なり。

オ 不分緇素。僧に云ふ、黑いか白いか見わけぬと謂はんを恐ると、氣づかうこと、骨折つたものも折らずして、ものも見分けがないと。

ク 殺其重輕。人の行然を重とし、行不然を輕とす、えこひいきをしたならばとなり。

ヤ 惠心。「けいしん」、慈悲の心なり。

マ 作麼相當。どうしたならば諸人の氣に叶ふやうになるであらふ。

ケ 重賞之下。これは三略にある文なり、されど士を夫に作る、大功あるものには急度褒美をくれると、身命を捨てゝ忠孝をする武士が出て來ると。

ケ 重賞則故。重賞のことは、この虛堂は無しらぬではない。

コ 阿那箇是。どれが法のため身を碎く石にすつてもひるまぬものだと、珠云く、「虛堂の上堂はこれを虛堂が上堂じやと云ふことだが。どこが上堂らしいことがある見性齋に棘を呑むやうにしておいてはなるまい、能く能く咬みわけよ」と。

エ 鯛。だれと云はず、拄杖をさして云ふ。

テ 看經。經文を看てをられしなり、珠云く、「未到底は古敎を以て照心し、已到底は心を以て古敎を照す」と。

ア 淹黑豆老僧。搭又は掩に作る、臨濟の本錄に搭に作る、搭は「ひろふ」、「かぞふ」、淹は「ひたす」、日本で云へば、黑豆かぞふると云ふ義に當る、黑豆は經文の文字に喩へる、文字禪の老師かとおもふたとなり。

サ 數日。四五日にして、いとまこひし去る。

キ 皆來。あからさまになり。

ユ 數里。二三里ばかりにしてなり。

メ 延其事。これはいかさま子細あらんと。

に因つて ㋑鐘聲を聞いて七條を披す。」師云く、㋺「水淺うして魚なし、徒に釣を下すに勞す。」僧云く、「長期已に過ぎ了る、㋩中間の事作麼生。」師云く、「㋥一向に收拾し來らず。」僧云く、㋭「鐘樓上に念讀し、牀脚下に菜を種う、甚麼邊の事をか明す。」師云く、「㋬皮を刮げて骨を見る。」僧云く、㋣勝首座、㋠猛虎路に當つて坐すと道ふ、㋡乞兒の席袋。」乃ち舉す、㋢鷄鳴丑、愁ひ見る㋤起き來つて還つて漏逗することを。㋥裙子㋦偏衫箇も也た無し。㋧袈裟形相些些有り、㋨裩に腰なく袴に口なし。㋩頭上の青灰三五斗、㋪修行して人を利濟せんことを指望す。㋫誰か知る翻つて不唧溜と成らんとは。」師云く、「㋬趙州新婦面上に笑靨を添ふ、㋭又緇幕裏に向つて行く、㋮只だ是れ

㋑ 再回巻夏。再び回つて密々の商量をなす。

㋺ 黃葉當時。黃葉はそのとき悟りもはたらきもぬるいと云ふ。

㋩ 臨濟偷心。臨濟の偷心は生死の命根を斷じてしまふたならばとなり。

㋥ 尾巴焦黃。尾巴は「をだれ」焦黃は「霜がれ」表替を云ふ、尾巴は魚の水がなくなつて死するとき、尾赤くなるを云ふ。

㋭ 檮林。この雙檮林、則ち寶林に再び來て、夏をふるものあるかどうじやと。

㋬ 上堂。解夏後、數日しての上堂なり。

㋣ 世界與麼。これは雲門錄の上に示衆の語あるを問端とす、世界はこんなにひろいが一袈裟の田地なり、珠云く、「これ甚麼ぞ、雲門宗の骨髓、大事の語じや」と。

㋠ 聞鐘聲。禪宗では、ひるの御齋の時の前に鐘を鳴らすと、大衆は七條の袈裟を着して飯に赴くなり、鼓は雲板をならすなり、七條衣は食衣なり、五條は行脚九條は說法、二十五條は入滅に用ゆる袈裟なり。

㋺ 水淺無魚。一向にこの漢に非ざるを抑下するなり、あゝ雲門が大魚をつらうと思ふたがさん〳〵淺瀨で有つて」と珠は云くり。

㋩ 中間事。結制と解制とのあひだの事はどうでござるし。

㋥ 一向收拾。一事も記憶せずと「這裡舊曆日を收めずの類なり」と溪注にいへり、「中間の履踐、所得の事を勘定し持ち來るものはない」と珠は云へり。

㋭ 鐘樓上。かねつきだうの上で念佛念經禪林の脚もとでは野菜つくりをすると、これはどう云ふことを明したのてござ

人の見ることを得ること少なり。」

運菴先師忌の拈香、「老和尚、死し去つてより二十五年、㋑誰ありてか門を撑へ戸を拄へん。㋺松源と同日に行くと雖も、㋩松源の三轉語を會せず、㋥父子背馳して面たりに相覩ず、㋭直に如今に至るまで莽鹵なることを成す。㋬露冷、に風高うして秋意深し、㋮久しいかな矣、藜黍を薦むる　心なきこと。」

中秋上堂、僧問ふ、「㋯靈山には月を話り、曹溪には月を指すと、意旨如何。」師云く、「㋰胡を欺き漢を謾す。」僧云く、㋱謝三郎甚麼の過かある。」師云く、「㋲人を誣ふるの罪。」僧云く、「恁麼ならば則ち㋳天上月圓に、人間月半なり。」師云く、㋴老鴉、蠣を喙む。」㋵僧圓相を打して云く、「者箇作麼生か明めん。」師云く、「㋶之を明むれば則ち瞎す。」僧云く、「師の指示を謝す。」師云く、「㋷屢生子。」

乃ち云く、「㋸華亭の滿船猶ほ足らず、㋹南泉の驟步蹈不著。㋺自餘は眼底紛紛として㋻摠に道ふ、月を見て指を忘ると、」拄杖を卓して、「㋼月雪。」

上堂、僧問ふ、「㋽仰山、㋾香嚴に謂ふて云く㋿「如來禪は、㌀師兄の會することを許す、㌁祖師禪は未だ夢にも見ざること在り」と此の意如何。」師云く、「㌂蛇、竹筒に入る。」僧云く、「㌃仰山平白に屈を受く。」師云く、「㌄儞に和して脫不得。」僧云く、「作麼生かこれ如來禪。」師云く、「㌅鐵壁鐵壁。」僧云く、「如何なるかこれ祖師禪。」師云く、「㌆楚甸雲寒く、㌇越山風暖なり。」僧云く、「如何なるか是れ和尚の禪。」師云く、「儞これ

りますと、此の一緣は黃龍の語である、末の納牌普說にくはしく出てゐる、これ黃龍宗の骨體なり。

㋺刮皮見骨。忠曰く、「徹底爲人の手だし」、これは恐ろしい語なり、皮をこそげて骨をあらはすようなり。

㋩勝首座。惟勝眞覺禪師なり、壇州黃檗に住す、黃龍南に嗣法す。

㋪猛虎當路。この語は上の鐘樓上の語に對して、勝首座が答へたる語なり、これで黃檗の法席を付ぜらる、これは近寄り難きを云ひなるものなり。

㋫異。問ひつめることばなり、ものをきくに用ふ、えーとかへいとかなり。

㋬乞兒席袋。こじきのかます、「これ不淨謾底拈出するに堪へず」と龍淡は注す、「勝の語はきたない、尻もふぐりもみえると珠は云へり。

㋭難鳴丑。これは趙州十二時頌の初篇なり、朝六つ時をいふ。

㋮起來漏逗。漏逗はとりみだしたので檢束なきなり。

㋯裙す。楚語、泥縛些那(ないばさな)、唐に裙と云ふ、又舊譯には內衣ともいふ、下著衣なり。

㋰倶彩。此には複膊衣と云ふ、右のかたとわきとをかくす、三衣の觀すしたかさねにして身に近づくの故なりと。趙州にはこれもない、貧乏で箇も也た無しといふ、上着衣は今は單に衣と云ふこれなり。

㋱袈裟形相。袈裟は具には迦羅沙曳と云ふ、此には不正色と云ふ、又壞色とも云ふ、袈裟だけはやぶれながらも、かたちだけすこしはあるとなり。

㋲裩無腿。これはともに破れて著用できぬものばかりなりと

㋳頭上青灰。落葉をひろふてきてたく故、あたまの上にほこりか澤山なり。

㋴修行利濟人。飛ぶ鳥をも墜おとし、生藤をもちぎらんと思ふたがと、指は趙州錄には比に作る、指頭は心に指しつめの頭ひなり。

㋵誰知翻。翻と成とは本錄には變と作とに作る、翻は溜に作る、神も佛も御存じあるまい不嘲嘲乃ち鈍漢じや、らちあかざるものになつたと、以上は五更正坐徹底無心沒可把の境界。

㋶新婦面上。或抄に「徹底無心沒可把の境界」とあり、はなよめのかほにゑくぼをそへたるなり。

㋷繡幕裏行。をしいことに錦の幕の中に居て闌麝の煙の中に居てと行はあちこちしてもなり。

㋸是人見。をしいことには人からすこしも見えない、これは趙州の境界は知つたものはないと云ふ意。

㋹有誰撑門。扶竪するものなきを謂ふと、添抄にあり、誰か法道門風を護持するものがあらうぞと。

㋺與松源同日。これは松源崇岳は運菴の師にして、蜜菴に嗣ぐ、宋寧宗帝嘉泰二年八月四日に寂す、運菴は宋の理宗帝寶慶二年八月四日に寂す、運化も同月同日とは父子緣ふかく中のよいやうなものなり。

㋻松源三轉語。語はこの錄の頌古の部に見ゆ。言ろは松源と同生同死すといへども其の語を會せずと、これは餘味又枯屋漫錄の中にも出づ參照すべし。

㋼父子背馳。孤負の謂なり、源と菴と君は瀟湘に向ひ我は秦

㋓顚ずる耶狂する耶。」僧云く、「㋔學人此れ從り問話せじ。」師云く、「㋕更に須く勘過すべし。」乃ち擧す、㋖大原の孚上座、初め㋗雪峰に參ず門に跨る纔かに雪峰を見て、便ち㋘主事に參ず次の日㋙却來して禮拜して云く、「昨日㋚和尙に觸忤す。」峰云く、「㋛是れ般の事を知らば便ち休せよ。」師云く、「盡く謂ふ、雪峰、㋜陷虎の機あり て斬蛟の劒なしと。㋝殊に知らず、養子の緣㋞寬にして恕あることを。」

㋟重九上堂、僧問ふ、「㋠理事を逐つて變せず、事は理を逐つて遷らず、㋡九九の日、甚と爲てか鼓を撾つて㋢陞堂す。」師云く、「㋣理事他を拘することを得ず。」僧云く、「他これ甚麼人ぞ。」師云く、「㋤頭輕く尾重うして脚遲沙。」僧云く、「㋥錯つて人に指示し了れり也。」師云く、「㋦山僧に向ふと、中がわるくなつてみむきもせぬ。

㋧直至如今。莽鹵不分明無分、曉なり。やくたゝぬとりさがした。

㋨籌冷風高。八月四日の忌景見るべし、景に對して其の人を思ひ慈ふの深きなり。

㋩久矣桑黍。二十五年にもなれば、蔬菜黍米の非薄の供へもの、乃ち御茶湯をも供へやうと思ふ心はない、眞箇無味の享祀なり、珠云く、「この語路は見性已後の詮索じゃ」と。

㋪靈山話月。これは修多羅の經は月を標するの指と、玄沙師備禪師の傳に「昔れに正法眼藏あり、大迦葉に付囑すと道ふが如きんば、我れは道ふ、なほ月を話するが如し、曹溪拂子を竪つるは還つて月を指すが如し」と。

㋫欺胡設漢。胡は靈山、漢は曹溪、珠云く、「玄沙がまゝじゃ佛祖をないがしにしたこと。」

㋬謝三郎。玄沙は支那の唐の閩の謝氏の子、幼にして好んで釣を垂る、後衆に云ふ、「釣魚船上の謝三郎、欺瞞した過はどこにござる」と。

㋭誣人之罪。珠云く靈山曹溪もと此の事なし、玄沙ことさらに之を誣ふるなり、輝迦と六祖に無實を云ひかけた。

㋮天上月圓。恁麼ならば只だ是れ現成底のみなりと、天上の月はもと圓缺はないか、人が月は缺けたと見る如く、仰月さまは天上にまるく、人間界は月の十五日なりと。

㋯老鴉啄蠟。あほうがらすが蠟がらをこつくが、石も一しよに呑吐不下なり。これは珠云く、「おのれがやたらにのみこみさへしたらよいと思ふて」と。

年邁けたり。」僧云く、「㋰汾陽道く、「重陽九日菊花新なり」と、此の意如何。」師云く、「㋱我れに隔水の犀なけれども、自然に塵染まず。」僧云く、「㋲汾陽今日落節す。師云く、「那裏にか汾陽を見る。」僧便ち喝す、師云く、「㋳弋すれども宿を射ず。」

㋴乃ち云く、㋵菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。㋶陶靖節は是れ箇の俗人なりと雖も、㋷却つて些しき衲僧の說話あり。然りと雖も、㋸他はこれ晉の時の人、未だ全く信ずべからず。」

㋹開爐首座を謝する上堂、僧問ふ、「趙州道く、「我れ喚んで火と作す。儞喚んで火と作すことを得ず」と、此の意如何。」師云く、「㋺撓鈎搭索。」僧云く、「㋻今日趙州を見ることを得たり。」師云

㋼打圓相。眞月を顯し、己が會處を呈す。

㋽明之明諦。元來明暗なき故、惡ざう木ぞうの眼が諦す。

㋾廣生子。愚漢の謂なり、鈍漢なり、この錄の頌古夾山次話に見ゆ、うぬうめ〳〵なり、臨濟錄の諦屋生と同じ、屋或は褒に作る。

㋿華亭滿船。珠云く、「船子いつかど思つて云ふたれど、のせをふせぬ」溪注に云く、「藥山下の秀州、華亭の船子德誠禪師偈あり、曰く千尺絲綸直下垂、一波纖動萬波。隨夜帶水寒魚不レ食、滿船空載二月明歸一。」

㌀南泉驟步。驟は馬の疾歩なりこばしこく取りまはしたやうなれど、この緣はこの錄のしまひに見ゆ。

㌁自僉眼底。珠云く、「上の兩箇の外は光影を弄する底で、紛亂して分明ならず、あの道理この道理とてじや。

㌂總道見月。すべてがいふ。おらまう佛教祖錄には用はないとこの語は楞嚴の第二と圓覺の清淨慧の章の所說に出づ、此れ猶ほ理觀に涉るを抑ふるなり。

㌃月雲。觀面指出である、珠云く、「雲といふ字に深密の義あり、珠云く、「月を見よと云ふことかみるなと云ふことか」と。

㌄仰山。惠寂、溈山に嗣ぐ。

㌅香嚴。智閑溈山に嗣ぐ、この緣は會元香嚴の章に出づ。

㌆師兄。香嚴は仰山の先輩、兄弟子。

㌇如來禪。この解は下の問答をみよ。

㌈祖師禪。下の問答を見よ。

㌉自僉眼底。珠云く、「上の兩箇の外は光影を弄する底で、紛亂して分明ならず、あの道理

㌊蛇入竹筒。方語に「曲心猶在」智度論廿三に云く、「一切禪定摠心皆三摩提と名づく、秦に

は正心行處と言ふ、謂く、是の心無始より已來、常に曲つて端しからず、是の正心行處を得れば、心則ち端直蛇の竹筒の内に入るが如し」珠云く、「仰山は曲りたくてならねども、しかたなく直に云つた」

㋩仰山平白。日晝に屈辱を受く、珠曰く、「仰山もひる中に大はぢをかいたと申すものである。」

㋥和倆說。その方どもに一しよにとなり、仰山と同じやうに屈を受くべし。

㋭縱橫々々。手脚を著くところなし 戎抄に祖師と同時にこたへんに、こゝに心をつけよ」と。

㋬楚甸雲寒。楚甸は郊甸なり、郊外のこと、六十里をいふ支那での野原なり、これは此の現成直示にして、馬竟祖師禪意地を提ぐなり、雲寒は戎抄「把住或は魔界に入る底を取るなり。」

㋣越山風暖。溪注に、「處處任運に現成す」風暖は戎抄に「放行或は佛界に入る底を取る、所謂祖師禪は或は佛界に入り、或は魔界に入る把住放行殺活自在なり。」

㋠顯耶狂耶。差別の不正問を發起する故にと珠曰く、「顯はなんと取りちがへて居るか、狂はうぬは氣が違ふたかなり、戎抄に「禪は多途なし、汝は二に別ち三に別つこれ本心にあらざるべし。」と。

㋡學人從此。非を知るの謂なり。珠曰く、「ぶてうはふ仕りました、まう申しますまい、如來禪、祖師禪尋ぬることはまうない」と。

㋢更須勘過。戎抄に「それにのることではない」と、珠云く、「うぬがなにほど利口めいた顏しても、おれが穿さくせねばゆるさぬ。」

㋦大原孚。雪峰存に嗣ぐ、初め楊州光孝寺に在り。

㋧雪峰。義存なり。

㋨主事。知事なり、知事に四員あり一に監寺、二に維那、三に典座、四に直歲。

㋩知來。方丈へかへりきたる。

㋪觸忤和尚。犯逆なり、虚外をいた した。

㋫知是般事。これほどの事を知つたならば、だまつてしまうてをれぬの義なり、又是般とは日本のこれしきの事をば知つたよと云ふて休すと又是れほどのはたらきえせまいと思はれたればなどなり。

㋬陷虎之機。命を行ぜざるが故なり 珠曰く、「大機は具足してゐらるれど手に物がないが、殘念なと斬蛟とは唐の開元の末、靜江東灘の中。雷公、一の黃蛇を逢ふて灘上に盤桓す、之を視れば一銅劍を得たり世說と云ふ書には、周處と云ふ人少かりしとき凶强にして、氣を使ふ、鄉里の爲に患へらる、義興水中の蛟と南山白額の虎と周處を并せて三害と爲す、處は虎を殺し蛟を斬り、遂に自ら改勵して忠臣孝子となると云ふ。

㋭珠不知。宗師の手前は、とんとも

がふたものなり。

㋮寬而有恕。ゆつたりと思ひやりがある、戎抄には「大慈悲心を以て人を利す、虚堂も下心は陷虎の機あり」といふ。

㋯重九。九月九日の重陽なり。

㋰理遥事。「理事法爾として雜亂せず、互に變遷せざる也」と溪注に見ゆ、珠曰く、「理が事をさまたぐることもならぬ、又事理不二にして、理は理事は事と分ちてある、柳は綠花は紅じやと戎抄に事を遥ふて變ぜずで、端午或は重陽等日日好日年々是好年の處じや、理を遥ふて遷らずで、事理分明差別混雜せざる也」と。

㋱九九之日。九々の上にかぎつたことはない、「已に理事共に變ぜず、九日は事なり、上堂は理なり」と。

㋲陞堂。大佛殿の法座にのぼりて、說法堂がある。

㋳理事拘他。珠云く、「理と云ふものがせきとめることはならぬ、理事も拘はることはならぬすきなことをするぞ。」

㋴頭輕尾重。これは他を形容す、沙は遠に作るべし、遲は巡なり、しどろもどろといふこと。今は非常の意を取る。珠云く、「よろ〳〵とよろめいて、あるきえることではないと云ふこと。」

㋵錯指示人。「和尚、此の人、形相もと人に指示すべからず、而も和尚の指示す、實に錯り了れり」と珠は云へり。

㋶山僧年邁。そらとぼけた賊意なり年邁た故、いひそこなひもする。

㋷汾陽道。この語は顯孝語錄に出でゐる。珠云く、「三玄三要事離レ分。得意忘言道易レ親、一句明明該二萬象一、重陽九日菊花新」とありしなり。

㋸我無隔水。眞の犀角なれば水に入れば一尺は三尺に開く、自然ときれいに水がすむと云ふ、これは先聖を慕はざれども、任運に欠少する所なければなりと、珠曰く、「其方がなんぼど問ひかけても、それにひつつきはせぬはやい、又不染は汾陽の語を指すなり。

㋹汾陽今日。屈を受くる故なり、珠曰く、「それでは汾陽ももと手を取り失ふたと云ふもの、をちどなり」

㋺弋不射宿。これは論語、述而篇にある語、弋はいぐるみ、弋射と云ふて鳥類を弓にていてとるを云ふけれども宿鳥とて巢に居る鳥はとらぬ、空飛をとるの義でなくばこれは利劍は死漢を斬らすの義なり珠曰く、「うぬがやうな、ねばうには、こちはかまはぬと。」

㋻乃云。提綱なり。

㋼採菊東籬。この二句は淵明の句で遺逸自得の境界なり、珠云く、「望みも思ひもなんとなう悠然と南山を見る」と、菊花酒とて、九月九日には御祝の酒をくみしものなり。

㋽陶靖節。陶元亮は晉に在りて淵明と名づく、宋に在りては潛と名づ

く、「㊀ 倆他の東壁に葫蘆を挂くることを會すや。」僧云く、「㊁ 也た是れ家常の茶飯。」師云く、㊂「互鄉の童子。」

乃ち云く、「㊃ 霜風曉を戒め、㊄ 黃葉雲を堆うす、㊅ 我が門庭の如きんば、一般に冷落す。㊆ 有る底は道ふ、「老子尋常、多くは是れ㊇ 貧を闘はしめて、富を闘はしめずと、山僧以謂らく然らず、何が故ぞ、㊈ 但だ板頭に人あることを得て、㊉ 自然に暖氣相洽し。」

㊋ 達磨第二忌の拈香、「㊌ 葱嶺に宋雲を見ざれども、㊍ 全身豈に熊耳に在らんや。㊎ 石火電光も殊に擬すること莫し、㊏ 雙樹堂上再び相逢ふ、㊐ 究竟して何ぞ曾て兩齒を缺く。㊑ 雪際に心を傳へ、㊒ 灰を餘して鬼を厭ふ。㊓ 後代の兒孫誰か倆を采らん、㊔ 龐蘊淡飯殷勤に當つ、㊕ 四海の香風、此れ從り起る。」

上堂、僧問ふ、「㊖ 布袋の長年落魄、㊗ 盤山の豬肉案頭、㊘ 觀音の手裏の魚籃、㊙ 大士の門椎拍板、㊚ 者の一絡索、㊛ 虛堂面前に到る時如何。」師云く、「㊜ 蘇嚕蘇嚕。」僧云く、「凡夫を轉じて賢聖と爲し、賢聖を抑へて凡夫と爲すことは、㊝ 則ち和尙なきにあらず。」師云く、「㊞ 家狗人を咬む。」僧云く、「㊟ 布袋鬧裡に向つて打開して、件件拈起して云く、『看よ看よ』と、此の意如何。」師云く、「㊠ 勘せざるに自敗す。」僧云く、「且く道へ、門椎拍板と相去ること多少ぞ。」師云く、「㊡ 窮餓相煎す。」僧云く、「手裏の魚籃は則ち問はず豬肉案頭の事麼生。」師云く、「㊢ 地獄門前鬼脫卯。」僧云く、此の問を伸べずんば、一生を蹉過せん。」㊣ 師便ち喝す。

く、世に靖節先生と號す、尋陽柴桑の人なり、曾祖侃は晉の大司馬たり、淵明は遠法師と友たり。

㊀ 却有些衲僧。なか〳〵どこかにすこしは衲僧の說話に似たることがあるけれども。

㊁ 他是晉時人。晉の時は達磨大師も、この支那に來り玉はず些しき無心の說話を解すと雖も、未だ活祖意を見ず、故に吾が宗の無師自證と同じくまた全く信ずるわけには參らぬ或は劍去りて久し矣言迹を逐ふべからずとなり。

㊂ 開爐。爐開きの上堂なり。

㊃ 我喚作火。珠云く、「こりや背觸をとつくり呑み込んで來なければ相談はならぬ、おそろしい、この語は趙州錄の下に出でゐる、汝は火なりと云ふことを知らぬかとなり。

㊄ 橈鈎搭索。橈は櫂なり、通じて橈なり、珠云く、「ひつかゝりをこしらへんがため」或抄に「趙が僧を接せんとて引きよせた、方語には大熟分明とあり、爲人の心ぞ。

㊅ 今日得見。師の判に據りてなり、「みかげををがむうれしさよ」と珠は云へり。

㊆ 倆他東壁。葫蘆はひやうたん是れ沒巴鼻の機なり、栢樹子や麻三斤の類の如し、又この錄の徑山後錄解夏の次に出づ珠曰く、「其方は趙州に相見したと云ふが、此の語が合點ならよい、さもなくてはまだだぞ。」と。

㊇ 也是家常。理會するにたらずと、珠云く、「それは劃きづかひなさりますな」と。

㊈ 互鄉童子。互鄉は論語の述而篇「互鄉難與言」とあり、註に「互鄉は鄕名、其の人不善に習ふ、與に善を言ひがたし、今は僧の惡覺を責むるなり、珠云く、「うぬめは人がらのわるいやつ、慮外千萬じゃ」と。

㊉ 霜風戒曉。あさあらしなり。

㊋ 黃葉堆雲。秋の末の葉ちりつもる、この二句は開爐の風物を序す。

㊌ 如我門庭。珠云く「我が禪宗達磨の門庭は、慮堂が處も秋枯れの景色と一やうにひえきりてゐる。これは其の節に應ずるなり。

㊍ 有底道。ある人たちはいふと老子は慮堂自らを云ふ、尋常のくせなりと。

㊎ 闘貧不闘富。「貧をぼかちとす、矮子の鰐くらべは矮をかちとするちつとも、衆人の喝ひ勇むやうなることはバはれぬ」と珠云へり。

㊏ 板頭有人。これは首座を謂するなり、「道德金剛の單頭師が出で來ればじや」と珠云へり。

㊐ 自然暖氣。おのづと人の心へ入りわたつて和合しどこともなう春の陽の入渡つた如く、衆心悅可することなり、洽は和なり、「この語は開爐を結ぶ」と珠云へり。

㊑ 達磨第二忌。劉善富が田を捨てゝ忌を弊むよりこのかた、第二忌にあたる。

㊒ 葱嶺宋雲。「これは初忌に出づ」と珠云へり、是れ面目から云ふと、蒸嶺で宋雲が達磨に御目にかゝらずとも、これは有相の達磨なり。

㊓ 全身豈在熊耳。理當是の如くなるべし。

㊔ 石火電光。これは上の意を斷送し了るなり、擬はなぞらへるなり、はやいことのたとへにするか。

㊕ 雙樹堂上。それじやのにこの達磨に二度も御目にかゝるはと目前露堂々なりと。珠云く

㋚乃ち擧す、㋛羅山初め嵩頭に參ず、便ち問ふ㋜「起滅停らざる時如何。」頭云く、「喝、これ誰か起滅す。」山豁然大悟、師云く、「嵩頭則ち㋝孔を見て楔と著くと雖も、㋞他の羅山を累はして起滅不停の處に坐在せしむ。」

上堂、僧問ふ、「若し㋟戰を論せば也、㋠箇箇力めて轉處に在りと、此の意如何。」師云く、「㋡猶ほ是れ死法。」僧云く、「作麼生か是れ活法。」師云く、「㋢逆風に帆を張る。」僧云く、「㋣年老いて精と成る。」僧云く、「㋤大力量の人甚に因つてか脚を搔げ起さざる、」師云く、「㋥師子人を咬み、㋦韓獹塊を逐ふ。」僧云く、「口を開くこと、甚に因つてか舌頭上に在らざる。」師云く、「㋧臟を抱いて屈と叫ぶ。」僧云く、「明眼の衲僧、甚に因つてか㋨脚跟下、紅絲線不斷　。」師云く、「㋩貪多くして嚼細ならず。」僧云く、「㋪昔日の松源、今朝の和尚。」師云く、「㋫牢く記取せよ。」

㋬乃ち云く、「㋭此の事甚だ易し、㋮走作するに因つて、㋯反つて以て難しと爲す。㋰何れの處かこれ走作。㋱眼に見耳に聞く、これ走作、鼻に嗅ぎ舌に嗜む、これ走作、㋲運奔執捉これ走作㋳覺觸攀緣、これ走作。㋴以至、擧心動念、參禪問道、古今を穿鑿し、㋵人我を是非するは、㋶悉くこれ走作なり。㋷只だ一處の不走作あり、以て諸人に說向し難く。若し說かば者の不走作底に和して、㋸一時に走作し了らん也。」

冬至小參、僧問ふ、「㋹黑豆未だ芽さざる時如何。」師云く、「㋺黑鱗皴地。」僧云く、「㋻芽して後如何。」師云く、「黑鱗皴地。」僧云く、「㋼芽と未芽

「着語す。」

㋚究竟何曾。珠云く、「ほんたうの處はおれが二度見たが、齒はぬけぬになぜ大師は兩齒をかいた」と。

㋛雪際傳心。これは二祖惠可が雪中に少林にて斷臂傳法を云ふ。

㋜篩灰眼鬼。眼は樶と通ず、禳なり、灰を篩ふて不祥を禳ふことは、和漢とも通俗なり、今は傳心の怪をはらふなり、珠云く、「みこやかんなぎのするやうなことをして、或は鬼は二祖にたとへる。」

㋝後代兒孫。虛堂などもその樣な後代では、臂を斷つたり、雪に立ちたりするやうなことは、と珠云へり。たとひ兒孫といへども豈に傳心の怪を取りて法とすべけんや」と溪注に見ゆ、采汝はかまはぬこと。

㋞麁羹淡飯。此れは祭の事を述ぶ、菜大根のけんちやんや大唐米の味のないごちそう、虛堂が心一ぱいのもてなしなり

㋟四海香風。言ろは天下宗の起るところ、故に殷勤に吊祭を致すとなり、珠云く、「天下中に最上の禪入り渡つたと云ふも、その根本は此の和上が仕出かしたことじや。」

㋠布袋。布袋の事跡はこの錄の佛祖贊に見えたれば、今は略す、落魂は志行衰惡の貌、おちぶれたること、珠云く、「鄙陋聚落おちぶれたるていたらく。」

㋡盡山猪肉。これも瑞恩入寺錄に見えたり、珠云く、「入鄙垂手のありさま、屠家にて精底一斤を割き來れ、那箇か精底にあらざると云ふところに於て省あり。」

㋢觀音手裏。これもこの錄の佛祖贊に見ゆ。

㋣大士門椎。この大士は傳大士これも前に見ゆ上の四大士皆鄙中の佛事を作す底の者なり門椎は袖うらの木椎、手中の拍板、之を執つて經を唱ふ。

㋤者一絡索。一からげなり、一段落と云ふが如し。

㋥虛堂面前。師の事に歸するの謂なり、珠云く、「虛堂の手前きたならば如何と云ふ程の意。」

㋦蘇盧々々。梵には蘇盧婆訶、此には梵音決定と云ふ、所謂一道の眞言、義解すべからず或抄に「そろはよみかへる、盧はかくるなり、をしむなり、則ち甘露の水を洒かれて蘇みかへるを云ふか」と。

㋧下無和尙。大活自在の手段を嘆ず、この樣な大活和尙ないではないと。

㋨家狗咬人。家賊の我なり、てがひ犬がかむやうなものなり

㋩布袋向闇。袋をひろげて件件枯起して云ふ、看よ看よで袋中の物事を見てくれ、下駄も燒味噌も一々とんとだして。

㋪不勘自敗。自らの件々敗露する故に、珠云く、「小首かたげるには及ばぬ、早や敗北降參する布袋が、我と自らはいけつした。」

㋫窮餓相煎。一齊に抑下す貧乏神が共にせりやつたどれもこれもやくに立たぬと。

㋬地獄門前。これは龍溪注などはまるで違ふてゐると、碧巖方語解附錄に出づ脫卯と云ふのはもと官府の語なり、吏の衙門へ詣るとき明け六を定めとす、上官の前で一々これを點檢をするを點卯と云ふ、着到帳に姓名を記載するを靈卯と云ふ、脫卯は其の日の上官のぎんみをはづれたるを云ふ又轉じて凡そ事の仕落ちなど

のあるをも脫と云ふなり、されば
この鬼國魔王のぎんみをはづれた
るなり、相脫卯すは。そそうしをち
なり。水滸傳第四十五回に云ふ、
「次の日五更楊雄起き來つて、自ら
去つて書卯し、官府に承應すと又
三十九回にも書中箇の老犬脫卯あ
ると云ふ、珠云く、「帳はづれ、鬼魔
の手にも俱生神の手にもあはぬ、
帳はづれ。」

㋒ 師便喝。珠云く、「くそぬかせ、う
ぬ〳〵まだ〳〵せいをだせ」と、又
或抄に、「水當らしいところに當つ
て喝す。」

㋓ 乃鼎。拈提なり。

㋔ 羅山。潙閑、富頭靈に嗣ぐこの話
は初めに石霜に問ひ、再び富頭に
問ふたのである。

㋕ 起滅不停。念起念滅で煩惱と妄想
なり、富頭は云く、「喝、これたれ
か起滅す」と、起滅するものはない
やなり。

㋖ 見孔著楔。合好の義ちやうどもつ
てまゐつたれどの義、又能く物を
仕合の義で、羅山をよく見てより
かつかうしたとなり。

㋗ 累他羅山。「氣毒なことには疑義
をさせて、虛堂富頭の宗風をよく
のみこんでいくゆゑに此のやうな
ことをゝふた」と珠はいへり。

㋘ 論戰也。この錄の瑞岩錄にも見ゆ
るが、富頭云く、「若し戰を論ぜば
也た箇々に須らく咬豬狗の手段な
るべし」とあり、又碧岩第十則の
垂示にも、「若し戰を論ぜば也た箇
々轉處に立在す」とあり、戰を論
ぜば法戰を論ぜばなり、古來この
語のよみかたは「戰を論ぜば」と
讀んでゐるが、それでは意味が通
ぜぬ、「論戰せば」と訓して、「理窟
を云ふならば」の意に解すべき字
であると近來或抄にいへり。

㋙ 箇々力在。力(つとめて)の字恐ら
くは立乎と珠も云へり、これは平
たく云へば、「どうでも理窟はた
つ」で、今日の言葉でいへば、議論
の出發點」とか、「立論の根底」とか
云ふ意味、立在は「證據して居る」と
か、「基因して居る」とかの意、箇
々は何れの議論もの意味なり。

㋚ 猶是死法。抑下で、不自由なり。

㋛ 逆風張帆。大自在の活法なり、珠
云く、「これはなんじや、鍬にまん
ぐわ、横に車か、是れが宗師の爲
人か。」

㋜ 今日自納。虛堂の機用を抑下す、
虛堂もをしくぐりなされた、既敗
露する故に。

㋝ 年老成精。精は邪精、精魅みな魔
の謂なり、或抄に「うか〳〵とう
ろたへまはる體を云ふ、ばけもの
になつてゐるなり、ばかされるこ
となどを云ふ。

㋞ 大力量人。下の二問に通じて松源
の三轉語なり、頌古の都に三頌あ
り、其の意を解す、珠著語して云
く、「因レ甚明眼衲僧撮レ眉底、擡レ脚
不起、終行會不レ行」と、擡はあゞ
るなり、大力量人とは一大人也、

との時如何。」師云く、「黑鱗皴地。」僧云く、「若し
與麼ならば、㋟ 甚の分曉かあらん。」師云く、「㋠
無分曉の處に向つて、黑鱗皴地を識取せよ。」僧
云く、「學人今夜 ㋡ 白衣拜相」といつて、便ち禮
拜す。復た僧あり、出でて問ふ、「如何なるか ㋢
冬來の事。」㋣ 古德道く、「京師に大黃を出す、
此の意如何。」師云く、「㋤ 短處に長を求む。」僧云
く、「忽ち人あり、和尙に冬來の事を問ふ、」㋥
「雪。」師云く、「㋦ 雪後に衣を添へば、定んで是れ
寒からん。」僧云く、「㋧ 元來古德猶ほ在り。」師云
く、「汝はこれ ㋨ 安祿山。」
乃ち云く、「㋩ 覆灰未だ動せず、㋪ 律管先づ知
る、㋫ 暗に去り明に來る、㋬ 未だ甞て遷謝せず
所以に衲僧家、㋭ 理に就き事に就いて、㋮ 順水
に舟を流る。㋯ 殊に知らず、㋰ 無陰陽の地、㋱

なり、この三轉語は無門關に
も出でゐる。

㋲ 獅子咬人。俊利の人、大力量
の人の上なり。

㋳ 韓擒虎塊。田犬なりと云ふ、
擒は犬と通じて虛に作る、黑
狗なり、塊は言句にたとへる
珠云く、「言句に取りつかず」
と、なせ本心本性にかへらぬ
かと。
この故事は戰國策に出づ、天
下の疾犬なりとある、淳于髡
が齊の宣王に說きし故事、韓
子虛を略して云ふ。

㋴ 抱贓叫屈。舌頭上に在らず、
却つてこれ眞箇開口の處なり
凝淡は此の意を知らず、徒ら
に言跡を認む、猶ほ賊の贓物
を抱いて叫ぶが如し、珠云く
、この馬鹿め、人の物をぬすん
で來て、やれ恥じや悲しやと
大聲上げて泣いて居るやうな
もの、我はぬすまぬに迷惑な
どと云ふやうなものなり。

㋵ 脚跟下紅。珠云く、「甚に因
づてかと云ふはやそれが生死
のきづな、明眼の衲僧も油斷
すれば、生死の紅絲線なり、
生死のきづなり。

㋶ 貪外嚼不細。むさぼるものは
嚼細からず、故に滋味を辨ぜ
ず、古句精喰、飽き易し、細嚼
飢ゑがたしと、珠云く、「うぬは
やたらに古則古案透ればよい
と思ふて、口ぐせに咬みわけ
もせで」と。

㋷ 昔日松源。古今二路なし、達
者共に途を同じうす。

㋸ 牢記取。又是れ賊意とおぼえ
てをれとなり。

㋹ 乃云。珠云く、「この上堂は學
者の骨を碎き髓をとる。」

㋺ 此事。至道無難の故に、珠云
く、「無上菩提、一大事因緣。」

㋻ 走作。散失の義、又物忘の義
塵勞妄想に轉ぜられて走作す

るなり、五塵六欲に轉ぜらるゝに因つてなり。

㊁反以爲難。唯嫌揀擇の故に。

㊂何處是赴作。微起す。

㊃眼見耳聞。珠云く、「男を言ては男と思ひ女を見ては女ととむ、もと男女不二もとの本心と鏡を取りうしなふ故に」と。

㊄運奔執捉。上は足、下は手なり。

㊅疊觸攀緣。上は身、下は意、珠云く、「見性の者は佛心に疊觸して、其の上に外に攀緣す。」上は寒輭麁下は是非憎愛。

㊆以至。いまし、その外、それからなり。

㊇是非人我。人を是とし我を非とする毀讚なり。

㊈悉是赴作。珠云く、「そんなら立ち臼も鐵棒も、法成就のもの乎。」

㊉一處不走作。珠云く、「けれども其の中にあるで、「あれ牛過二窓櫺一じゃ」州云く、「無じやのと」云ふて、難透難解を以て平生用心す、

さうでなくば皆走作じゃ。」

㊋一時走作。だではないか」と珠長老は云へり。

㊌黑豆未芽。冬夜の菓子に寄せて一機未生、渾然たる本分の正位を表す、珠云く、「混沌未分、空劫已前である、空諦門である、佛祖も來つてつらを出さぬ、是れすなはち衲僧放身捨命の處じや、一陽來復のときゆえなり。

㊍黑鱗鱗地。無分曉、沒巴鼻なり、拄杖を見よと、こくりんしゅん地じやほとんど、すさまじい手もつけられぬ、以下みな同じことである。

㊎芽後。假諦門なり。

㊏芽未芽。中道門なり。

㊐有甚分曉。どろ田を棒でぶつたやうなものなり。

㊑向無分曉處。珠云く、「此處に於て無分曉をとめるな、必ず見そこなふ」と、これは年よつてあんまり濶遥なる故なり。

㊒白衣拜相。凡を轉じて聖となす、顯孝錄に見ゆ、珠云く、「龍かきがにはかに大名になつたやうなものなり。」

㊓冬來事。さむくなつて來た時、一大事はどうござると。

㊔古德道。疎山の仁和尚、報恩錄に見ゆ。

㊕短處求長。此の話を擧するを抑ふ又不相應の義、古德の苦を抑ふ、珠云く、「あまりせんさくして求めたが、づつとよい枯骨上求汁の義好苦じや、京師出二大黃一がいきかへる。

㊖靈。物を指し云ふ、こりやどうじやと。

㊗雪後添衣。直示なり、冬至の端的底なり。

㊘元來古德。慮堂を弄するの意珠云くとりも直さず、和尚は直に疏山和上じや」と。

㊙安祿山。安祿山は唐の逆臣、玄宗時代、恩幸無比、却つて反逆を致

荆棘天に參はり、㊚契券ある邊、㊛蒺藜地に滿ちて、㊜春生じ夏長するの徒をして、卒に近傍し難からしむることを致す。㊝林㊞一著を放過して、曲げて今時の爲にす。」

復て擧す、㊟潙山、仰山に問ふ、「㊠仲冬嚴寒年年の事、㊡暑運推移する事若何。」仰山近前叉手しで立つ、潙云く、「㊢誠に知る、子者の話に答ふること得ざることを。」㊣香嚴至る、潙前話を擧す、嚴云く、「某甲偏に者の話を答へ得ん。」潙復た擧す、嚴も㊤亦近前して、叉手して立つ。潙云く、「㊥賴に寂子が不會に遇ふ。」師云く、「潙山㊦若し後語なくんば、㊧儘自ら包裹し得去らん。㊨其れ用處太だ過ぎて、以て栓索俱に露るゝことを致すことを奈せん。」

上堂、㊩秉拂を謝す、僧問ふ、「㊪智、師と齊し、唐室をくつがへすの陰謀を企つ、今此の意を以て此の僧の賊精を貫む、珠云く、「面前ほむるものは背後必ずそしるものあり」。

㊫葭灰。よしのはひ、葭管などと云ふ、冬至の事、報恩錄に見ゆ、大地山河、不レ改二相形一なり。

㊬律管先知。一陽來復し、悟つて見れば山は山なり、河は河なり、先知は陽氣の至ることを知るとなり。

㊭晴去明來。陰と陽となり、妄想習氣の晴が去りて、妙明心性の明來る、

㊮來音遥謝。これ何物ぞ、根本かはりはせぬ。

㊯就理就事。理に就いては未遙謝底、事に就いては晴去明來底。

㊰順水流舟。櫓に臨んで運用、自然に力を費さず順水に舟を

潙る如く自由自在、今時那邊盡く手に入る。

㊱疎不知。已下は向上の一轉なり　珠云く、「上の順理順事を貶斥す、大宗匠はわけが違ふ」

㊲無陰陽地。本分なり、面目坊の世界、無陰陽から生じたるものでなければ、やくにたゝぬ。

㊳荊棘參天。出頭すべからずなり。いはら松原なり、珠云く、「釋迦選磨、衲僧も此の中へなげこむ。」

㊴有契券邊。手形證文きつとした處、現成建立なり、珠云く「面目を見る」と、慮のこと。

㊵葭翁滿地。足を措くべからず共に把住綿密珠云く、「宗師法當の爪牙、奪命の神符を以て接得する底。」

㊶春生夏長。隨時に遥興ずる底なり、珠云く、「菩提をうゑて佛を求むる等のやからなり。

きは、師に半德を減ず、智、師に過ぎて、方に傳授するに堪へたり。㋑那箇の智か師に過ぎたる。」師云く、「㋺忽ち去り忽ち來りて、今古を坐斷す。」僧云く、「㋩學人瞻仰するに分あり。」師云く、「㋥狗口を合取せよ。」僧云く、「㋭若し與麼ならば、首座、藏主、遂に虛設と成らん。」師云く「㋮是れ苦心の人にあらずんば知らじ。」僧云く、「㋯却つて些子に較れり」といつて、便ち禮拜す。師云く、「㋰急に頭を抽んでば是れ好手。」乃ち云く、「㋱深山大澤は、象龍の所なり、㋲雷霆の變化、㋳一時の間に在つて、㋴艸木自然に光潤す。「椅林の下、㋵此の瑞あること莫し麼。」拄杖を卓して、「㋶闍梨を疑殺す。」上堂、僧問ふ、「㋷天雪ふらんと欲して未だ雪ふらず、㋸梅花さかんと欲して未だ花さかず。㋹

㋺忽ち去り忽ち來り。百人の師家に見ゆること。

㋻放過一著。珠云く、「一手放してどこへ何を一手ゆるした、是を名けて荊棘叢天と云ふ、達磨の宗風を直に以て來ては今時にあはぬゆゑ、曲げて今時の爲にず」と、又或抄に「放過はぼんやりしてゐるじや。」

㋼濁山仰山。珠云く、「この話は仰山悟後、餘り得て日用の糞掃如何と試みらるなり。」

㋽艸冬嚴寒。珠云く、「これは濁仰宗の風彩、ぬらりとふくべで、ほゝをなでるやうにやはらかにかゝる。」あゝさむくてこたへん、辰の年巳の年になり。

㋾暴運推移。珠云く、「日かげがうつり行く事は受用することなり、どんなことじやな、老牛舐犢のやうなと。

㋿誠知子荅。珠云く、「濁仰宗の奥ふかい語じや、」不得とはかねてそうこそ思ふた、一千五百人の師家に見ゆること。

㌀香嚴。仰山の師弟（おとうとでし）。

㌁近前叉手。ちかづきたりて叉手と云ふて兩手をこまぬいて立つなり、珠云く、「なんのことかはしらんが、をんたうのものなり。」

㌂頓遇寂子。作麼々々なり、其方幸の義なり。」

㌃若無後語。頓遇三寂子不會」、と云ふの語なくばなり。

㌄儘自包裹。珠云く此の嶋はみな濁山が背擔へかゝへてはしるべきが、自領出去なり、儘は皆なり、極なり。

㌅其奈用處。珠云く、「奈んせんはあんまりせんさくすぎてはばけがあらはれたがなり、珠の外見にくい、栓はくぎじめ樂はなはじめと、虛堂がこれ宗風どこに釘目が見える、好評好評と。

㌆乘拂。この乘拂は藏主首座などをして乘拂せしむるを謂ずるなり。

㌇智與師齊。この語は百丈の語で、百丈の傳に出づ、傳燈錄六に見ゆ。

㌈那箇智。珠云く、「その智と云ふものは、どんな、わらうでござる」と。

㌉忽去忽來。「那一人、舊職は去り新職來る、四威儀逆順竟界なり」と珠はいへり、坐斷は佛を屬り祖を罵る。

㌊學人瞻仰。自ら相見と稱す、珠云く、「私もその智、師に過ぎたる人を瞻仰することができます。」

㌋同取狗口。珠云く、「いぢざたないことを云ふやつ、奥い口を以てたゝくな、瞻仰し及ぼす所に非ず。」

㌌若與麼。即今分座說法底の人なり珠云く、「瞻仰ずることもならぬ、向上の事ならば、首座藏主乘拂して說法等はむだごとと用すものでないか。」

㌍不是苦心。珠云く、「苦取證の者でなくんばしらぬと、」或抄にはこの事にてつていの人ねんごろの義如普でなうては知るまい。

㌎較些子。唐宋の俗語なり、珠云く。その不知が些子ばかりのことぞ、ふかしいことはあるまい、又すこしはなしになると云ふこと、すこしはわかりました。

㌏急抽頭。急に衆に歸するなり、にげるが上手の意なり、抽頭はくびぬけするなり、好手は上手なり。

㌐深山大澤。左傳の襄二十一年の條に「深山大澤、實に龍蛇を生ず」と註に非常の地多く非常の物を生ずとあり、深山は實林の道場を指し象龍は名納子のあつまるを云ふ、所謂六處の聚落をはなれて、深山大澤に入ると云ふところ。

㌑雷霆變化。これはこの錄の瑞岩の天基節にも見ゆ、今は乘拂の頭首を贊す、「變化は凋枯せる草木を生きかへらすといふにたとへる」と珠長老は云ふ、又法雷を振ひ、法鼓をうつなり。

㌒一時之間。一時片時の間もと。

㌓艸木自然。名山瓦剎は宿納の居るところ、纔に分座提唱せば、則ち一雨の下衆生自然に益を得て艸も木もともにしぜんに光がうるほふと。

㌔莫有此瑞。虛堂が處にもかういふめでたいことはないか。

㌕疑殺闍梨。これは乘拂の人を指す疑殺は其の提唱の不可思議なることを讃嘆するの謂なり、珠云く、「たつた獨り心もとないものがある。」

㌖天欲雪。珠云く、「事では雪ふりさうで降らぬ、陽和に向ふたが理では行者工夫凝結して、打成一片の時節陰陽沙汰には及はぬ。」

㌗梅花欲花。珠云く、「理では工夫熟して未だ發せず、事では陽和至りて花がひらかぬ」と、この二句は時節を序して、心機交徹を表す。

㌘好箇西來意。その端的達磨のつらだま。

好箇西來意、㋙人の共に家を出づるなし。」師云く、「㋚耳を掩ふて鈴を偷む。」僧云く、「㋛和尙多くはこれ學人を成褫す。」師云く、「老僧儞に向つて甚麼とか道つし。」僧云く、「㋜當面に蹉過す。」師云く、㋝座上に老僧なく、目前に閻梨なし。㋞喪。」僧云く、「㋟夾山の背後に向つて叉手すること莫れ。」師云く、「㋠老僧儞に靠倒せらる。」乃ち云く、「㋡明明に汝に向つて道ふ、㋢得の得は不得なり、㋣不得の得は得なり、㋤自ら是れ諸人雙眼清寒にして、㋥無事甲裏に坐在す。㋦直饒ひ彌勒即今下生して、㋧三頭六臂を現すとも、也た儞を救ふこと得じ。」

臘八上堂、僧問ふ、「釋迦老子、㋨金輪の寶位を棄て、㋩雪山に苦行すること六年、臘月八夜に於て、忽ち㋪明星を覩悟り去る。㋫還つて端的なりや也た無や。」師云く、「㋬人をして長く李將軍を憶はしむ。」僧云く、「㋭後來一藏の葛藤を說いて、㋮技を牽き蔓を引き、㋯尿を拋し屙を撒して、今に至るまで未だ已まず。」師云く、「㋰獅子身中の蟲。」僧㋱坐具を擲下して云く、「未だ明星を見ざる時、㋲還つて箇の消息ありや也た無や。」師云へ、「㋳髻を把つて衙に投ず。」乃ち拄杖を卓して云く、「㋴是は則ち是、㋵窮するときは則ち變じ、變するときは則ち通ず、只だ㋶三更半夜の如きんば、㋷衆星朗然たり。知らず是れ㋸那箇の星を見てか悟り去る。㋹急急に出で來つて、一轉語を下して、者の老子を蓋覆せよ。然らずんば、㋺後悔を貽すこと毋れ」といつて、㋻拄杖を靠く。

㋼華藏和尙至る上堂、僧問ふ、「㋽我が手何ぞ佛

㋙無人共出家。珠云くこゝの處を見徹したならば、又貪瞋痴の生死の家を出づべきに。

㋚掩耳偷鈴。これを日本で云ふならば「頭かくして尻かくさず」なり、鈴は牛につける小さい鈴のこと、我が耳を掩ふて他人の聞かざるを欲す、是れ鈍感の謂なり、淮南子や呂氏春秋に出でゐる、珠云く、「おれは出たが、人は家を出ないと云ふた。」

㋛成褫學人。褫は音池、褫を藉くなり、他を成就重持する意。俗語の引立つるなり、珠云く、「和尙の左樣仰せ下さるは、私をおひきたて下さるのじや」と、又わたくしづれの者を御印可なされて迷惑でござりますと。

㋜當面蹉過。珠云く、「人天衆前大きたしぞこなひをなされました」蹉過は虛堂の上を云ふ。

㋝座上老僧。珠云く、「成褫氏の老僧も成褫せらるゝ底の圍繞もない。」

㋞喪。へいどうですかと云ふて看よなり。

㋟夾山背後。これは古人を訟襲するを責むるなり、洛浦の傳にある故事の昔に付いてまはりはいたさぬとなり。

㋠老僧儞靠倒。靠倒は唐宋時代の俗語で、だしぬけをくうと云ふの意、又不意討にあふと云ふの意、反問さるゝなり、虛堂がきさまに不意打に逢ふて、かへつて反問されたとのこと。

㋡明明向汝。珠云く、「日の如く月の如く、ちりほどもうそは云はぬ。」

㋢得得不得。得は行なつて所得あるなり、言ふ所の得中の眞得は即ち不得なり、故に般若心經に「無智亦無得」とあり、

珠云く、「此の二句、無事甲裏か塗毒鼓か倚天長劍か。」

㋣不得得得。不得にして得る、これ所謂眞の得なり、得は所得の相なき故なり。

㋤自是諸人。空見の相なり、如上の憲照なき故に、珠云く、それに自己とみなが皆、淨躶躶地の處を認取す。」

㋥無事甲裡。不得の言跡を認むる故に、珠云く、「無事是れ貴人。」

㋦直饒彌勒。此のやうに世がわるくなつてと云ふものは寶林は彌勒垂迹の地なれば之を言ふ。

㋧三頭六臂。珠云く、「神變不思議をあらはしてもなり、」この上堂は虛堂御家のとつてをきなり。

㋨金輪寶位。四天下を領すべき天子の御位を陞座の如くすてゝと。

㋩雪山苦行。凡夫と同じやうに觀明星悟。一佛成道、觀見法界、艸木國土、悉皆成佛と悟れり。

㋪還端的也。端と的とは共に正なり、正理の當然を問ふと、今日の言葉では着眼點、そこにあるかどうかとなり。

㋫憶李將軍。これは溪註に「問話不利人をして、箭虛しく發せざる底の李將軍を憶はしむるなり、或抄に李は釋尊を沿すと珠云く、「そのやうなばけのかはをしをるのを、引取の名人に射ぬかしたい、」これは彼の雲門の云く、我れ若し昔日在さば、狗子に與へて契却せしめん、貴ぶらくは天下太平を見んと云ふと同じ。」

㋬後來一藏。珠云く、如來が見性悟道したとて、やれ華嚴、阿含方等、般若涅槃じやの何のかんのと。」

㋓乘我引蔓。珠云く、「經じや、論じや、律じやのと、又西天の四七、東土の二三、歷代の相承をばゞふ。」

㋔拋尿攪糞。一代時教を云ふ、言句を不淨じやと云ふ、この葛藤は今に於て己まぬ、諸善知識の說法を指す。

㋕師子身中。溪注に「元來が無所說の法じやに、此の僧妄に法をそしる故に」と、珠云く、「うぬめ、にくいやつじや、佛の一大藏經は火火棗の如く、象王の鼻の如くじやに」或抄に「人をわるく云ふは、己をわるく云ふ。」

㋖坐具。これは僧家に佛前、又は祖師前に敷いて禮拜するに用ふるもの、梵には尼師壇譯して坐具と云ふ、或は隨坐衣とも云ふ、袈裟の上又は下にかけてゐるもの。

㋗證箇消息。珠云く、「者箇これを佛も知つたかどうじや」と。

㋘把臂投衙。溪注に「鴛降の義なり甲をおろしもとゝりを把りて衙に歸投するなり、衙は唐制に、天子の居を衙といふ、行を駕と云ふ、或抄には「死刑するところなり」とあり、珠云く、「甲を卸し陣參して來れ、云ふてきかさう」と。

㋙是則是。珠云くよきことはよい。世界國土、山河大地皆如來の身體それでは寶のもちぐされ。」又卓拄杖は人々本具じやと評するなり。

㋚窮則變。これは易の繫辭のことばなり、溪注に「工夫窮るときは則ち開發變通あること亦知るべし」と、珠云く、「或は七日二七日乃至接心して骨を折ると、ぐわらりあらはれる、通ずるは久じや。」

㋛三曲半夜。正と珠は云へり。

㋜棗星朗然。偏と珠は云へり。

㋝那箇是。珠云く、「明星と云ふたならば三十棒。」どの星をみての成道か。」

㋞急急出來。珠云く、「大家はやばやきて、如來星を覩て悟ると云ふ、其の敗闕の處を蓋覆しかくせ、古佛の慚愧を蓋覆せよ」と。

㋟母貽後悔。珠云く、「不然で、さうなくは後悔してあとで先にかういへばよかつたと云ふな。」

㋠拿拄杖。或抄に、「明星を指したところじや」と。

㋡華藏。未だ其の人を審にせず。

㋢我手佛手。これは下の二問に通じて黃龍の三關と云ふ、蘊透離解なり、臨濟、曹洞、雲門などを一束にして唱へ出した。

㋣老婆擧眉。我が手を以て佛手に擬するを以ての故事は、報恩錄の部に見えたり、珠云く、「此れまた蕭麼ぞ、虛堂門下の大事、川醍はいとゞみにくいじや、しほらしうするほどみつともない。」

㋤趙州祿徇。祿は略に作るべし、獨木の橋を云ふ、珠云く、「これは實に紅旗閃爍と着語す」、趙州の石橋とて、日本などでも田舍の小川などにある飛石のはしなどな又、り水の上に一寸木をよこにしてある

手に似たる。」師云く、「㋥老婆眉を顰め醜を出す。」僧云く、「我が脚何ぞ驢脚に似たる。」師云く

㋦「曾て趙州の祿徇を蹈む。」僧云く、「人人箇の生緣あり、如何なるか是れ學人が生緣。」師云く、「㋧人前に向つて茄樹を拔くに懶し、南川に去つて化主と作らんことを。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「㋨我れ本心に希求する所あることなし、㋩今此の寶藏、自然にして至る。二林は小衆なり、㋪枯枯燥燥として㋫鶴望すること多時。㋬珊瑚の枕、明月の珠、便に從つて採取す㋭只だ是れ諱に觸るゝことを得ず。」

㋮上堂、「傳大士㋯本相現じて、㋰一地裏の人を引き得て、前廊後架尿を拋ち屙を撤す。㋱之を龍華の勝會と謂ふ。㋲知らず當來の所證、㋳果して此れありや否や。然らずんば」、拄杖を卓しざつとした樣を云ふ。

㋴向人前拔茄樹。茄は本草綱目に曼陀羅華、一名山茄兒風茄兒きちがひなすび、此の花で酒を造りて、一人をして或は笑ひ或は舞はしむと、又支那では問禪問話の僧を拔茄樹と云ふ、一說には唐土に人を嘲けるの語なりと、南川は蜀の地、この僧の生緣か、云ふ意は雜務の慚愧を作すに忍びず鄉里に歸りて托鉢でもするに如かずと、生計を以て生緣を答ふ、これは溪注に見ゆ、珠云く、「人にわらはれると、年老いてあるいて鄉里へ返つて堂もりでもせよと。」

㋵我本心希求。この語は法華經の信解品に出づるなり、希は經には悕に作る、珠云く、「華藏和上の御出、中々及びないと思ふて居た。」

㋶今此寶藏。これも上と同じつゞきの文なり、藏は華藏の藏に托して寶藏の文を引き、以て和尙の自ら招かざるに來り至るを謂す、寶藏は功德の寶藏なり、珠云く、「不意に彼方より御出じや。」

㋷枯燥燥。枯淡乾燥にして富潤の色なしと、この虛堂が處は貧乏で勝手かがいにわるいと。

㋸鶴望多時。つるの長き首をのばしてまつやうに、寶藏のたからぐらを望むこと久しきに至ると。

㋹珊瑚枕。藏中有らゆるの寶物無量の故に、隨用缺くることなしと、以て華藏の蘊蓄する法寶は無量なるに比す、珠云く、「さあ〳〵、ほしいものはとれ〳〵、寶藏への謝語。」

㋺只是觸諱。只だ藏の字に約して佛性の諱に觸れずとなり、珠云く、「鶴望の採取のと云ふ

て、㋐青山綠水、短棹孤舟。」

㋑慈雲和尚至る上堂、僧問ふ、「㋒路に道伴に逢ふて肩を交へて過ぎば、一生參學の事畢る時如何。」師云く、「㋓鴉鳩樹上に啼く。」僧云く、「㋔也た恐る、和尚古人を見ること未だ盡さざらんことを。」師云く、「㋕同道方に知る。」僧云く、「知つて後如何。」師云く、「㋖布袋に錐を盛る、快きもの先づ出づ。」

㋗乃ち云く、「㋘去住無心、㋙卷舒則あり、㋚之を布くときは則ち六合に彌る、六合猶ほ窄し、㋛之を置くときは則ち一毫に歛む、一毫猶ほ寬し。㋜彼の羣生の爲に、何く從りしてか起る。」

㋝拄杖を卓して、「㋞帝鄉を飛過し去つて、㋟遠く南山の陰に接す。」

上堂、擧す、㋠風穴因に僧問ふ、「㋡語默離微に

ものゝ、その根本の名はわかたぬ」、又云く、「小判を小判と云ふな、玉を玉と云ふなと云ふことじやが」、又云く、「そのお名は申さんが、寺内うるほひ大慶に存じます。」或抄に云く、「不レ得レ觸レ諱とは今、藏の名に託して云ふて、和尚の名に觸れぬ」と。

㋕上堂。これは龍華會の上堂。

㋖本相現。本相は彌勒應身の相圓光寶蓋ありて、此に出現すと珠云く、「彌勒佛の本相がどこへもかしこへも一ぱい顯れ出で」と。

㋗一地裏人。この寶林寺の人をさあ皆來いと、前廊後架、せども街道も、拋尿撒屙と、むさ〳〵ひりちらかすとは誦經禮讚、當齋辨香等じや、溪注に「處々に於て佛法を商量する」の謂なり。

㋘龍華勝會。祖庭事苑七に云く

「龍華三會註に龍華は樹なり、その樹華あり、華の形、龍の如し、故に龍華と名づく」と、又經に言ふ、「當來彌勒此の樹の下に於て說法度人三會あり初會に先づ釋迦の未だ度せざる所の者を度し、次にその餘の凡そ六十八億人を度し、第二會に六十六億、第三會に六十四億、故に龍華三會と云ふ」珠云く、「寶林に於て傳大士の會を建て、稱して龍華會と云ふは、大士はこれ彌勒の化身で、當來龍華樹下に於て成道す故と。」

㋙不知當來。受記作佛なりなんとどうであると問ふ意なりと經には云へるが、當來のことが即今か合點いつたか」と珠は云へり。

㋚果有此否。若し所證なくんばなり。

㋛青山綠水。能く〳〵眼を著けて看よ、即今目前の現境他物に非ず。」

㋜慈雲。浙江嘉興府慈雲寺の和尚。舊版には觀物察禪師なりと、この提綱は雲の字に寄せて、佛事をなすを見れば、この說あたれるか。

㋝路逢道伴。虛堂と慈雲和尚は道伴かこの路逢より、一生參學事畢るまでは長慶の語で、この錄の延編錄に見ゆ、珠云ふ、「雪峰門下の吹毛劍、この語は金剛王寶劍の如き大名劍じや、畢る時とは諸勘定さつぱりすむとき。」

㋞鴉鳩樹上、其の意は群を求むるに在り、珠云く、「くくふ〳〵と鳥類だに伴がなつかしい。」

㋟也恐和尚。意に曰く、「古人知道の人に在つて、必ず群を求むるに在らず、」珠云く、「どうか和尚に長慶のしん底が見えぬさうな。」

㋠同道方知。汝等が所知にあらずとなり、珠云く、「慈雲和上より知つていた。そさうを云ふな。」

㋡布袋盛錐。今は異利の道伴に擔著するなり、珠云く、「顯利なるものは直にもぬけ出て、道伴に逢著すきさまのやうな馬鹿は彌勒下生に至りても逢ふことは出來ぬ、」又云く、「利鈍早く顯はれ、利はこれ見鈍はこれ未見盡さずじや。」

㋢乃云。提綱なり。

㋣去住無心。慈雲の雲に託して德を表す、全篇一意珠云く、「此の提綱は始終慈雲の去住自由を述べて自性の妙用に比す。」

㋤卷舒有則。其の自由の進止、則とすべきことあり、白樂天の詩に「舒卷如レ雲得二自由一」と云ふがある、珠云く、「藏すべきときは藏す行ふべきときは行ふ、共に祖師門下の規則となる」、卷舒は與奪自在を云ふなり。

㋥彌於六合。六合は天地四方なり、珠云く、「其の妙用を以て之を布くときは、人々具足、如來をとりひろげるとじや」、放行底なり。

㋦置之則。歛翠猶寬とは其の極致を談ぜんと欲す、把住底なり。

㋧彼羣生。彼は慈の字を、何の字は雲の字を云ふ、珠云く、「其の中へ文殊の普賢のと云ふものがどこからくるやら、何にからなれば大慈悲心ばかりより。」

㋨卓拄杖。雲の起るところを指して

㋩飛過帝鄉。莊子の天地篇に「彼の白雲に乘じて帝鄉に至らん」とあり、珠云く、「本分家鄉の帝鄉を飛び過ぎ去つて、南山差別の境に趣いて、羣生を利濟す」、忠曰く、「今の南宋は臨安府、則ち浙江の杭州府に都す、これを帝鄉と云ふ」、忠曰く、「飛過は雲にちなむの語なり。

㋪遠接南山陰。忠曰く、「南屏山即ち淨慈寺なり、臨安府にあり、觀物初の師北磵和尚時に淨慈に住す、嘉興府と臨安府とは稍遠し、故に遠と云ふ、接陰これも雲にちなみし語なり。

渉る、如何が不犯を通せん。」穴云く、「㊐長く憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」師云く、「㋑風穴關を破つて敵を受く、㋺知らず者の僧を蹉過することを。二林に僧ありて出でゝ問はゞ、拄杖を拈じて㋻便ち打たん。」

上堂、擧す、趙州因に㋼僧問ふ、「㋽一物不將來の時如何。」州云く、「㋾放下著。」僧云く、「一物不將來、箇の甚麼をか放下せん。」州云く、「放不下ならば㋿擔將し去れ。」師云く、「趙州者の僧の痛處に向つて、㌀一針を下す、妨げず奇特なることを。㌁只だ是れ病膏肓に入る、㌂以て藥を發し難し。」

上堂、㌃明明に道ふ、言語の上に在らず、何ぞ必ずしも三寸の舌頭を用ひて、帶び將ち出來らんと、㌄會得せば、㌅桐花地に落ちて春將に半ならんとす、㌆然らずんば、㌇杜宇歸を催して月三を過ぐ。」

上堂、擧す、百丈㌈普請して地を鉏く次で、一僧あり、鉏頭を擧起す、忽ち鼓聲を聞いて、乃ち拋下して大笑して便ち歸る、丈云く、㌉俊なる哉、此れは是れ觀音入理の門なり」といつて、院に歸つて乃ち僧を喚んで問ふ、「適來箇の其麼の道理を見てか、便ち與麼なる。」㌊僧云く「適來肚飢う、鼓聲を聞いて歸つて飯を喫し去る。」丈乃ち大笑す、師云く、「百丈當面に者の僧に謾せらる、若しこれ二林ならば、㌋誰だ儞が口欺を管せん、㌌未だ招かざるに、便ち闌胸に一踏を與へん。只だ百丈笑ひ者の僧笑ふが如きんば、㌍還つて優劣ありや也た無や。」

㌎西白和尚至る上堂、僧問ふ、「三日㌏說著せず

㊐風穴。名は延沼、南院顒に嗣ぐ、臨濟義玄―興化存獎―南院惠顒―風穴延沼。
風穴は唐の昭宗乾寧三年餘杭に生れ、汝州の風穴寺に住す宋の太祖開寶六年に寂す、日本の圓融天皇の天延元年に當る。

㋙語默涉離微。溪注に「語默動靜、離微に涉るは道妙なれば如何が犯觸せざることを通達せんとなり」とあり、珠云く、「言ふに付け、だまるにつけ、なにがものがござるとじや」、離微は出息入息、又生滅有無と同じ、離は默、微は語なり通不犯は珠云く、まつかくの時如何が五蘊六塵に染まざることを得るとじや」肇法師の寶藏論に離微の事、くはしく出づ、これによりしものか、是は「大光明藏」の師の傳に云く、「離は正中偏、本分受用微は偏中正差別用。不犯は本分正位を不犯と云ふ。

㋚長憶江南。鷓鴣「しさご」、古は多く越の地に住めりと云ふ、江南の暖き三月ごろは、愛くるしい鷓鴣は囀きみだれたる百花の下で、自然の恩惠に對して感謝の歌をさゝげて居る、これ離か微か默か語か離微に即して離微に涉らざるところでないか、現成底ではないかと、珠云く金剛寶戒を風穴がまるけ出した」又云く「釋迦さまも一生此の機を用ふ、禪僧の守りじや」。「長く憶ふ」は正宗贊には「常憶」あり、大光明藏には「常憶」とあり。

㋛風穴破關。自ら關を開き破つて敵を受くるなり、珠云く、關門を開き破つて敵を受く、いかないかな、一人生かしてはかへさぬ。

㌅不知者僧。風穴は天眞無爲の法を將て、八字に打開し來つて、者の僧の會せざるを奈何んせん」と溪注にあり、珠云く、「者の僧をやりすごした、馬耳風じや、虛堂はなぜかういふた、八方に敵を受けたと思たが、つひ此の僧をつんにがした」、或抄に「不會を如何せん」と、蹉過は大失敗のことなり。

㌆便打。珠云くこゝにはわけのある故、氣を付けてみよ、離微といふところに拄杖を拈じた、」便打は把住なり。

㌇僧問。僧は即ち嚴陽尊者なり名は善信、趙州に嗣ぐ、雲臥紀談の上に詳なり。

㌈一物不將來。珠云く、「煩惱菩提、迷悟凡聖、すつきと。しよいもござらぬが、如何がいたさうぞ」と。

㌉放下著。すてゝしまへなり。

㌊不會。風穴は天眞無爲の法を將て、八字に打開し來つて、者の僧の會せざるを奈何んせん」と溪注にあり、珠云く、「者の僧をやりすごした、馬耳風じや、虛堂はなぜかういふた、八方に敵を受けたと思たが、つひ此の僧をつんにがした」、或抄に「不會を如何せん」と、蹉過は大失敗のことなり。

㌋便打。珠云くこゝにはわけのある故、氣を付けてみよ、離微といふところに拄杖を拈じた、」便打は把住なり。

㌌僧問。僧は即ち嚴陽尊者なり名は善信、趙州に嗣ぐ、雲臥紀談の上に詳なり。

㌍一物不將來。珠云く、「煩惱菩提、迷悟凡聖、すつきと。しよいもござらぬが、如何がいたさうぞ」と。

㌎放下著。すてゝしまへなり。

㌏擔將去。になふてかへれなり
この次に五燈會元や正宗贊には「於言下大悟」とあり。

㌐下一針。一はりさいたといふこと。

㌑只是病。珠云く、「嚴陽久しく觀音禪を修してゐた、趙州がところへ來て、何もかも打つぶされたいきのねもあがらん。」

㌒膏肓以發藥。教化しがたいと。

㌓明明道。あからさまにいふこと、珠云く、「口を以ていふてきかさないでもよい、雀はちふ〳〵犬はわん〳〵と說法してゐる。

㌔會得。言語上でないといふことをがてんしたならばなり。

㌕桐花落地。珠云くこれは東山下の唱號令、虛堂が云ふたほどに〳〵、なんとも辨のつげやうがない、春將半は二月中旬なり、或抄に「桐花落地は無心自然の境界を會得する底